

目 次

目 次

凡 例.....	6
----------	---

仏伝諸經典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧

【01】 ディーパンカラ仏から記別を受ける.....	12
【02】 兜率天に住む.....	14
【03】 兜率天において世間を觀察する.....	15
【04】 積尊の家系	
[01] 先祖・種姓.....	17
[02] 親族.....	24
【05】 入胎	
[01] マハーマーヤーの夢.....	27
[02] 占師が夢を占う.....	30
[03] 胎内で十カ月を過ごす.....	31
【06】 出胎	
[01] ルンビニー園へ.....	33
[02] 三十二種の瑞兆.....	34
[03] 誕生.....	35
[04] 「天上天下唯我為尊」と宣言する.....	37
[05] 「サルヴァールタシッダ」と命名される.....	38
[06] 「天中天」の異名.....	40
[07] アシタ仙人の予言.....	41
[08] 三十二相・八十種好.....	44
[07] マハーマーヤーの死.....	45
[08] マハーパジャーパティー乳母となる.....	47
【09】 太子の教育	
[01] 学問.....	48
[02] 種々の競技.....	49
【10】 提婆達多が射た雁を助ける.....	50
【11】 樹下の禪定.....	51
【12】 結婚	
[01] 妃の選択.....	53
[02] 媚選びの種々の競技.....	55
【13】 三つの宮殿に住む.....	56
【14】 四門出遊.....	57
【15】 夫人の懷妊とラーフラの誕生.....	60
【16】 出家の前兆	
[01] 浄飯王の夢.....	61
[02] マハーパジャーパティーの夢.....	62
[03] 太子夫人の夢.....	62
[04] 菩薩の夢.....	64
【17】 出家	
[01] 美女たちの熟睡中の姿態.....	65
[02] 出城.....	66
[03] 悪魔が出家を止めようとする.....	68
[04] 貢識が道標となって天道を示す.....	69
[05] 剃髪し、狩人と衣服を交換する.....	69
【18】 バッガヴァ仙人を訪問する.....	72
【19】 ビンビサーラ王と逢う.....	73

目 次

【20】 2仙人を訪問する	
[01] アーラーラ・カーラーマ仙人を訪問する	75
[02] ウッダカ・ラーマプッタ仙人を訪問する	77
【21】 苦行	
[01] ウルヴェーラーへ	78
[02] 5人の侍者が菩薩と共に苦行に入る	80
[03] 6年間の苦行	81
【22】 苦行を捨てる	
[01] 苦行が悟りに役立たないと知る	82
[02] 5人の侍者が菩薩を見捨てる	84
【23】 成道	
[01] 村の乙女の供養	85
[02] ネーランジャラー河で沐浴する	87
[03] 前正覚山に上る	88
[04] 龍王カーリカの讃歎	89
[05] 草刈り人のクサ草献上	90
[06] 菩提樹下の誓い	92
[07] 降魔	93
[08] 菩提樹下の成道	95
【24】 解脱を楽しむ	
[01] 悪魔が淫槃に入れと誘惑する	98
[02] アジャパーラ樹下にて	100
[03] ムチャリンダ樹下にて	101
[04] タップサとバッリカの供養と帰依	103
[05] ディーパンカラ仏の因縁	105
[06] 天神が呵梨勒果を献じる	106
[07] 天女が糞掃衣を献じる	107
【25】 梵天勧請	
[01] 説法を決心する	107
[02] アーラーラ・カーラーマとウッダカ・ラーマプッタの死を知る	110
【26】 ウパカに遇う	112
【27】 初転法輪	
[01] 五比丘と会う	113
[02] 中道を説く	116
[03] 四諦三転十二行相を説く	117
[04] コンダンニヤに法眼生ず	119
[05] 善来比丘戒	121
[06] 他の4人に法眼生ず	122
[07] 無常・苦・無我を説く	123
[08] 五比丘心解脱す	124
【28】 ヤサの教化	
[01] ヤサに法眼生ず	125
[02] ヤサの父が優婆塞となる	127
[03] ヤサ阿羅漢果を得る	127
[04] ヤサを侍者とする	128
[05] ヤサの母と妻が優婆夷となる	129
【29】 ヤサの4人の友人の出家	130
【30】 ヤサの50人の友人の出家	131
【31】 富樓那の帰仏	132
【32】 那羅陀の帰仏と龍王の帰依	133

目 次

【33】婆毘耶の帰仏	134
【34】弟子たちを布教に出す	135
【35】悪魔を破す	136
【36】弟子たちに弟子を取ることを許す	137
【37】三帰具足戒を定める	138
【38】30人の賢衆の出家	139
【39】ガンジス河の船師の出家	140
【40】ウルヴェーラーの牧女が優婆夷となる	141
【41】三迦葉の帰仏	
[01] ウルヴェーラ・カッサバの帰仏	142
[02] ナディー・カッサバとガヤー・カッサバの帰仏	144
[03] ガヤーシーサ山において阿羅漢果を成じる	146
【42】法雨林の苦行者の教化	147
【43】ビンビサーラ王の帰依	
[01] 釈尊を訪ねる	148
[02] 王に法眼生ず	150
[03] 5種の願	151
【44】竹林園の寄進	152
【45】舍利弗と目連の帰仏	154
【46】大迦葉の帰仏	157
【47】王舍城の人々の非難	159
【48】故郷へ帰る	
[01] 浄飯王が釈尊の帰郷を切望する	160
[02] ウダーライが帰郷を促す	161
[03] カピラヴァットウヘ	162
【49】ナンダとラーフラの出家	
[01] ナンダの出家	164
[02] ラーフラの出家	165
[03] 浄飯王の依頼	167
【50】祇園精舎の寄進	
[01] スダッタ長者の帰依	167
[02] 精舎建設を発起する	169
[03] ジェータ太子の園林を買い取る	170
[04] 祇園精舎の完成と寄進	172
【51】波斯匿王の帰依	172
【52】釈迦族の子弟の出家	174
【53】ゴーシタ園の寄進	176
【54】ウデーナ王の帰依	177
【55】舍衛城における神通	177
【56】三十三天でマハーマーヤーに説法する	178
【57】マハーパジャーパティー・ゴータミー最初の比丘尼となる	180
【58】アングリマーラの教化	181
【59】提婆達多の破僧	182
【60】ヴェーランジャーにて馬糞を食する	185
【61】諸弟子の教化	186
【62】パータリ村の繁栄を予言する	189
【63】ナーディカ村の人々への授記	190
【64】アンババーリーの帰依	192
【65】竹林村で最後の雨安居を過ごす	194
【66】入滅を決心する	195

目 次

【67】ボーガ城における説法.....	197
【68】チュンダの供養.....	198
【69】スバッダの帰仏.....	199
【70】最後の説法.....	201
【71】涅槃.....	202
【72】葬儀	
[01] 火葬.....	204
[02] 舍利の分配.....	205
〔付表1〕仏伝諸經典および仏伝関係諸資料の エピソード別出典一覧表.....	209
〔付表2〕仏伝諸經典および仏伝関係諸資料の 成道後七週間のエピソード一覧表	230

凡 例

[1] 本「仏伝諸經典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」（以下「要覧」という）は次のような目的のもとに作成された。すなわち

- (1) 釈尊の生涯を伝えた「仏伝諸經典」の記す諸エピソードを比較対照して、その所在を示すこと
- (2) 仏伝諸經典の記すこれら諸エピソードが、「原始仏教聖典」のどこを拠り所としているかを調査して、その所在を示すこと
- (3) 後世に中国・タイ・ビルマ（ミャンマー）などにおいて作られた「仏伝関係諸文献」が上記

(1) (2) をどのように継承しているかを調査し、その所在を示すこと

である。

以下これをそれぞれ【B 資料】 【A 資料】 【C 資料】と称する。本「要覧」表題中の「仏伝諸經典」はこのうちの【B 資料】を指し、「仏伝関係諸資料」は【A 資料】 【C 資料】を指す。

なお(2)でいう「拠り所」は、具体的に拠り所となったと考えられる原始聖典名とその所在はもとより、伝承の基底をなすと考えられる思想や文化的背景も含める。これに関しては故中村元博士の『ゴータマ・ブッダ』（「中村元選集・決定版」第11、12巻）に多大の恩恵を蒙った。記して謝意を呈しておきたい。

また漢訳資料の収集には、CBETA の電子資料を活用させていただいた。このような貴重な資料を無料で公開されている中華電子仏典協会に敬意を表するとともに、深甚の謝意を表したい。

[2] 本「要覧」のエピソード項目は次のような方針で立てられている。

[2-1] 本「要覧」は、「仏伝經典」が取り上げている「釈尊の伝記」中のエピソードにはどのようなものがあり、それが「仏伝經典」や「原始聖典」「後世の仏伝資料」の、どの文献の、どこに、どのように、記述されているかを示すことを第1目標としたものである。

したがって、ここに取り上げた「エピソード」は「仏伝經典」に取り上げられているエピソードのみであって、「仏伝經典」が取り上げていないエピソードは含まれない。

例えば原始聖典には、成道直後に傲慢なバラモン (*huhuṇkajātika brāhmaṇa*) が現れて、釈尊と真のバラモンとは何かを問答するというエピソードが伝えられているが、これはどの「仏伝經典」にも含まれていないので、取り上げられていない。

念のために言えば、このようなケースは枚挙にいとまがなく、「仏伝經典」が取り上げている釈尊伝エピソードは、「原始聖典」が伝える釈尊の生涯に係わるエピソードのほんの一部分で、おそらく1%にも満たないであろう。もちろん「仏伝經典」の制作者もこれを知っていたであろうが、それが釈尊の生涯のどの時点のエピソードであるかの判断がつかなかったなどの理由で、やむなく放置されたのであると考えられる。

また、たとえ「仏伝經典」にあるエピソードでも、それがただ一つの經典にしか取り上げられていない特殊なエピソードで、しかも「原始聖典」にその出所が見出せないような場合は、採用しなかった。そのようなものまで取り上げると、際限がなくなるからである。ただしそのようなケースでも、例えば成道直前に菩薩が、「前正覚山」に登られたというエピソードのように、よく知られたものについては採用した。

[2-2] 「項目」は原則として、一つの完結したエピソードを単位として設定したが、エピソードがいくつかの複数のエピソードから構成されている場合は、その下に「枝番号」をして、細分化して示した。「拠り所」となっている原始聖典がそれぞれ独立した經になっている場合を目処としたが、編者の恣意的な判断に基づいた場合も少なくない。前者については、単に原始聖典の編集上の必要性（例えば、*Samyuttanikāya* や *Aṅguttaranikāya* などの小經の場合）に過ぎないかもしれないが、もともとは別の伝承が一つにまとめられたという可能性がないではなく、その判断材料

となると考えたからである。

逆に言えば舍利弗と目連の帰仏などは、「仏伝」のエピソードとしては、まず舍利弗がアッサジに遇って「縁起法頌」を聞いて法眼淨を得るエピソード、それを聞いて目連も法眼淨を得るエピソード、そしてサンジャヤの弟子250人と一緒にサンジャヤのもとを離れて、釈尊に帰信するエピソードというように、3つに分けることも可能であるが、原始聖典にこれを区別して伝えるものがないので一つの項目とした。

[2-3] エピソードとして取り上げた項目は上記のような原則にしたがっているが、なお恣意的な部分も残されており、それが項目の精粗のバラつきとなつて現れているのではないかと恐れている。すべての「仏伝經典」のエピソードを、白紙の状態からカードにとって項目を立てたものではなく、先行の釈尊伝（特に中村博士の『ゴータマ・ブッダ』）が取り上げているエピソードの出典を探すということから始めたために、このような結果となった。今はこれを反省しているが、これをやり直す余裕がなかったために、そのまま残されている。

[2-4] 項目名は簡潔を旨としたため、これを繋げれば「釈尊の伝記」がイメージできるというには立てられていない。そこで、各「項目」のもとに、その項目に含まれるエピソード内容を簡略に記しておいた。これを見ればその内容のおおよそは想像されるはずである。ただし「仏伝經典」によって記事内容が異なるので、厳密を期すことは難しく、けっしてすべてを網羅したものではなく、といって最大公約数的なものでもないことを了解されたい。したがって、本文中に示す一つ一つの文献の記事内容が、この項目内容の説明から外れる場合も存することを留意願いたい。

[2-5] 項目およびその内容説明中に含まれる人名・地名の表記は、パーリ語のあるものはパーリ語を用いることを原則とした。ただし一つ一つの文献の記事内容の紹介部分は、サンスクリット語文献はサンスクリット語を、漢訳文献はその文献の使用する漢訳語を用いている。しかし要約して示した部分に含まれる、固有名詞を除く仏教語についてはそこまで配慮していない。

[2-6] 項目中に「帰依」「出家」「帰仏」という、同じような意味を有する用語を用いているが、これは以下の基準に基づいている。「帰依」は在俗者が仏教の在家信者となった場合（優婆塞あるいは優婆夷となったと表現した場合もある）、「出家」は在俗者が出家して仏教の比丘・比丘尼となった場合、「帰仏」は他の宗教の出家修行者が、釈尊の教えに帰した場合、である。

[3] 項目の配列順序は原則として「釈尊の生涯」の時系列に従っているが、「仏伝經典」によって順序に違いがあり、歴史的事実はもちろん、「仏伝經典」の最大公約数的なものを見いだすのも困難である場合が少なくない。そこで大体の方針としては、まず“Nidānakathā”に記述のあるものはこれに従い、“Nidānakathā”に記述のない部分はできるだけ諸「仏伝經典」のなかから最大公約数的な順序を見いだす努力をした。しかし現段階ではほとんどまだ仮説の段階である。この総合研究－「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」－は、「原始仏教聖典」資料と「仏伝經典」や後世の「仏伝関係諸資料」を総合的に検討して、釈尊の伝記を明らかにしようとしているのであるから、その結果を見て修正したい。

なお“Nidānakathā”を中心としたのは、本モノグラフシリーズの第1号に掲げた本研究の「目的と方法論」に書いたように、本研究はパーリの伝える釈尊伝イメージの再構築を第1目標とするからである。

[4] 【A資料】【B資料】【C資料】の区分は便宜的なものにすぎないが、次の基準によった。

【A資料】；パーリの「経蔵」「律蔵」に含まれる文献と、大正新脩大藏經の「阿含部」「律部」に収録されている文献。ただし「律部」は『四分律』『五分律』『僧祇律』『十誦律』『根本有部律』などの広律を対象とした。したがって『根本有部律』の「破僧事」や「出家事」などに含まれる説話的なものは、原始聖典資料と見なすことが躊躇されるが、これも含まれている。ただし『善見律毘婆沙論』のような律の注釈類は除外した。

【B 資料】；大正新脩大蔵經の「本縁部」に収録されている「仏伝經典」と目される文献と、それに相応するパーリ・サンスクリット文献。この具体的な文献名と使用したテキストは別に掲げる。

【C 資料】；仏伝に係わる中国・タイ・ビルマ（ミャンマー）撰述の文献。この具体的な文献名と使用したテキストは別に掲げる。

したがってここには論藏や、アッタカター、ないしは大乗經典中にちりばめられている仏傳資料については採取されていない。またチベット文献についても採録する余裕がなかった。

[5] 資料の紹介に際しては、一つ一つの文献に番号を付した。それは、その項目に該当するエピソードをどの文献が伝え、どの文献が伝えないかを一目して判別せんがためである。その番号とここに使用したテキストは以下の通りである。

[5-1] 【A 資料】に含まれる仏傳記事は原則として断片的であり、単独では時系列における先後関係が判らない。そこで全体的に検討しなければならない。しかしその系統によって、差異があることも予想されるので、系統別に分けて番号を付した。

- ①=パーリ聖典 Vinaya, DN.MN.SN.AN.KN.のすべてを含む。
- ②=長阿含 後秦 仏陀耶舍共竺仏念訣 『長阿含經』22卷 (大正第01巻 pp.001上～149下)
- ③=中阿含 東晋 霍曇僧伽提婆訳 『中阿含經』60卷 (大正01巻 pp.421上～809下)
- ④=雜阿含 劉宋 求那跋陀羅訳 『雜阿含經』50卷 (大正02 pp.001上～373中)
- ⑤=別訳雜阿含 失訳 『別訳雜阿含經』16卷 (大正02 pp.374上～492上)
- ⑥=增一阿含 東晋 霍曇僧伽提婆訳 『增一阿含經』51卷 (大正02 pp.549上～830中)
- ⑦=四分律 姚秦 仏陀耶舍共竺仏念等訳 『四分律』60卷 (大正22 pp.567上～1014中)
- ⑧=五分律 劉宋 仏陀什共竺道生等訳 『弥沙塞部和醯五分律』30卷 (大正22 pp.001上～194中)
- ⑨=十誦律 後秦 弗若多羅共羅什訳 『十誦律』61卷 (大正23 pp.001上～470中)
- ⑩=僧祇律 東晋 仏陀跋陀羅共法顯訳 『摩訶僧祇律』40卷 (大正22 pp.227上～549上)
- ⑪=根本有部律 唐 義淨訳 『根本說一切有部毘奈耶』50巻、『根本說一切有部苾芻尼毘奈耶』20巻、『根本說一切有部毘奈耶出家事』4巻、『根本說一切有部毘奈耶安居事』1巻、『根本說一切有部毘奈耶隨意事』1巻、『根本說一切有部毘奈耶皮革事』2巻、『根本說一切有部毘奈耶藥事』18巻、『根本說一切有部毘奈耶羯恥那衣事』1巻、『根本說一切有部毘奈耶破僧事』20巻、『根本說一切有部毘奈耶雜事』10巻 (大正23 pp.627上～1057中、大正24 pp.001上～414中)
- ⑫=その他 「その他」には異訳の「涅槃經」やサンスクリットの ‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’、他の漢訳の單訳經など、雑多なものが含まれる。

テキストについては、パーリ聖典はPTS版、漢訳は大正新脩大蔵經を使用した。なおサンスクリットの ‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’ は中村元訳の「遊行經 上・下」（仏典講座1 大蔵出版社 1984.9、1985.2）とErnst Waldschmidtの “Das Mahāparinirvāṇa-sūtra” (Rinsen Book Co. 1986) を利用した。

また【A 資料】の最後に、1字下げにした上で、*を付し、文字を若干小さめにして示したものは、直接「仏傳經典」の記事とは関係しないが、参考として掲げておいたほうがよいと判断されたものである。

[5-2] 【B 資料】において取り上げた文献の略号とその使用テキストは以下の通りであり、番号は漢訳年代の順序によった。ただし異訳經典と原典は近くにまとめた。なお、漢訳年代は仏書解説大辭典によった。

- ①=NK. Nidānakathā (Jātaka vol. I, 南伝大蔵經 第28巻)

- ②=修行 後漢 竺大力共康孟詳訳（建安2, 197）『修行本起経』2卷（大正03巻 pp.461上～472中）
- ③=中本 後漢 曇果共康孟詳訳（建安12, 207）『中本起経』2卷（大正04巻 pp.147下～163下）
- ④=瑞応 吳 支謙訳（黄武2～建興2, 223～253）『太子瑞応本起経』2卷（大正03巻 pp.472下～483上）
- ⑤=異出 西晋 聶道真訳（太康初～永嘉末, 280～312）『異出菩薩本起経』1巻（大正03巻 pp.617中～620下）
- ⑥=普曜 西晋 竺法護訳（永嘉2, 308）『普曜経』8巻（大正03巻 pp.483上～538上）
- ⑦=方広 唐 地場訶羅訳（永淳2, 683）『方広大莊嚴経』12巻（大正03巻 pp.539上～617中）
- ⑧=LV. “*Lalitavistara*”（Lefmann本 名著普及会 1977, 外薗幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』大東出版社 平成6年, 溝口史郎訳『ブッダの境涯』東方出版 1996）
- ⑨=僧伽 符秦 僧伽跋澄等訳（建元20, 384）『僧伽羅刹所集経』3巻（大正04巻 pp.115中～154中）
- ⑩=十二 東晋 遍留陀伽訳（太元17, 392）『仏說十二遊経』1巻（大正04巻 pp.146上～147中）
- ⑪=仏讚 北涼 曇無讖訳（玄始3～同15, 414～426）馬鳴菩薩造『仏所行讚』5巻（大正04巻 pp.001上～054下）
- ⑫=BC. “*Buddhacarita*”（E.H.Johnston本 Calcutta 1935, 原実訳『大乗仏典 13』中央公論社 昭和55年, 梶山雄一外訳『原始仏典 10』講談社 昭和60年）
- ⑬=行経 宋 釈宝雲訳（元嘉年中, 424～453）『仏本行経』7巻（大正04巻 pp.054下～115中）
- ⑭=過去 劉宋 求那跋陀羅訳（元嘉21～同30, 444～453）『過去現在因果経』4巻（大正03巻 pp.620下～653中）
- ⑮=集経 隋 閻那崛多訳（開皇7～同11又は12, 587～591or592）『仏本行集経』60巻（大正03巻 pp.655上～932上）
- ⑯=MV. “*Mahāvastu*”（É.Senart本 名著普及会 1977, J.J.Jones 英訳本 London 1949）
- ⑰=衆許 宋 法賢訳（雍熙2～淳化5, 985～994）『衆許摩訶帝経』13巻（大正03巻 pp.932上～975下）

[5-3] 【C資料】として取り上げた文献の略号とその使用テキストは以下の通りである。中国撰述については制作年代順に番号を付したが、その他については恣意的に配列したものである。これらの制作年代の研究は別の機会に行いたい。なお、制作年代は仏書解説大辞典によった。

- ①=釈迦 梁 僧祐撰（天監1～17, 502～518?）『釈迦譜』5巻或10巻（大正50巻 pp.001上～084中）
- ②=歴代 隋 費長房撰（開皇17, 597）『歴代三宝紀』15巻（大正49巻 pp.022下～127下）
- ③=氏譜 唐 道宣撰（麟德2, 665）『釈迦氏譜』1巻（大正50巻 pp.084中～099上）
- ④=統紀 宋 志磐撰（咸淳5, 1269）『仏祖統紀』54巻のうち4巻（大正49巻 pp.129上～169上）
- ⑤=JM. “*Jinakālamālī*”（A.P.Buddhadatta PTS版 1962, 畑中茂訳『Jinakālamālī試訳研究』昭和55年度東洋大学大学院修士論文）
- ⑥=Bigandet “The Life or Legend of Gaudama”（London 1911、赤沼智善訳『ビガンデー氏

凡 例

『緬甸仏伝』無我山房 大正3年 なお、Bigandetに記したローマ字表記は、その英文テキストに記されているものである。)

[6] 項目に立てたエピソードに対する各文献の記事内容は以下のように示した。

[6-1] できるだけ原文あるいはその和訳を引用するようにした。しかし長文となる場合は、冒頭部分のみを掲げて以下を省略した。しかし中間を省略した場合もある。いずれの場合も省略部分には……を用いた。したがって、一々の紹介記事が、「項目」に立てた内容のすべてを含んでいるわけではないので注意されたい。

[6-2] またストーリーがあって長文となる場合は梗概を記した場合もある。この中に原文を引用する場合は、その部分を「 」で括った。

[6-3] 一々の紹介記事が、上記のうちのどれに当たるかは注意しなかったが、おおよその見当はつくはずである。

[7] 所在ページは、記事冒頭のページ数のみを示した。したがって記事が数ページに亘る大きなエピソードを、もとのテキストに溯って確認しようとする場合は、ここに示したページ数に続く後の数ページをご覧いただきたい。

なお‘Buddhacarita’は章と偈の番号で示した。

[8] 本表を材料として、近いうちにこれらを分析しての論文を作成するつもりであるので、本「要覧」ではあえて一切の論評を差し控えた。したがって注記は必要最低限に止めた。

[9] 卷末に掲げた「付表」は以下のような目的のもとに作成した。

[9-1] 「付表1」の「仏伝諸經典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典一覧表」は、本「要覧」の形式では明らかになし得ない、それぞれの文献（あるいは系統）が、エピソードの一つ一つを、釈尊の生涯のなかで、どのような順序にあるものと把握していたかを知るために作成した。また、これによって、エピソードの一つ一つをどの經典が伝え、どの經典が伝えないかが、一目して明らかになるはずであり、さらにこれによって、仏伝經典間の系統や、原始聖典を含めた系統なども知るようすがとなりうるであろう。

[9-2] 「付表2」の「仏伝諸經典および仏伝関係諸資料の成道後七週間のエピソード一覧表」は、文献によって釈尊成道後7週間の順序と記事内容に大きな相違があるため、それを整理しようとしたものである。

[9-3] 以上二つの「付表」の凡例については、当該個所を参看されたい。

[10] 本資料集は森章司・本澤綱夫・岩井昌悟の共同作業によるものであるが、その役割分担は以下の通りである。

まず岩井が作成した【B資料】を中心とする粗原稿を、本澤が補修するとともに、【C資料】を書き加えて、【B資料】【C資料】の原稿を作り、これに基づいて森が最後に【A資料】を調査した。

その上で、項目の設定や内容説明の文章作成など、この完成に至るまでには、しばしば共同研究者全体（本号の「はじめに」に紹介させていただいた合計6名）の研究会を開いて、討議した。

なお、本「モノグラフ篇」はわれわれ自身がパソコン上で版下まで作成しているので、その編集・入力作業には多大の労力を必要とするが、共同研究者のうちの中島克久には、今回は脇役に回ってもらって、その労をとつてもらった。またその助手として、東洋大学の学生である大久保英美さんには、大変お世話になった。

したがって本資料集は、文字通りの共同研究のたまものであるが、もし瑕疵ありとすれば、その責任は代表者の森にあることは言うまでもない。

仏伝諸經典および仏伝関係諸資料の
エピソード別出典要覧

【01】ディーパンカラ仏から記別を受ける

ディーパンカラ (Dīpamkara 燃灯) 仏在世のとき、釈尊の前世であるスメーダ (Sumedha 無垢光) が泥濘に髪を敷いて仏を供養し、将来成仏して釈迦牟尼仏となるとの記別を受ける。

[A] 原始聖典

- ① ‘Buddhavamsa’ 02–59~65 (p.012) ; 髮の毛を泥の上に布いてうつ伏せになった私の頭のところに立って、Dīpañkara仏はこういわれた。「この苦行者 (tāpasa) である結髪行者 (jaṭila) を見よ。今より無量劫の後に仏となるだろう、如来はカピラと名づける美しい都から出家して、精進・努力し、苦行を行じて、アジャパーラ樹の下で (Ajapālarukkhamūlasmīm) 乳粥 (pāyāsa) を受け、ネーランジャラー (Nerañjarā) 河に至り、その岸辺にて乳粥を食して、菩提道場 (bodhimāṇḍa) に行って、アッサッタ樹の下で (assattharukkhamūlamhi) 成仏するであろう (bujjhissati)。生母はマーヤー (Māyā) という名で、父はスッドーダナ (Suddhodana) という名、この者はゴータマとなろう」と。
- ② ‘Apadāna’ 03–49–486 (p.429) ; Dīpañkara仏・勝者 (Jina) はSumedhaを記別して、今より無量劫の後にこの者は仏となるだろう、この者の生母はマーヤー (Māyā) という名で、父はスッドーダナ (Suddhodana) という名、この者はゴータマで、精進・努力し、苦行を行じて、アッサッタ樹の下で (assatthamūle) 、大名声ある等正覺者として成仏するであろう (bujjhissati)。
- ⑥増一阿含20–03 (大正02 p.599中) ; 時彼梵志手執五莖華。右膝著地。散定光如來。並作是說。持是福佑、使将来世當知定光如來至真等正覺、而無有異。即自散髮在于淤泥、若如來授我決者、便當以足蹈我髮上過。比丘當知。爾時定光如來觀察梵志心中所念、便告梵志曰。汝將來世當作釈迦文佛。如來至真等正覺。
- ⑥増一阿含43–02 (大正02 p.758中) ; 梵志は五華をもって灯光如來に奉上し、髪を地に布いて授記を乞うた。「是時灯光佛、知梵志心中所念。即告之曰。汝速還起。將來之世當成作佛、號釈迦文如來至真等正覺」
- ⑦四分律「受戒犍度」 (大正22 p.785中) ; 摩納即解鬚髮以布泥上、心發願言。若今定光如來、不授我別者、我當於此処形枯命終、終不起也。……汝於當來無數阿僧祇劫、號釈迦文如來至真等正覺明行足為善逝世間解無上土調御丈夫天人師仏世尊。
- ⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.116上) ; 昔有誓願今應思 然燈如來先授記 衆生多拘苦惱中 応速捨家求正道 我今亦能作如是 及彼梵王諸天等 当令汝得無障礙 詣樹林中修正覺
- ⑫「央掘魔羅經」 (大正02 p.537中) ; 我於無量阿僧祇劫恒河沙生、於灯光如來所修菩薩行聞自受記。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.015, 南伝28 p.027) ; ディーパンカラ (Dīpamkara) 世尊は……泥土の上に臥しているスメーダ (Sumedha) 行者を見給い、……四阿僧祇十万劫の後 (ito kappasatasahassā-dhikānam catunnam asamkheyānam mattake) 罷曇 (Gotama) という仏と成るであろう。そしてその生では、迦比羅衛 (Kapilavatthu) という都がこの人の住処であり、摩耶 (Māyā) という妃が母、スッドーダナ (Suddhodana 浄飯) という王が其父、最上首の弟子は優婆帝沙 (Upatissa 舍利弗) という長老、そして第二の弟子を拘利多 (Kolita 目犍連) といい、仏の侍者を阿難陀 (Ānanda) といい、最上首の女弟子は讖摩 (Khemā) という長老尼、第二の女弟子はウッパラヴァンナー (Uppalavaññā 蓮華色) という長老尼である。……ニグローダ (榕樹) の下で乳糜 [の供養] を受け、尼連禪 (Nerañjarā) 河の畔でそれを啜り、菩提道場に上って阿説他 (assat-

tha 菩提) 樹の下で上正覚を得るであろう。

- ②修行（大正03 p.462中）；菩薩（無垢光）歡喜、布髮著地、願尊踏之。……仏（錠光仏）告童子。汝却後百劫、當得作仏、名釈迦文漢言能仁如來無所著至真等正覺。劫名波陀、漢言為賢。世界名沙樞、漢言恐畏國土。父名白淨、母名摩耶、妻名裘夷、子名羅雲。侍者名阿難、右面弟子名舍利弗、左面弟子名摩訶目犍連。教化五濁世人、度脫十方、當如我也。
- ④瑞應（大正03 p.473上）；仏（定光仏）知至意、因記之曰。……汝（儒童）自是後九十一劫、劫號為賢、汝當作仏、名釈尊文。天竺語釈迦為能文為儒義名能儒。……乃解髮布地、令仏踏而過。仏又称曰。汝精進勇猛、後得仏時、當於五濁之世、度諸天人、不以為難必如我也。
- ⑤異出（大正03 p.617下）；仏（提憇竭羅仏）知菩薩（摩納）至心。却後九十劫、劫名拔羅、汝當為釈迦文仏。菩薩聞仏語、心中大歡喜、即布髮令仏足踏之。……仏復言。令汝後世得道度世、亦當如我作仏。
- ⑥普曜（大正03 p.502下）；（出家時に応出家という兜術天子が説く偈の中で）念定光受決 至誠無虛妄 暢最勝音響。
- ⑦方広（大正03 p.541上）；尊憶然灯記 積集無辺福 超越於生死 智慧發光明。
- ⑦方広（大正03 p.607中）；（初転法輪時）尊憶過去時 然灯仏授記 当得成正覺 号名曰牟尼尊。
- ⑧LV. (Lef. p.011, 外蘭・梵 p.288, 外蘭・訳 p.715)；廣大なる福德を集積し、正念・理解・証知は無辺にして、智慧の光明を発する者よ、剛力無双にして、勇猛絶大なる者よ、ディーパサハ (Dīpasaha) なる者 (ディーパンカラ仏) の授記を想起せよ。
- ⑪過去（大正03 p.622中）；於是普光如來、以無碍智、讚善慧言。善哉善哉、善男子、汝以是行、過無量阿僧劫、當得成仏。号釈迦牟尼如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏世尊。……即脫皮衣、以用布地、不足掩泥、仍又解髮、又以覆之。如來即便踐之而度、因記之曰。汝後得仏當於五濁惡世、度諸天人、不以為難、必如我也。
- ⑯集經（大正03 p.668中）；時然灯仏、告比丘言。比丘、汝見是摩那婆(雲童子=菩薩)、持七莖花、供養於我、伏身被髮、泥上作橋、令我踐渡。以是事故、此摩那婆、過於阿僧劫、當得作仏、号釈迦牟尼多陀阿伽度阿羅呵三藐三仏陀、十号具足、如我無異。
- ⑯MV. (vol. I p.239, Jones I p.195)；ディーパンカラ (Dīpañkara) 仏は、彼 (Megha童子=菩薩) は、この上ない完全な悟りを得るであろうと宣言した。「お前は、阿僧祇劫後の将来 (anāgatam adhvānam aparimite asaṅkhyeyē kalpe)、シャカ族の都カピラヴァストゥ (Kapilavastu) において、釈迦牟尼 (Śākyamuni) という名の如來になるであろう」。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.004下）；錠光授記表号釈迦。玄符冥契故託化釈種。
- ④統紀（大正49 p.137下）；次值一仏、名曰然灯。……我為儒童、以青蓮華、供養彼仏。為我授記、過阿僧祇劫、當得作仏号釈迦牟尼。
- ④統紀（大正49 p.138中）；按因果經云。……即脫鹿皮衣以用布地不足掩泥。又解髮以覆之。
- ⑤JM. (p.010, 番中 p.040)；その時、ディーパンカラ (Dīpañkara) 世尊は「これより四阿僧祇十万劫の未来に (ito kappasatasahassādhibhānaṁ catunnāmaṁ asaṅkheyyānaṁ mattake)、彼は世間においてゴータマ (Gotama) と呼ばれる仏陀となるであろう」と菩薩 (Sumedhaなるバラモン) に授記した。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.009, 赤沼 p.011)；須弥陀 (Thoomeda) 隠者は、仏陀（燈作仏=Deipinkara）に対して帰敬渴仰の念に堪えず、何の躊躇もなく道普請の出来上らなかった凹地に身を横たえ、腹を下にし、背を上にし、身を以て橋梁となし、仏陀及び仏弟子のこれを横ぎり亘り給わんことを願うた。……又仏陀は……須弥陀は四阿僧祇劫と十萬の成壞劫との後、賢劫に顯われ

給う第四仏として正覚を開くであろうと授記し給うた。

【02】兜率天に住む

釈尊が一生補廻の菩薩として兜率（Tusita）天に生れる。

[A] 原始聖典

- ①MN.123 ‘Acchariyabbhutadhamma-s.’ (希有未曾有法經 vol.III p.119) ; 念あり、知あって、菩薩は兜率天身に生まれた (Bodhisatto Tusitam kāyam uppajji) 。
- ① ‘Suttanipāta’ Vs.955 (p.185) ; 尊者舍利弗が言った。私はこんなことを以前に見たこともない、聞いたこともない (na me diṭṭho ito pubbe …… na-ssuto uda kassa ci) 、好もしき言葉を語る者である師主が集団の長としてこのように兜率天からやって来られたのを (evam vagguvado satthā Tusitā gaṇi-m-āgato) 。
- ③中阿含032「未曾有經」(大正01 p.469下) ; 我聞世尊迦葉仏時始願仏道行梵行、生兜瑟哆天……。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.102上) ; (吉枳王の時) 爾時迦葉波如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師仏薄伽梵。出興於世。時彼釈迦牟尼菩薩、於迦葉仏所、發阿耨多羅三藐三菩提心、淨修梵行生觀史多天。
- ⑫闍那崛多等訳「起世經」(大正01 p.364上) ; (雞梨祁王の時) 爾時有迦葉如來阿羅呵三藐三佛陀出現世間。菩薩於彼修行梵行、生兜率天。
- ⑬達摩笈多訳「起世因本經」(大正01 p.419上) ; 彼(枳梨祁王)時、有迦葉如來阿羅訶三藐三佛陀出現世間、菩薩於彼修行梵行、生兜率天。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.047, 南伝28 p.100) ; その大地の震動するほどの大功德を行い、その(ヴェッサンタラ〔Vessantara=菩薩〕王子としての)寿命が尽きたとき、其處から死んで兜率(Tusita)天に生まれられた。
- ②修行(大正03 p.462下) ; 能仁菩薩承事錠光。至于泥日奉戒清淨守護正法慈悲喜護惠施仁愛利人等利救濟不倦壽終上生兜術天上。
- ④瑞應(大正03 p.473中) ; 菩薩於九十一劫修道德學仏意通十地行在一生補廻後生第四兜術天上。
- ⑤異出(大正03 p.618上) ; 凡三十六為天帝釈、八萬四千世、為飛行皇帝。如是寿命終以後、即上生第四兜率天上。
- ⑥普曜(大正03 p.484上) ; 何謂比丘、普曜經典大方等法。於斯菩薩住兜術天、咸見奉敬逮得無余阿惟顏住。
- ⑦方広(大正03 p.540上) ; 何等名為方広神通遊戲大嚴經典。所謂顯於菩薩住兜率宮、常為無量威德諸天之所供養。
- ⑧LV. (Lef. p.010, 外蘭・梵 p.286, 外蘭・訳 p.714) ; 無量無數の衆生を昇天と解脱との道に導き、無上正等覺を正覺せんと欲し、一生補廻となり、この〔人間の〕世から没して、兜率(Tuṣita)天の端嚴なる宮殿に住し、シュヴェータケーツ(Śvetaketu 浄幢)と名づける最上なる天子として……。
- ⑩十二(大正04 p.146中) ; 菩薩在兜術天上、意欲下生觀於天上誰國可生。
- ⑪行經(大正04 p.057上) ; 処兜術宮時 以天眼普 觀觀衆生苦惱 追憶往古誓
- ⑭過去(大正03 p.623上) ; 爾時善慧菩薩、功行滿足、位登十地、在一生補廻、近一切種智、生兜

率天、名聖善白。

- ⑯集經（大正03 p.676中）；爾時護明菩薩大士、從於迦葉仏世尊所護持禁戒、梵行清淨、命終之後、正念往生兜率陀天。
- ⑰MV. (vol. I p.357, p.366, Jones I p.302, p.311)；12年のうちに (dvādaśehi varṣehi)、菩薩はトウシタ天の住所を離れるだろう。
- ⑯衆許（大正03 p.938中）；時釈迦菩薩在兜率天宮、欲生人間、作五種觀察。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.004下）；菩薩住兜率天。（出普曜經）
- ②釈迦（大正50 p.013中）；爾時善慧菩薩功德行滿足、位登十地在一生補廻、……生兜率天、名聖善白。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.088中）；因果經云。釈迦如來未成佛時、為大菩薩名曰善慧。功行滿已位登補廻。生兜率天名曰聖善。
- ④統紀（大正49 p.138中）；我如是、奉事諸佛、修學佛意、爾乃生兜率天宮、住一生補廻位。
- ⑤JM. (p.024, 番中 p.092)；ディーパンカラ (Dīpaṅkara) の足もとで決意をした我らの菩薩は、このように純粹なマハーサンマタ (Mahāsammata) の王統におけるヴェッサンタラ (Vessantara) の生涯に在って、7度大地を震わせて婆羅門にジャーリン (Jālin) とカシハ (Kaśha) という2人の息子を与え、翌日、[天帝] サッカ (Sakka) へのマッディー (Maddī) 王妃の施与によって波羅蜜の頂点に達し、寿命尽きた時、そこから死没して兜率天宮に生まれた。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.012, 赤沼 p.016)；この間、未來の釈迦牟尼佛 (Gautama) となり給うべき我等の菩薩は天界兜率 (Nats) に住み給うたのである。

【03】兜率天において世間を觀察する

菩薩が兜率天において、生れるべき国・時期・家系などを觀察する。

[A] 原始聖典

- ①根本有部律「波逸底迦058」（大正23 p.844上）；如佛往昔為菩薩時在觀史天宮、將欲下生瞻部洲內、作四種觀察。
- ②根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.907下）；爾時菩薩在觀史天宮、將欲下生、先以五事觀察世間。云何為五。一觀遠祖、二觀時節、三觀方國、四觀近族、五觀母氏。時六欲天來至母所、三淨其腹。摩耶夫人因寢、夢見六牙白象來降腹中。
- ③根本有部律「出家事」（大正23 p.1020下）；爾時菩薩在觀史天宮、觀察世界、有五事具廻、將欲下生。時六欲諸天、辦所應辦、於迦維羅衛國、閱頭檀家、三淨摩耶夫人胎中、乃令獲大吉夢。見菩薩作白象形、降神母胎。
- ④根本有部律「破僧事」（大正24 p.106中）；菩薩若在觀史多天、常有五法觀察世間。何謂五法。一者觀察生廻、二者觀察國土、三者觀察時節、五者觀察所生父母。
- ⑤根本有部律「雜事」（大正24 p.297下）；是時菩薩於天宮上、以五種事觀察世間。云何為五。一觀遠祖、二觀時節、三觀方國、四觀近族、五觀母氏。六欲諸天三淨母腹、摩耶夫人因寢夢見六牙白象來降腹中。
- ⑥根本有部律「雜事」（大正24 p.395中）；爾時世尊為菩薩時在觀史多天、以五種事觀察世間。六欲天子三淨母腹、現白象相來入母胎。
- ⑦根本有部律「雜事」（大正24 p.399中）；菩薩昔在觀史天宮、將欲下生觀其五事。

*⑥増一阿含48-03（大正02 p.788上）；彌勒菩薩於兜率天觀察父母不老不少。便降神下応從右脅生。
如我今日右脅生無異。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.048, 南伝28 p.103) ; 五種觀察 時機……寿命の長さが十万歳より下、百歳より上の時。國土……閻浮提。地方……中部地方（律藏に説かれている）、カピラヴァツ。家系……刹帝利か婆羅門、淨飯王。母親およびその寿命の長さ……マハーマーヤー、十ヶ月と七日間。
- ②修行（大正03 p.463上）；興四種觀。觀視土地、觀視父母、生何國中教化之宜先當誰、白淨王者、是吾累世所生之父。
- ③瑞應（大正03 p.473中）；託生天竺迦維羅衛国。父王名白淨、聰慧仁賢、夫人曰妙、節義溫良。迦維羅衛者、三千日月二千天地之中央也。
- ④普曜（大正03 p.485中）；諸眷屬衆各六十六億、咸共講議、當使菩薩現生何種。
- ⑤方廣（大正03 p.541下）；以四種心而遍觀察。一、時……世間衆生が老病死の苦があることを明らかに予知する劫滅の時。二、方……閻浮に現す。三、國……中国。四、族……刹帝利種および婆羅門。
- ⑥LV. (Lef. p.019, 外蘭・梵 p.304, 外蘭・訳 p.729) ; 四種の大觀察。時……世界が安定し、生老病死が知られたとき。洲……ジャンブドヴィーパ（閻浮提）。國……中央の國土。種姓……バラモンかクシャトリヤ。
- ⑦僧伽（大正04 p.122中）；觀有為行無常心無亂想。常自觀察知所從生處。亦復自知更不受胎。
- ⑧十二（大正04 p.146中）；意欲下生觀於天上誰國可生。言唯白淨王家可生身。
- ⑨行經（大正04 p.57下）；善妙稱吾意 応託生為子 白淨男中上 妙后女中英 諸城邑之中 迦夷羅越最 今日吾當降 施善於世間
- ⑩過去（大正03 p.623上）；即觀五事。一者觀諸衆生熟與未熟、二者觀時至與未至、三者觀諸國土何國處中、四者觀諸種族何族貴盛、五者觀過去因緣誰最真正應為父母。
- ⑪集經（大正03 p.677下）；金團（兜率天衆の中の一天子）が護明菩薩に言う。「有一刹利。元本已來、從於大衆、平量安立。世世転輪聖王之種、乃至甘蔗苗裔已來、子孫相承、在彼迦毘羅婆蘇都枳種所生。其王名為師子頬王、其子名為輪頭檀王、一切世間天人之中、有大名稱、尊者堪為彼王作子。」
- ⑫MV. (vol. II p.001, Jones II p.001) ; 菩薩はトゥシタ (Tuṣita) 天から去るにあたり、4つの大觀察をする。即ち、彼が生まれるべき時と場所と大陸と家族である。
- ⑬衆許（大正03 p.938中）；五種の觀察 一、種姓……刹帝利の家。二、國土……中国。三、時分……滅劫百歳之時。四、上族……淨飯王。五、母身……摩耶。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.004下）；究竟菩薩一生補處、所可降神種姓云何。（出普曜經）
- ②釈迦（大正50 p.013下）；……至當下作佛、即觀五事。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.087上）；（太子瑞應本起經を引用）
- ④統紀（大正49 p.141中）；期運將至、當下作佛、即觀五事。觀諸衆生、皆是我發心已來所成熟者、堪受妙法。觀此大千界、閻浮提迦毘羅國、最為處中。……觀釈迦第一甘庶聖王之後觀白淨王夫妻真正堪為父母……觀摩耶夫人懷抱太子。滿足十月、生七日已。其母命終。
- ⑤JM. (p.025, 番中 p.097) ; その時菩薩は、このように神々に乞われながらも神々に約束せずに、時、國土、地方、種姓、生母、その寿命の長さから成る五大觀察をした。

⑥Bigandet. (vol. I p.022, 赤沼 p.030) ; 菩薩は……仏陀のこの世に出世し給うに就ては、いろいろ必要な事情があるが、……その事情というのは、仏陀の顯われ給うべき時期、出生の地、出生の種姓、仏母となり給う夫人の年齢及びその性質等のことである。

【04-01】釈尊の家系——先祖・種姓

人類誕生から王族階級の発生を経て、ラーフラに至る家系を示す。

[A] 原始聖典

①DN.003 ‘Ambattha-s.’ (阿摩昼經 vol. I p.092) ; 釈迦族はOkkāka王を祖先とする。王は寵愛する妃の王子に王位を譲ろうとして、四人の王子Okkāmukha, Karaṇḍu, Hatthiniya, Sīnipuraを国外に追放した。彼らは雪山のふもと (Himavanta-passa) に住み、自分たちの姉妹を妻とした。彼らが釈迦族の先祖である。

①‘Suttanipāta’ Vs.422~423 (p.073) ; (ビンビサーラ) 王よ、雪山のふもとに (Himavant-tassa passato) 正直な民族がいて、コーサラ地方に住み、富と勤勉とを備えています。姓をĀdiccaといい、種族をSakiyaといいます。王よ、私は家から出家したのであって、欲望をかなえるためにではありません。

②長阿含020「阿摩昼經」(大正01 p.082下) ; 昔声摩という王があり、面光・象食・路指・莊嚴という四人の王子がいた。王子らに過失があったので、王は彼らを国外に追放した。彼らは雪山の南に住み、姉妹等と夫婦になった。これが釈種の始まりである。

②長阿含030「世記經」(大正01 p.148下) ;
民主－珍宝－好味－静斎－頂生－善行－宅行－妙味－味帝－水仙－百智－嗜欲－善欲－断結－大
断結－宝藏－大宝藏－善見－大善見－無憂－洲渚－殖生－山岳－神天－遣力－牢車－十車－百車
－牢弓－百弓－養牧－善思－伽毘舍－五転輪聖王

－多羅婆－五転輪聖王
－阿葉摩－七転輪聖王
－持施－七転輪聖王
－伽楞伽－九転輪聖王
－瞻婆－十四転輪聖王
－拘羅婆－三十一転輪聖王
－般闍羅－三十二転輪聖王
－彌私羅－八萬四千転輪聖王
－声摩－百一転輪聖王 (最後有王、名大善生)
－烏羅婆－渠羅婆－尼求羅－師子頬－白淨王－菩薩－羅睺羅

⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.779上) ;

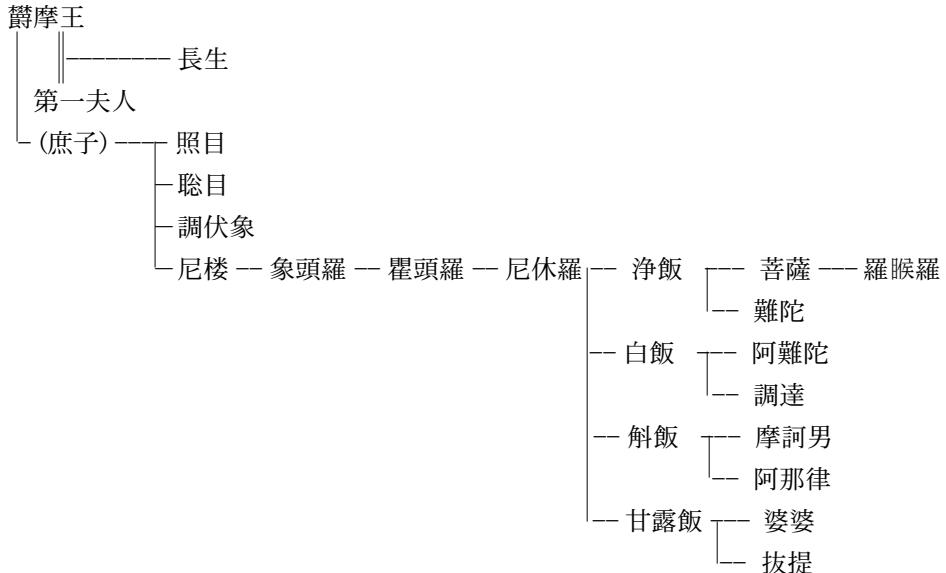
大人－善王－樓夷－斎－頂生－遮羅－跋遮羅－微－微鱗陀羅－鞞醯梨肆－舍迦陀－樓脂－修樓脂
－波羅那－摩訶波羅那－貴舍－摩呵貴舍－善現－大善現－無憂－光明－梨那－彌羅－末羅－精進
力－牢車－十車－百車－堅弓－十弓－百弓－能師子－真闍

－伽毘支－五王
－多樓毘帝－五王
－阿濕卑－七王
－乾陀羅－八王
－伽陵迦－九王
－瞻鞞－十四王

- 拘羅婆 —三十一王
- 般闍羅 —三十二王
- 彌悉梨 —八萬四千王
- 懿師摩 —百王
- 大善生 —懿師摩 —憂羅陀

—瞿羅 —尼浮羅 —師子頬 —悅頭檀 —菩薩 —羅睺羅

⑧五分律 (大正22 p.101上) ;

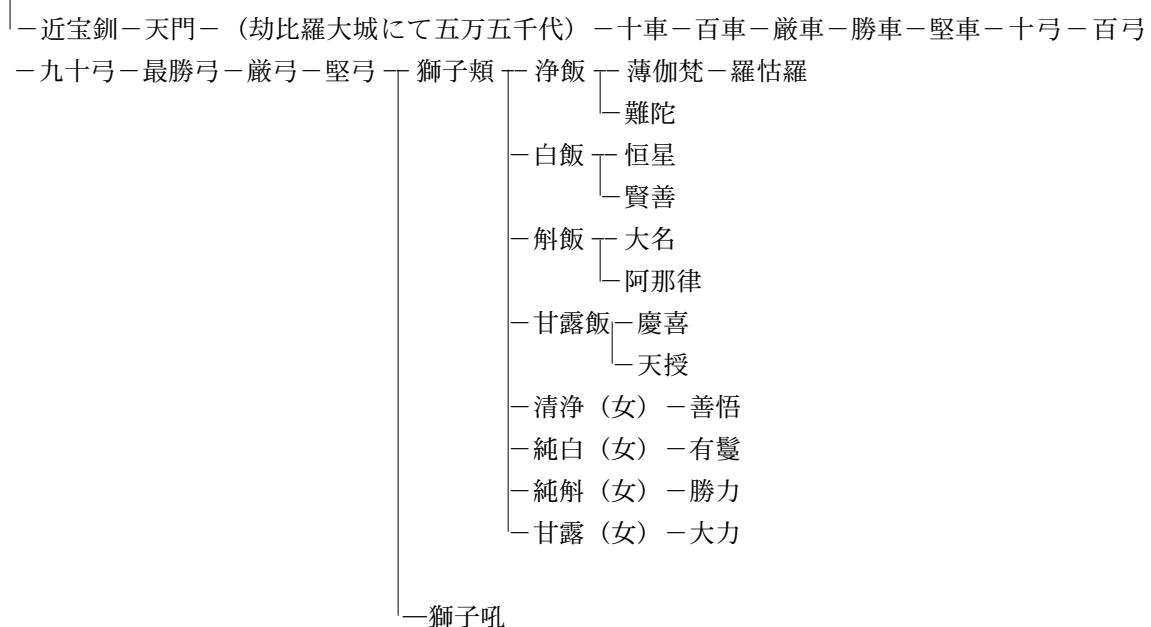
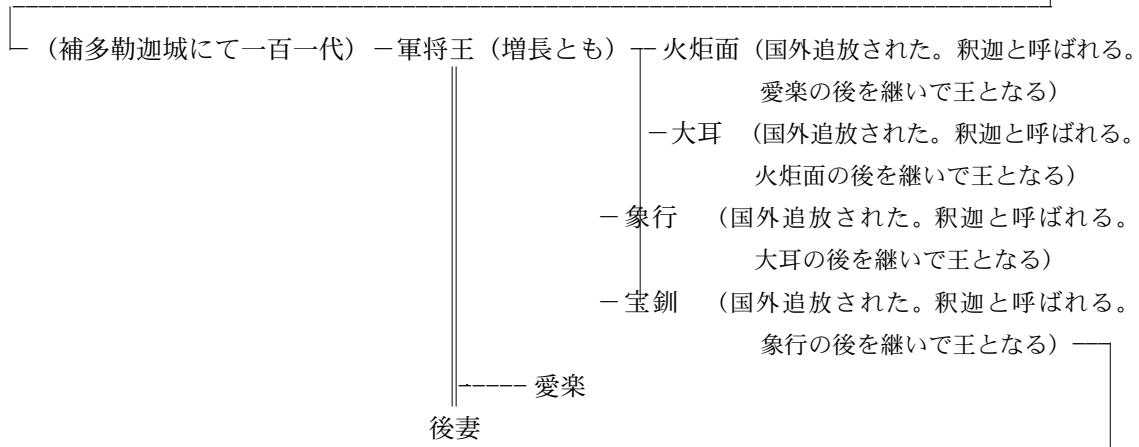


⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.100下) ;

大同意 — 意樂 — 善徳 — 最勝善 — 長淨 — 頂生 (持養) — 端巖 — 近端巖 — 端巖足生 — 極端巖 — 愛樂 — 善樂 — 能捨 — 極捨 — 支車 — 巖車 — 小海 — 中海 — 大海 — 瑞鳥 — 大瑞鳥 — 香草 — 近香草 — 大香草 — 善見 — 大善見 — 極愛 — 大愛 — 妙声 — 大妙声 — 作光 — 有威 — 広大 — 大彌樓 — 有彌樓 — 広慧 — 艷光 — 有艷 — 有大艷 — (富多羅城にて百代) — 調怨 — (無闇城にて五万四千代) — 無能勝 — (波羅庇斯城にて六万三代) — 難当 — (金毘羅城にて八万四千代) — 梵授 — (象造城にて三万二千代) — 象授 — (削石城にて五千代) — 及時王 — (広肩胸城にて三万二千代) — 童勝力 — (無勝城にて三万二千代) — 上勝 — (妙童女城にて一万二千代) — 勝軍 — (贍婆城にて一万八千代) — 龍天 — (未利城にて二万五千代) — 人天 — (多摩栗城にて一万二千代) — 海天 — (歡喜城にて一万八千代) — 善恵 — (王舎城にて二万五千代) — 除闍 — (波羅庇斯城にて一百代) — 大帝軍 — (俱尸那城にて八万四千代) — 海神 — (布多羅城にて一千代) — 修行 — (俱尸那城にて八万四千代) — 広面 — (波羅庇斯城にて十万代) — 地主 — (無戦城にて一千代) — 持大地 — (弥恥羅城にて八万四千代) — 大天 (弥恥羅城にて八万四千代) — 倸彌 — 正謝王 — 堅 — 佢努 — 近佢努 — 有佢努 — 極佢努 — 善見 — 正見 — 軍聽 — 悟了 — 大悟 — 悟軍 — 無憂 — 離憂 — 繩果 — 善合 — 大声 — 殺大声 — 明旦 — 坊主 — 闘戦 — 生怖 — 慶喜 — 鏡門 — 能生 — 普生 — 最勝 — 飲食 — 多飲食 — 難勝 — 極難勝 — 安立 — 善立 — 大力 — 勝大力 — 善慧 — 勝堅固 — 十弓 — 百弓 — 新弓 — 妙色弓 — 勝弓 — 堅弓 — 十輻 — 百輻 — 千輻 — 妙色輻 — 牢輻 — (善議城にて七万七千代) — 果仙王 — 龍護 — (波羅庇斯城にて一百一代) — 吉枳 (このとき迦葉如來の元で釈迦牟尼菩薩は観音多天に生まれた) — 善生 — (補多羅城にて一百一代) —

耳生 — 喬答摩 (出家した) — 暖生 (喬答摩、身生とも。長子 日種、甘蔗種と呼ばれた。叔父の波羅墮闍の後を継いだ)
 — 暖生 (次子。兄の後を継いで王となった。甘蔗王と呼ばれた)

└ 波羅墮闇（王位を継いだ）



⑫法立共法炬訣「大樓炭経」（大正01 p.309上）；

大王-真-齊-頂生-遮留-和行-留至-日-波那-大波那-沙竭-大善見-提炎-染-迷留
-摩留-精進力-堅賤-十車-舍羅-十丈-百丈-那和檀-真闇-波延-迦奴車-五

-多盧提-五
-阿波-七
-捷陀利-七
-迦陵-九
-遮波-十四
-拘獵-三十一
-般闍-三十二
-彌尸利-八萬四千
-摩彌-百一-大善生

（人呼為伊摩）-烏獦-不尼-師子-悅頭檀-悉達菩薩-羅云

⑫闇那崛多等訣「起世経」（大正01 p.363上）；

大平等王-意憲王-正真王-最正真王-受斎戒王-頂生王-右髀王-左髀王-右膝王-左膝王

—已脫王—已已脫王—體者王—體味王—果報車王—海王—大海王—奢俱梨王—大奢俱梨王—茅草王—別茅草王—善賢王—大善賢王—相愛王—大相愛王—叫王—大叫王—尼梨迦王—那瞿沙王—狼王—海分王—金剛臂王—牀王—師子月王—那耶邸王—別者王—善福水王—熾熱王—作光王—曠野王—小山王—山者王—焰者王—熾焰王—（逋多羅城にて一百一王）—降怨王—（阿踰闍城にて五万四千王）—難勝王—（波羅奈城にて六万三千王）—難可意王—（迦毘羅城にて八万四千王）—梵德王—（白象城にて三万二千王）—象徳王—（拘尸那城にて三万二千王）—薺香王—（優羅奢城にて三万二千王）—那伽那嗜王—（難降伏城にて三万二千王）—降他王—（葛那鳩遮城にて一万二千王）—勝軍王—（後波城にて一万八千王）—天龍王—（多摩梨奢城にて二万五千王）—海天王—（多摩梨奢城にて一万王）—海天王—（檀多富羅城にて一万八千王）—善意王—（王舍城にて二万五千王）—善治化王—（波羅奈城にて一千一百王）—大帝君王—（茅主城にて八万四千王）—海天王—（逋多羅城にて一千五百王）—苦行王—（茅主城にて八万四千王）—地面王—（阿踰闍城にて一千王）—持地王—（波羅奈城にて八万王）—地主王—（寐鬚羅城にて八万四千王）—大天王—（寐鬚羅城にて八万四千王）—尼寐王—沒王—豎齊王—訶奴王—優波王—奴摩王—善見王—月見王—聞軍王—法軍王—降伏王—大降伏王—更降王—無憂王—除憂王—肩節王—節王—摩羅王—婁那王—方主王—塵者王—迦羅王—難陀王—鏡面王—生者王—斛領王—食飲王—饒食王—難降王—難勝王—安住王—善住王—大力王—力徳王—豎行王—（迦摶波城にて七万五千王）—菴婆梨沙王—善立王—（波羅大城にて一千一百王）—雞梨祁王（この時迦葉如來の元で菩薩は兜率天に生まれた）—善生王—（逋多羅城にて一百一王）—

耳者王 —瞿曇——甘蔗種王—（逋多羅城にて一百一甘蔗種王）—不善長王—優牟佉
 —婆羅墮闍
 —金色
 —似白象
 —足瞿王—天城王—

牛城王—（迦毘羅婆城にて七万七千王）—廣車王—別車王—堅車王—住車王—十車王—百車王—九十車王—雜色車王—智車王—廣弓王—多弓王—兼弓王—住弓王—十弓王—百弓王—九十弓王—雜色弓王—智弓王—師子頬—淨飯—悉達多—羅睺羅

—難陀
 —白飯—帝沙
 —斛飯—阿泥婁馱
 —跋提梨迦
 —甘露飯—阿難陀
 —提婆達多
 —甘露（女）—世婆羅
 —師子足

②達摩笈多訳「起世因本経」（大正01 p.417下）；

大平等王（摩訶三摩多）—乎盧遮（隋言意喜）—柯梨耶哪（隋言正真）—婆羅柯梨耶哪（隋言最正真也）—烏逋沙他（隋言斎戒）—頂生王—右脣王—左脣王—右膝王—左膝王—已脫王—已已脫王—體者王—體味王—果報車王—海王—大海王—奢俱梨王—大奢俱梨王—茅草王—別茅草王—善賢王—大善賢王—相愛王—大相愛王—叫王—大叫王—尼梨迦王—那瞿沙王—狼王—海分王—金剛臂王—床王—師子月王—那耶邸王—別者王—善福水王—熱惱王—作光王—曠野王—小山王—山者王—焰者王—熾焰王—子孫相承して一百一代—降怨—（於阿踰闍城にて）五萬四千王—難勝—（波羅奈城にて）六萬三千王—難可意—（柯算囉城にて）八萬四千王—梵徳—（白象城にて）三萬二千王—象徳—（拘尸那城にて）—三萬二千王—薺香—（優羅奢城にて）—三萬二千王—那伽那嗜—（難降

伏城にて）三萬二千王－降者－（葛那鳩遮城にて）一萬二千王－勝軍－（波波城にて）一萬八千王－天龍－（多摩梨奢城にて）二萬五千王－海天－（多摩梨奢城にて）一萬王－海天－（檀多富羅城にて）一萬八千王－善意－王舍大城にて）二萬五千王－善治化－（波羅奈城にて）一千一百王－大帝君－（茅主大城にて）八萬四千王－海天－（逋多羅城にて）一千五百王－苦行－（茅主大城にて）八萬四千王－地面－（阿踰闍城にて）一千王－持地－（波羅奈大城にて）八萬王－地主－（寐(亡毘反)湊(湯梨反)羅城にて）八萬四千王－大天－（寐湊羅大城にて）八萬四千刹帝利王－尼寐王－沒王－堅齊王－軻峯王－優波王－峯摩王－善見王－月見王－聞軍王－法軍王－降伏王－大降王－更降王－無憂王－除憂王－肩節王－王節王－摩羅王－婁那王－方主王－塵者王－迦羅王－難陀王－鏡面王－生者王－斛領王－食飲王－饒食王－難降王－難勝王－安住王－善住王－大力王－力德王－堅行王－（迦奢婆波城にて）七萬五千王－菴婆梨沙－善立－（波羅大城にて）一千一百王－枳梨祁（彼時有迦葉如來阿羅訶三藐三佛陀出現世間、菩薩於彼修行梵行、生兜率天）－善生－（逋多羅城にて）一百一王－

耳 瞿曇

婆羅墮闍－甘蔗種－（逋多羅城にて）一百一甘蔗種王－不善長
 優牟佉
 金色
 似白象
 足渠－天城－（迦毘羅婆蘇

都城にて）七萬七千王－廣車王－別車王－堅車王－住車王－十車王－百車王－九十車王－雜色車王－智車王－廣弓王－多弓王－兼弓王－住弓王－十弓王－百弓王－九十弓王－雜色弓王－智弓王－師子頬－淨飯－悉達多－羅睺羅
 難陀
 白飯－帝沙童
 難提迦
 斛飯－阿泥婁馱
 跋提梨迦
 甘露飯－阿難陀
 提婆達多
 (女) 不死－世婆羅
 師子足

[B] 仏伝經典

- ⑩十二（大正04 p.146中）；阿僧祇劫の昔、国王は弟に王位を与え、婆羅門瞿曇の下で道を学ぶ。修行中、賊と間違えられて殺される。その時の流血から男女二人が誕生する「於是便姓瞿曇氏。一名舍夷仁。賢劫來始為宝如來釈迦越……」
- ⑪仏讚（大正04 p.001上）；甘蔗之苗裔 釈迦無勝王 淨財德純備 故名曰淨飯 群生樂瞻仰 猶如初生月 王如天帝釈 夫人猶舍脂 執志安如地 心淨若蓮花 假譬名摩耶
- ⑫BC. (01-01)；その昔敵すべからざるシャカ族には、由緒あるイクシュヴァークの苗裔、威力まさに一門の創設者イクシュヴァークその人に匹敵するシュッドーダナと名づける王があった。帝釈天にその威力匹敵するこの王には、その壯麗なること神妃紛う妃があり、その名をマハーマーヤーと呼ばれていた。
- ⑬過去（大正03 p.623中）；諸族種姓釈迦第一甘蔗苗裔聖王之後。
- ⑭集經（大正03 p.672上）；
 大衆平章（王、刹利王、田主）－真実－意喜（自用）－智者（受戒）－頂生－大海－具足（敷）

—養育—福車—解脱—善解脱—逍遙—大逍遙—照曜—大照曜—意喜—善喜—満足—大満足—養育—福車—人首領—火質—光炎—善譬冠—空冠—善見—大善見—須彌—大須彌—（褒多那城にて一百一代）—師子乘—（波羅捺城にて六十一代）—女乘—（阿踰闍城にて五十六代）—巖熾生—（迦毘梨耶城にて一千代）—梵德—（阿私帝那富羅城にて二十五代）—象將—（徳叉尸羅城にて二十五代）—護—（奢耶那城にて一千二百代）—能降伏—（迦那鳩闍城にて九十代）—勝將—（贍波城にて二千五百代）—龍天—（王舍城にて二十五代）—作闍—（拘尸那竭城にて二十五代）—大自在天—（菴婆羅劫波城にて二十五代）—大自在天—（檀多富羅城にて二十五代）—善意—（多摩婆頗梨多城にて二十五代）—無憂鬱—（寐湧羅城にて八万四千代）—毘紐夫—（毘裏多那城にて一百一代）—大自在天—（寐湧羅城にて八万四千代）—魚王—真生（掘王）—平等行王—闇火—焰熾—善譬—虛空—戒行—無憂—離憂—除憂—勝將—大將—胎生—明星—方主—塵—善意—善住—歡喜—大力—大光—大名称—十車—二十車—妙車—步車—十弓—百弓—二十弓—妙色弓—罪弓—海將—難勝—茅草—大茅草—（褒多那城にて一百八代）—大茅草（其王無子。……剃除鬚髮。捨於王位。出家修道。……一獵師。……遙見王仙。謂是白鳥。遂即射之。……有兩湧血出墮於地。……即便生出二菩薩。……其一莖蔗。出一童子。更一莖蔗。出一童女。）

— 善生（菩薩生、日種） —

|||
善賢（水波、第一王妃）

第二妃 — 炬面（国外追放。釈迦（能）の姓を立てる。迦毘羅婆蘇都に住む。三子没して、末弟が王となる。）

—金色

—象衆

—別成（尼拘羅）—拘盧—瞿拘盧—師子頬

⑯MV. (vol. I p.348, Jones I p.293) ;

Mahāsammata—Kalyāṇa—Rava—Upoṣadha—Māndhāṭṛ—（数千代）—

Ikṣvāku Sujāta (Śāketa市の王) — Opura (国外追放される。Kapila仙人の住むヒマラヤ麓のSākota樹

の森にに入る。能く治めるからŚākiya（能仁）と呼ばれる。)

都市 (Kapilavastu) を建設する。)

—Nipura (国外追放される。Opura の後を継ぎ王となる)

—Karakāṇḍaka (国外追放される。Nipura の後を継ぎ王となる)

—Ulkāmukha (国外追放される。Karakāṇḍakaの後を継ぎ王となる)

—HastiKaśīrṣa (国外追放される。Ulkāmukhaの後を継ぎ王となる) —

—Suddhā (女)

—Vimalā (女)

—Vijitā (女)

—Jalā (女)

—Jalī (女)

Jentī (内縁の妻) — Jenta

—HastiKaśīrṣa—Simha— hanu (以下【04-02】)

⑰衆許（大正03 p.933下）；

三摩達多（田主、刹帝利姓）—愛子—善友—最上—戒行—頂生（我嬪王）—尼嚕—烏波尼嚕—室尼嚕—摩尼嚕—嚕唧—酥嚕唧—母唧—母唧鱗捺—阿誡—阿儻囉他—婆儻囉他—婆誡囉—摩賀婆誡囉—舍矩襍—摩賀舍矩襍—矩舍—烏波矩舍—摩賀矩舍—酥捺哩舍曩—摩賀酥捺哩舍曩—鉢囉擎那—摩賀鉢囉擎那—鉢囉擎那—摩賀鉢囉擎那—鉢囉半迦囉—鉢囉多波—囉彌嚕摩多—阿哩唧

—囉哩唧瑟摩—曩哩唧瑟摩多—阿哩止娑滿多—（布多羅迦城にて一百代）—降怨—（阿喻駄也城にて五万四千代）—無能勝—（波羅奈国にて六万代）—耨鉢囉娑訶—（緊閉羅城にて八万四千代）—梵授—（賀悉帝曩布里城にて三万二千代）—賀悉帝捺多—（怛叉尸羅城にて五千代）—波多黎薩—（烏囉娑大城にて三万二千代）—曩識曩囉曩—（無能大城にて三万二千代）—勝軍—（瞻波大城にて一万八千代）—龍天—（怛摩黎多城にて二万五千代）—仁—（怛摩黎多城にて一万二千代）—海—（難多布里也城にて一万八千代）—妙意—（王舍城にて二万五千代）—娑多護努那—（波羅奈国にて一百代）—大軍—（矩舍囉帝大城にて一千代）—海軍—（補多羅迦城にて一千代）—娑多半尼囉—（矩舍囉帝城にて八万四千代）—摩咽目併—（波羅奈国にて十万代）—摩咽鉢帝（地主）—（阿喻駄大城にて一百代）—持世—（彌體羅城にて八万四千代）—大天—（彌體羅城にて八万四千代）—爾彌—摩娘努—涅里咤爾彌佐努—嚕波佐努—佐努摩曩—佐努滿多—酥涅里舍—娑涅里舍—酥嚕多細曩—達魔細曩—尾爾多—摩賀尾爾—尾爾多細曩—阿輸迦—尾識多輸迦—頗羅婆埵—惹羅婆埵—沒度摩囉—阿嚕擎—爾扇波帝—里娘—商迦囉迦—阿難那—阿那里舍目併—惹那迦—散惹曩佐—惹曩娑婆—案曩播曩—鉢囉祖曩播曩—阿囉多—波羅囉多—鉢囉底瑟恥多—酥鉢囉底瑟恥多—摩賀摩羅—囉賀曩—酥摩帝—涅里咤囉賀—捺捨駄努—設多駄努—曩囉帝駄努—室左怛囉駄努—尾囉多駄努—涅里咤駄努—捺捨囉他—（僧迦大城にて七万七千代）—阿末麗沙—龍護—（波羅奈国にて一百代）—訖哩吉—（この時、仏世尊、訖哩吉王宮に下生）—善生—（一百王）—迦囉擎—瞿曇（出家して訖哩瑟擎吠波野努仙人の弟子となる。姪女殺害の罪をさせられ、
処刑。その際、「滴二滴精墮地面上……生二童子」）
—婆囉捺囉惹（王位を紹ぐ、嗣子なし）—童子（日族、瞿曇、阿儻囉婆、甘庶を姓とする。婆囉捺囉惹の王位を継ぐ。甘庶王）—（補多落迦城にて一百代）—

最後の甘庶王

- 烏羅迦目併
 - (能仁。国外追放。雪山の側、迦毘羅に住す。
 - 尾嚕茶迦甘庶王、命終後、王位を継ぐ)
- 迦羅尼
- 賀悉帝曩野
- 酥曩布囉迦

(後妻) —樂

—若迦扼—賀悉帝—努布囉迦—烏布囉迦—（迦毘羅大城にて五万五千代）—十車—九十車—百車—畫車—最勝車—牢車—十弓—九十弓—百弓—最勝弓—畫弓—牢弓—星賀賀努（以下 [04-02] ）
—師子吼

⑯衆許（大正03 p.936中）；乃為立名名為日族為第一姓……因立瞿曇為第二姓……因立阿儻囉婆為第三姓……因立甘庶為第四姓。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.001中）；釈迦始祖劫初刹利相承姓緣譜第一（出長阿含經）
- ①釈迦（大正50 p.003上）；釈迦賢劫初姓瞿曇緣譜第二（出十二遊經）
- ①釈迦（大正50 p.003下）；釈迦近世祖始姓釈緣譜第三（出長阿含經）
- ③氏譜（大正50 p.085上）；但明仏姓自分五別。一曰瞿曇。二曰甘庶。三曰釈迦。四曰舍夷。五曰日種。
- ④統紀（大正49 p.139上）；序曰。世人皆知如來為刹帝利之聖種而終莫能委瞿曇釈迦前後立号之義。須知言瞿曇者。有四義焉或純淑。或最勝。此從本德。以為称也。或甘庶。或日種。此就本緣以為言也。其称釈迦者則有三名。拏德建号。則曰能仁。依處称名。則云舍夷之與直林。然釈迦之起。

実見於甘蔗王之四子。甘蔗梵語。既為瞿曇。則釈迦之称。實自瞿曇出。前瞿曇。後釈迦。雖有二稱。其實一姓。前人有以日種甘蔗舍夷並列為五氏者。本末粉揉。無所取裁。

⑤JM. (p.021, 番中 p.085) ; この劫 (賢劫 Bhaddakappa) の最初の時代に、我々の世尊は、まず最初に大衆によって選ばれたことにより、(Mahāsammata) と呼ばれる王になった。

Mahāsammata—Roja, Vararoja, Kalyāṇa, Varakalyāṇa, Uposatha, Mandhātar, Varamandhātar, Caraka, Upacaraka, Cetiya, Mucala, Mahāmucala, Mucalinda, Sāgara, Sāgaradeva, Bharata, Bagīratha, Ruci, Suruci, Patāpa, Mahāpatāpa, Panāda, Mahāpanāda, Sudassana, Mahāsu-dassana, Neru, Mahāneru, Accimaの28人 (Kusāvatī, Rājagaha, Mithilāという3つの都城で) — Kusāvatīにて100人、その最後がArindama—Ayojhāにて56人、その最後がDuppasaha—Bārā-nasīにて60人、その最後が Ajita — Kapilaにて8万4千人、その最後が Brahmadatta—Hatthipuraにて36人、その最後が Kambalapasaha — Ekapakkhaにて32人、その最後が Purindada — Vajiravatīにて28人、その最後が Sādhīna—Mathurāにて22人、その最後が Dhammagutta — Ariṭṭhapuraにて18人、その最後が Sivi — Indapattaにて17人、その最後が Brahmadeva — Ekapakkhaにて15人、その最後が Baladatta — Kolatṭhiにて14人、その最後が Hatthideva — Kaṇṇakochiにて9人、その最後が Naradeva — Rojaにて7人、その最後が Mahinda — Campāにて12人、その後が Nāgadeva — Mithilāにて25人、その後が Samuddadatta — Rājagahaにて25人、その後が Divāṅkara — Takkasilāにて12人、その後が Tālissara — Kusinārāにて12人、その後が Sudinna — Malittiyaにて9人、その後がSāgaradeva — MithilāにてMakhādevaを始めとする8万4千人、その後がNimi — BārānasīにてKaṭārajanaka, Sumanikara, Asoka等を始めとする8万4千3人、その後が Vihāsaya — Bārānasīにて Vijitasena, Dhammasena, Nāgasena, Samatha, Disampati, Reṇu, Kusa, Mahākusa, Bharata Dasaratha Rāma, Biṭāraratha, Cittaramsi, Amabaramsi, Sujāta, Okkākaの16人、一数十万の王、その後に再びOkkāka — 数千の王、その後にさらにOkkāka — Kapilaにて Okkāmukha, Nipura, Candimant, Candamukha, Siri, Sañ-jaya, Vessantara, Jālin, Sivivāhana, Sīhassaraの10人—Sīhassara Kapilaにて82000人、その後がJayasena。 (以下 [04-02])

⑥Bigandet. (vol. I p.010, 赤沼 p.013) ; 中国に於て、摩訶三摩達多王 (Mahathamadat) より、婆羅那斯国の甘庶王 (Ookakaritz) に至るまで25萬2千5百56人の王が君臨せられた。……迦維羅城 (Kapilawat) の最初の主たる炬面王 (Ookamukka) からエーッサンタラ (Wethandra) 太子にいたるまで七王治化し、エーッサンタラの子ジャーリ (Dzali) から釈尊の曾祖父ジャヤセーナ (Dzeyathana) 王にいたるまで、8萬2千2人の王が相続して君臨した。

【04-02】 釈尊の家系——親族

釈尊の父・母・叔父・叔母・従兄弟・子の名を示す。

[A] 原始聖典

①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (大本経 vol. II p.007) ; 私の父はSuddhodana王、生みの母は Māyā devīである。

① ‘Theragāthā’ Vs.534 (p.057) ; Suddhodanaは大仙人 (釈尊) の父、Mahāmāyāは仏陀の母、菩薩を母胎によって守り (bodhisattam parihariya kuchchinā) 、死んで三十三天において楽しんだ。

① ‘Buddhavaṃsa’ 02–65 (p.013) ; 生母をマーヤー (Māyā) と名づけ、父をスッドーダナ (Suddhodana) と名づけ、彼はゴータマ (Gotama) となるであろう。

① ‘Buddhavamsa’ 26–13 (p.097) ; 私の父はSuddhodana王、生みの母はMāyā devīという。

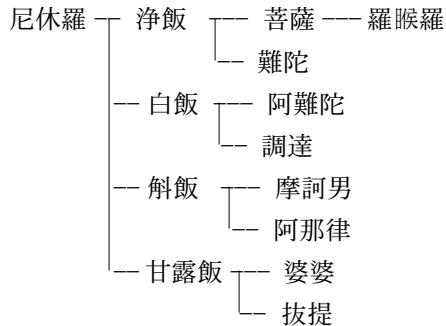
②長阿含經001「大本經」(大正01 p.003下)；我父名淨飯刹利王種、母名大清淨妙。

③長阿含030「世記經」(大正01 p.149中)；師子頬—白淨王—菩薩—羅睺羅

④增一阿含26–06(大正02 p.637中)；父名真淨、母名摩耶。

⑤四分律「受戒犍度」(大正22 p.779中)；師子頬—悅頭檀—菩薩—羅睺羅

⑥五分律(大正22 p.101中)；



⑦根本有部律「藥事」(大正24 p.055下)；父名淨飯。母号摩耶。城名劫比羅。賢子羅怙羅。

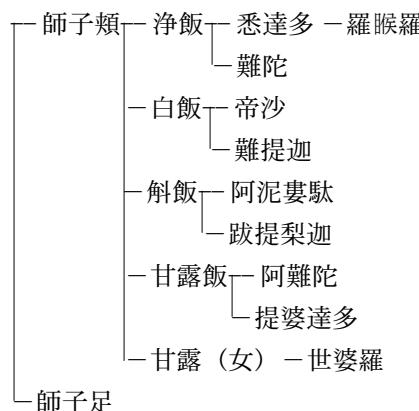
⑧根本有部律「破僧事」(大正24 p.105上)；其堅弓王而有二子、一名師子頬、二名師子吼。此贍部洲所有一切善射之者師子頬王最為上首。其師子頬王而有四子、一名淨飯、二名白飯、三名斛飯、四名甘露飯。師子頬王復有四女、一名清淨、二名純白、三名純斛、四名甘露。淨飯王有二子、其最大太子即我薄伽梵是、其第二者即具壽難陀是。白飯王有二子、一名恒星、二名賢善。斛飯王有二子、一名大名、二名阿那律。甘露飯王有二子、一名慶喜、二名天授。其清淨女誕生一子、名曰善悟。純白有子、名曰有鬚。純斛有子、名曰勝力。甘露有子、名曰大力。我薄伽梵有子、名曰羅怙羅。始從地主大王乃至羅睺羅斷其繼嗣。

⑨法天訣「七仏經」(大正01 p.150下)；我今應正等覺父名淨飯王、母名謨訶摩耶、城名迦毘羅。

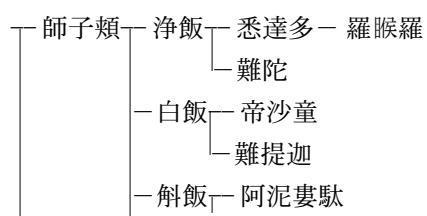
⑩失訣「七仏父母姓字經」(大正01 p.159下)；今我作釀迦文尼仏。父字閱頭檀刹利王。母字摩訶摩耶。所治國名迦維羅衛。先大王名槃提。

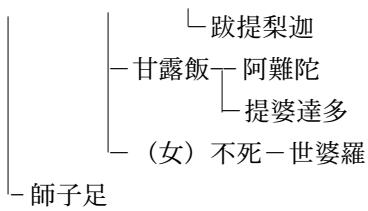
⑪法立共法炬訣「大樓炭經」(大正01 p.309上)；師子—悅頭檀—悉達菩薩—羅云

⑫闍那崛多等訣「起世經」(大正01 p.363上)；



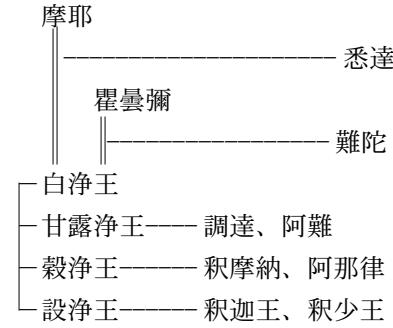
⑬達摩笈多訣「起世因本經」(大正01 p.417下)；





[B] 仏伝經典

⑩十二 (大正04 p.146下) ;



⑯集經 (大正03 p.675下) ;

(父方)

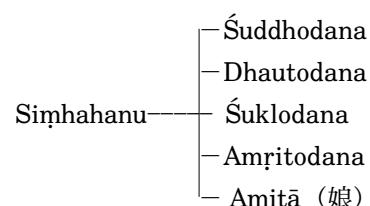


(母方)

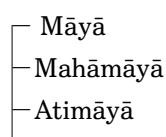


⑯MV. (vol. I p.352, Jones I p.298) ;

(父方)



(母方)



Subhūti——
 (釈迦族の族長) —— Anantamāyā
 —— Gūliyā
 —— Kolisovā
 —— Mahāprajāpatī

⑦衆許 (大正03 p.937下) :

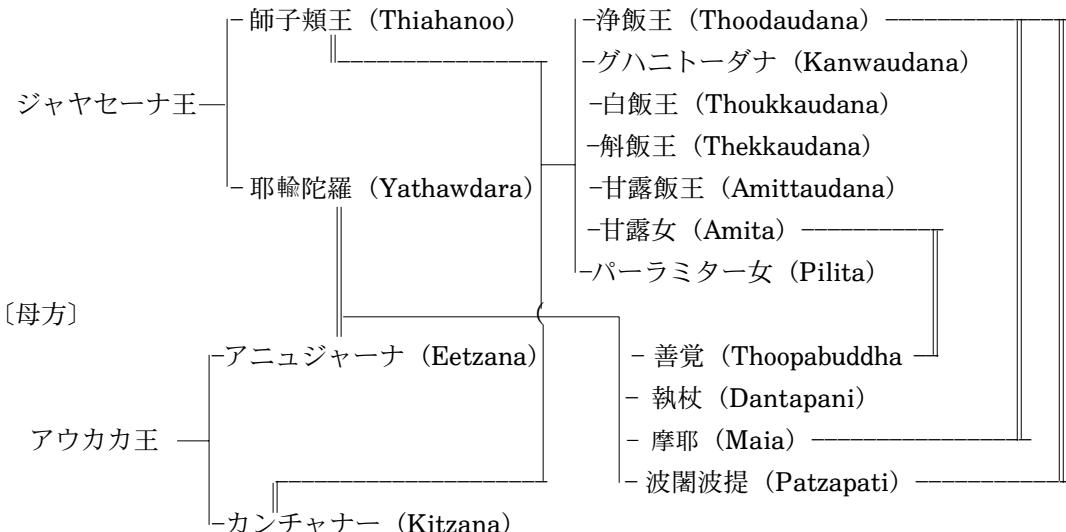
星賀賀努王	師子吼王	○ 羅怙羅
—— 净飯王 —— 悉達多、難陀、(女) 蘇鉢羅	—— 白飯王 —— 婆帝疎嚕、婆棕哩賀、(女) 鉢怛囉摩黎	
—— 餅飯王 —— 摩賀曩麼、阿爾樓駄、(女) 跋棕黎		
—— 甘露飯王 —— 阿難陀、提婆達多、(女) 細囉羅		

[C] 後世の仏伝資料

⑤JM. (p.021, 番中 p.085) ; また彼らのうちの最後はJayasenaと呼ばれる王であった。彼には SihahanuとYasodharāという2人の子供がいた。そして、Devadaha城には釈氏Devadahaと呼ばれる王がいた。彼にもAñjanaとKaccānāという2人の子供がいた。彼らのうち、Kaccānāは Sihahanu王の第一夫人となった。Jayasenaの娘Yasodharāは釈氏Añjanaの第一夫人となった。釈氏Añjanaにも、MāyāとPajāpatīという2人の娘、DaṇḍapāṇinとSuppabuddhaという2人の息子がいた。Sihahanu王には、Suddhodana, Dhotodana, Sakkodana, Sukhodana, Amitodanaという5人の息子、AmitāとPamitāという2人の娘がいた。彼女たちのうち、AmitāはSuppabuddhaの第一夫人となった。彼女にはSubhaddakaccānāとDevadattaという2人の子供がいた。釈氏Añjanaの娘MāyāとPajāpatīとは、釈氏Suddhodanaの第一夫人となった。彼女たちのうち、Māyāの息子がSiddhatthaと呼ばれる我らの菩薩である。釈氏Suppabuddhaの子でDevadattaの妹である Subhaddakaccānāと呼ばれる娘が、我らの菩薩の第一夫人となった。彼女にもRāhulabhaddaと呼ばれる息子があった。

⑥Bigandet. (vol. I p.013, 赤沼 p.017) ;

[父方]



【05-01】入胎——マハーマーヤーの夢

母のマハーマーヤー (Mahāmāyā) が菩薩が白象となって、右脇から胎内に入る夢を見る(1)。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.108) ; 菩薩が兜率天より正念・正知にして母胎に入るとき、大地は揺れ動き、震い、振動する (yadā Bodhisatto Tusitā kāyā cavitvā sato sampajāno mātu-kucchim okkamati, tadā 'yam paṭhavī kampati samkampati sampavedhati)。
- ①MN.123 ‘Acchariyabbhutadhamma-s.’ (希有未曾有法經 vol.III p.119) ; 念あり、知あって、菩薩は兜率天身より没して母の胎内に入った (Tusitā kāyā cavitvā mātu kucchim okkami)。
- ①AN.04-127 (vol. II p.130) ; 菩薩は兜率天から、正念・正知をもって母胎に入る (sato sampajāno mātukucchiyam okkamati)。
- ①AN.08-070 (vol. IV p.312) ; 菩薩は兜率天から、正念・正知をもって母胎に入る (sato sampajāno mātukucchim okkamati)。
- ①‘Therīgāthā’ V.162 (p.139) ; 多くの人々のためにマーヤーはゴータマを産んだ (bahūnam vata atthāya Māyā janayi Gotamam)。
- ②長阿含002「遊行經」(大正01 p.016上) ; 若始菩薩從兜率天降神母胎、專念不亂、地為大動。
- ③中阿含032「未曾有經」(大正01 p.470上) ; 世尊在兜瑟哆天於彼命終知入母胎。
- ⑥增一阿含42-05 (大正02 p.753下) ; 菩薩從兜術天降神來下在母胎中是時地亦大動。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.716上) ; 爾時菩薩從覩史天下、託生劫比羅城淨飯王家。
- ⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」(大正23 p.907下) ; 爾時菩薩在覩史天宮、將欲下生、先以五事觀察世間。云何為五。一觀遠祖、二觀時節、三觀方國、四觀近族、五觀母氏。時六欲天來至母所、三淨其腹。摩耶夫人因寢、夢見六牙白象來降腹中。
- ⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.947下) ; 菩薩從覩史天下託生劫比羅城淨飯王家。
- ⑪根本有部律「出家事」(大正23 p.1020下) ; 爾時菩薩在覩史天宮、觀察世界、有五事具廻、將欲下生。時六欲諸天、辦所應辦、於迦維羅衛國、閱頭檀家、三淨摩耶夫人胎中、乃令獲大吉夢。見菩薩作白象形、降神母胎。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.106下) ; 我今從覩史多天下生人間、於白淨王最大夫人(摩耶)胎中、為其太子、誕生之後証常住果。……即於夜中、如六牙白象形、下於天竺、降摩耶夫人清淨胎內。爾時摩耶夫人即於其夜見四種夢。一者……二者……三者……四者……。
- ⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.297下) ; 是時菩薩於天宮上、以五種事觀察世間。云何為五。一觀遠祖、二觀時節、三觀方國、四觀近族、五觀母氏。六欲諸天三淨母腹、摩耶夫人因寢夢見六牙白象來降腹中。
- ⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.388中) ; 若大菩薩從覩史多天下降母胎時、大地振動……。
- ⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.395中) ; 爾時世尊為菩薩時在覩史多天、以五種事觀察世間。六欲天子三淨母腹、現白象相來入母胎。
- ⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.399中) ; 菩薩昔在覩史天宮、將欲下生觀其五事。欲界天子三淨母身、作象子形託生母腹。
- ⑫法天訣「七仏經」(大正01 p.152中) ; 彼菩薩摩訣薩從兜率天下降闇浮入母胎時、部摩夜叉高聲唱言。此大菩薩大威德大丈夫捨天人身及阿修羅身廻彼母胎而受人身……。
- ⑫白法祖訣「仏般泥洹經」(大正01 p.165中) ; 仏為菩薩時、從第四兜術天來下、入母腹中。時天地為大動。
- ⑫失訣「般泥洹經」(大正01 180下) ; 若始菩薩、從第四天下入母胎、明哲慈意、欲見道化、開發愚曇、乃放神光、震動天地。

- ⑫法顯訳「大般涅槃經」（大正01 p.191下）；菩薩在兜率天、將欲來下、降神母胎、故大地動。
*①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’（大本經 vol. II p.012）；Vipassī菩薩は兜率天から正念にて母の母胎に下るといふのは法である（Vipassī Bodhisatto Tusitā kāyā cavitvā sato sampajāno mātukuc-chim okkami. ayam ettha dhammatā.）。
- *②長阿含001「大本經」（大正01 p.003下）；當知諸仏常法毘婆尸菩薩從兜率天降神母胎從右脇入、正念不亂……。
- *⑬「善見律毘婆沙」（大正24 p.760上）；如菩薩母夢菩薩初欲入母胎時、夢見白象從忉利天下入其右脇、此是想夢也。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.050, 南伝28 p.107)；（夢の中で）菩薩は白色の優れた象となって……母〔妃の臥する〕臥榻の周りを、右の方へ三たび繞り、〔母妃の〕右脇を開いてその胎に入られたようであった。斯うして菩薩は、阿沙陀祭最後の日に（uttarāsālha-nakkhattenā）、母胎に宿られたのである。
- ②修行（大正03 p.463中）；於是能仁菩薩、化乘白象、來就母胎。用四月八日、夫人沐浴、塗香着新衣畢、小如安身。夢見空中有乘白象、……來詣我上、忽然不現。
- ③瑞應（大正03 p.473中）；菩薩初下、化乘白象。冠日之精、因母昼寢、而示夢焉、從右脅入。夫人夢寤、自知身重。
- ④異出（大正03 p.618上）；即下入王夫人腹中。
- ⑤普曜（大正03 p.491上）；于時菩薩過冬盛寒、至始春之初、修合星宿、春末夏初樹木彫落、初始花茂不寒不暑。……菩薩便從兜術天上、垂降威靈化作白象。口有六牙……降神于胎趣於右脅。……時晏然寐忽然即覺、見白象王光色如此來處于胎其身安和。
- ⑥方廣（大正03 p.548下）；冬節過已、於春分中毘舍佉月、……氏宿合時三界勝人。……而弗沙星正與月合。菩薩是時從兜率天宮沒、入於母胎。為白象形、六牙具足、……於母右脅降神而入。聖后是時安隱睡眠、即於夢中見如斯事。
- ⑦LV. (Lef. p.054, 外蘭・梵 p.386, 外蘭・訳 p.789)；ヴァイシャ一カ月の……第十五日の満月の夜、……〔月が〕プシュヤ星と合する時に（vaiśākhamāse……pañcadaśyām pūrṇamās-yām……puṣyanakṣatrayogena）、菩薩は、兜率天……より下生して、……白象の子となり、六牙を有し……母の右の胎に入りたり。……また、安樂なる寝台に眠りたるマーヤ（Māyā）妃は、かくの如き夢を見たり。
- ⑧僧伽（大正04 p.122中）；是時菩薩不懷恐怖、從兜率天降神。
- ⑨十二（大正04 p.146中）；伊羅慢龍王以為制乘名白象、其毛羽踰於白雪山之白。象有三十三頭、頭有七牙、一牙上有七池。……菩薩與八萬四千天子、乘白象寶車來下。時白淨王夫人中寐見白象彷彿、寐寤驚寤以告王。
- ⑩行經（大正04 p.057下）；白象如銀山 菩薩乘象王 …… 降神下生時 現瑞甚微妙 菩薩降入胎 如鷹處清淵
- ⑪過去（大正03 p.624上）；爾時菩薩、觀降胎時至、即乘六牙白象、發兜率宮。……以四月八日明星出時、降神母胎。于時摩耶夫人、於眠寤之際、見菩薩乘六牙白象騰虛而來、從右脅入。……心大歡喜、踊躍無量、見此相已。
- ⑫集經（大正03 p.683中）；菩薩正念、從兜率下、託淨飯王第一大妃摩耶夫人右脅住已。是時大妃、

於睡眠中、夢見有一六牙白象、……乘空而下、入於右脅。

⑯MV. (vol. II p.008, Jones II p.008) ; 「さあ出発する」と菩薩が言われた丁度その瞬間に、夫人は彼の夢を見た。六牙の高貴な象の形をして、彼女の胎内に入る。パウシャ (Pauṣa)月⁽²⁾の満月の夜であった (pūrṇāyām pūrṇamāsyām puṣyanakṣatrayogayuktāyām rātryām)。

⑰衆許 (大正03 p.938下) ; 爾時六欲天子及天帝釈、觀見菩薩乘六牙白象、下兜率天処摩耶腹。……爾時摩賀摩耶、作四種夢。一夢白象口有六牙、二夢白象從天來下入於腹中。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦 (大正50 p.005上) ; 菩薩從兜率天化作白象。 (出普曜經)

①釈迦 (大正50 p.015上) ; 以四月八日明星出時降神母胎。 (出因果經)

②歴代 (大正49 p.023上) ; 仏以莊王九年癸巳四月八日、現白象形從兜率降中天竺國迦毘羅城淨飯大王第一夫人摩耶右脇。

③氏譜 (大正50 p.088下) ; (普曜經、瑞應修行二經を引用)

④統紀 (大正49 p.140下) ; 菩薩、已從此沒、生於人間淨飯王家。乘旃檀樓閣處摩耶夫人胎。

④統紀 (大正49 p.141下) ; 時菩薩乘六牙白象發兜率宮……以四月八日明星出時降神母胎。……時摩耶夫人眠寤之際、見六牙白象騰空而来、從右脇入。

⑤JM. (p.025, 畑中 p.099) ; マハーマーヤー (Mahāmāyā) 王妃の胎内にアーサル八月の満月の日に (Āsālhapuṇṇamāyām Uttarāsālhanakkhattenā) 、……結定を得た。……眠りに入っている時、次のような夢を見たそうである。一頭の白い象が黄金の山からおりてきて、彼女を右繞し、右脇を破って入ったかのようなのであった。

⑥Bigandet. (vol. I p.027, 赤沼 p.037) ; かくて、菩薩は立ち上り、兜率天のあらゆる天人を伴いて、……天界を離れ、人間の坐に下り、光榮ある摩耶夫人の胎内に入り給うた。 (摩耶夫人の夢：四王天の天人が夫人をヒマワンド山に運び、そこで菩薩が白象となって夫人の右脇を開いてその中に姿を隠す)

(1) 白象に乗ってとするものや、夢を四種とするものもある。

(2) Jonesは「月がプシュヤ星と合するとき」 (puṣyanakṣatrayogayuktāyām) をパウシャ月に解するがLV.との関連で言えば疑問である。

【05-02】入胎——占師が夢を占う

占師がマハーマーヤーの夢を占い、托胎した王子が転輪聖王となるか、そうでなければ仏となると予言する。

[A] 原始聖典

⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.107中) ; 爾時摩耶夫人即於其夜見四種夢。一者見六牙白象來處胎中、二者見其自身飛騰虛空、三者見上高山、四者見多人衆頂禮圍繞。作是夢已向淨飯王說如上事。時淨飯王即召相師說其夢事、相師答曰、如我相法、王大夫人必當生男、具足三十二丈夫之相莊嚴其身、若紹王位當乘金輪伏四天下、若出家修道證法王位、名聞十方作衆生父。

[B] 仏伝經典

⑯NK. (vol. I p.050, 南伝28 p.107) ; 王は64人の名高い婆羅門たちを呼び寄せ、……問うた。婆羅門達は、「……お妃が御懷妊なされたのでござります。そ〔の王子〕が若し家に留まって

〔家庭〕生活なされば世の転輪王となられるであります。若し家を出て生活をなされば、…
…仏と成られるであります。」と〔答えた〕。

- ②修行（大正03 p.463中）；王意恐懼心為不樂、便召相師隨若耶、占其所夢。相師言。此夢者、是王福慶、聖神降胎、故有是夢、生子廻家、當為転輪飛行皇帝、出家學道、當得作佛、度脫十方。
- ④瑞應（大正03 p.473中）；王即召問太卜、占其所夢。卦曰。道德所歸、世蒙其福、必懷聖子。
- ⑥普曜（大正03 p.491下）；時王請梵志問此意、梵志為王說偈言。梵志聞是言 歡喜無不吉 生子有相好 在家為聖王 假愍世出家 成佛祐三界。
- ⑦方廣（大正03 p.549上）；時王聞此語、即召占夢人、而語彼人言、宜占皇后夢。皇后時告彼 己所夢因縁。汝既稱善占……必生勝相子、在家作輪王 威力統所化、出家成佛道 哀愍諸世間。
- ⑧LV. (Lef. p.057, 外蘭・梵 p.390, 外蘭・訳 p.791)；王は、その時、直ちに、ヴェーダに通曉し、聖典を朗唱する婆羅門たちを招喚せり。……婆羅門達は、かくの如く言えり。「〔あなたの〕種族に不吉なることなく、……最勝の息子を生むべし。……転輪聖王を、……もし……出家するならば、彼は、三界において供養せられるべき仏陀となり、……」
- ⑬行經（大正04 p.058上）；王聞后所夢 懷疑喜踊躍 即召梵志占 為說夢所見 …… 女夢日光明入腹 因此懷妊生吉子 如日赫照普地界 其子德尊主十方 …… 生子聖達転金輪 …… 此女夢白象 趣入其右脅 …… 所生必為佛
- ⑭過去（大正03 p.624中）；爾時白淨王、……即便遣請善相婆羅門。……時婆羅門、即占之曰。…
…此相必是正覺之瑞。若不出家、為転輪聖王、王四天下、七寶自至、千子具足。
- ⑮集經（大正03 p.683下）；爾時占夢婆羅門師、白大王言。夫人所夢、其相甚善。大王今者當自慶幸夫人所產。必生聖子、彼於後時、必成佛道、名聞遠至。
- ⑯MV. (vol. II p.012, Jones II p.011)；もし世間に止まれば、彼は強力な王になるでしょう。
しかし、もし宗教的生涯を選び取るならば、自分を導き人天を導く仏陀となられるでしょう。
- ⑰衆許（大正03 p.939上）；王以此夢問其相師。相師告王。今此夫人必生太子具諸相好、若在王宮作転輪王、若是出家修諸梵行、成正等覺号天人師。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.015上）；爾時白淨王、……即便遣請善相婆羅門。（出普曜經）
- ④統紀（大正49 p.141下）；王召婆羅門占之。曰今此夫人胎中之子、必是正覺之瑞、若不出家當為輪王。
- ⑤JM. (p.026, 番中 p.100)；婆羅門たちは、「大王よ、ご心配召去るな。お妃さまに胎児が宿られたのです。そしてそれは男児であって女児ではありません。彼がもし俗家にとどまるならば、転輪王になるであります。もし俗家から離れて出家するならば、世間において煩惱の覆いを開く仏陀になるであります」と答えた。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.029, 赤沼 p.039)；淨飯王は直ぐ様六十四人の婆羅門を召し寄せてこの夢の占を命ぜられた。……「大王よ、……御子がもし家にあり給わば四天下を領する転輪聖王となり給うであろうし、またもし、世の騒々しさを逃れ給うであろうならば……遂に仏陀の大果を得給うであります」。

【05-03】入胎——胎内で十ヵ月を過ごす
菩薩がマハーマーヤーの胎内で十ヵ月を過ごす。

[A] 原始聖典

- ①DN.014 “Mahāpadāna-s.” (DN.vol. II p.14) ; 菩薩の常法として、10ヶ月胎内にあるとしている。
- ①MN.123 ‘Acchariyabbhutadhamma-s.’ (希有未曾有法經 vol.III p.122) ; 菩薩の母は菩薩をちょうど10ヶ月間胎内に宿して産む (das'eva māsāni Bodhisattam Bodhisattamātā kucchinā pariharitvā vijāyati) 。
- ②長阿含002「遊行經」(大正01 p.016上) ; 菩薩二足尊 百福相已具 始入母胎時 地則為大動。十月處母胎 如龍臥茵蓐 初從右脇生 時地則大動。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.782中) ; (定光菩薩) 至十月滿已生一男兒。端正無比世之希有。始生在地無人扶侍、自行七步而說此言。我於天上世間最上最尊我當度一切衆生生老病死苦。
- ⑦四分律「雜犍度」(大正22 p.950中) ; (釈尊の前世の慧灯王) 十月滿已生一男兒。
- ⑪根本有部律「藥事」(大正24 p.060下) ; (賢劫菩薩) 遂於國大夫人腹內受胎。……十月滿已。當誕子。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.106下) ; 堪任菩薩具足十月處其胎藏而此女人、所其生業往來進止、曾無障礙。
- ⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.298上) ; 十月滿足往藍毘尼林攀無憂樹枝。暫時佇立便於右脇誕生菩薩。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.052, 南伝28 p.109) ; 他の婦人は十箇月 (dasamāsa) に満たぬか或は〔十箇月を〕過ぎてから、或いは坐り或は臥しながらお産をするが、菩薩の母はそうではなく、彼女は菩薩を十箇月間その胎内に保護して後、立ちながらお産をする。これが菩薩の母の常法である。
- ②修行 (大正03 p.463下) ; 十月已満、太子身成。
- ⑥普曜 (大正03 p.492中) ; 於是菩薩在胎十月、開化訓誨三十六載諸天人民、使立聲聞及諸大乘。
- ⑦方広 (大正03 p.549下) ; 云何菩薩世間之宝、最勝清淨殊妙香潔、乃捨兜率处在人間、於母胎中經於十月。
- ⑧LV. (Lef. p.060, 外蘭・梵 p.396, 外蘭・訳 p.794) ; されば、一体何故に、一切世間を超出せる菩薩が、清浄にして臭氣なきく衆生の宝なるにもかかわらず、兜率の天界より下生して、惡臭ある人間の身体に入り、十ヶ月の間、母の胎内に住したるや (…daśamāsān mātuḥ kukṣau sthita iti) 。
- ⑭過去 (大正03 p.624下) ; 菩薩處胎、垂滿十月、身諸支節及以相好、皆悉具足。……
- ⑮集經 (大正03 p.685中) ; 爾時菩薩聖母摩耶、懷孕菩薩、將滿十月、垂欲生時。
- ⑯MV. (vol. II p.018, Jones II p.016) ; すべての菩薩の母は十ヶ月が満ちた時 (pratipūrṇe daśame māse) 、出産する。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.005上) ; 菩薩在胎十月。 (出普曜經)
- ①釈迦 (大正50 p.015下) ; 菩薩處胎垂滿十月。 (出因果經)
- ③氏譜 (大正50 p.089上) ; 普曜經云。在胎十月、開化三十六載天人、使立三乘聖道。
- ④統紀 (大正49 p.142上) ; 夫人懷孕將滿十月。
- ⑤JM. (p.025, 畑中 p.099) ; また「彼女の寿命はいか程であろうか」と觀察して、「10ヶ月と7日間 (Dasamāsānam upari sattadivasāni)」であると知った。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.033, 赤沼 p.043) ; 大摩耶夫人は一挙一動に注意して、十個月の間は、全く。胎内の尊き宝物を安全に護持することにのみ骨折られたのである。

【06-01】出胎——ルンビニー園へ

マハーマーヤーが出産のため、デーヴァダハ（Devadaha）へ里帰りする途中、ルンビニー（Lumbinī）園に立ち寄る。

[A] 原始聖典

- ① ‘Suttanipāta’ Vs.683 (p.132) ; 菩薩は利益・安樂のために人界に生まれられた。釈迦国の Lumbini村で (Sakyānam gāme janapade Lumbineyye) 。
- ② ‘Apadāna’ 03—55—543 (p.501) ; Siddhatthaは世間の安樂のために美しいLumbinīの森で生まれられた。
- ③根本有部律「藥事」（大正24 p.032上）；至嵐毘尼園世尊復告阿難陀曰。我於此林中亦既生已南行七步不假人扶。觀察四方便作是言。此最後身更不受生。
- ④根本有部律「破僧事」（大正24 p.108上）；令摩耶夫人及諸侍從婬女詣藍毘尼園而為遊觀。
- ⑤根本有部律「雜事」（大正24 p.298上）；十月滿足往藍毘尼林攀無憂樹枝。暫時佇立便於右脇誕生菩薩。爾時大地六種震動。放大光明與入胎無異。菩薩生時帝釈親自手承置蓮花上不假扶侍足踏七花行七步已、遍觀四方手指上下作如是語。此即是我最後生身、天上天下唯我獨尊。
- ⑥法顯訳「大般涅槃經」（大正01 p.199下）；常在人天受樂果報無有窮盡。何等為四。一者如來為菩薩時、在迦比羅施兜國藍毘尼園所生之處。二者於摩竭提國、我初坐於菩提樹下得成阿耨多羅三藐三菩提處。三者波羅捺國鹿野苑中仙人所住転法輪處。四者鳩尸那國力士生地熙連河側娑羅林中雙樹之間般涅槃處。

[B] 仏伝經典

- ⑦NK. (vol. I p.052, 南伝28 p.110) ; この二つの都〔迦毘羅衛とマーヤーの故郷デーヴァダハ（Devadaha 天臂）〕の都の中間に、二つの都の人が共に藍毘尼園（Lumbinivana）と呼べる沙羅樹の遊苑があった。
- ⑧修行（大正03 p.463下）；到四月七（八=宋元明）日、夫人出遊、過流民樹下。
- ⑨普曜（大正03 p.493中）；爾時王后臨產菩薩、承道威神即於初夜起着服飾。將諸侍女往詣王所聽我所言思入園觀……出行遊觀隣樹下。
- ⑩方広（大正03 p.552上）；爾時摩耶聖后、以菩薩威神力故、即知菩薩將欲誕生。於夜初分詣輪檀王而說偈言、大王聽我今所請 久思詣彼龍毘園。
- ⑪LV. (Lef. p.078, 外蘭・梵 p.430, 外蘭・訳 p.817) ; その時マーヤー (Māyā) 妃は、菩薩誕生の時の来たれるを知り、夜の初更において、シュッドーダナ (Śuddhodana) 王のもとに至り、偈をもって語りかけたり。「私の心に久しく園林へ行かんの意思生じたり……」王は……眷属に告げたり。「……秀逸なる美観を備えたるルンビニー（Lumbinī）園を嚴飾せよ」
- ⑫仏讚（大正04 p.001上）；藍毘尼勝園 流泉花果茂 寂靜順禪思 啓王請遊彼
- ⑬BC. (01—06) ; 瞑想するに適した、人里離れた森に行きたいものと思いながら、彼女はある日色とりどりに美しい木立ちの茂る（財宝の神、クベーラの楽園）チャイトララタのように心愉しき森の奥地、ルンビニーと名づける園に行って滞在したいと夫王に願い出た。
- ⑭行經（大正04 p.058中）；不復樂宮室 意思遊園觀 啓王如是已 王即答之曰 恃卿意所樂 王從將俱出 乃至於流民 清涼花樹園
- ⑮過去（大正03 p.625上）；会遇夫人遣信白王、我今欲出園林遊觀。時王聞此益懷歡喜、即勅於外、令淨掃灑藍毘尼園、更使栽植諸妙花果。
- ⑯集經（大正03 p.685中）；時彼摩耶大夫人父善覺長者、即遣使人、詣迦毘羅淨飯王所(摩訶僧祇

師云摩耶夫人父名善覺)、奏大王言。……若彼產出、我女命短、不久必終、我意欲迎我女摩耶、… …安止住於嵐毘尼中。……爾時善覺釈種大臣、於彼春初二月八日鬼宿合時、共女摩耶相隨、向彼嵐毘尼園。

- ⑯MV. (vol. II p.018, Jones II p.016) ; シャカ族のスブーティ (Subhūti) は早速ルンビニー (Lumbīnī) 園を掃除させ花を飾り香水をまいて準備をさせた。マーヤー (Māyā) 夫人は友人に取り囲まれてこの園に入り、イチジクの樹の枝に腕をかけた。
- ⑰衆許 (大正03 p.939中) ; 爾時摩賀摩耶告淨飯王、我今思於園苑住止。王即告彼酥鉢囉沒駄王、汝女摩賀摩耶樂住園苑。酥鉢囉沒駄王即遣工人大興營繕、……名龍弭禰園。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.005中) ; 王后臨産……出遊憐憇樹下。 (出普曜經)
- ①釈迦 (大正50 p.015下) ; 淨掃灑藍毘尼園……。 (出因果經)
- ③氏譜 (大正50 p.089上) ; 普曜經云。時王思惟懷妊將滿、作此念時夫人白王、欲往園觀即勅莊嚴、藍毘尼園花果泉池。
- ④統紀 (大正49 p.142上) ; 其父善覺遣使白王。我女懷藏聖胎威德甚大、慮產子後女命不久、欲迎止嵐毘尼園中盡父子情。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.034, 赤沼 p.047) ; 出産の時が漸やく近づいて來たので、夫人は夫の王に向って天與城 (Dewaha) に歸り、友達や親戚の間に優遊したいということを願われた。……この両国の中には丈の高い沙羅樹の大きな森が、広く拡がっている……。

【06-02】出胎——三十二種の瑞兆

菩薩が生まれようとするとき、世間に光明が満ち、陸地に蓮華が生じるなどの32種の瑞兆が現れる。

[A] 原始聖典

- ④雜阿含604 (大正02 p.166下) ; 王問神言、仏生有何瑞應。神答言、我不能宣說妙勝諸事。今略說少分、光明能徹照 身體具相好 令人喜樂見 感動於天地。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.051, 南伝28 p.108) ; (入胎時) 菩薩が母胎に宿られると同一瞬時に、一万世界は悉く震い搖ぎ動き、三十二種の前兆が現れた。
- ①NK. (vol. I p.054, 南伝28 p.113) ; (誕生時) そして胎内に宿られた時のように、〔菩薩が〕生れ出られる時にも、三十二の前兆が現れた。
- ②修行 (大正03 p.464上) ; (宮参りの後) 於是還宮。天降瑞應、三十有二。
- ④瑞應 (大正03 p.473下) ; (誕生後) 当此日夜、天降瑞應、有三十二種。
- ⑤異出 (大正03 p.618上) ; (誕生時) 太子生時、上至三十三天下至十六泥犁、傍行八極、萬二千天地、皆為大明、天地為之振動。……
- ⑥普曜 (大正03 p.492下) ; (誕生前) 滿十月已、菩薩臨產之時、先現瑞應三十有二。
- ⑦方廣 (大正03 p.551中) ; (誕生前) 菩薩処胎満足十月將欲生時、輸檀王宮先現三十二種瑞相。
- ⑧LV. (Lef. p.076, 外蘭・梵 p.428, 外蘭・訳 p.816) ; (誕生前) 十ヶ月を過ぎて、菩薩誕生の時が近づくや、シュッドーダナ王の園林において、三十二相の前兆が出現せり。
- ⑨僧伽 (大正04 p.122下) ; 若菩薩從兜術天降神時、有大光明照世間界、是智慧光明相初瑞應。… …

…若菩薩初生時拳足行七歩、此七覺意之瑞応。

⑭過去（大正03 p.625中）；（誕生後）當爾之時、所感瑞応、三十有四。

⑮集經（大正03 p.687中）；此是菩薩希奇之事、未曾有法、……此是如來往先瑞相。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦（大正50 p.005上）；菩薩臨産先現瑞応三十有二。（出普曜經）

①釈迦（大正50 p.016中）；當爾之時、所感瑞応、三十有四。（出因果經）

③氏譜（大正50 p.089下）；爾時瑞応又降三十有四。文多不述。

⑤JM. (p.026, 番中 p.101)；生まれた瞬間に、彼に32の異相があらわになった。

⑥Bigandet. (vol. I p.039, 赤沼 p.053)；嘗て懷胎の時に、三十二の異相が顯われたように、今この降誕の時にも、同数の異相が顯われた。

【06-03】出胎——誕生

マハーマーヤーが沙羅樹（あるいは無憂樹）の枝を取ったとき、菩薩が右脇から生れる⁽¹⁾。

[A] 原始聖典

①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’（大本經 vol. II p.014）；菩薩の母は菩薩を立って産む（*thitā va Bodhisattam Bodhisatta-mātā vijāyati*）、これは決まった法である。

①MN.123 ‘Acchariyabbhutadhamma-s.’（希有未曾有法經 vol. III p.122）；菩薩の母は立って菩薩を産む（*thitā Bodhisattam Bodhisattamātā vijāyati*）。

①‘Apadāna’ 03—55—543 (p.501)；Siddhatthaは世間の安樂のために美しいLumbinīの森で生まれられた。

②長阿含002「遊行經」（大正01 p.016上）；菩薩二足尊 百福相已具 始入母胎時 地則為大動。
十月處母胎 如龍臥茵蓐 初從右脇生 時地則大動

④雜阿含604（大正02 p.166下）；（時尊者拳手指）摩耶夫人所攀樹枝。

⑩根本有部律「破僧事」（大正24 p.108上）；見一無憂樹花葉滋茂。夫人欲生太子、便手攀其樹枝。
……夫人即生。……菩薩生時大地振動、天地光明乃至日月所不及處、皆令明徹、其中衆生皆得相見。各相謂言、非唯我身獨在此處生。亦有余人共在此處。一切菩薩有常法式。從胎出時、無諸濃血及余穢惡。其菩薩母欲產之時、不坐不臥攀樹而立、無諸苦惱後有、菩薩常法。生已在地。無人扶侍而行七步、觀察四方便作是言。此是東方、我是一切衆生最上。此是南方、我堪衆生之所供養。此是西方、我今決定不受後生。此是北方、我今已出生死大海。

⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.298上）；十月滿足往藍毘尼林攀無憂樹枝。暫時佇立便於右脇誕生菩薩。爾時大地六種震動。放大光明與入胎無異。菩薩生時帝釈親自手承置蓮花上不假扶侍足踏七花行七步已、遍觀四方手指上下作如是語。此即是我最後生身、天上天下唯我獨尊。

⑫法天訣「七仏經」（大正01 p.153上）；彼菩薩摩訶薩右脇生時大地震動……。

⑬白法祖訣「仏般泥洹經」（大正01 p.165中）；菩薩從右脇生時、天地為大動。

⑭法顯訣「大般涅槃經」（大正01 p.191下）；菩薩初生、從右脅出、故大地動。

* ②長阿含001「大本經」（大正01 p.004中）；諸仏常法、毘婆尸菩薩當其生時、從右脅出、專念不亂。
時菩薩母手攀樹枝、不坐不臥……。

[B] 仏伝經典

①NK. (vol. I p.052, 南伝28 p.110)；妃は王者らしい沙羅樹（*sāla*）の下に行き、沙羅樹の枝

を捉えたいと思った。〔すると〕沙羅樹の一枝が、湿気を加えた蘆のように垂れて、妃の手の方へ寄ってきた。妃は手を伸ばしてその枝を捉えると、それと同時に産氣を催した。〔そこで〕幕を以て妃を囲み、大勢の者はその場を退いた。沙羅の枝を捉えて立ったまま妃はお産をした。

②修行（大正03 p.463下）；十月已満、太子身成。到四月七日、夫人出遊、過流民樹下。衆花開化、明星出時、夫人攀樹枝、便從右脇生墮地。

④瑞應（大正03 p.473下）；到四月八日夜明星出時、化從右脇生墮地。

⑤異出（大正03 p.618上）；太子以四月八日夜半時生、從母右脇生墮地。

⑥普曜（大正03 p.494上）；爾時菩薩從右脇生。

⑦方広（大正03 p.553上）；満足十月、從母右脇安詳而生。正念正知而無染着。

⑧LV. (Lef. p.083, 外蘭・梵 p.440, 外蘭・訳 p.821)；實にまた、菩薩は、母の胎に在りし時、かくの如き種類の神通変現を具足せり。〔すなわち〕彼は、十力月を満ち終って、母の右脇より、正念正知にして子宮の垢に染汚せられることなくして生まれたり。

⑨僧伽（大正04 p.122中）；欲出於家、大尊妙神天子、皆悉扶持胎淨無惱。若舉足行七步。

⑩十二（大正04 p.146下）；調達以四月七日生。仏以四月八日生。仏弟難陀四月九日生。阿難以四月十日生。

⑪仏讚（大正04 p.001上）；時四月八日 清和氣調適 斋戒修淨德 菩薩右脇生

⑫BC. (01-09)；プシュヤの星座がひときわ澄んできたとき (prasannaś ca babhūva puṣyas)、この精進潔斎していた王妃の脇腹よりいささかの陣痛もまた患ひもなく人の世を利益せんために男子が誕生したのであった。

⑬行經（大正04 p.058中）；于時仏星 適與月合 吉瑞應期 從右脇生

⑭過去（大正03 p.625上）；於二月（四=宋元明）八日日初出時、夫人見彼園中、有一大樹、名曰無憂。花色香鮮、枝葉分布、極為茂盛。即舉右手、欲牽摘之、菩薩漸漸從右脇出。

⑮集經（大正03 p.686上）；爾時善覺釈種大臣、於彼春初二月八日鬼宿合時、共女摩耶相隨、向彼嵐毘尼園。……爾時菩薩、見於其母摩耶夫人、立地以手攀樹枝時、在胎正念、從座而起。……是時摩耶立地以手執波羅叉樹枝訖已、即生菩薩。

⑯MV. (vol. II p.020, Jones II p.018)；菩薩の母は普通の女性のように横になったり座ったりして出産せず、立ったままで出産する。菩薩は母の右脇から何らの害を与えることなく生まれ出る。

⑰衆許（大正03 p.939中）；時摩賀摩耶……同往園内……以右手攀彼樹枝欲生太子。……天主復自化身為一老母。在夫人前欲取太子。是時太子初出母胎。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦（大正50 p.005中）；爾時菩薩從右脇生。（出普曜經）

①釈迦（大正50 p.016上）；十月満足。於四月八日日初出時、……菩薩漸漸從右脇出。（出因果經）

②歴代（大正49 p.023上）；仏以莊王九年癸巳四月八日、現白象形從兜率降中天竺國迦毘羅城淨飯大王第一夫人摩耶右脇。

③氏譜（大正50 p.089中）；……經云。十月満足、於四月八日日初出時、於無憂樹下花葉茂盛。便舉右手欲牽摘之、菩薩漸漸從右脇出

④統紀（大正49 p.142上）；二十六年(甲寅)……夫人懷孕將滿十月。……往藍毘尼園中。十月満足。四月八日。日初出時。……菩薩漸漸從右脇出。

⑤JM. (p.026, 畑中 p.101)；菩薩を10力月間母胎で保護し、ヴィサーカー星宿に満月が宿るヴィサーカー月の満月の日に (Visākhapuṇṇamāyām Visākhanakkhattena) 出産した。

⑥Bigandet. (vol. I p.035, 赤沼 p.049)；摩耶夫人は妹の波闍波提とつれ添うて床によりかか

り、自ら指示した一本のエンジン樹 (Engyin) の傍へ床を運ぶ様に命ぜられた。……夫人は静かに床を立ち上り、……小さな若枝を取ってボキと折り給うた。……その時、急に産気がついて太子が降誕し給うた。

(1) 誕生の月日については本「モノグラフ篇」第1号のp.132を参照されたい。

【06-04】出胎——「天上天下唯我為尊」と宣言する

菩薩は誕生するや、四方（あるいは十方）に7歩歩き、「天上天下唯我為尊」と宣言する。

[A] 原始聖典

- ①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (大本經 vol.II p.014) ; 菩薩は生まれると、北方に七歩歩き、一切の方角を眺めて、「私は世間で最高のものである……」というのは、決まった法である。
- ②MN.123 ‘Acchariyabbhutadhamma-s.’ (希有未曾有法經 vol.III p.123) ; 生まれた菩薩は七歩歩き、「私は世間で最上の者、世間で最勝の者、世間で最高の者、これが最後の生であり、もはや後有はない (aggo 'ham asmi lokassa, settho 'ham asmi lokassa, jettho 'ham asmi lokassa, ayam antimā jāti, na'tthi dāni punabbhavo.) 」といわれた。
- ③中阿含032「未曾有經」(大正01 p.470中) ; 世尊初生之時即行七步、不恐不怖亦不畏懼。
- ④雜阿含604 (大正02 p.166下) ; 神以偈答曰、我見相好身 生時二足尊 拳足行七步 口中有所說 於諸天人中 我為無上尊
- ⑤四分律「受戒犍度」(大正22 p.782中) ; (定光菩薩) 至十月滿已生一男兒。端正無比世之希有。始生在地無人扶侍、自行七歩而說此言。我於天上世間最上最尊、我當度一切衆生生老病死苦。
- ⑥根本有部律「藥事」(大正24 p.032上) ; 至嵐毘尼園世尊復告阿難陀曰。我於此林中亦既生已南行七歩不假人扶。觀察四方便作是言。此最後身更不受生。
- ⑦根本有部律「破僧事」(大正24 p.108上) ; 菩薩常法生已在地、無人扶侍而行七歩、觀察四方便作是言。此是東方我是一切衆生最上。此是南方我堪衆生之所供養。此是西方我今決定不受後生。此是北方我今已出生死大海。
- ⑧根本有部律「雜事」(大正24 p.298上) ; 菩薩生時帝釈親自手承置蓮花上不假扶持足蹈七花行七歩已。遍觀四方手指上下作如是語。此即是我最後生身、天上天下唯我獨尊。
- *⑨長阿含001「大本經」(大正01 p.004中) ; 諸佛常法、毘婆尸菩薩當其生時、從右脇出專念不亂、從右脇出墮地行七歩、無人扶持遍觀四方、拳手而言、天上天下唯我為尊、要度衆生生老病死。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.053, 南伝28 p.112) ; それから七歩目に立ち止まって「私は世界の第一人者である」等厳かな声を出して師子吼された。
- ②修行 (大正03 p.463下) ; 行七歩、拳手而言。天上天下、唯我為尊。
- ③瑞應 (大正03 p.473下) ; 即行七歩、拳右手住而言。天上天下、唯我為尊。
- ④異出 (大正03 p.618上) ; 行七歩之中、拳足高四寸、足不踏地、即復拳右手言。天上天下、尊無過我者。
- ⑤普曜 (大正03 p.494上) ; 行七歩顯揚梵音、無常訓教。我當救度天上天下為天人尊。
- ⑥方廣 (大正03 p.553上) ; 不假扶持即便自能東行七歩、……又於南方而行七歩、……又於西方而行七歩、作如是言。我於世間最尊最勝。……又於北方而行七歩、作如是言。我當於一切衆生中、為無上上。

- ⑧LV. (Lef. p.084, 外蘭・梵 p.444, 外蘭・訳 p.823) ; 菩薩は〔まず〕東方 (pūrva) に向かって七歩を進めたり。……南方 (dakṣīṇā) ……西方 (paścima) に向かって七歩を進め……「われは世間において最尊なり……」……北方 (uttara) に向かって七歩を進めたり、「一切衆生の中において、無上なる者 (anuttara) とならん」
- ⑨僧伽 (大正04 p.122下) ; 菩薩初生時拳足行七歩。此七覚意之瑞応。
- ⑩仏讚 (大正04 p.001中) ; 安庠行七歩 …… 堪能如是説 此生為仏生 則為後辺生 我唯此一生 当度於一切
- ⑪BC. (01-14・15) ; すると、七仙星宿 (大熊座) にも似たこの幼子は、(たちまちにして) 堂々たる七歩を踏み出したのであったが、その歩調たるやたじろぐことなく、大地をしっかりと抑えてしまつに正しく上げられ、(大地を) 碎かんばかりで、一股の幅は広大な闊歩であった。……「われこそはそとりを開くため、ひいては人の世を利益せんために生まれきたったものである。そして、私の輪廻の世界における生起はこれが最後である」と宣言して、……慶賀すべき約束事を予示する言辞を吐いた。
- ⑫行經 (大正04 p.059上) ; 故行七歩 如師子起 …… 如師子吼 吾齊以此 未後受形 不復処在 胚胎之獄 今當得仏 最難得道 將導一切
- ⑬過去 (大正03 p.625上) ; 無扶侍者、自行七歩、拳其右手而師子吼。我於一切天人之中最尊最勝。無量生死、於今尽矣、此生利益一切人天。
- ⑭集經 (大正03 p.687中) ; 菩薩生已、無人扶持、即行四方、面各七歩。…… 正語正言。世間之中。我為最勝。我從今日。生分已尽。
- ⑮MV. (vol. II p.024, Jones II p.021) ; それから、釈迦族の家系に (kule sākiyānām) 生れるや否や、しっかりと足取りで、ここに7歩を歩み、諸方角を見渡して、笑った。「これが、今や、一度きりの、最後の誕生である」と。(ayam dānim eko bhavo paścimo tti)
- ⑯衆許 (大正03 p.939中) ; 於其四方各行七歩。東方表涅槃最上、南方表利樂群生、西方表解脱生死、北方表永断輪廻。

[C] 後世の仏伝資料

- ⑰Bigandet. (vol. I p.037, 赤沼 p.051) 菩薩は北方に向って七歩を行じ、一つの宣言をなし給うた。「この生は我が最後の生である。私には最早、他の存在を受くることはないであろう。私はすべてのものの中に於て最も偉大なるものである」。

【06-05】出胎——「サルヴァールタシッダ」と命名される

菩薩が生れて一切の事柄が成就したので、サルヴァールタシッダ (Sarvārthaśiddha、「悉達」「一切義成」と命名される。

[A] 原始聖典

- ①增一阿含24-04 (大正02 p.623上) ; 如來初生時 天地普大動 誓願悉成辦 今曰号悉達
- ②增一阿含45-01 (大正02 p.769中) ; 我聞、真淨王子名曰悉達。出家學道有三十二大人之相八十種好。彼若當在家者便當為轉輪聖王。若出家學道者便成佛道。
- ③根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」 (大正23 p.908中) ; 是時釈梵天與諸天衆百千圍繞、恭敬尊重親事菩薩。又諸王都城邑聚落一切長者婆羅門等、咸為瞻仰禮事菩薩普皆雲集。于時淨飯王作如是念。以我宿福之所招感、今有聖子來生我家、又能成就一切勝事。宜與我子名一切事成。
- ④根本有部律「破僧事」 (大正24 p.108中) ; 菩薩生時、五百宮人各生一男、謂贊鐸迦而為上首。

五百宮人各生一女、旃尼而為上首。五百大臣各生一男、鄖陀夷而為上首。有五百象各生一子、報灑陀子而為上首。五百馬各生一子、馬囉呵馬子而為上首。五百寶藏自開出現。四方諸國王等悉皆降伏、常獻種種雜物而來奉事。爾時大臣見是相已、來自大王。王聞此事便深思念。我今此子成就一切諸善事業、因此大王號此太子、名為成就一切事。是故菩薩初得此名。

⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.298中）；大臣見已白淨飯王曰。大王今日國祚興隆、王子誕生嘉瑞咸應、五百侍男五百侍女、上象上馬各生五百、五百伏藏自然開現、諸國朝賀奇珍總集。王聞告已心大欣躍。告大臣曰。太子生後諸事皆成、宜與立字名一切事成（梵云薩婆訥他悉陀）此是菩薩最初立字、號一切事成。

* ‘siddhattha’ が釈尊をさす呼称として用いられている。① ‘Apadāna’ pp.055, 056, 064, 078, 079, 090, 098, 101, 114, 126, 133, 135, 136, 137, 140, 141, 172, 182, 185, 192, 198, 200, 205, 206, 208, 212, 219, 223, 224, 228, 230, 232, 235, 239, 240, 241, 251, 252, 253, 254, 256, 256, 257, 258, 261, 265, 267, 293, 373, 377, 395, 401, 404, 408, 419, 425, 501, 507, 513

[B] 仏伝經典

- ②修行（大正03 p.463下）；於時集至梵志相師、普稱萬歲、即名太子、號為悉達（漢言財吉）。
- ④瑞應（大正03 p.474上）；字名悉達。
- ⑤異出（大正03 p.618上）；名為悉達。
- ⑦方廣（大正03 p.555上）；作是念言。我子生已、一切事物皆悉增長成就。我當與子名薩婆悉達多。
- ⑧LV. (Lef. p.095, 外蘭・梵 p.466, 外蘭・訳 p.833)；かくの如く、實に、シュッドーダナ王の利益事として望まれたるところの、それらすべてが円満成就せり。それから、シュッドーダナ王に、かくの如き思いが生じたり、「われは王子の命名を如何にすべきや？」と。而して、彼に、かくの如き思いが生じたり、「この子が生まれるや否や、われに一切の利益事が成就せり。故に、われは、この〔王子〕名をサルヴァールタシッダ（一切利益事成就）となさん。」
- ⑩十二（大正04 p.146下）；白淨王有二子。其大名悉達。其小子名難陀。菩薩母名摩耶。難陀母名瞿曇彌。
- ⑪仏讚（大正04 p.004中）；以備衆德義 名悉達羅他
- ⑫BC. (02-17)；（王子が誕生して以来）王家の繁栄と一切のことの成就かくのごとくであったから、王は「彼こそサルヴァールタシッダ（Sarvārthasiddha 一切のことの成就者）である」といつて（このように）この息子の名前をつけた。
- ⑬行經（大正04 p.060上）；王告諸大衆梵志曰 今當為子 因德立字 …… 當名太子 号曰吉財
- ⑭過去（大正03 p.626中）；抱太子出。……以此義故、當名太子為薩婆悉達。
- ⑮集經（大正04 p.700上）；我於爾時、將是童子、入於宮殿、覆復思惟。今我童子、作何名也。我更思惟。其生之日、我一切利、自然而成、我時知已、便作名字、號悉達多。
- ⑯MV. (vol. II p.026, Jones II p.023)；この世界の師が生れた時、王のすべての事柄が成功した。そこで、人々の恩恵であるこの童子は一切事成就（Sarvārthasiddha）と名づけられた。
- ⑰衆許（大正03 p.939下）；爾時淨飯王見此祥瑞種種殊勝。……應為立號名一切義成。
- * ‘siddhattha’ が釈尊をさす呼称として用いられている。①NK. vol. I, pp.056, 058, 059, 060, 061, 066, 071, 072, 073, 074, 075, 077, 088, 089

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.017中）；抱太子出……以此義故。當名太子為薩婆悉達。（出因果經）

- ③氏譜（大正50 p.089下）；経云。王欲立名、広請婆羅門集已、抱太子出請為作名。即共通論云。太子生時、宝蔵皆現諸瑞吉祥、可立名為薩婆悉達。
- ④統紀（大正49 p.142中）；王召諸婆羅門。當為太子作何等名……當名薩婆悉達（此云一切義成又名頓吉）。
- ⑤JM. (p.027, 番中 p.102)；5日目に（pañcame divase）、人々は菩薩を命名するに、あらゆる世間の目的の達成を遂行することにより、Siddhatthaという名前を与えた。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.047, 赤沼 p.062)；この王子がすべての有情の平安と徳とを増進し給う方であるというのには一致したので、一切義成という意味の悉達多（Theiddat）と名づけ奉った。

【06-06】出胎——「天中天」の異名

菩薩が天祠に参詣したとき、天神が菩薩を礼拝したので、「天中天（devadeva）」とも名づけられる（あるいは、自ら号す）（1）。

[A] 原始聖典

- ④雜阿含604（大正02 p.166下）；將王至天寺中。語王言。太子生時令向彼神禮、時諸神悉禮菩薩。時諸民人為菩薩立名今是天中天。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.108下）；時釈迦牟尼菩薩、至藥叉廟所。彼釈迦增長藥叉。遙見菩薩漸近廟所、即從座起五體投地頂禮菩薩。衆人見已甚大驚怪即往淨飯王所白言。大王。今藥叉神遙見太子從廟而出頂禮雙足。時王聞已甚大歡喜、作如是言。若天神禮拜太子故、知是天中天。以此緣故號為天中天。
- ⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.298中）；是時菩薩乘四寶輿、無量百千人天翊從入劫比羅城。諸釈迦子體懷橋慢立性多言。菩薩入城皆悉默然牟尼無語王見是已報諸臣曰。諸釈迦子體懷傲慢立性多言、太子入城皆悉默然牟尼無語、應與太子名曰釈迦牟尼。此是菩薩第二立名。時此城中有旧住藥叉名釈迦增長。時人敬重立廟祠祀。但是釈種生男女已、令淨澡浴抱至藥叉處而申敬禮。時淨飯王以上酥蜜滿太子口。告大臣曰。可抱太子往禮藥叉、大臣抱至。時彼藥叉遙見太子即自現身。至菩薩所頂禮其足。臣歸白王。王聞是已生希有心。今我太子於天神中更為尊勝、應與立字名天中天。此是菩薩第三立名

* ‘devadeva’ という言葉が多くの過去仏の称号として使われている。① ‘Apadāna’ pp.020、032、096、104、326、410、① ‘Buddhavamsa’ pp.042、045、062

* 釈迦牟尼という別名も付けられたという。⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.108下）；時淨飯王作思念曰。此住劫比羅城諸釈種等。性懷獣烈心意兇暴、多起人我堅鞭惡性。彼見太子入城。皆如牟尼默然而住、以此緣故可呼太子名為釈迦牟尼。

[B] 仏伝經典

- ②修行（大正03 p.463下）；時未至城門、路側神廟一國所宗。梵志相師咸言、宜將太子禮拜神像、即抱入廟、諸神形像、皆悉顛覆。……咸稱太子、號天中天。
- ⑥普曜（大正03 p.497上）；尊豪諸釈咸共集会、來至王所、前啓白言。王當知之、宜將太子至於天祠。……以告大愛道、擁護太子將詣天祠。……即說偈言……超天天中天 天無比況勝……。
- ⑦方廣（大正03 p.558上）；是時釈種耆舊詣輸檀王所、白言。大王、今者可將太子謁於天廟以祈終吉。……告摩訶波闍波提言、欲將太子往於天廟。……爾時菩薩、而說偈言……我是天中天於天中最勝……。
- ⑧LV. (Lef. p.118, 外蘭・梵 p.508, 外蘭・訳 p.869)；その時、また、シャーキヤ（Śākyya）

族の〔男女の〕長老たちは、一緒に集まりて、シュッドーダナ (Śuddhodana) 王に……。シュッドーダナ王は自らの宮殿に入りて、マハープラジャーパティー・ガウタミー (Mahāprajāpatī Gautamī) に……。王子は微笑を浮かべ、破顔一笑して、姨母に偈をもって告げたり。「……われは〈天中の天 (devātideva)〉にして、一切の天神を凌駕せり。……」

- ⑬行經 (大正04 p.059下) ; 將詣天祀 欲令拜謁 諸天形像 天像皆起 屈申低仰 諸有金石 水泥天像 叉手稽首 禮敬菩薩 …… 縁是瑞応 号天中天
- ⑭過去 (大正03 p.626上) ; 時白淨王及諸釈子、未識三宝、即將太子、往詣天寺。太子既入、梵天形像、皆從座起、禮太子足而語王言。大王當知、今此太子天人中尊……。
- ⑮集經 (大正03 p.692上) ; 時迦毘羅去城不遠、有一天祠、神名增長。……爾時乳母、抱持菩薩、詣彼天祠。時更別有一女天神、名曰無畏。彼女天像、從其自堂、下迎菩薩、合掌恭敬。……爾時迦毘羅城、有諸釈種五百大臣、……造立五百精舍、擬菩薩坐。當於菩薩初入城時、各各立在自家門前、……而作是言。願天中天、入我精舍。
- ⑯MV. (vol. II p.026, Jones II p.022) ; シュッドーダナ (Śuddhodana) 王は大臣に命じた。「さあ、釈迦 (Śākyā) 族の力であるこの子供を宮へ連れていき、アバヤー (Abhayā) 女神の足元に拝礼させよ。」しかし神前に来たとき、この子が前に向けたのは頭でなく足であり、アバヤー女神がその頭を子供の足に下げたのであった。
- ⑰衆許 (大正03 p.940上) ; 復次迦毘羅城有夜叉神、名舍迦囉馱曩。若諸衆生所有男女初生之後。將詣神廟令拜夜叉求其守護。時淨飯王亦令太子乘四寶車詣彼神祠、將至廟庭夜叉出迎拜於車前。淨飯王曰。天神至尊禮重菩薩、應為立号名為天子。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.006上) ; 王告大愛道、擁護太子將詣天祠。 (出普曜經)
- ③氏譜 (大正50 p.089下) ; 経云。時白淨王將禮天神、……隨從入城往詣天祠。梵釈天像皆從座起、禮太子足言。此太子者天人中尊、如何今欲禮於我耶。
- ④統紀 (大正49 p.142中) ; 隨從入城將詣天祠。梵釈形像皆起禮足而言曰。今此太子天人中尊。云何來此欲禮於我。

(1) [B] の⑥⑦⑧はこれをアシタ仙人の予言の後とする。

【06-07】出胎——アシタ仙人の予言

アシタ (Asita) 仙人 (カーラデーヴァラ Kāladevala) が32相・80種好を占って菩薩が転輪聖王となることを予言し、甥のナーラカ (Nālaka) に仏の弟子となることを勧めて死ぬ。

[A] 原始聖典

- ①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (大本經 vol. II p.016) ; 32相を具えた菩薩が生まれると占相バラモンが転輪聖王か仏になると占うのは、決まった法である。
- ① ‘Suttanipāta’ Vs.689～ (p.134) ; 結髪のKaṇhasiri (アシタ) 仙人は成仏して、法輪を転じるであろうと予言し、甥のナーラカ (Nālaka) に遺言し、仏の成道を聞いたならば、直ちに仏に就いて梵行を修せよと命じた。
- ⑦四分律「受戒犍度」 (大正22 p.779中) ; 北方国界雪山側釈種子、生処豪族父母真正、衆相具足。適生已時、諸相師婆羅門、皆共占相、記言。大王、此兒有三十二大人之相。有此相者、必趣二道

……。

- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.106上）；相師阿夷知菩薩成仏。当在波羅捺國仙人鹿苑中転于法輪。又念。我命過後諸弟子中那羅摩納當紹繼我。我之供養悉當屬彼。彼必貪著無復憶仏出興世意。我今寧可於鹿苑邊為立舍宅。教令日日三念仏當出世。若出世時汝當於彼淨修梵行。念已即為立宅。如念教之。阿夷不久便命過。那羅果得供養貪著心深。都不復憶仏當出世。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.716上）；于時四方有大名稱、云釈迦族生太子。在雪山邊分鹽河側劫比羅仙人所住之處。去斯不遠有婆羅門仙人。名阿私多、善解占相。王召觀察。授記有二種瑞、若在家者……。
- ⑫根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.947下）；在雪山邊分鹽河側劫比羅仙人所住之處。去斯不遠有婆羅門仙人名阿私多、善解占相。王召觀察授記。有二種瑞、若在家者……。
- ⑬根本有部律「破僧事」（大正24 p.108上）；爾時阿私陀仙在吉悉枳迷山石窟之中。彼仙恒知一切世間興衰之相。其仙有一外甥名那羅陀。……時阿私陀仙既知太子必成正覺。即自觀身壽命長短。我今此生得見菩薩證菩提不。既諦觀已、即觀菩薩十九出家、六年苦行獲甘露果。復知己身先時殞歿不逢菩薩度人說法、便自悲傷啼泣懊惱。……時阿私陀仙說此頌已便即命終。爾時弟子那羅陀以種種如法供具、隨時殯葬已。便詣波羅痩斯城於彼而住、與五百摩納薄伽。為其教示婆羅門薛陀呪。其那羅陀為是迦旃延姓、因号迦旃延。若釈迦菩薩當成正覺、迦旃延詣於仏所。彼仏即喚大迦旃延而便以法教示。令彼度生死大苦海、住於最上寂靜究竟涅槃。遂以名之為大迦旃延。
- ⑭根本有部律「雜事」（大正24 p.299上）；（阿私陀）仙人遍觀見成仏相已、復更觀察久近當得無上甘露転妙法輪、遂見二十九年捨王城去、六年苦行當成正覺。復觀自身得幾時住得見仏不、知不見仏便生憂惱涕淚盈目。……爾時阿私多仙命終之後弟子那刺陀如法焚燒、殯葬事訖割捨憂慼。遂詣婆羅痩斯於諸仙內而共住止。其那刺陀先是迦多演那種族時人因号迦多演那仙人、衆皆敬重。
- *②長阿含001「大本經」（大正01 p.004下）；太子（毘婆尸菩薩）初生、父王槃頭召集相師及諸道術、令觀太子、知其吉凶。時諸相師受命而觀、即前披衣見有真相、占曰。有此相者、當趣二處……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.054, 南伝28 p.114)；カーラデーヴァラ (Kāladevala アシタ) という行者が……三十三天に上り、（浄飯大王に王子誕生の話を聞き、急いで天人の世界を下り、王宮に入り、王子を礼拝した。）……菩薩の相好の完全に具わっているのを見て……「必ず仏となられるであろう」と知り……。
- ②NK. (vol. I p.055, 南伝28 p.116)；（ナーラカ [Nālaka] 少年に）「……このお方は仏の種子で、今から三十五年経つと仏となられるであろう。おまえはそれに遇うことが出来るのだから、今日只今から出家しなさい」と云った。
- ③修行（大正03 p.464上）；於是香山有道士名阿夷。中夜覺天地大動……阿夷念言、世間有仏、應現此瑞。……步詣宮門。……於是侍女、抱太子出、欲以太子向阿夷禮。阿夷便驚起、前禮太子足。國王及群臣、見國師阿夷敬禮太子、心便悚然、益知至尊。
- ④瑞應（大正03 p.474上）；王告夫人。子生非凡、吾国有道人、名曰阿夷、年百余歲、耆舊多識、明曉相法、今欲共行相子可乎。夫人曰佳。……出詣道人。
- ⑤異出（大正03 p.618上）；明日王與夫人議。吾子生不與人同、國中有大道人、年百余歲、大工相人、字為阿夷、寧可俱行相太子。夫人曰、大善。王與夫人、共行到道人所。
- ⑥普曜（大正03 p.495中）；王會釈種欲試問之。今者太子當作國主、若當出家、欲決此疑。衆釈啓曰。窃聞雪山有仙梵志、名阿夷頭、耆舊多識明曉相法。……欲詣道人。
- ⑦方広（大正03 p.556中）；時輸檀王又與釈種共集議論。我此太子為作転輪聖王、為當出家成仏道也。時有五通神仙名阿斯陀與外族那羅童子、居雪山中。……時阿斯陀仙與那羅童子、……詣輸檀

王宮立於門下。……王之太子必定不作転輪聖王。

⑦方広（大正03 p.557下）；是時仙人語童子言。不久有仏出興於世、汝當往詣求請出家、於長夜中得大利得。

⑧LV. (Lef. p.100, 外蘭・梵 p.476, 外蘭・訳 p.838) ; それから、シュッドーダナ (Śuddhodana) 王はすべてのシャーキヤ (Śākyā) 族衆を招集してかくの如く談義せり。「一体、この王子は転輪聖王とならんや。あるいはまた、遊行すべく出家せんや」〔と〕その時、山の王たる雪山の中腹に、アシタ (Asita) と名づける大仙人がありて、……甥のナラダッタ (Naradatta) と共に居住せり。……大仙人アシタは……シュッドーダナ王の宮殿の門前に立てり。

⑨LV. (Lef. p.108, 外蘭・梵 p.490, 外蘭・訳 p.845) ; それからまた、大仙人アシタ (Asita) はナラダッタ (Naradatta) 童子にかくの如く言えり。「ナラダッタよ、汝が『仏陀、世間に出現せり』と聞くことあらば、その時、汝は行って、彼 (仏陀) の教えのもとにて出家学道せよ。それは、汝に長夜 (長久) にわたる富と利益と安樂とをもたらすべし。」〔と〕

⑩佛讚（大正04 p.002下）；時近廻園中 有苦行仙人 名曰阿私陀 善解於相法 来詣王宮門 王謂梵天應 苦行樂正法 此二相俱現 梵行相具足

⑪BC. (01-49) ; さて、偉大なる聖者アシタはこれらもろもろの吉兆より……シャカ (Śākyā) 族の王の館にやってきた。……けだしこの子は、(執着の対象となるべき) 王位を捨て、(感官の対象や) 領土 (拡大) については顧るところなく、激しい努力によって真理を窮め、人の世における迷妄の闇を払わんため、知よりなる太陽となって燃え上がり、光り輝くであります。

⑫行經（大正04 p.060中）；衆山少及者 故名阿夷岳 囊久居此山 年耆結族髮 長暴露形體 寿高百有余 …… 自暴名阿夷 …… 欲見釈童子 …… 便到王宮門 …… 見太子德相

⑬過去（大正03 p.626中）；爾時白淨王普勅群臣、令訪聰明多聞、智慧善知占相。……爾時群臣、得五百婆羅門聰明知相見諸奇瑞。……婆羅門言……、若當出家成一切種智、若在家者為転輪聖王領四天下。

⑭過去（大正03 p.627上）；爾時仙人（阿私陀）又答王言。……若在家者、年二十九、為転輪聖王、若出家者、成一切種智。

⑮集經（大正03 p.693中）；爾時有一阿私陀仙、在三十三天上安居。（仏誕生を聞きし）爾時復有說如是言、南天竺地、有一城名優禪耶尼、……更有一山、名阿私陀。是時仙人、於彼山居。……即稱仙人、名阿私陀。……將一侍者、名那羅陀、從彼山中、隱身來此迦毘羅城、……到宮門前。

⑯集經（大正03 p.700上）；阿私陀仙、語那羅陀童子、作是言。汝那羅陀童子當知、有仏出現於今世間、汝當彼辺、出家學道、修習梵行。久遠之時。大得利益、大得安樂。

⑰MV. (vol. II p.030, Jones II p.027) ; ウッジエーニー (Ujjenī) の富裕バラモンの子アシタ (Asita) 仙人は、ヴィンディヤ (Vindhya) 山脈の住居に5000人の弟子及びナーラカ (Nālaka) と住んでいた。菩薩誕生の時、彼は大地の震動と大光明を見た。シュッドーダナ (Śuddhodana) 王に王子が生まれたことを天眼で知り、この子供を見たいと思い、カピラヴァストゥ (Kapilavastu) に至り、王宮の門に立った。

⑱衆許（大正03 p.940下）；爾時囊羅那仙告白本師阿私陀仙人、我今往彼迦毘羅城禮拜菩薩。……步行至城詣淨飯宮。……爾時仙人……如是觀已得見太子。出彼王城入於山野、年二十九、於其山中六年苦行、證甘露滅成無上道。

⑲衆許（大正03 p.941下）；爾時囊羅那、姓迦底以姓為名。仏為開示法要得寂滅樂、乃名大迦底。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦（大正50 p.005下）；雪山有仙梵志、名阿夷頭……。 (出普曜經)

- ①釈迦（大正50 p.017下）；有一梵仙名阿私陀。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.090上）；經云。王召善相者五百人、於大寶殿令占太子。咸言出家成佛在家輪王。又曰。香山大仙阿私陀者、……便言至年十九為轉輪王、若出家者成一切智然必成佛說法度人。
- ④統紀（大正49 p.142中）；王訪五百聰明相師令占太子。相師言、若當出家成一切種智、若在家者為轉輪王。相師又言、有一梵仙名阿私陀……在香山中。……阿私陀、遙知王意……相太子已……法定必成一切德智。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.040, 赤沼 p.055)；ここにカーラデーワラ (Kaladewila) と呼ばれて居る有名な仙人があった……「……太子が正しく仏果を開き給うた後の晴々しいお顔を見ることの出来ないのだとこう思うて……泣いて居るのであります」
- ⑥Bigandet. (vol. I p.042, 赤沼 p.058)；「ナラカ (Nalaka) よ、……これから三十五年の後に、淨飯王の王子は仏陀となり給う……お前はこれから沙門となってその時を待って居るがよかろう」。

【06-08】出胎——三十二相・八十種好

ここには32相・80種好を詳細に掲げる資料のみを紹介する。

[A] 原始聖典

- ①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’（大本經 vol. II p.016）；32相とは何か。……
- ①DN.030 ‘Lakkhaṇa-s.’（vol. III p.142）；32相を具えた大人 (MahāPurisa) の赴く道は二つである。……
- ①‘Buddhavamsa’ 26 – 24 (p.098)；32相を具え、勝れた徳を有している身 (ayam gunavaradeho dvattiṁsalakkhaṇācito)。
- ②長阿含001「大本經」（大正01 p.005上）；是時父王殷勤再三重問相師、汝等更觀太子三十二相、斯名何等。時諸相師即披太子衣、說三十二相……。
- ③中阿含059「三十二相經」（大正01 p.493上）；大人成就三十二相必有二處真諦不虛。……
- ④雜阿含604（大正02 p.166下）；此處菩薩現三十二相八十種好。
- ⑥增一阿含09-03（大正02 p.564中）；布施成佛道 三十二相具 転無上法輪 本施之果報
- ⑪根本有部律「波逸底迦082」（大正23 p.874下）；中有淨飯王、生一太子。具三十二相有八十種好。相師瞻之云。此太子若在家者當為轉輪聖王。七寶圓滿千子具足、降伏四洲以法化世。若出家者當證如來應正等覺、於人天內號曰佛陀。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.108下）；王即問曰、何者是其三十二大丈夫相。一者具大丈夫足善安住等案地相。二者……。
- ⑫支謙訳「梵摩渝經」（大正01 p.883下）；略說其要。絕世之相三十有二。一相足下安平正。……

[B] 仏伝經典

- ④瑞應（大正03 p.474上）；披藜相太子、見有三十二相。軀體金色、頂有肉髻。……
- ⑥普曜（大正03 p.496上）；披氈相太子、見三十二相。軀體金色、頂有肉髻。……
- ⑦方廣（大正03 p.557上）；王言、何等名為三十二相。仙言、三十二相者、一者頂有肉髻、……如是之相唯諸佛有、非輪王有。大王聖子、復有八十種好。……八十種好者、一……若人成就如是八十種好、……必當出家……。
- ⑧LV. (Lef. p.105, 外蘭・梵 p.484, 外蘭・訳 p.842)；大王よ……王子は、家の中に居住するにとどまることなかるべし。それは何故か。すなわち、大王よ、サルヴァールタシッダ王子は

<三十二の大人の相>を具足せり。如何なる三十二相をか……王子は頭頂に肉髻あり。……かくの如き〔瑞〕相は諸の菩薩に〔のみ〕生ずるなり。また、……王子の身体には<八十種隨好>あり。……

- ⑪仏讚（大正04 p.002下）；仙人觀太子 足下千輻輪 手足綱縵指 眉間白毫時 馬藏隱密相 容色炎光明
- ⑫BC. (01-60) ; ……この偉大なる聖者（アシタ）は、この王子が足の裏に輪の印があり、手足の指のあいだには網模様がはりめぐらされ、両眉のあいだには捲毛が生え、睾丸は象（馬？）のそれのように表に見えず、奥にはいりこんでいる（馬藏隱密相）のをしげしげと眺めていた。
- ⑬行經（大正04 p.061上）；阿夷熟視之 眼翫青紺光 舌如蓮花葉 頭髮紺青色 …… 其有充滿足 三十二妙好 必當成為佛
- ⑭過去（大正03 p.627上）；爾時仙人又答王言。大王、太子具三十二相。一者足下安平平如龜底。
……
- ⑮集經（大正03 p.692下）；（アシタ仙人到来前）時淨飯王。聞是記已。復更重問婆羅門言。太子何處是大丈夫三十二相。
- ⑯集經（大正03 p.695下）；阿私陀仙、復白王言。大王……如是勝相、非是転輪聖王之相。今此童子、有百善相、八十隨形。……彼人……得菩提已。……從今已去、三十五年、此之童子、必得成於阿耨多羅三藐三菩提。……
- ⑰MV. (vol. II p.029, Jones II p.026) ; (アシタ仙人到来前) 大自在天 (Maheśvara) 達がやつてきて王に言う。「王は大変な利益を獲られました。三十二大人相を具えた偉大な人物が王の家に生まれた」
- ⑱MV. (vol. II p.043, Jones II p.040) ; 佛陀は八十種好 (asītyanuvyamjana) を有している。
- ⑲衆許（大正03 p.940中）；爾時淨飯王復問相師、云何我子三十二相。相師答言、三十二相者、一太子足下……若不出家年三十二作金輪王。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.005下）；道人披鬚相太子、見三十二相。（出普曜經）
- ②釈迦（大正50 p.018上）；爾時仙人又答王言、大王太子具三十二相。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.089下）；經云。太子身黃金色、三十二相光照大千。……一切天人讚歎種智。速成佛道早轉法輪度脫衆生

【07】マハーマーヤーの死

マハーマーヤー (Mahāmāyā) が菩薩を産んで7日後に死ぬ。

[A] 原始聖典

- ①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (大本經 vol.II p.014) ; 菩薩の誕生後7日に、菩薩の母は死んで、兜率天に生まれる (sattāha-jāte Bodhisatte Bodhisatta-mātā kālam karoti, Tusitām kāyām upapajati.) というのは決まった法である。
- ②‘Udāna’ (p.048) ; 世尊の母は世尊が生まれて7日に亡くなり、兜率天に生まれた (sattāhajāte bhagavati bhagavato mātā kālam akāsi Tusitakāyām upapajjati)。
- ③‘Theragāthā’ Vs.534 (p.057) ; Suddhodanaは大仙人（釈尊）の父、Māyāは佛陀の母、菩薩を母胎によって守り (bodhisattām parihariya kucchinā) 、死んで三十三天において楽しんだ。
- ④五分律「比丘尼法」 (大正22 p.185下) ; 仏生少日母便命終。瞿曇彌乳養世尊至于長大。

- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.109上）；菩薩常法、其菩薩母産菩薩已、七日命終生三十三天。
- ⑫根本有部律「雜事」（大正24 p.405上）；大世主是仏姨母、摩耶夫人生仏七日便即命終、世主親自乳養。
- ⑬法天訖「七仏經」（大正01 p.153上）；彼菩薩摩訶薩從兜率天下降闇浮廻母胎時、母自受持近事五戒。一不殺生、二不偷盜、三不婬欲、四不妄話、五不飲酒。於其右脇誕生。菩薩母後命終生天界中。
- ⑭慧簡訖「仏母般泥洹經」（大正02 p.869中）；仏生七日大后薨。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.052, 南伝28 p.109)；菩薩の宿られた母胎は祠の奥殿のようで、他の人がそれに宿ったり用いたりすることは出来ない。それ故菩薩の母は、菩薩の誕生後七日目に死んで兜率天に生まれるのである。……これが菩薩の母の常法である。
- ②修行（大正03 p.465上）；太子生七日、其母命終。以懷天師功德大故、生忉利天。
- ③瑞應（大正03 p.474中）；適生七日、其母命終。以懷天人師功福大故、上生忉利、封受自然。菩薩本知母人之德不堪受其禮故、因其將終、而從之生。
- ④異出（大正03 p.618中）；太子生七日、其母終矣。
- ⑤普曜（大正03 p.494下）；於時菩薩生七日後、其母命終。……母七日終、所以者何。菩薩生時。母根身具無有軼漏、應受忉利天上功祚服食、上忉利天、適昇彼天。
- ⑥方廣（大正03 p.555下）；菩薩初生滿七日已、摩耶聖后、即便命終、生三十三天。
- ⑦LV. (Lef. p.098, 外蘭・梵 p.470, 外蘭・訳 p.836)；菩薩が生まれて七日を過ぎたる時 (*saptarātra jātasya bodhisattvasya*)、母なるマーヤー (*Māyā*) 妃は命終せり。彼女は命終して三十三天に生まれたり。……何となれば、〔胎内にて〕生長せる菩薩が、諸感官を円満具足して出家⁽¹⁾する時、母の心臓の破裂すべき〔は当然なる〕が故に……。
- ⑧仏讚（大正04 p.004中）；時摩耶夫人 見其所生子 端正如天童 衆美悉備足 過喜不自勝 命終生天上
- ⑨BC. (02-18)；……王妃マーヤー (*Māyā*) は、神々、聖仙にも等しきこの息子の放つ広大な威光を見て、湧き出づる歓喜を抑ええぬままに、天に居を構えんと昇天してしまった。
- ⑩過去（大正03 p.627下）；太子既生、始満七日、其母命終。以懷太子功德大故、上生忉利、封受自然。太子自知。
- ⑪集經（大正03 p.701上）；爾時太子、既以誕生、適滿七日。其太子母摩耶夫人、……以力薄故、……遂便命終。或有師言、……菩薩幼年出家、母見是事、其心碎裂。……薩婆多師、……見所生子、……端正可喜、以不勝故、命終之後、即便往生忉利天上。
- ⑫衆許（大正03 p.940下）；爾時摩賀摩耶生太子已七日命終生忉利天受五欲樂。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.005下）；菩薩七日後其母命終。（出普曜經）
- ②釈迦（大正50 p.018下）；太子既生始満七日、其母命終。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.090上）；太子本起云。……普曜云。……大權經云。福盡生天非菩薩咎。前廻兜率觀后余命。十月七日故託神來。
- ④統紀（大正49 p.142中）；太子生滿七日其母命終。以懷太子功德大故上生忉利……。
- ⑤JM. (p.026, 番中 p.101)；菩薩が誕生してから7日後、マハーマーヤー (*Mahāmāyā*) 王妃は、もはや他の人々とは同じではない事により、ヴェーサーカ月の黒分7日目に (*Visākhamāse kālapakkhassa sattamiyam*) 死んで兜率天に生まれた。

⑥Bigandet. (vol. I p.047, 赤沼 p.064) ; 命名式の二日目、即ち降誕の七日目に母后摩耶夫人は崩御せられた。

(1) 外蘭訳は「出生するとき」とするが、テキストに ‘abhiniskrāmato’ とあり、これを「出家するとき」と解して訂正した。

【08】マハーパジャーパティー乳母となる

マハーマーヤーの妹であるマハーパジャーパティー (Mahāpajāpatī Gotamī) が乳母となって、菩薩を育てる。

[A] 原始聖典

①MN.142 ‘Dakkhiṇāvibhaṅga-s.’ (vol. III p.253) ; マハーパジャーパティー・ゴータミーは叔母でうば、養母、乳母にして、世尊の生母が亡くなつてから母乳を飲ませてきた (Mahāpajāpatī Gotamī bhagavato mātucchā āpādikā posikā khīrassa dāyikā bhagavantam janettiyā kālakatāya thaññam pāyesi.) 。

①AN.08-051 (vol. IV p.276) ; 同上

① ‘Apadāna’ 04-02-017 (p.529) ; マハーゴータミーは勝者の乳母である (jinassa mātucchā Mahāgotami bhikkhunī) 。(p.534, 537にも同様の文章あり)

①Vinaya ‘Bhikkhunikkhandhaka’ (vol. II p.254) ; マハーパジャーパティー・ゴータミーは叔母でうば、養母、乳母にして、世尊の生母が亡くなつてから母乳を飲ませてきた (Mahāpajāpatī Gotamī bhagavato mātucchā āpādikā posikā khīrassa dāyikā bhagavantam janettiyā kālamkatāya thaññam pāyesi) 。

①Vinaya ‘Pañcasatikakkhandhaka’ (vol. II p.289) ; 同上

③中阿含116「瞿曇彌経」(大正01 p.605下) ; 瞿曇彌大愛為世尊多所饒益。所以者何、世尊母亡後、瞿曇彌大愛鞠養世尊。

③中阿含180「瞿曇彌経」(大正01 p.722上) ; 此大世主瞿曇彌於世尊多所饒益。世尊母命終後乳養世尊。

⑦四分律「比丘尼犍度」(大正22 p.923上) ; 摩訶波闍波提於佛有大恩。佛母命過乳養世尊長大。

⑧五分律「比丘尼法」(大正22 p.185下) ; 佛生少日母便命終。瞿曇彌乳養世尊至于長大。

⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.109中) ; 時彼嫗母即前捧抱太子。

⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.350下) ; 是大世主於世尊廻誠有大恩。佛母命終乳養至大、豈不世尊慈悲攝受。

⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.405上) ; 然大世主是佛嫗母、摩耶夫人生佛七日便即命終、世主親自乳養、既有深恩豈得不報。

⑫慧簡訳「佛母般泥洹経」(大正02 p.869中) ; 大愛道比丘尼者即從佛母也。

[B] 仏伝經典

⑥普曜(大正03 p.495上) ; 又今太子転當長大。……大愛道則然可之。

⑦方広(大正03 p.556上) ; 時輸檀王召諸親族長德……善来夫人當為其母。摩訶波闍波提奉王勅已。

⑧LV. (Lef. p.100, 外蘭・梵 p.474, 外蘭・訳 p.837) ; その時、彼ら、シャーキヤ (Śākyā) 族の長老たちは集いて、かくの如き談義をなせり。「さても、如何なる女人が、利益心あり慈悲心あり……菩薩を保護し世話し、養育することを得んや。」……このマハープラジャーパティー・

ガウタミー（Mahāprajāpatī Gautamī）は、王子の母方の叔母にして、彼女ならば、王子を真に幸福に愛育することを得ん……」

⑩十二（大正04 p.146下）；難陀母名瞿曇彌。

⑪仏讚（大正04 p.004中）；大愛瞿曇彌 見太子天童 德貌世奇挺 既生母命終 愛育如其子 子敬亦如母

⑫BC. (02-19)；そこで、神々の胤のごときこの王子を、実母に等しい威厳をそなえた母の妹は、産みの親にも劣らぬ愛情と心根をもってわが子のごとく育てあげた。

⑬過去（大正03 p.627下）；爾時太子姨母摩訶波闍波提、乳養太子、如母無異。

⑭集經（大正03 p.701中）；時淨飯王、見其摩耶国大夫人、命終之後、即便喚召諸釈種親年德長者。……彼諸釈種、一切和合、勸彼摩訶波闍波提為母養育。時淨飯王、即將太子、付囑姨母摩訶波闍波提。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦（大正50 p.005下）；或有說言。太子年幼誰能養育。唯大愛道能使長大耳。大愛道者。太子姨母清淨無夫。時白淨王詣大愛道乳哺令長。

②統紀（大正49 p.142下）；時姨母摩訶波闍波提。乳養太子如母無異。

【09-01】太子の教育——学問

菩薩が7歳（あるいは8歳）となって学堂に上ると、すでに64種の書体などの学問を習得していたので、師を驚かせる。

[A] 原始聖典

③雜阿含604（大正02 p.167上）；此處菩薩学堂。

④根本有部律「破僧事」（大正24 p.110中）；菩薩生時有常法式。若欲入学以五百侍從童子令隨。菩薩學習書業時有博士名彩光甲、明解五百種書……。

*⑤四分律「受戒犍度」（大正22 p.782下）；（定光菩薩）年向八歲九歲、時王教菩薩學種種技術、書算數印畫戲笑歌舞鼓弦乘象乘馬乘車射御捨力、一切技術無不貫練。

*⑥四分律「雜犍度」（大正22 p.950下）；（釈尊の前世の慧灯王）至年八九歲、其母教學諸伎芸書画算數戲笑歌舞伎樂、象馬騎乘乘車、學射勇健捷疾、於諸技芸皆悉綜練。

[B] 仏伝經典

⑦修行（大正03 p.465上）；有一臣言、唯教書疏、用繫志意。即與其僕五百人俱、共詣師門。……太子問言、此為何人。臣言、是國教書師也。太子問言、闍浮提書凡有六十四種、……今用何書。……梵志惶怖、答太子言、六十四種、已所未聞、唯持二書。

⑧瑞應（大正03 p.474中）；及至七歲、而索學書、乘羊車詣師門。時去聖久、書缺二字。以問於師、師不能達、反啓其志。

⑨普曜（大正03 p.498上）；爾時太子厥年七歲、……菩薩乘羊車將詣書師、……師名選友。時見威神光曜、不能堪任、即僻墮地。……問師選友、今師何書而相教乎。其師答曰、以梵佐留而相教耳。……菩薩答曰、其異書者有六十四。……

⑩方廣（大正03 p.559上）；菩薩年始七歲、……爾時菩薩將昇学堂。博士毘奢蜜多、……自顧不以為菩薩師、……迷悶躰地。……六十四書、欲以何書而相教乎。

⑪LV. (Lef. p.123, 外蘭・梵 p.522, 外蘭・訳 p.878)；王子が成長して適齢に達したる時、

百千の祝賀を為すとともに王子を学堂に往詣せしめたり。菩薩が学堂に入るや否や、児童の師なるヴィシュヴァーミトラ (Viśvāmitra) は、菩薩の光輝と威光に堪えず顔を伏せて地面に倒れたり。……「六十四の文字の中のいずれをわれに学ばしめんとするや」。

⑪仏讚 (大正04 p.004中) ; 修学諸術藝 一聞超師匠

⑫BC. (02-24) 幼年期を過ごしたあと、時いたって然るべく入門の儀式を享けると、彼は自分のよきお家柄にふさわしかるべき学問を身に付けたが、(普通なら) 多年を要すべきものをわずかの日数のうちに修得してしまった。

⑬行經 (大正04 p.062上) ; 時過孩童 初入在美 世人所習 衆諸技術 太子学能 不加日勞 年滿十六 體方精健 文武兼備 藝過諸釈

⑭過去 (大正03 p.627下) ; 至年七歳、父王心念、太子已大、宣令学書。訪覓國中聰明婆羅門善諸書藝、請使令來以教太子。爾時有一婆羅門、名跋陀羅尼、……以四十九書字之本、教令讀之。

⑮集經 (大正03 p.703中) ; 時淨飯王、知其太子年已八歳、即會百官……堪為太子作於師匠。……今有毘奢婆蜜多羅。……此書凡有六十四種。……

⑯集經 (大正03 p.705中) ; 年滿八歳、……入於学堂、從毘奢蜜及忍天所、……受讀諸書。

⑰衆許 (大正03 p.941下) ; 菩薩在王宮時、與五百眷屬入学讀書。爾時本師將第一書令太子讀、太子告言、此書我解。……第二書、……五百種書……。爾時太子即自寫書令師讀之。……太子告曰、此是梵書。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦 (大正50 p.006上) ; 太子年七歳、……乘羊車將詣書師。(出普曜經)

②釈迦 (大正50 p.019上) ; 太子至年七歳、父王心念、太子已大……。(出因果經)

③歴代 (大正49 p.023中) ; 仏至僖王元年庚子年七、乘羊車詣学堂。

④歴代 (大正49 p.024) ; 普曜經第三卷云。悉達太子年七歳乘羊車詣学堂就師。

⑤氏譜 (大正50 p.090上) ; 経云。太子七歳、王召選友為太子師。……普曜經云。……凡諸技芸典籍射御。天文算術自然知之。

⑥統紀 (大正49 p.143上) ; 三十二年(庚申) 太子年七歳、王令學書……名曰選友。……太子問師、書有幾種。師默不答、內懷慚愧禮太子足。……凡技芸典籍天文地理算數射御、皆悉自然知之。

【09-02】太子の教育——種々の競技

武術を学ばない菩薩を心配する人々に、菩薩が弓術・角力などにおいて勇健であることを知らしめる (1)。

[A] 原始聖典

⑦雜阿含604 (大正02 p.167上) ; 此處學乘象。此處學乘馬乘車弓弩、如是學一切伎術處。

⑧五分律「衣法」 (大正22 p.141上) ; (波斯匿王の言葉) 佛為菩薩時射一由旬又一拘樓舍。釈摩南射一由旬。最下手者不減一拘樓舍。

⑨根本有部律「破僧事」 (大正24 p.111上) ; 爾時薛舍離城諸人得一好象、形貌具足。諸人共集通相議曰。其淨飯王有一太子、天文占相。以後之時必為金輪聖王。由彼威德現此寶象。令使數人將此寶象獻此釈迦太子。諸人當即莊嚴彼象、將向劫比羅城漸行到彼。至於淨飯王宮門外。爾時惡性提婆達多王子從於內出見彼寶象種種莊嚴、心貪愛念……。爾時釈迦童子遙相謂曰。我等出外作輪刀斷樹之樂……。時諸童子復與菩薩闘諸弓射。以七重鐵多羅樹并七鐵鼓、其間各安鐵猪而為射垛……。其城門傍有諸相者遙見菩薩威光殊特競相謂曰。今此太子若却後十二年中不出家者必當登彼

転輪王位。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.058, 南伝28 p.123) ; (結婚の後) 或日のこと、同族の集まりの中で斯ういう話が出た。「悉達 (Siddhatta シッダッタ) は、……何一つとして芸を習わないが、もし戦が始まつたら如何するのであろう」……「都中に……『……〔私の〕芸を御覧に入れる』と触れ廻らせて下さい」……菩薩は……他の弓術士の真似の出来ない十二とおりの芸を見せられた。……そこで同族〔の人たち〕は疑いを懷かなくなつた。
- ④瑞應 (大正03 p.474中) ; 至年十歳。……太子有從伯仲之子兄弟二人、長名調達、其次曰難陀。……請戲後園、的附鉄鼓、……久後又請、手搏於王前、……二人久後復請梅力。難陀、前牽鼻象、掣之至庭。調達力壯、挽而撲之。太子含笑、……拳擲牆外。
- ⑩過去 (大正03 p.628中) ; 爾時太子至年十歳。……時提婆達多等五百童子、……共相謂言。太子雖復聰明智慧、善解書論、至於力臂、詎勝我等、欲與太子較其勇健。……有一大象、當城門住。……弓……相撲……白淨王太子、……其力勇健亦無等者。
- ⑪衆許 (大正03 p.942上) ; 爾時毘舍離城有一大象。……即馳獻此象而充貢獻。……提婆達多……心生嫉妒、……殺象命終。……弓射。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.019中) ; 爾時太子年至十歳、諸釈種中五百童子皆亦同年。 (出因果經)
- ②歴代 (大正49 p.023中) ; 四年癸卯年十、與諸同齒釈族試力。
- ③氏譜 (大正50 p.090上) ; 経云。……至年十歳從弟調達與五百釈童相謂曰。太子聰慧善明書論、至於筋力詎勝我等請共挿之……。
- ④統紀 (大正49 p.143中) ; 三十五年(癸亥) 太子年十歳。 (出因果經)
- ⑥Bigandet. (vol. I p.052, 赤沼 p.070) ; 一族の人は太子の行為に就いていろいろ陰口をきいていた。……然るべき人に相応しい文武の諸芸におろそかに日を送り給うは宜しくないという非難であった。……太子は……「……我が一族の者共に、私が既に文武の十八芸に精通していることを示すであります。」

(1) 結婚と関連させているものは「[12-02] 結婚—婿選びの種々の競技」に入れた。

【10】 提婆達多が射た雁を助ける

提婆達多 (Devadatta) が弓で射殺した雁を菩薩が助ける。これにより提婆達多に遺恨が生じる。

[A] 原始聖典

- ⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.112中) ; 時有一雁飛空而度。提婆達多、即挽其弓射之、令落其雁。落在菩薩座前。菩薩爾時、収捧其雁為拔其箭、以藥療之應時平復。

[B] 仏伝經典

- ⑯集經 (大正03 p.705中) ; 経歷四年、至十二時、……在勤劬園、遨遊射戲。……時有群鴈、行飛虛空。是時童子提婆達多、彎弓而射、即着一鴈。……時太子見彼鴈帶箭被傷墮地、……右手拔箭、即以酥蜜、封於其瘡。
- ⑰衆許 (大正03 p.942下) ; 爾時迦毘羅城不遠、有一大河名嚧賀迦。……嚧賀迦河旁有園苑、……

往彼園中随意遊戲。時提婆達多見一飛鵝從空而過、挽弓仰射墮太子前。太子見之……與拔其箭放鵝飛去。

[C] 後世の仏伝資料

④統紀（大正49 p.143中）；三十三年（辛酉）太子在苑射戲。提婆達多、射著一雁、墮於苑中。太子拔箭以酥蜜封瘡。……自此與達多結怨相競。

【11】樹下の禪定

種蒔き式のとき、菩薩が闇浮樹下で禪定に入ると、菩薩にかかった樹影が時間を経過しても移らないでいる。

[A] 原始聖典

- ①MN.036 ‘Mahāsaccaka-s.’ (vol. I p.246) ; 私は釈迦族の父の行事中、畔のジャンブー樹の日影に (jambucchāyāya) 坐して初禪定を得ていた (pathamam jhānam upasampajja viharitā) のを思い出す。
- ①MN.085 ‘Bodhirājakakumāra-s.’ (vol. II p.093) ; 同上
- ①MN.100 ‘Saṅgārava-s.’ (vol. II p.212) ; 同上
- ③中阿含032「未曾有經」（大正01 p.470下）；世尊一時在父白淨王家、昼監田作坐闇浮樹下、離欲離惡不善之法。有覺有觀、離生喜樂得初禪成就遊。爾時中後一切余樹影皆転移、唯闇浮樹其影不移蔭世尊身。……世尊一時遊軀舍離大林之中……往入林中至一哆羅樹下、敷尼師檀結加趺坐。是時中後一切余樹影皆転移、唯哆羅樹其影不移蔭世尊身。……世尊一時遊跋耆中在溫泉林娑羅樹王下坐。爾時中後一切余樹影皆転移、唯娑羅樹王其影不移蔭世尊身。
- ③中阿含117「柔軟經」（大正01 p.607下）；我復憶昔時看田作人止息田上、往詣闇浮樹下結跏趺坐、離欲離惡不善之法。有覺有觀、離生喜樂得初禪成就遊。
- ④雜阿含604（大正02 p.167上）；此處菩薩坐闇浮提樹下坐禪得離欲、樹影不離身。
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.781上）；爾時菩薩自念。昔在父王田上坐闇浮樹下、除去欲心惡不善法。有覺有觀喜樂一心、遊戲初禪。時菩薩復作是念。頗有如此道可從得盡苦原耶。復作是念。如此道能盡苦原……。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.719上）；菩薩曾往田中觀諸產業於贍部樹影結跏而坐、遠離欲界惡不善法、有尋有伺得喜樂定、入初靜慮。日已過午、其余諸樹影悉東垂。唯贍部樹影而獨不移蔭菩薩身。
- ⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦003」（大正23 p.950中）；復菩薩曾往田中觀諸產業、於贍部樹影結加而坐、遠離欲界惡不善法、有尋有伺得喜樂定入初靜慮。日已過午、其余諸樹影悉東移、唯贍部樹陰而獨不移転、以覆蔭菩薩身。
- ⑪根本有部律「藥事」（大正24 p.032中）；爾時世尊復至犁地村聚落告具壽阿難陀曰。我為菩薩時遊行父王聚落至一贍部樹下思惟入定證得初禪無漏。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.114上）；爾時菩薩復漸前行、至犁田村見彼耕人、塵土坌身遍體流汗。手執牛杖尽皆有血……。從車而下、於贍部樹間、入第一無漏相似三昧……。一切林影皆隨日転、唯太子所坐之樹、猶蔭太子、其陰不移。

[B] 仏伝經典

①NK. (vol. I p.057, 南伝28 p.121) ; さて、或日のこと、王は種蒔きの式を行った。……菩薩

は……誰もいないのに気づき、……第一禪定に入られた。……（樹影の奇瑞）……王は……その不思議を見、……王子を礼拝した。

- ②修行（大正03 p.467中）；有一臣言。宜令太子監農種殖、役其意思、使不念道。……太子坐闇浮樹下、見耕者墾壟出蟲、……鳥隨啄吞。……菩薩見此衆生品類展転相呑、慈心愍傷、即於樹下得第一禪。日光赫奕、樹為曲枝、隨蔭其軀。……王……不識下馬、為作禮時。
- ④瑞應（大正03 p.475中）；到於王田闇浮樹下。……王因自到田上、遙見太子、坐於樹下。日光赫烈、樹為曲枝。隨蔭其軀。……王知其志固、惘然不知所言、便自還宮。於是……太子、攀樹枝見耕者、墾壟出虫。……觀見人間、上至二十八天、貴極而無道。
- ⑤異出（大正03 p.619中）；自到王家佃上。……王即自到佃舍、遙見太子坐樹下。……樹曲其枝叶扇之。不得令日光照太子。……太子在樹下、專精長思惟累劫之事、上至三十三天、下至十六泥犁、無一可者。見田中犁者、出土中蟲。……太子歎曰、人生地上、死當入泥犁、不亦苦乎。
- ⑥普曜（大正03 p.499上）；爾時太子年遂長大。啓其父王、與群臣俱行至村落、觀耕犁者。……則在彼樹蔭涼下坐、一心禪思三昧正定、以為第一。……爾時日照樹曲覆菩薩身。
- ⑦方広（大正03 p.560中）；菩薩年漸長大。共諸釈子出城遊……至園中、見諸農夫勤勞執役、……乃見園中有闇浮樹。……菩薩爾時、於彼樹下結跏趺坐。……住初禪……住二禪……住三禪……住四禪。……唯闇浮之影湛然不移。
- ⑧LV. (Lef. p.128, 外蘭・梵 p.534, 外蘭・訳 p.888)；王子は次第に成長せり。……ある時に、王子は、……と共に農村を見るべく外出せり。農作業を見たるのち、ある園林に入れり。……ジャンブ樹 (Jambuvrksa) を見たり。菩薩は、その影に、結跏して坐せり。坐して、また、菩薩は<心一境性>を得たり。……初禪……第四禪に達して〔その境地に〕安住せり。
- ⑩仏讚（大正04 p.008下）；出城遊園林……路傍見耕人 墾壟殺諸虫 其心生悲惻……自蔭闇浮樹 端坐正思惟……入初無漏禪……正受三摩提
- ⑪BC. (05-08)；彼は心のなかで何事にも煩わされず、ひとりになりたいと思い、隨行の友だちを放って……ジャンブ (Jambu) の大木 (闇浮樹) の根元に近づいた。……に坐し、この世の生滅を思いながら、心を安住させる方途によりどころを求めた。するとまもなく心の安住に到達し、……第一の静かな瞑想恍惚境に達した。
- ⑬行經（大正04 p.066上）；菩薩於是時……過到遊觀園……時見農田夫……心思計無常 趣闇浮樹下……坐思堅不動……平等逮一禪……乃至第四禪……日時轉向夕諸樹蔭移徒 唯闇浮樹影 如蓋覆太子
- ⑭過去（大正03 p.629上）；爾時太子、啓王出遊。……到王田所、即便止息、闇浮樹下、看諸耕人。……得四禪地。日光赫奕、樹為曲枝、隨蔭太子。
- ⑮集經（大正03 p.705下）；淨飯王、……并將太子、出外野遊、觀看田種。……觀田作已、……還入一園。……一處、有闇浮樹。……到樹下已、即於草上、加趺而坐。……即得初禪。
- ⑯MV. (vol. II p.045, Jones II p.042)；シュッドーダナ (Śuddhodana) 王や王子は遊園に散歩に出掛け、犁作業で蛇や蛙が掘り出されるのを見る。菩薩はジャンブ (Jambu) 樹の影に坐る。日が動いても影は彼から離れない。彼はそこで第一禪に入った。
- ⑰衆許（大正03 p.944中）；爾時太子……至迦里沙迦聚落之界、見有多人、各執牛具苦力耕種。……即往闇浮樹下、結跏趺坐而入禪定。……日色雖轉樹影不移。

[C] 後世の仏傳資料

- ①釈迦（大正50 p.020中）；爾時太子啓王出遊。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.090中）；經云。太子出遊前至王田、息闇浮樹。日光輝赫、樹為曲枝蔭太子身。看諸耕人……見已起慈逮得四禪。

- ④統紀（大正49 p.143下）；四十一年(己巳)太子啓王出遊。前至王田、息闇浮樹下、見諸耕人。…
…見已悲愍、即便思惟。得四禪地……一切樹影悉移。唯此樹陰覆太子身。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.050, 赤沼 p.067) ; 或る日、広野に耕耘の祭が行われた。……菩薩は周囲を見廻し、御附のものの誰も居ないのを見て、急に起き上がり、床上に結跏趺坐して觀念を凝し給うた。

【12-01】結婚——妃の選択

淨飯王が菩薩の気に入った女性を妃にしようとする。女性の名にはヤソーダラー (Yasodharā) 、ゴーパー (Gopā) 等が挙げられる。妃を1人とするものと、3人とするものがある⁽¹⁾。

[A] 原始聖典

- ① ‘Buddhavamsa’ 26-15 (p.098) ; Bhaddakaccāと名づけるものが夫人で、Rāhulaと名づけるものが実子である。
- ① ‘Apadāna’ 04-03-028 (p.585) ; 私ヤソーダラー (Yasodharā) は家にあっては宮女で、釈迦族に生まれ、勇者よ (vīra) 、それからあなたの妻となった (itthi atho patiṭṭhitā) 。
- ① ‘Apadāna’ 04-03-029 (p.591) ; ディーパンカラ仏はスメーダ (Sumedha=釈尊) とスミッタ (Sumittā=Yasodharā) が未来に夫婦となって、苦楽を共にすると記別された。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.720下）；世尊為菩薩時、便捨宝女耶輸陀羅(持称亦云具称)、瞿比迦(密語也)、密伽闍(鹿子也)等六萬妓女而為出俗。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.111下）；時執仗釈種有一童女、名耶輸陀羅。……時王即遣二萬妓女、囲遼耶輸陀羅、入太子宮内。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.112下）；時有釈迦女名喬比迦住鍾聲聚落。在於高閣上遊觀。菩薩入城遙見女遂以脚指以圧其車。車便不転。其女遙見菩薩念於心菩薩手中先有鐵杵以指撲之遂便微碎。喬比迦女觀視菩薩以脚指捺樓其閣遂穴。諸人見已作是念言。此之釈女必能善得菩薩之心。時淨飯王聞此語已、即迎喬比迦女并二萬妓女侍從入宮。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.114中）；爾時菩薩既至城内有一釈迦種名不過。時有其一女名曰鹿王。於樓窓中遙見菩薩、讚歎頌曰
安樂乳母生 安樂父能養 彼女極安樂 当與汝為妻
菩薩聞此、其心寂入涅槃声義、唯聞言曰。汝最勝人當思惟寂靜涅槃。菩薩聞此涅槃声愛念歡喜。聞妙声故即脫頸上珠瓔擲於空中。以威力故遂落鹿王女頸上。諸人見此皆大歡喜。白淨飯王具陳上事。王聞此語。即令二萬妓女迎鹿王女。將入太子宮内。彼時菩薩有三夫人。一名鹿王、二名喬比迦、三名耶輸陀羅。其耶輸陀羅最為上首。
- ⑫法賢訳「阿羅漢具德經」（大正02 p.833下）；宿植良因具大福德羅睺羅母耶輸陀羅苾芻尼是。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.058, 南伝28 p.123) ; (年16歳の頃、王は菩薩の為に三宮殿を建てさせる [013]) 時候に応じてこれ等の宮殿の一つに住わたった。羅睺羅の母 (Rāhulamātā) はその第一の妃であった。
- ②修行（大正03 p.465中）；至年十七。……有一臣言、太子已大、宜当娶妻以廻其志。王為太子、採択名女無可意者。有小国王、名須波仏(漢言善覺)。有女名裘夷。
- ②修行（大正03 p.466上）；太子迎妃以来、意志云何。……即復為娉妙女、一名衆称味、二名常樂意。

- ④瑞應（大正03 p.475上）；太子至年十七、王為納妃。……最後一女、名曰瞿夷、……是則宿命賣華女也。
- ⑤異出（大正03 p.619上）；太子年二十、王欲為太子娶婦、……名曰俱夷。太子曰。吾欲娶是女、……是女平生可持華賣與菩薩者、宿命時、字俱夷、今生統字俱夷。
- ⑥普曜（大正03 p.500上）；白淨王曰、且當觀之、何所玉女宜應太子妃。……執杖釀種家生。……時釀家女名曰俱夷。
- ⑦方廣（大正03 p.561上）；爾時菩薩年既長大。……時諸釀種白大王言、……應為求婚令生染着。……有一大臣名為執杖、其人有女名耶輸陀羅。
- ⑧LV. (Lef. p.136, 外蘭・梵 p.550, 外蘭・訳 p.899~904)；王子が〔更に〕成長したる、ある時に、……シャーキヤ (*Sākya*) 族の男女の長老たる者たちは、……「……王子の婚儀を執り行なうが至当なり、……快樂を享受し、出家することなからん……」……ダンダパー二 (*Dandapāṇi* 執杖) 釀種の娘にしてゴーパー (*Gopā*) と名づける釀女……。
- ⑩十二（大正04 p.146下）；菩薩外家去城八百里、姓瞿曇氏……戶名一億王。菩薩婦家姓瞿曇氏、舍夷長者名水光、其婦母名月女。……瞿夷者是太子第一夫人、其父名水光長者。太子第二夫人生羅云者名耶惟檀、其父名移施長者。第三夫人名鹿野、其父名釀長者。
- ⑪仏讚（大正04 p.004中）；父王…… 広訪名豪族 風教禮義門 容姿端正女 名耶輸陀羅 応嫂太子妃 誘導留其心
- ⑫BC. (02-26)；そこで、王は息子のために、きちんとしたお家柄から……ヤショーダラー (*Yaśodharā*) という名前の、よいお嬢さんを、「美女 (*Vāmā*)」と名づける幸福の女神 (*Śrī*) として迎えたのであった。
- ⑬行經（大正04 p.062中）；王然此義 即召美女 十五以上 …… 尋致諸女 充太子宮 …… 執杖釀種女 …… 是故号除称 …… 過去五百世 曾為太子妻 …… 父母授女 為太子妃
- ⑭過去（大正03 p.629中）；爾時太子、至年十七。王集諸臣、宜應為其訪索婚所。諸臣答言、有一釀種婆羅門、名摩訶那摩、其人有女、名耶輸陀羅。
- ⑮集經（大正03 p.707下）；婆私吒族釀種大臣摩訶那摩、其女名為耶輸陀羅。
- ⑯集經（大正03 p.713下）；有一釀種大臣、姓檀荼氏。……時彼波尼有於一女、名瞿多彌。
- ⑰集經（大正03 p.715中）；第二宮中、摩奴陀羅(隋言意持)而為上首。
- ⑱MV. (vol. II p.048, Jones II p.045)；王は王子のために広大な後宮 (*antahpura*)を用意し、若い女性を王宮に集め、王子から宝石を彼女達に分け与えるとの布告を出させる。釀種マハーナーマン (*Mahānāman*) の娘ヤショーダラー (*Yaśodharā*) は輝いてやってきて王子にはにかみながら触れる。
- ⑲衆許（大正03 p.942下）；爾時有一童女名耶輸陀羅。……太子見是童女視相妙勝身有光明、心大歡喜下師子座、……耶輸陀羅同入宮室。……。釀種伽吒儻里有一女名婬閉迦。在高楼上、忽見太子身相端嚴心生戀仰、……婬閉迦女令入王宮。……。時有釀種名迦羅叉摩、其女名蜜里謔惹。瞻見太子威儀尊重。而與讚歎、……蜜里謔惹女入於王宮。爾時太子有三夫人、耶輸陀羅、婬閉迦、蜜里謔惹。及六萬宮人朝夕供侍、心無愛着專求捨棄。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釀迦（大正50 p.006上）；王曰。何所王女宜太子妃、……釀女俱夷……。（出普曜經）
- ②釀迦（大正50 p.010中）；第一夫人……第二夫人……第三夫人。（出十二遊經）
- ③釀迦（大正50 p.020中）；爾時太子年至十七、王集諸臣……。（出因果經）
- ④歷代（大正49 p.023中）；六年庚戌年十七、納妃求夷。
- ⑤氏譜（大正50 p.090中）；經云。太子十七王乃訪婚、釀種婆羅門有女、禮儀備舉便迎至宮。

- ④統紀（大正49 p.143下）；四十二年（庚午）太子十七歳……釈種婆羅門摩訶那摩有女、名耶輸陀羅、顏色端正智慧過人。王即遣使往迎、為太子妃。太子常修禪觀、未嘗與妃有夫婦道……太子有三夫人。一瞿夷、二耶惟檀、三鹿野。
- ⑤JM. (p.027, 番中 p.102)；さて、摩訶薩はやがて16才になった。釈氏たちもまた自分の娘たちを厳飾して4万人の舞娘たちと共に、妻として仕えるために送った。彼女たちのうち、ラーフラ（Rāhula）の母となるバッダカッチャーナー（Bhaddakaccānā）妃が第一夫人となった。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.052, 赤沼 p.069)；太子がその従妹にして、かの善覺長者と甘露女との間に生れた耶輸陀羅（Yathaudara）姫を娶り給うたのはこの時であった。（十六才）

(1) 1人とするものは [B] の④⑤⑥⑦⑧⑪⑫⑬⑭⑯、3人とするものは [A] の⑪、[B] の②⑩⑮⑯である。

【12-02】結婚——婿選びの種々の競技

妃にしようとした女性の父親が婿には武術に秀でたものを望んだため、菩薩が提婆や難陀と力比べをする。

[A] 原始聖典

*⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.111下）；時執杖釈種有一童女、名耶輸陀羅。容色端正世所希有。執杖釈種即還家中告其女曰。今者太子施諸童女珠宝珍奇嚴好之具、汝可往取。其女報曰。我之家中豈無此耶。何用他物。父告女曰。然彼太子雖施珍寶、或因愛樂便以為妃。女曰。若因此時便為妃者縱取余女我必當得為其太妃。

[B] 仏伝經典

- ②修行（大正03 p.465中）；善覺聽之、表白淨王。女即七日、自出求迦國中勇武技術最勝者、爾乃為之。……太子即與優陀難陀調達阿難等五百人、執持禮樂射藝之具。當出城門、安置一象。……相撲……射決……力人王……。
- ⑥普曜（大正03 p.500下）；時執杖釈種言。我等本性有藝術者、乃嫁與女。……皆出城門。於是調達手執牽象來入城門、……持鼻撲捏殺之。……宣說六十四種書。……計校算術……手博……試射……。
- ⑦方廣（大正03 p.562中）；爾時執杖報國師言。自我家法積代相承、若有伎能過於人者、以女妻之。……算術……相撲……試射……權捷騰跳、競走越逸、……人間一切伎能及過人上、諸天伎藝、皆悉通達。
- ⑧LV. (Lef. p.143, 外蘭・梵 p.562, 外蘭・訳 p.905)；ダンダパニ（Daṇḍapāṇi）は言えり。「われらには、この家訓あり。『伎芸を知る者に娘を与うべし……』……」……（デーヴアダッタ（Devadatta）が象を殺害、菩薩足の拇指もて城外へ投げる。）……書……算術……格斗……弓術……かくの如き……世俗的なる〔伎芸〕、〔及び〕天界・人界を超越せる伎芸の、すべてにおいて、菩薩のみが勝利せり」
- ⑯集經（大正03 p.708下）；時釈大臣報國師言。我釈迦法、相承如是、若有技能勝一切者、於彼人邊即嫁女與。……手筆……計算……射鞠……諸象技……馬上……相撲。……大白象、為於提婆達多所殺、……以殺白象。……大臣摩訶那摩、見於太子一切技藝、勝妙智能、最為上首。
- ⑯MV. (vol. II p.073, Jones II p.070)；王はマハーナーマン（Mahānāman）に彼の娘を王子にもらいたいとの使いを出すが、マハーナーマンはこれを断る。何故ならば、王子は武芸において

て秀でていないから。王は七日後 (*saptamam divasam*) 競技を行うと布告する。入場途中、デーヴァダッタ (Devadatta) が象を殺す。……すべての競技で王子に匹敵するものはなかった。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦（大正50 p.006中）；執杖釈言、我等本姓有藝術者乃嫁與之。（出普曜經）

【13】三つの宮殿に住む

菩薩が雨期・冬期・夏期の三つ（あるいは春夏秋冬の四つ）の時に応じた宮殿に住む。

[A] 原始聖典

- ①MN.075 ‘Māgandiya-s.’ (vol. I p.504) ; マーガンディヤよ、私には3つの宮殿があった (tassa mayham Māgandiya tayo pāsādā ahesum)。1つは雨期 (vassika) の、1つは冬 (hemantika) の、1つは夏の (gimhika) ものである。
- ②AN.03-38 (vol. I p.145) ; 比丘らよ、私に3つの宮殿があった (tassa mayham bhikkhave tayo pāsādā ahesum)。1つは冬の (hemantika)、1つは夏の (gimhika)、1つは雨期の (vassika) ものである。
- ③‘Buddhavamsa’ 26-14 (p.098) ; Ramma、Suramma、Subhakaという3つの最上の宮殿があった。
- ④中阿含117（大正01 p.607下）；我在父王悅頭檀家時、為我造作種種宮殿、春殿・夏殿及以冬殿。為我好遊戲故去殿不遠、復造種種若干華池。
- ⑩僧祇律「單提042」（大正22 p.365中）；如來柔軟樂人無有能過。父王為作三時殿春夏冬。如柔軟線經中廣說。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.111中）；若却後十二年中不出家者、必當登彼轉輪王位。時白淨王、聞斯相語甚大喜躍、即集群臣而告之曰。我聞相者相我太子、却後十二年中不出家者、當得轉輪王位。汝等諸人宜加防衛、滿十二年勿令出家。……汝等應當速立宮殿簡求美女令共娛樂。…
- …
- *①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (大本經 vol. II p.021) ; 王はビバッシン太子のために三宮殿を建てた (tayo pāsāde kārāpesi)。
- *⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.782下）；（定光菩薩）至五十六。時王即為設三時殿。冬夏春給二萬妓女、使娛樂之……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.058, 南伝28 p.123) ; それから次第に生長して、菩薩は年16歳の頃 (solasa-vassapadesika) になられた。王は菩薩のために三つの時に適した三つの宮殿を建てさせた。その一つは九階建、一つは七階建、一つは五階建であった。
- ②修行（大正03 p.465上）；於是王深知其能相、為起四時殿。春秋冬夏、各自異處。
- ④瑞應（大正03 p.474上）；王深知其能相、為起宮室、作三時殿。各自異處、雨時居秋殿、暑時居涼殿、寒雪時居溫殿。
- ⑥普曜（大正03 p.496中）；王深知其能相、為起宮室作三時殿。各自異處、涼時居秋殿、暑時居涼殿、寒雪時居溫殿。
- ⑦方広（大正03 p.569下）；時輸檀王為菩薩故造三時殿。一者溫煖以御隆冬、二者清涼以當炎暑、三者適中不寒不熱。

- ⑧LV. (Lef. p.186, 外蘭・梵 p.670, 外蘭・訳 p.974) ; それからシュッドーダナ (Śuddhodana) 王は、王子の享楽のために夏季と雨季と冬季との季節に応じたる三つの宮殿を建立せしめたり。そこにおいてかの夏季殿なるものはもっぱら清涼……雨季殿は冷暖均等……冬季殿は自然に温暖なりき。
- ⑩十二 (大正04 p.146下) ; 以有三婦故、太子父王為立三時殿。
- ⑪行經 (大正04 p.063上) ; 種種嚴飾 猶如天宮 春秋冬夏 四時各異 応節修治
- ⑫過去 (大正03 p.627下) ; 爾時白淨王、……慮恐出家、……別為起三時殿。溫涼寒暑、各自異処。
- ⑬集經 (大正03 p.707上) ; 爾時太子漸向長成、至年十九。時淨飯王為於太子、造三時殿。一者暖殿、以擬隆冬。第二殿涼、擬於夏暑。其第三殿、用擬春秋二時寢息。
- ⑭集經 (大正03 p.715中) ; 時淨飯王、為其太子立三等宮。(三夫人をそれぞれに配す)
- ⑮MV. (vol. II p.115, Jones II p.111) ; 私は細心をはらって育てられた。王は私のために三つの宮殿を建てさせた。一つは寒期用 (hemantika) 、一つは暖期用 (grīsmika) 、一つは雨期用 (vārsika) として。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.006上) ; 王深知其能相、為作三時殿。(出普曜經)
- ②釈迦 (大正50 p.018下) ; 又復別為起三時殿。溫涼寒暑、各自異処。
- ③氏譜 (大正50 p.090上) ; 経云。王時聞仙決定說已、慮恐出家……起三時殿。……
- ④統紀 (大正49 p.142中) ; 王聞仙說、慮恐出家、起三時殿。
- ⑤統紀 (大正49 p.143下) ; 以有三婦、為立三時殿。
- ⑥JM. (p.027, 畑中 p.102) ; 菩薩は彼女たちに奉仕されながら、3つの季節にふさわしいCanda, Kokanuda, Koñcaという名の3つの高樓において贅沢を享受した。
- ⑦Bigandet. (vol. I p.051, 赤沼 p.069) ; 菩薩が十六歳に達し給うた時、父王は王子のために、三時殿を作るよう命を下された。

【14】四門出遊

菩薩が四つの門から園遊に出て、天人の化作する老人・病人・死人と出会って憂いに沈み、沙門と出会って出家を志す。

[A] 原始聖典

- ① ‘Buddhavamsa’ 26–16 (p.098) ; 四種の相を見て、馬に乗って出家した (nimitte caturo disvā assayānenā nikkhamim) 。
- ②雜阿含604 (大正02 p.167上) ; 此處菩薩見老病死人。
- ③四分律「受戒犍度」 (大正22 p.779下) ; 爾時菩薩漸漸長大、諸根具足、於閑靜處作是念。今觀此世間甚為苦惱、有生有老有病有死。死此生彼以此身故、不尽苦際。如是苦身何可得尽。……輒自剃鬚髮著袈裟捨家入非家。
- ④四分律「受戒犍度」 (大正22 p.783上) ; (定光菩薩) 伺菩薩入後園時、即往化作四人。一者老、二者病、三者死、四者出家作沙門。時菩薩見此四人已、極懷愁憂、厭患世苦、觀世如是有何可貪。
- ⑤五分律「受戒法」 (大正22 p.101中) ; 至年十四嚴駕遊觀出東城門、逢見老人頭白背偻拄杖羸步……。出南城門、逢見病人……。出西城門、逢見死人……。……逢見一人剃除鬚髮法服擎鉢視地而行……。
- ⑥根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.716中) ; 後時菩薩養在深宮、年漸長大由見老病

死故、心懷憂惱。

- ⑪根本有部律「波逸底迦058」（大正23 p.844上）；仏往昔為菩薩時……時漸至童年出門遊觀見老病死等、遂適林中苦行六年、將為無益道成正覺普濟群迷。
- ⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.947下）；後時菩薩養在深宮年漸長大、由見老病死故心懷憂惱。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.112下）；菩薩登車遊觀、逢一老人……。今可遊觀、將欲出城、逢一病人……。既嚴飾已出城遊觀、逢一死人……。既嚴駕已登車前行、於衢路中逢一沙門……。
- ⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.299下）；菩薩出四門觀見老病死患、遂於三夫人廬生厭離心。所謂牛護夫人鹿養夫人名稱夫人、此為上首六千婁女咸皆捨棄。於其中夜踰城而去。
- *①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’（大本經 vol. II p.021）；ビパッシン太子は老人、病人、死人、出家者を見て出家した。
- *①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’（vol. I p.163）；生法（jātidhamma）・老法（jarādhama）・病法（byādhidhamma）・死法（marañadhamma）・愁法（sokadhamma）・雜染法（saṅkilesa-dhamma）を求めて出家した。
- *①MN.100 ‘Sangārava-s.’（vol. II p.212）；同上
- *②長阿含001「大本經」（大正01 p.006上）；菩薩（毘婆尸菩薩）欲出游觀、告勅御者嚴駕寶車、詣彼園林、巡行游觀。御者即便嚴駕訖已、還白、今正是時。太子即乘寶車詣彼園觀。於其中路見一老人……。一病人……。一死人……。一沙門……。

[B] 仏伝經典

- ①NK.（vol. I p.058, 南伝28 p.124）；……或日のこと、菩薩は遊苑に行きたいと思って……一人の天子を……一人の老人に作り立てた。……病人……死人……沙門……。……菩薩は出家に心を曳かれて、その日は苑へ行かれた。
- ②修行（大正03 p.466中）；於是王告太子、當行遊觀。……始出東城門、時首陀会天、名難提和羅、……化作老人。……駕乘出城南門、天化為病人。……出西城門、天作死人。……嚴駕出北城門、天復化作沙門。
- ④瑞應（大正03 p.474中）；至年十四、啓王出遊。始出城東門、天帝化作病人。……太子駕乘、出南城門、天帝復化作老人。……太子駕乘、出西城門、天帝復化作死人。
- ④瑞應（大正03 p.475上）；出北城門、天帝復化作沙門。
- ⑤異出（大正03 p.618中）；太子年十歳、前白大王。為王太子。未曾出遊。……太子乘車、出東城門、第二忉利天王釈即化作病疾人在前。……出南城門、天王釈復化作熱病人。……出西城門、天王釈復化作一老人。……出北城門、天王釈復化作喪車。
- ⑥普曜（大正03 p.502下）；爾時菩薩出東城門、……諸天化作老人。……出南城門、復於中路見疾病人。……出西城門、見一死人。……。……出北城門見一沙門。
- ⑦方広（大正03 p.569下）；後於一時菩薩即便欲出遊觀。……出城東門、時淨居天化作老人。……出城南門、時淨居天化作病人。……出城西門、時淨居天化作死人。……出城北門、時淨居天化作比丘。
- ⑧LV.（Lef. p.187, 外蘭・梵 p.674, 外蘭・訳 p.975）；かくして、菩薩は、大莊嚴を以て、東の城門より園林の地に向けて出立せり。時に、……淨居天に属する天子たち（Śuddhāvāsakā-yika）は、……〔老〕人を、道の前方に、示現したり。……南の城門……〔病〕人……西の城門……死せる人（死人）……北の城門……比丘。
- ⑪仏讚（大正04 p.005下）；時淨居天王……變形衰老相……太子見老人……天復化病人……復化為死人……（若き日の禪定）……爾時淨居天化為比丘形來詣太子所

- ⑫BC. (03-26) ; ……シュッダーディヴァーサ (*Śuddhādhivāsa*) 神群は、……王子の出家を唆すため一人の老人を（その場に）つくりだした。……例の神々はまたしてもその身体が病いに蝕まれている一人の男をつくりだした。……死者を仕掛けた。……（若き日の禪定）……ひとりの乞食僧の装いをした男が彼のところへ近づいてきた。
- ⑬行經（大正04 p.064上）；王愍太子愁 勸令行遊觀 始出宮城門 …… 天卒化病人 …… 後時復更出 天化作老人 …… 後復出遊見 天化命過人 …… 方便欲求出 天化作梵志
- ⑭過去（大正03 p.629下）；爾時太子。……出城東門、……時淨居天化作老人。……出城南門、時淨居天化作病人。……出城西門、……化為死人。……出城北門、到彼園所、……時淨居天化作比丘。……在太子前。
- ⑮集經（大正03 p.720上）；爾時太子。……城東門、……是時作瓶天子、……変身化作一老弊人。……（淨飯王七種夢相）……城南門出、……爾時作瓶天子、……化作一病患人。……城西門出、……時作瓶天子、……化作一屍。……城北門出、……爾時作瓶天子、……化作一人、剃除鬚髮、着僧伽梨。……在路而行、太子見已、問馭者言……名為出家。
- ⑯MV. (vol. II p.150, Jones II p.145) ; 菩薩は父王に遊園に行きたいと言う。カピラヴァストゥ (*Kapilavastu*) から遊園に向う途中、淨居天子 (*Śuddhāvāsadevaputra*) になったガティカラ (*Ghatikāra*) が一老人を出現させる。……病人を……一死人を……黃衣を着けた一遊行者 (*Pra-vrajita*) を出現させる。
- ⑰衆許（大正03 p.943中）；爾時太子納夫人已、思惟城外遊觀園苑……乗車騎出於城外。於其馬前見一老人。……一病人。……一死人。……乗車騎出外遊觀。……兜率天子……剃鬚髮身被法服、……住立馬首。……此何人耶、……是出家人。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.006下）；於時太子出東城門、……諸天化作老人。（出普曜經）
- ②釈迦（大正50 p.021中）；爾時太子……出城東門。（出因果經）
- ③歴代（大正49 p.023中）；惠王三年丁未年十四、啓父王遊。出城東門見病人廻。
- ④氏譜（大正50 p.090下）；經云。……出城東門、……淨居化為老人。……太子出遊南城門外、淨居天化為病人。……出城西門、路見死人……又遊北門下馬息樹、……淨居天化為比丘。……視地徐行而過太子前問。答云、我是比丘……。
- ⑤統紀（大正49 p.143下）；四十三年(辛未)太子白王將遊園林。前後導從出城東門、時淨居天化作老人。……城南門……病人……城西門……死人……城北門……比丘。
- ⑥JM. (p.027, 畑中 p.102) ; また彼は、28才の年のアーサールハ月の満月の日に (atthavisati-me vasse Āsālhapuṇṇamiyam) 、威厳ある車駕に乗って遊園に向かって進んでいる時、老いさばらえた男を見、それから4ヶ月後のカッティカ一月の満月の日に (tato catunnam mānāsam accayena Kattikapuṇṇamiyam) 病人……4ヶ月後のパッグナ月の満月の日に (tato catunnam mānāsam accayena Phaggupuṇṇamiyam) 死人を見て戻った。29才の年のアーサールハ月の満月の日に (tato ekūnatimsatime vasse Āsālhapuṇṇamāyam) 出家者の装いをした男を見……。
- ⑦Bigandet. (vol. I p.052, 赤沼 p.071) ; ある日、菩薩は、莊園へ赴いて、野外の遊樂を味わうと思召して、御者に命じて馬車を用意せしめ給うた。……その時諸天は、……かの四相をつづいて菩薩の御目にかけんと決心した。……老人……病人……死屍の相……沙門。此の日太子は車を返さず急いで花園に向い給うた。

【15】夫人の懷妊とラーフラの誕生

菩薩に子供が生まれ、ラーフラと名づける（夫人が懷胎してから6年後 [=成道後] に生まれたとするものもある）(1)。

[A] 原始聖典

- ① ‘Theragāthā’ Vs.295 (p.035) ; 人々は私を2つの事柄によって「吉祥なるラーフラ (Rāhula-bhadda)」と呼んでいる。私がブッダの子であるということ (yañ c' amhi putto buddhassa) と、法眼を持っていることである。
- ⑩僧祇律「単提004」（大正22 p.332下）；仏子羅睺羅（という語あり）。
- ⑩僧祇律「単提042」（大正22 p.365中）；仏為菩薩時在家、父王愛惜、恐転輪王種滅。愁憂泣涙不聽出家。以懷妊羅睺羅故便捨出家。（羅睺羅が6年間胎にあったことの因縁が続く(2)）
- ⑪根本有部律「薬事」（大正24 p.087中）；于時羅怙羅即説頌曰……我所作此業 実無有惡意 黒縄炎熱中 六十年受苦 業報尽後身 六年在母胎
- ⑫根本有部律「破僧事」（大正24 p.115上）；其耶輸陀羅因即有娠。既懷娠已生思念曰、我於明日報菩薩知。爾時菩薩、於其夜中約緣生理、而説頌曰、所共婦人同居宿 此是末後同宿時 我今從此更不然 永離女人同眠宿
- ⑬根本有部律「破僧事」（大正24 p.124中）；時耶輸陀羅、聞世尊菩薩證無上智、生意悅曰、誕一息。斛飯王亦生一息。……為耶輸陀羅所生之息、而立其名。内宮侍女前白王曰、此子生時羅怙障月、因此應以為名羅怙羅。時斛飯王、為其子故廣施如上、亦會親屬與子立名。問諸人曰、此子當立何字。親屬報曰、此子生日、劫比羅城人衆歡喜、可名此子為阿難陀。
- ⑭根本有部律「破僧事」（大正24 p.162中）；耶輸陀羅が羅怙羅を6年間懷胎していた因縁が説明されている。
- ⑮失訳「七仏父母姓字経」（大正01 p.159下）；今我作釈迦文尼仏子字羅云。

[B] 仏伝經典

- ⑯NK. (vol. I p.060, 南伝28 p.128) ; この時、「羅睺羅 (Rāhula ラーフラ) の母〔なる王子の妃〕がお産をされた」と聞いて、スッドーダナ (Suddhodana) 大王は、「予の王子に予の慶びを伝えよ」といって使者を遣った。菩薩は、それを聞いて、「邪魔 (ラーフラ) が出来た。緊縛が出来た」といわれた。……王は……この語を聞き……「予の孫はラーフラ王子という名をつけよう」といった。
- ⑰瑞應（大正03 p.475上）；太子以手指妃腹曰、却後六年、爾當生男。遂以有身。
- ⑱仏讚（大正04 p.005上）；時白淨太子 賢妃耶輸陀 年並漸長大 孕生羅睺羅
- ⑲BC. (02-46) ; ……時經て、可愛らしい乳房をそなえ、（白雲のごとき）己が名声を持つヤショーダラー (Yaśodharā) 妃とシュッドーダナ (Śuddhodana) 王の子のあいだに、その顔容ラーフの敵（月）と紛う息子、ほかならぬラーフラ (Rāhula) と名づくる息子が誕生した。
- ⑳過去（大正03 p.632中）；王語太子……唯願為我、生汝一子、然後絕俗。……太子、……即以左手、指其妃腹。時耶輸陀羅、便覺體異、自知有娠。
- ㉑集經（大正03 p.727上）；（國師の子優陀夷は王の命で、太子の出家を防止する為、種々の娛樂に誘う）便入宮中、共諸嬢女、行於五慾。……其太子妃耶輸陀羅、即於是夜、便覺有娠。
- ㉒集經（大正03 p.888上）；其羅睺羅、……在胎六年。……過六年已、……其羅睺羅、便即出生。（王は出家後六年出生を聞き怒るが、世尊が書を出して疑を解く）
- ㉓MV. (vol.II p.159, Jones II p.154) ; (出家の時) ラーフラ (Rāhula) はトウシタ (Tuṣita)

天を去り、真夜中に母の胎に入る。

- ⑯衆許（大正03 p.945下）；爾時悉達多太子、……思惟。我今雖有耶輸陀羅、婬閉迦、蜜里譏惹、……若無男女便去修行、衆人俱言、悉達多太子非是丈夫。出別之後、即令耶輸身有懷妊。
⑰衆許（大正03 p.950下）；王聞是語（成道）……及奏王云、甘露飯王生其一子、耶輸陀羅亦生一子。……耶輸陀羅生子之時月有蝕障、名羅護羅。（王の疑い→石に載せ池中へ→疑い解ける）

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.024上）；唯願為我生汝一子、然後絕俗……。（出因果經）
③氏譜（大正50 p.090中）；修行瑞應經云。諸人咸疑太子不男。便指妃腹曰、却後六年爾當生男。遂以有娠。
④統紀（大正49 p.144上）；五十年戊寅 太子年二十五歲……往父王所……唯願聽我出家學道。… …太子即以右手、指其妃腹、便覺有娠……。
④統紀（大正49 p.146上）；佛成道日斛飯王……是歲耶輸夫人生子名羅睺羅。
⑤JM. (p.027, 番中 p.103)；（出家を見た日）まさしくその日 (Tasmin yeva divase) 、ラーフラバッダ (Rāhulabhadda) が生れたのである。
⑥Bigandet. (vol. I p.058, 赤沼 p.077)；（沙門に会った後）丁度太子がその馬車に乗り込み給うた時、父王の使臣は恭しく御妃耶輸陀羅姫の王子を安産し給うたという喜びを申し上げた。これを聞いて太子は極めて冷静に「これぞ私が破らねばならぬ新しい強い緊縛である」と答え給うた。……王はこの太子の語に依って王孫に羅睺羅 (Raowla) という名を与えられた。

- (1) [B] の④、⑯、⑰、[C] の③④である。
(2) ラーフラの6年在胎の因縁は、「有何因縁羅睺羅六年在胎。佛告諸比丘。往昔有仙人、名梨波都。詣王求相見。王報仙人。汝且住無憂園中、須臾當與相見。作是教已、乃至六日不與相見。爾時王者羅睺羅是。以是因縁故、六年在胎。如生經中廣說」（『僧祇律』大正22 p.365下）とされる。

【16-01】出家の前兆——浄飯王の夢

浄飯王が菩薩の出家する夢を見る。

[A] 原始聖典

[B] 仏伝經典

- ⑥普曜（大正03 p.502下）；父王白淨、寐夢睹見菩薩出家樂於寂然諸天圍繞。又見剃頭身着袈裟。時從夢覺。
⑦方広（大正03 p.569下）；諸天勸發菩薩已。菩薩是時現夢於輸檀王。……乃見菩薩、剃除鬚髮行出宮門。……
⑦方広（大正03 p.571上）；時淨居天欲令菩薩速疾出家、重與父王作七種夢。一者夢見有帝釈幢衆多人昇從迦毘羅城東門而出。二者夢見太子乘大香象徒馭侍衛從迦毘羅城南門而出。三者夢見太子乘駒馬車從迦毘羅城西門而出。四者夢見有一寶輪從迦毘羅城北門而出。五者夢見太子在四衢道中揚桴擊鼓。六者夢見迦毘羅城中有一高樓太子於上四面棄擲種種珍寶無數衆生競持而去。七者夢見離城不遠忽有六人拳声号哭。時輸檀王作是夢已。
⑧LV. (Lef. p.185, 外蘭・梵 p.670, 外蘭・訳 p.974)；菩薩は、かの天子によって勸發せら

れたる時、シュッドーダナ (Śuddhodana) 王にこの夢を示現せり。すなわちシュッドーダナ王は、……菩薩が……夜半に天神に囲繞せられて〔城外に〕去り行くを……また〔菩薩が〕出家して遊行者となり、袈裟衣をまとえるを見たり。

- ⑯集經（大正03 p.721上）；爾時作瓶天子、以神通力、欲令太子發出家心。即於其夜、與淨飯王七種夢相。時淨飯王、眠臥床上、於睡夢裏、見如是相。第一所謂夢見、有一大帝釀幢、其幢周匝、有於無量無辺人、拳從迦毘羅城東門出。第二所謂夢見、太子乘十大象、駕馭衆車、從迦毘羅城南門出。第三所謂夢見、太子駕駒馬車、端坐其上、從迦毘羅城西門出。第四所謂夢見、雜寶莊嚴一輪、從迦毘羅城北門出。第五所謂夢見、太子在迦毘羅城之中央大街衢内、手執一搥、撃打大鼓。第六夢見、此迦毘羅城之廻中、有一高樓、太子坐上、四面散擲無量諸宝、而其四方、復有無量無辺億數諸衆生、來將此宝去。第七夢見、此迦毘羅城外不遠、有於六人、拳聲大哭、号咷流淚、各以兩手、自拔頭髮、宛轉于地。（東門出遊後、南門出遊前）
- ⑰MV. (vol. II p.133,, Jones II p.129) ; シュッドーダナ (Śuddhodana) は夢を見た。息子よ、私は夢の中で一匹の象が宝石の浴場から飛び出すのを見た。
- ⑯衆許（大正03 p.945下）；時淨飯王自説其四夢。一夢滿月有其蝕障、二夢日出復於東没、三夢大人衆來禮拜、四夢自身笑而復哭。

[C] 後世の仏伝資料

【16-02】出家の前兆——マハーパジャーパティーの夢

マハーパジャーパティーが白牛がカピラヴァットウから走り去る夢を見る。

[A] 原始聖典

- ⑮根本有部律「破僧事」（大正24 p.115中）；爾時大世主夫人、於其夜中見四種夢。一者見月被蝕、二者見東方日出便即却沒、三者見多有人頂禮夫人、四者見其自身或笑或哭。

[B] 仏伝經典

- ⑯集經（大正03 p.727上）；又當其夜、太子姨母憍曇姓氏摩訶波闍波提、眼中夢見一白牛王、在於城中、揚声吼喚、安庠而行、無有一人能當彼前而作障礙。
- ⑰MV. (vol. II p.134, Jones II p.130) ; 彼の伯母 (mātuhsvasr) も又夢を見た。可愛らしいこぶをもった白牛がカピラヴァストゥ (Kapilāhvaya) から走り去るのを夢の中で見た。

[C] 後世の仏伝資料

【16-03】出家の前兆——太子夫人の夢

太子夫人（ヤソーダラーあるいはゴーパー）が不吉な夢を見る。

[A] 原始聖典

- ⑮根本有部律「破僧事」（大正24 p.115中）；爾時耶輸陀羅復於此夜見八種夢。一者見其母家種族皆悉破散、二者見與菩薩同坐之床皆自摧毀、三者見其兩臂忽然皆折、四者見其牙齒皆悉墮落、五者見其髮鬢悉皆墮落、六者見吉祥神出其宅外、七者見月被蝕、八者見日初出東方便即却沒。

[B] 仏伝經典

- ②修行（大正03 p.467下）；勸太子去時婁夷見五夢。
- ⑦方広（大正03 p.571下）；是時耶輸陀羅亦夢二十種可畏之事、忽然覺悟中心驚悸惶怖自失。菩薩問言、何所恐懼。耶輸陀羅啼哭而言。太子、我向夢見一切大地周遍震動。復見一鮮白大蓋常庇蔭者車匿輒來奪我將去。復見有帝釈幢崩壞在地。復見身上瓔珞為水所漂。復見日月星宿悉皆墮墜。復見我髮為執寶刀者割截而去。復見自身微妙端正忽成醜陋。復見自身手足皆折。復見形容無故赤露。復見所坐之床陷入於地。復見恒時共太子坐臥之床四足俱折。復見一寶山四面高峻為火所燒崩摧在地。復見大王宮內有一寶樹被風吹臥。復見白日隱蔽天地黑暗。復見明月在空衆星環拱。於此宮中忽然而沒。復見有大明燭出迦毘羅城。復見此護城神端正可喜住立門下悲号大哭。復見此城變為曠野。復見城中林木泉池悉皆枯竭。復見壯士手執器仗四方馳走。
- ⑧LV. (Lef. p.194, 外蘭・梵 p.686, 外蘭・訳 p.981) ; (22) ゴーパー (Gopā) [妃] と王子とが、ひとつの寝台に横臥して休める時、ゴーパーは、夜も更けたる丑三つ時に、かくの如き夢を見たり。この全大地が、峰の聳える山岳もろともに、振動せり。諸の樹木は風に吹き荒らされ、根こそぎ抜かれて、地面に倒れたり。 (23) 太陽と月とが、星辰の瑩飾もろともに、天空より地上に落下し、右手に髪毛が引き抜かれ、頭冠の碎け落ちるを見たり。手が切断せられ、また、足も切断せられ、自ら裸身なるを見たり。己が身の真珠瓔珞、また、金帯や宝珠の、切断せられたるを見たり。 (24) 寝台の四本の脚が折れて、地面の上に横たわれるを見たり。王の傘蓋の、鮮彩にして光輝ある、美しき把手の折れたるを見たり。また、あらゆる装身具が落ちて、散乱し、それらは水に流失せり。夫の装身具も、衣服や頭冠もろともに、寝台の上にありて雜乱す。
- (25) 都城より、諸の炬光去り行き、城下は暗黒に覆われたるを見たり。宝石より成る、淨嚴なる網縵の、切断せられたるを、夢に見たり。垂下せる真珠瓔珞が落下して、大海が動乱し、その時、山王メールが根底より振動するを見たり。 (26) これら、かくの如き夢を、シャーキヤ族の后妃（ゴーパー）は眠りの中に見たり。
- ⑬行經（大正04 p.063下）；太子妃寐 夢睹憂變 太子出家 捨宮媛女 逃入山沢 妃獨逐走 徒後求哀 莫相捐棄
- ⑭過去（大正03 p.632下）；爾時耶輸陀羅、眠臥之中、得三大夢。一者夢月墮地、二者夢牙齒落、三者夢失右臂、得此夢已。
- ⑮集經（大正03 p.727中）；爾時其夜、耶輸陀羅、疲極睡眠、無所知曉、臥夢睹見。有二十種可畏之事、心戰身動、恐怖不安、疑怪驚惶、忽然而寤。時太子問耶輸陀言。汝耶輸陀、何故如是驚怖戰慄、氣喘心忪、忽爾而起。何故如是、汝耶輸陀、今者又不在尸陀林、又復不為諸屍所繞、亦不在山、不居曠野。今此城内、無量無邊、兵仗守護、在於王宮、此處深牢、不懼野獸、亦復不慮盜賊來驚。此中安樂、是無畏処。我今見汝耶輸陀羅、心大驚怖、心大憂愁、心生疑畏、忽然覺寤、此事何因。爾時太子妃耶輸陀、淚下如雨、恐怖悲咽、報太子言。大聖太子、我於今夜、夢見如是二十種變、唯願諦聽、我當說之。聖子、我向夢見、一切大地、周匝震動、聖子、次復夢見、有帝釈幢崩倒於地。聖子、次復夢見虛空日月、及諸星宿、悉皆墮落。聖子、次復夢見、有一最大鮮潔傘蓋、是我從來依蔭之處、守護我者、憐愍我者、而彼婢生車匿之子、忽以莊力、奪我將行。聖子、次復夢見、我頭髮鬚、為彼諸寶所莊嚴者、刀截而去。聖子、次復夢見、我身體上所有瓔珞、為水所漂。聖子、次復夢見、我之身形微妙端正。忽成醜陋。聖子、次復夢見、我身體上所有手足、自然墮落。聖子、次復夢見、我此身形忽然赤露。聖子、次復夢見、我之從來常所坐床、我坐之時、承事聖子、彼床忽然自蹈於地。聖子、次復夢見、我常所共、聖子眠臥受樂之床、彼床四腳、並皆摧折。聖子、次復夢見、有一衆寶、所成大山、纖利四楞、無量高峻被火所燒、崩頽墮地。聖子、次復夢見、淨飯大王宮內、有一微妙之樹、被風吹倒。聖子、次復夢見、朗月円団衆星圍繞、在此宮中、忽然而沒。聖子、次復夢見、淨日照明、千光圍繞、在此宮内、忽然而沒、彼隱沒後、世間

黑暗、無有光明。聖子、次復夢見、此宮城内、有一火炬、出向城外。聖子、次復夢見、此城從來所護之神、遍體種種、瓔珞莊嚴、可喜端正、彼忽悲啼、拳声大哭、住在門外。聖子、次復夢見、迦毘羅城、忽為曠野、可畏如夜、心無処樂。聖子、次復夢見、迦毘羅城、所有諸池、水悉皆濁、所有樹林、華果枝葉、並皆墮落、遍散於地、無可觀瞻。聖子、次復夢見、所有莊土、手執刀杖、身着甲鉢、周匝四方、交橫馳走。聖子、我見如是二十種夢。

⑯MV. (vol. II p.135, Jones II p.130) ; ヤショーダラー (Yaśodharā) もまた夢を見た。一群の雲が王宮をとり巻き、雷と豪雨をともなった光明が三つの世界を輝らした。

⑰衆許 (大正03 p.945下) ; 耶輸陀羅亦說八夢。一夢上族離散、二夢吉祥座破、三夢腕釤損墜、四夢牙齒墮落、五夢鬚髮亂垂、六夢吉祥雲出於宮舍、七夢滿月有其蝕障、八夢日出未高復於東沒。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦 (大正50 p.24上) ; 爾時耶輸陀羅眠臥之中。得三大夢。 (出因果經)

④統紀 (大正49 p.144中) ; 耶輸臥中即得三夢。

【16-04】出家の前兆——菩薩の夢

菩薩が須弥山を枕にし、手足で大海を搅拌するなどの夢を見る。

[A] 原始聖典

⑩僧祇律「僧殘001」 (大正22 p.263中) ; 何者実夢。所謂如來為菩薩時、見五種夢如實不異。是名實夢。

⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.115中) ; 菩薩於夜中見五種夢。一者見其身臥大地、頭枕須彌山、左手入東海、右手入西海、双足入南海。二者見其心上生吉祥草高出空際。三者見諸白鳥頭皆黑色、頂禮菩薩所欲騰空、不過菩薩膝下。四者見於四方雜色諸鳥、至菩薩前皆同一色。五者見雜穢山菩薩在上經行來去。

[B] 仏伝經典

⑦方広 (大正03 p.572上) ; 其夜菩薩自得五夢。一者夢見身席大地頭枕須彌手擎大海足踐渤海。二者夢見有草名曰建立從臍而出其杪上至阿迦膩吒天。三者夢見四鳥從四方來毛羽斑駁承菩薩足化為白色。四者夢見白獸頭皆黑色咸來屈膝舐太子身。五者夢見有一糞山狀勢高大菩薩身在其上周匝遊踐不為所汙。

⑧LV. (Lef. p.196, 外蘭・梵 p.694, 外蘭・訳 p.984) ; 福徳と威光とを積集し、栄えある威光の精髓を有する彼 (菩薩) は、次の如き、瑞相 (前兆) を夢に見たり。……彼は巨大なる手と足とを以て、四大海の水を搅拌し、……高顯なるメール (Meru) 山を枕となせるを [夢に] 見たり。

⑨僧伽 (大正04 p.122下) ; 是時菩薩夢見。以此世界為床、須彌山為机。

⑯集經 (大正03 p.728上) ; 爾時太子其夜自復見五大夢。第一夢見、席此大地、持用作榻以須彌山、安為頭枕、東方大海、安左手臂、西方大海、安右手臂、南方大海、安置兩足。第二夢見、有一草莖、名曰建立、從臍而出、其頭上至阿迦膩吒。第三夢見、有四飛鳥、作種種色、從四方來、在於太子兩足之下、自然變成、純一白色。第四夢見、有四白獸、頭皆黑色、從足已上、乃至膝頭、舐太子子脚。第五夢見、有一糞山、高大峻廣、太子自身、在彼山上、周匝經行、不為彼糞之所污染。

⑯MV. (vol. II p.136, Jones II p.131) ; 菩薩もまた五つの大きな夢を見た。菩薩は悟りを開く前に夢を見るものである。1. この大地が彼の広く高い寝床となり、山の王スメール (Smeru)

は枕となる。左腕を東の太洋に、右腕を西の太洋に両足を南の太洋に安置する。2. クシリカ（*kṣirikā*）という草が臍から生じ、天に向ってのびる。3. 黒色の頭をもった赤色の動物が、彼の足の裏から膝頭まで覆って立つ。4. 異なった色の四匹の禿げ鷲が四方から飛んできて、彼の足裏をなめて、白色になって飛び去る。5. 大きな糞の山を汚されることなく、歩き回る。

⑦衆許（大正03 p.945下）；即時太子復自思惟。曾作五夢。一夢床座如妙高山坐臥自在。二夢兩手左托東海右托西海、復以二足垂南海中。三夢花果樹木及諸藥草長至天界。四夢大身飛禽其類甚衆、形白頭黒、及諸小鳥種種顏色、四方而來都至面前、變為一色而禮其足。五夢大石山上經行顧望。

[C] 後世の仏伝資料

- ⑤JM. (p.028, 番中 p.105) ; (出家・苦行の後) 35才の年の (*pañcatimsatime vasse*) ヴェーサ一月の半月の14日目に (*cātuddasiyā pakkhassa*) 、5つの大いなる夢を見……。
⑥Bigandet. (vol. I p.080, 赤沼 p.107) ; (修闇多が供養を準備中に) その夜、菩薩は五つの夢を見給うた。第一は、大地を床とし、比摩羅耶山を枕とし……。

【17-01】出家——美女たちの熟睡中の姿態

菩薩が宮廷の美女たちのだらしなく、死人のように熟睡する姿を見て、世を厭う(1)。

[A] 原始聖典

- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.102上）；菩薩為諸妓女所娛樂已、便得暫眠。衆妓女輩皆淳惛而寐。菩薩尋覓、觀諸妓直更相荷枕、或露形體如木人狀、鼻涕目淚口中流涎、琴瑟箏笛縱橫在地。又見宮殿猶如丘墓。菩薩見已三反稱言、禍哉禍哉……。
⑩根本有部律「破僧事」（大正24 p.115中）；當此之夜。妓女倡伎悉皆疲倦、昏悶眠睡。或頭髮披亂、或口流涕唾、或復調語、或半身露。菩薩見此、雖在深宮猶如塚間見諸死人。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.061, 南伝28 p.131) ; 菩薩は眼を覚まして、臥榻の上に足を組みあわせて坐ったまま、彼の婦人たちが楽器を擲り出して臥ている〔相〕を眺められた。
②修行（大正03 p.467下）；時難提和羅、化諸宮殿、盡為塚墓。裘夷伎女皆成死人、骨節解散、髑髏異処。……
④瑞應（大正03 p.475中）；太子徐起、聴妻氣息、視衆伎女、皆如木人。百節空空、譬如芭蕉。
⑥普曜（大正03 p.504下）；爾時法行天子、淨居天子、來入宮殿自現形像、娛樂之形無常之変。……爾時菩薩普觀眷屬、視衆伎女猶如木人。百節空中、譬如芭蕉中無有實。
⑦方広（大正03 p.573中）；爾時法行天子及淨居天衆、以神通力令諸妓女形體姿容悉皆變壞。所處宮殿猶如塚間。……爾時菩薩見於宮内所有美女形相變壞。
⑧LV. (Lef. p.205, 溝口 p.185) ; 神々の首領達によって勸告されて、かの菩薩は一瞬後宮の様子を見回して考えられた。そして女達が嫌悪感を催すような光景を現しているのを見て言われた。本当に私は墓場の真ん中に住んでいる！と。
⑩仏讚（大正04 p.009下）；時淨居天子 知太子時至 決定應出家 忽然化來下 厥諸伎女衆 悉皆令睡眠 容儀不斂攝 委縗露醜形 ……
⑫BC. (05-47) ; するとそのとき、苦行のすぐれた功徳をそなえたアカニシュタ（Akaniṣṭha）神群は王子のこの決断のほどをさとて、女たちに一度に眠気を催さしめ、彼女たちの身体の動きに（ぶざまな）変化あらしめた。

- ⑬行經（大正04 p.068上）；寤寐尋起 見嬌女眠 瓔珞逆散 失棄樂器 衣裳發露
⑭過去（大正03 p.632下）；太子即從坐起、遍觀妓女及耶輸陀羅、皆如木人。譬若芭蕉中無堅實。
⑮集經（大正03 p.728下）；是時衆中、有一天子名曰法行。來至宮內、以神通力、令諸嬌女身體服飾縱橫不正。
⑯MV. (vol. II p.159 , Jones II p.155) ; (ラーフラ [Rāhula] がトウシタ [Tuṣita] 天より母胎に入った直後) 菩薩は目を覚まし、女たちが眠っているのを見た。ある者は樂器を抱き……。菩薩は彼等が後宮の床に横たわっている様を見たとき、墓場にいるとの想いが生じた。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.007上）；時菩薩夜觀妓女、百節空中。（出普曜經）
①釈迦（大正50 p.024中）；太子即從座起、遍觀妓女及耶輸陀羅。（出因果經）
⑥Bigandet. (vol. I p.060, 赤沼 p.081) ; 菩薩は中夜の少し前に眼をさまして臥榻し給うた。
周囲を眺め見廻せばさてもいろいろに浅間布き姿の多きことよ。

(1) 出家年齢については、本研究の第1号中の「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」のpp.103~108を参照されたい。

【17-02】出家——出城

菩薩が出家を決意し、御者のチャンナ (Channa) を伴い、馬のカンタカ (Kanthaka) に乗つて出城しようする。

[A] 原始聖典

- ①DN.004 ‘Soṇadaṇḍa-s.’ (種徳經 vol. I p.115) ;沙門ゴータマは父母が欲しないのに、涙を流し、泣いているのに、髪と鬚を剃り、袈裟衣をまとって、家から非家に出家した (Samaṇo khalu bho Gotamo akāmakānaṁ mātā-pitunnaṁ assu-mukhānaṁ rudantānaṁ kesa-massuṁ ohāretvā kāsāyāni vattāni acchādetvā agārasmā anagāriyam pabbajito)。
①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.163) ;私は後に年若く漆黒の髪をもち、美しさ若さを有し、第一期にあるにかかわらず (paṭamena vayasā) 、父母が欲しないのに、涙を流し、泣いているのに、髪と鬚を剃り、袈裟衣をまとって、家から非家に出家した。
②長阿含022「種徳經」（大正01 p.095中）；沙門瞿曇初出家時父母涕泣、愛惜恋恨……。
③中阿含204「羅摩經」（大正01 p.776中）；我於爾時父母啼哭諸親不樂。我剃除鬚髮着袈裟衣、至信捨家無家學道。
⑧五分律「受戒法」（大正22 p.102上）；於是菩薩勅奴闍陀、汝起被馬勿令人聞。闍陀白言、夜非行時不應遊觀、又無怨敵逼於上宮。不審何故夜勅被馬。太子答言、有大怨敵汝不知耶、老病死怨。怨之大者。汝速被馬勿得稽留。即被白馬牽至中庭、白言馬已來此。菩薩便到馬所、將欲跨之。馬大悲鳴。天神恐有留難、即散馬聲令人不聞。菩薩跨馬向閣、閣即自開。復向城門、門亦自開。
⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.911上）；爾時菩薩遍觀一切老病死已、諸天圍繞、便於夜半踰城出家往勤苦林。
⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.115下）；爾時菩薩發心欲出。大梵天王及帝釈等、知菩薩念應時而至、合掌恭敬而說頌曰、……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.061, 南伝28 p.132) ; 菩薩は「予は今日こそ大出家を遂げなければならない」と〔決心して〕臥榻から立ち上がり……「其処にいるのは誰か」といわれた。……チャンナ (Channa) は、「王子さま、チャンナでございます」と答えた。(王子) 「予は今日大出家を遂げようと思う。予に馬の用意をしてくれ」(チャンナ) 「畏りましてございます」といつて、……廁に行った。……犍陟 (カンタカ Kanthaka) 馬王を見て、「今日はこの馬を用意しなければならぬ」と思って、犍陟を用意した。
- ②修行 (大正03 p.467下) ; 至年十九、四月七日、誓欲出家。至夜半後、明星出時、……即呼車匿、急令被馬。……於是城門自然便開、出門飛去。
- ④瑞應 (大正03 p.475中) ; 至年十九、四月八日夜、天於窓中、叉手白言。時可去矣。……即呼車匿、徐令被馬……踰出宮城。
- ⑤異出 (大正03 p.619上) ; 夜半時、四天王、從天窓中來、呼太子曰。時到可去。……踰屋出城。
- ⑥普曜 (大正03 p.505下) ; 爾時菩薩告車匿曰。車匿、速起嚴被白馬、今日人尊宜吉祥時、應當出去。
- ⑦方広 (大正03 p.574下) ; 菩薩作是思惟、於今夜靜出家時到。即就車匿而語之言。車匿汝宜為我被乾陟來。
- ⑧LV. (Lef. p.210, 溝口 p.190) ; かの菩薩は真夜中の時刻が来たのを知って、チャンダカ (Chandaka) に言われた。チャンダカよ、もはやぐずぐずできない。装飾品で飾られた馬の王を連れてきてくれ。
- ⑨僧伽 (大正04 p.122下) ; 是時菩薩志性不可廻転如所說。如月初出於幽冥處衆人所敬。即從座起欲得出家。
- ⑩十二 (大正04 p.146下) ; 佛以二十九出家。
- ⑪仏讚 (大正04 p.010上) ; 爾時淨居天 来下為開門 太子時徐起 …… 而告車匿言 吾今心渴仰 欲飲甘露泉 被馬速牽來 …… 飄然超出城
- ⑫BC. (05-66) ; …… (女の本性と変容との) 懸隔をさとり、いまこそ好機だと思った彼には、この夜のうちに出家してしまおうという意欲がこみあがってきた。すると、彼の意中を知った神々は、彼のために御殿の扉を開け放した。……彼は足の速い馬丁チャンダカ (Chandaka) を起こしてつぎのように言った「急ぎ駿馬カンタカ (Kanthaka) を連れてきてくれ。私は今日ただいま、ここより不死 (の境地) に到達するため、出かけたいのだ……」……父王の都より出ていったのであった。
- ⑬行經 (大正04 p.068下) ; 即從坐起 意計決定 …… 即時出宮 …… 即以方便 覚起車匿 以柔軟聲 告語車匿 速取良馬 犍陟使來
- ⑭過去 (大正03 p.632中) ; 爾時太子心自念言。我年已至一十有九今是二月復是七日。宜應方便思求出家。
- ⑮過去 (大正03 p.636上) ; 阿私陀仙昔相太子。年至十九出家學道必當成就一切種智。
- ⑯集經 (大正03 p.730上) ; 爾時太子仰瞻虛空如是思惟。今中夜靜鬼宿已合……宜出家也。……即喚同日所生奴子車匿告言。……急被帶我同日所生馬王乾陟將前着來。
- ⑰集經 (大正03 p.745下) ; 爾時菩薩從兜率天下來之時入釀種胎欲受生日。彼時先於其跋伽婆仙人林中所居之處自然涌出二金色樹……而彼二樹當於菩薩出家之夜忽然沒地。……菩薩即問彼仙人言。尊者彼等二樹出來幾時。仙人答言。到今已來二十九年。
- ⑱MV. (vol. II p.161, Jones II p.157) ; かくて菩薩は、軍隊や財産や王位や家族を棄て、家住から遊行の生活に入っていった。
- ⑲MV. (vol. II p.299, Jones II p.280) ; 菩薩は29才になり (ekūnatriṁśo vayasānuprāpto) 、成熟に達した時、彼は王国と七宝を捨て、黃衣を着けた。

⑦衆許（大正03 p.946上）；爾時帝釈天主及梵天王告太子言。……早出宮殿明相現前證一切智。…
…菩薩下之即覓餐那令被馬王。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.007上）；即勅車匿起被撻陟。（出普曜經）
- ①釈迦（大正50 p.024上）；爾時太子心自念言。我年已至十九、今又是二月復是七日。（出因果經）
- ②歴代（大正49 p.023中）；八年壬子年十九、四月八日夜半踰城出家。十二遊經云、佛二十出家。
增一阿含第二十四卷云、我年二十九、出家欲度人故。又云、年二十在外道中学。長阿含亦云、年
二十九出家。推其大例如來在世七十九年、若二十九出家三十五成道、所可化物唯應四十五年。而
禪要經云、釈迦一身教化衆生四十九年。諸經多云、十九出家。今以此為正。
- ③氏譜（大正50 p.090下）；經云。至年十九、思出家時將已至矣。到父王……自言、思欲出家、必
願聽許。……因果云、我年十九、今二月七日出家時至。
- ④統紀（大正49 p.145上）；述曰。按瑞應・因果・中本紀・大論、並云十九出家。十二遊、增一中
雜長四阿含、出曜經和須蜜論、並云二十九出家。……今以如來八十壽除五十說法、則定取梵網・
無相三昧・寶藏經等、三十成道之言。若以三十成道除六年苦行、則定取荊溪二十五出家。
- ⑤JM. (p.027, 畑中 p.103)；彼は夜半時に目覚め、淨らかな螺貝のごとく、白いカンタカ (Kan-thaka) と呼ばれる王馬に乗り、チャンナ (Channa) の馬の尾につきそわせて、大出離をなそう
と大門に到着した。一夜のうちに、3 王国を越えて 30 由旬の道 (*timsayojanikam maggam*) を
進み、アノーマー (Anomā) 河の岸辺に到着した。摩訶薩はまた、そこで出家したのだが……ア
ヌピヤ (Anupiya) と呼ばれるマンゴ樹林で 7 日間の (*sattāham*) 出家の至福をもって過ごした。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.061, 赤沼 p.082)；太子は今や不動の決心を以て自ら宣う様、「今日今
時只今から、閑寂の地に隠退するであろう」と。……「車匿 (Tsanda) よ……私の為に、一番足
の駒を用意して呉れよ」……太子の出城は實にアニュジャーナ紀元九十七年であった。

【17-03】出家——惡魔が出家を止めようとする

惡魔が菩薩に転輪聖王になるように勧め、出家を止めようとする。

[A] 原始聖典

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.063, 南伝28 p.135)；この瞬間に魔王 (Māra) が、〔菩薩を還らせよう〕と思つて……「あなたは出ていってはなりません。あなたはこれから七日目に輪宝が現れて来ます。
……」と云つた。（菩薩）「そなたは誰か」（魔王）「私はヴァサヴァッティン (Vasavattin)
天であります。」（菩薩）「魔王よ、……予には王位は要らないのだ。予は一万世界を鳴り響か
せて仏と成るであろう。」
- ⑯集經（大正03 p.732上）；爾時欲界魔王波旬、見於太子初出家時、為欲恐怖於太子故、以神通力、
化作諸声。……爾時淨居諸天、……將彼魔王波旬、擲着無量百千由旬之外、勿使障礙太子出家。

[C] 後世の仏伝資料

- ⑤JM. (p.027, 畑中 p.103)；その時マーラ (Māra) が摩訶薩に言った。「大雄よ、出家するで
ない。これより 7 日後に (*sattame dine*) 汝のために天の輪宝がまことあらわになるであろう」
と。

⑥Bigandet. (vol. I p.062, 赤沼 p.084) ; 悪魔 (Manh Nat) は菩薩の出家を止め、成道を妨げよう決心した。

【17-04】出家——貴識が道標となって天道を示す

貴識という名の神が出城した菩薩の前に現われ、天道・人道・悪道のうちの天道を示す。

[A] 原始聖典

[B] 仏伝經典

- ④瑞應 (大正03 p.475下) ; 即起上馬、將車匿前行數十里、忽然見主五道大神、名曰貴識。……所居三道之衢、一曰天道、二曰人道、三曰三惡道。……示以天道曰、是道可從。
⑤異出 (大正03 p.619中) ; 行十數里、見一男子、名曰貴識。貴識者、鬼神中大神。……貴識所立処者有三道、一者天道、二者人道、三者泥犁惡人之道。……貴識即以天道示之、此道可從。
⑥普曜 (大正03 p.507下) ; 於是菩薩稍進前行、覩五道神名曰奔識、住五道頭。

[C] 後世の仏伝資料

【17-05】出家——剃髪し、狩人と衣服を交換する

出城した菩薩がアノーマー (Anomā) 河を渡ったところ（あるいはマッラ国のアヌピヤー）で馬を降り、剃髪して、チャンナを歸らせ狩人と衣を交換する。

[A] 原始聖典

- ②長阿含001「大本経」 (大正01 p.007上) ; 太子於後即剃除鬚髮服三法衣、出家修道。
④雜阿含604 (大正02 p.167上) ; 此処菩薩脫瓔珞與車匿、遣馬還國。……又此処菩薩從獵師易袈裟衣、被此衣已而為出家。
⑦四分律「受戒捷度」 (大正22 p.779下) ; 時菩薩強違父母、輒自剃鬚髮著袈裟捨家入非家。
⑧五分律「受戒法」 (大正22 p.102上) ; 既出門已向阿菟耶林、去城不遠。便下馬脫寶衣、語闡陀言。汝可牽馬并持寶衣還宮道。……菩薩前行、見一獵人著袈裟衣。往至其所、以所著衣價直百千、用以貿之得著而去。菩薩復前向須摩那樹、樹下有剃頭師。求令除髮。即為剃之。釈提桓因如屈伸臂頃至菩薩前、以衣承髮持還天宮。剃已作是念、我今已為出家自然具戒。
⑪根本有部律「藥事」 (大正24 p.030下) ; (勝身城から弥替羅に至り、そこから阿耨井に至り、またそこから隨路而至) 我昔為菩薩時天帝釈作獵師形被一雜色衣。我時為出家故脫於細軟上服而與換之。有信婆羅門居士等因從此地、建立受袈裟塔乃至今日、諸苾芻咸皆禮拜供養。天帝釈將我施迦衣……。我昔為菩薩時以青蓮花色劍自割我髻、擲於空中。有信心婆羅門居士便於此地建立割髻塔。諸苾芻今應禮拜供養。于時天帝釈持我髮髻……。我昔行菩薩道時闡陀迦於此地、將我乾闥伽馬王却還本宮。有信心婆羅門居士復於此地立馬廻塔。諸苾芻至今供養。
⑫根本有部律「破僧事」 (大正24 p.117中) ; 是時菩薩、以二更中、行十二踰膳那、從馬而下、即解瓔珞告車匿曰。汝可將馬及我瓔珞從此廻去。……爾時菩薩即於車匿手中取其所執之刀。其刀輕利、青光湛色如青蓮花葉。既拔其刀即自割髮擲虛空中。釈提桓因於虛空中即便捧接、將往三十三天。每至此日集三十三大衆旋繞供養。其割髮之地信心長者婆羅門等營一宝塔名曰割髮地塔。苾芻俗人常應供養。……時天帝釈觀其下界、乃見此衣在樹空中便往取之身自被著。作老獵師形状、執

持弓箭與菩薩相近、菩薩告曰。此是出家人衣、我衣貴妙是俗人服、今欲相換可得以不。……諸婆羅門居士長者共於此地造一制底、名為受出家衣塔。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.064, 南伝28 p.137) ; (アノーマー [Anomā] 河を渡ったところで) 菩薩は馬の背から下り……車匿 (Channa) を呼んで云われた。(菩薩) 「友車匿よ、おまえは予の瓔珞と犍陟 (Kanthaka) とを伴れて還ってくれ、予は出家をする。」……菩薩は……考えられた。「予のこの毛髪は沙門に相応しくない」と。だが、菩薩の毛髪を切るに適するものは他にはなかつたので、……右の手に刀を取り、左の手に頭被と鬚とと一緒に攢んで切られた。毛髪は長さ二指量 (angula アングラ) で、……毛髪の長さは菩薩の一生を通じてそれだけであった。……次に菩薩は考えられた。「このカーシ国産の衣服 (Kāsikavattha) は沙門たる予には相応しくないと。すると迦葉仏 (Kassapabuddha) の頃、菩薩の旧い友人であったガティーカーラ (Ghatikāra 瓦師) という大梵天が、……八種の沙門の道具を持って来て献じた。
- ②修行 (大正03 p.468上) ; 天曉行四百八十里、到阿奴摩国(漢言常満)。太子下馬。……告言、汝便牽馬帰。……思欲剃頭髮、倉卒無有具、帝釈持刀來、天神受髮去。……即便見獵師馳遊被法衣、太子喜念言、此則真人衣、度世慈悲服、獵者何故着。心念欲貿易成我志所願便持金鏤衣、貿所法震越。獵者内歡喜、菩薩亦俱然、太子被震越。
- ④瑞應 (大正03 p.475下) ; 行數十里、逢兩獵客。太子自念、我已棄家、在此山沢、不宜如凡人被服宝衣有慾態也、乃脱身宝裘、與獵者賈鹿皮衣。……到前下馬、遣車匿還。……当作沙門如菩薩法、天神奉剃刀鬚髮自墮、天受而去。
- ⑤異出 (大正03 p.619中) ; 太子行數十里、道逢獵者。太子曰、我欲從卿有所債、寧可得耶、……獵者即以皮與太子、太子亦以珍物與之。……太子行數十里、駐馬而下、謂車匿、若從是而還。
- ⑥普曜 (大正03 p.508上) ; 於時車匿夜送菩薩、菩薩脱身宝瓔奇珍以付車匿、持是還國。……遂進前行逢兩獵師、心自念之、吾已出家不與俗同、脱身所服賈鹿皮衣、着之而去。……天王知心、飛天奉刀來、帝釈受髮則成沙門。
- ⑦方広 (大正03 p.576上) ; 爾時菩薩去迦毘羅城、至彌尼國其夜已曉、所行道路過六由旬。……菩薩既行至彼往古仙人苦行林中、即便下馬慰喻車匿、……汝便可將乾陟俱還。……菩薩作是思惟、若不剃除鬚髮非出家法、乃從車匿取摩尼劍、即自剃髮。……爾時菩薩剃鬚髮已、自觀身上猶着寶衣、即復念言、出家之服不当如是。時淨居天化作獵師、身着袈裟……即取袈裟授與菩薩、菩薩……即便與彼橋奢耶衣。
- ⑧LV. (Lef. p.225, 溝口 p.203) ; こうしてかの菩薩は出發してからシャーキヤ族の国を過ぎ、クローディヤ (Kroḍya) ⁽¹⁾族の国を過ぎ、マッラ (Malla) 族の国を過ぎ、夜が明ける頃 (Kapilavastuから6yojuna離れた) マイネーヤ (Maineya) 族の都アヌヴァイネーヤ (Anuvaineya) に到着された。そこでかの菩薩は彼の馬カンタカ (Kaṇṭhaka) から地面に降り立ち……チャンダカ (Chandaka) を呼んで言われた。チャンダカよ、行け。これらの装身具とカンタカを持って、ここから引き返せ、と。……かの菩薩にまた次の考えが浮かんだ。遍歴修行者になったからには、高く結い上げた頭髪を保つのは、いかがなものであろうか? そして、自分の刀で自分の頭髪を切つて、それを空中に放り上げられた。……また、かの菩薩に次の考えが浮かんだ。遍歴修行者になったからには、これらのカーシー産の衣服 (Kāsikāni vastrāṇi) を保つのは、いかがなものであろうか? ……その時、淨居天の……神々 (Śuddhāvāsakāyika) の一人の息子が、神の姿を消して、赤茶色の衣服を着て、かの菩薩の前に現れた。……そこで獵師の姿をしていたこの一人の神の息子は、かの菩薩に赤茶色の衣服を与え、カーシー産の衣服を受け取った。
- ⑨僧伽 (大正04 p.122下) ; 是時菩薩右手執刀自剃頭髮。是時菩薩以宝衣賈鹿皮用作袈裟。是時菩

薩復作是念。最是我應所着衣。

- ⑪仏讚（大正04 p.010下）；下馬手摩頭 汝今已度我 慈目視車匿 …… 汝事我已畢 今且乘馬還 …… 衆寶莊嚴劍 車匿常執隨 太子拔利劍
- ⑫仏讚（大正04 p.012上）宝冠簾玄髪 合剃置空中 …… 太子時自念 莊嚴具悉除 唯有素絵衣 猶非出家儀 時淨居天子 知太子心念 化為獵師像 持弓佩利箭 身被袈裟衣 ……
- ⑬BC. (06-01) ; ……世界の眼である太陽が一瞬にして昇ったとき、この男のなかのすぐれたるものは、ブリグ仙の後裔（Bhārgava）の庵の一角を見た。……自ら恭順を旨としながら、馬より降りた。……お前はほんとうに私のためによいことをしてくれた。いまや馬を連れて引き返しなさい。
- ⑭BC. (06-57) ; そして、青蓮の花弁のように青光りする剣を引き抜くや、（頭から）彼は毛髪もろともきらびやかな冠を切り落とし、あたかもハンサを湖に放つごとく、……房々した髪のはためく冠を天に向かって投げかけた。
- ⑮BC. (06-59) ; ……彼は（このようにして）豪華な装飾品と別居し……黃金色のハンサを刺繡した絹の衣が眼に入ると、……（質素な）装束を（手に入れたいと）願った。すると、この彼の意中を知った本性淨らかな一人の天人は、鹿の狩人の相をなし、オレンジ色の衣（袈裟衣）をまとつて、近くにやってきた。シャカ族の王子は、「……私にその衣をくださいませんか。（その代わりに）私はこれを（あなたに）さしあげましょう」と。
- ⑯行經（大正04 p.069上）；即便下馬 入山沢中 心懷歡喜 弁已大事……金鞘明珠靶 拔劍如抽虺 自以剃其頭 天敬接髮去
- ⑰行經（大正04 p.070中）；行且自思惟 不宜着綵服 忽見釈化作 獵師被袈裟 太子因語曰 服非汝宜 取吾金綵衣 卿袈裟與我
- ⑲過去（大正03 p.633中）；爾時太子、次行至彼跋伽仙人苦行林中。……即便下馬、……又語車匿、……我今既已至閑靜處、汝便可與健陟俱還宮也。……爾時太子、便以利劍、自剃鬚髮、即發願言。今落鬚髮、願與一切、斷除煩惱及以習障。釈提桓因、接髮而去。……爾時太子、剃鬚髮已、自見其身所着之衣、猶是七寶、即心念言。過去諸仏出家之法、所着衣服、不当如此。時淨居天、於太子前、化作獵師。……即脫宝衣、而與獵者、自被袈裟、依過去諸仏所服之法。
- ⑳集經（大正03 p.733下）；爾時太子見此樹林、乃往仙人所居之處。……是時太子從其馬王乾陀而下。……爾時太子、從車匿邊、索取……七寶把刀、……螺髻之髮、……割取、……擲置空中、……有一華鬘、名須曼那、……下化作一淨髮師、……剃於太子無見頂相紺螺髻髮。……爾時太子、自解其身一切瓔珞及以天冠、剃去髮鬚、剪落既訖、觀於體上、猶有天衣、……此衣非是出家之服。……時淨居天、……應時化作獵師之形、身着袈裟染色之衣。……是時化人、即與菩薩袈裟之衣、從菩薩取迦尸迦衣、價數直於百千金者。
- ㉑MV. (vol. II p.164, Jones II p.159) ; カピラヴァストゥ (Kapilavastu) の南方へ 12 ヨージャナ (dvādaśayojana) を馬に乗り、マッラ (Malla) 国のアノーミヤ (Anomiya) という所のヴァシシュタ (Vaśiṣṭha) 仙人住所から遠からぬところまで向かい、そこで菩薩とチャンダカ (Chandaka) は停った。
- ㉒MV. (vol. II p.165, Jones II p.161) 菩薩にこのような考えが生じた。「このような頭髪をもつたままで、どうして遊行者になることが出来ようか」そこで菩薩は自分のナイフで髪を切り落とした。
- ㉓MV. (vol. II p.195, Jones II p.186) その時、淨居天 (Śuddhāvāsa deva) は一人の黄衣を着けた狩人を作った。菩薩は彼の方に近づき言った。「自分のベナレス産の衣装 (Kāśika) をとつて、あなたの黄衣を私に下さい」
- ㉔衆許（大正03 p.947上）；説此語已即脱宝冠上妙衣服、告伐那曰。將我衣服及彼馬王歸奉父王。

……即從座起合掌頂禮、拳手執劍如優鉢羅花葉、即自截髮擲虛空中、天主帝釈……以手接髮。…爾時菩薩而復思惟、我今落髮作沙門相、云何身上得袈裟衣。如是念已阿耨波摩城中、有一長者。（十子の辟支迦）……時帝釈……為一獵士、……乃以袈裟奉上菩薩。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.007中）；菩薩脫宝衣以付車匿。（出瑞應本起経）……天王知心持刀來、帝釈受髮、則成沙門。（出普曜經）
- ②釈迦（大正50 p.025上）；爾時太子次行至彼跋伽仙人苦行林中……爾時太子便以利劍自剃鬚髮……爾時太子剃鬚髮已自見其身。所著之衣猶是七寶……。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.091上）；經云。太子至閑靜林、以寶冠明珠瓔珞嚴飾具、與車匿已。……以劍自剃鬚髮、作是誓言願共一切除斷煩惱、于時天帝接髮而去……又念過去諸仏法、衣不以七寶、淨居天知已、化作獵師身服袈裟、菩薩即以寶衣而用貿之。智度論云、所貿得衣、麁布僧伽梨也。
- ④統紀（大正49 p.144中）；行至跋伽仙人苦行林中、即便下馬語車匿言。……太子即就車匿、取七寶劍自剃鬚髮、而發願言、願共一切除斷煩惱及以習障、帝釈接髮而去。……時淨居天化作獵師身被袈裟、太子見已而語之曰、……我今持此七寶之衣。與汝貿易。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.064, 赤沼 p.087)；菩薩はこの夜の中に、……馬を馳すること三十由旬、やがて阿奴摩河（Anauma）の岸にいたり給うた。……菩薩は衣服を脱ぎ、車匿を呼びてこれに与え、これより健渉（Kantika）と共に衣服珠宝を携えて宮城に帰る様にと命じ給うた。……太子は又今や髪も鬚も不要のものである。沙門には不似合のものなれば却って捨てるがよいと決し給うて、自ら剣を抜き、片手に頭髪をとりて、一刀にてこれを切り給うた。

(1) Koliyaか。

【18】バッガヴァ仙人を訪問する

出家した菩薩がバッガヴァ（Bhaggava）仙人（あるいはヴァシシュタ〔Vaśiṣṭha〕仙人）のところを訪れる。

[A] 原始聖典

- ④雜阿含604（大正02 p.167上）；此處是仙人所稽請處。
- ⑪根本有部律「藥事」（大正24 p.030下）；爾時世尊告阿難陀曰。我為菩薩時、此處往昔有仙人。名跋伽婆。請我令坐以花果供養。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.118上）；爾時菩薩既剃頭被袈裟已、於林野中處遊行、至婆伽婆仙人所。見其仙人以掌支頰思惟而住。菩薩問曰、大仙、何故作此思惟……。

[B] 仏伝經典

- ⑦方広（大正03 p.576下）；別車匿已、安詳徐歩、經彼跋渠仙人苦行林中。
- ⑪仏讚（大正04 p.010下）；須臾夜已過……林樹間跋伽仙人處……見彼仙人是所應供養……安詳而諦步入於仙人窟
- ⑫BC. (06-01)；それから（まもなく）、世界の目である太陽が一瞬にして昇ったとき、この男のなかのすぐれたるものは、ブリグ仙の後裔（Bhārgava）の庵の一角を見た。
- ⑬行經（大正03 p.070中）；林藪有梵志隱居學神仙……於其中有一智達梵志曰……速疾可往詣中清淨山林於彼有仙士名曰無不達……彼之所修學豈能合仁意

- ⑭過去（大正03 p.634中）；爾時太子、即便前至跋伽仙人所住之處。……太子……更思惟。此諸仙人、雖修苦行、皆非解脫真正之道、我今不應止住於。
- ⑮集經（大正03 p.733中）；爾時太子從迦毘羅城門出已、勅其車匿作如是言。……向羅摩村行（異説；彌尼迦）。……至日出時、到跋伽婆仙人居處。……
- ⑯集經（大正03 p.745上）；爾時菩薩、從彼阿尼彌迦聚落、漸漸欲向於毘耶離中、路有一仙人居處、彼旧仙人名跋伽婆（隋言瓦師）。
- ⑰MV. (vol. II p.195, Jones II p.186)；菩薩はヴァシシュタ (Vaśiṣṭha) 仙人住所のある、苦行林 (dharmāraṇya) に入つてゐた。
- ⑱衆許（大正03 p.947下）；爾時菩薩……漸次經行、見一仙人名婆哩謔囉、以手揩頤顔容不悅。……菩薩思惟、城邑不遙、如釀種來必作魔難。即別仙人過毘伽河、往王舍城。……

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.026上）；爾時太子即便前至跋伽仙人所住之處。
- ③氏譜（大正50 p.091上）；經云。太子至跋伽仙林中……言論反覆乃至日暮明旦辭去。諸仙答曰。……可往北行、彼有大仙可就語論。
- ④統紀（大正49 p.144中）；跋伽仙人遙見太子、謂是天神、與衆請坐即問。……言論往復、明旦辭去。

【19】ビンビサーラ王と逢う

ビンビサーラ (Bimbisāra) 王が高樓に立ち、菩薩の威儀にあふれて王舍城に入つてくる姿を目撃し、パンダヴァ山にまで菩薩を訪ねて、王位を譲ることを申し出るが、断られる。

[A] 原始聖典

- ① ‘Suttanipāta’ Vs.405~413 (p.072)；出家して佛はマガダ国 (Magadha) の王舍城 (Rājagaha) に行かれた。高樓に立つBimbisāraは佛を見て、家臣たちに後を追わせた。
- ① ‘Suttanipāta’ Vs.414 (p.073)；王舍城を出て佛はそこを住所としようとPāṇḍava山を行つた。
- ④雜阿含604（大正02 p.167上）；此處瓶沙王與菩薩半國處。
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.779下）；著衣持鉢入羅閱城乞食。時摩竭王、在高楼上、諸臣前後圍繞。王遙見菩薩入城乞食、屈申俯仰行歩庠序、視前直進不左右顧眄。見已即向諸大臣……。時王語太子言、今可於此住、當分半國相與。菩薩報言、……
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.780上）；時乞食得已 聖還出城住 山名班茶婆
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.102中）；於是漸漸遊行到王舍城……。時王與諸群臣於高楼上、遙見菩薩以為奇雅。顧語衆臣。未曾見聞若斯人比、必是神聖。咸皆白言……。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.102下）；菩薩乞食畢還波羅捺山、向波旬國結跏趺坐。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.118中）；渡毘伽河、漸次遊行至王舍城。……時頻毘婆羅王在樓觀望、遙見菩薩行步端正被如法僧伽胝衣捧持一鉢如法瞻視威儀庠序次第乞食。……
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.118下）；菩薩乞食已 默然出城外 往彼般茶林 清淨自安止
使者知處已 卽遣一人守 一報速還城 報彼國王曰 天王彼苾芻 今在般茶山 坐如猛虎兒
處山如師子 王聞說是言 即登諸寶輶 群臣共圍繞 速詣彼所居 至彼般茶山 王從車輶下 步
行前往詣 便即覩菩薩

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.065, 南伝28 p.140) ; [かくして] 菩薩は出家された。その地方に阿奴夷 (アヌーピヤ Anūpiya) というアンバの樹林があった。其処で七日間を (sattāham) 過し、一日に (ekadivasen' eva) 三十由旬の道を (timsayojanamaggam) 歩いて、ラージャガハ (Rājagaha) に入られた。……王は宮殿の高台に立って大士を見、…… (役人に命じて、あとをつけさせた)。大士は……入った [時に通った] 門から出て行ってパンダヴァ (Pāñdava) 山の麓に、東の方に向って坐て、食事を初められた。……王は使者の言を聞いて、急いで都を出て菩薩の所へ行き、その勝れた威儀に敬服して、菩薩に一切の主権を譲り渡そうといった。
- ②修行 (大正03 p.468中) ; 於是出国、小復前行、到摩竭国。……時国王瓶沙、即問臣吏。……於是王與群臣、出詣道士、遙見太子……。
- ④瑞應 (大正03 p.476中) ; 太子自去、踰越名山、經摩竭界。瓶沙王出田獵、遙見太子、行山沢中。
- ⑥普曜 (大正03 p.509中) ; 菩薩嚴飾衣被第一顯現、手執應器、思惟無念、入羅閱祇欲行分衛。……衆人惟察人中之尊……往告瓶沙王。……時王聞之勅外嚴駕、……尋便下車、……稽首禮足。
- ⑦方広 (大正03 p.579上) ; 出毘舍離城漸次遊行、往摩伽陀國王舍大城、入靈鷲山獨住一処。……時王……自陟高楼上 遙觀菩薩身 相好甚端嚴……於彼晨朝時 嚴駕躬親謁。
- ⑧LV. (Lef. p.239, 溝口 p.214) ; ヴァイシャーリー (Vaiśali) に心ゆくまでの期間留まってから、マガダ (Magadha) 国の中に入った。この国の中を遍歴して都のラージャグリハ (Rājagrha) に近づき、山々の王であるパーンダヴァ (Pāñdava) 山の麓に到着した。……ビンビサラ (Bimbisāra) 王は夜が明けたのを見てから、大勢の家来に囲まれて、山々の王であるパーンダヴァ山の麓へ行った。……王はかの菩薩の足を頭に頂いて挨拶し、……。
- ⑪仏讚 (大正04 p.019上) ; 太子辭王師 及正法大臣 冒浪濟恒河 路由靈鷲巖 藏根於五山 …… 爾時瓶沙王 処於高觀上 …… 即勅嚴駕行 …… 恭步漸親近
- ⑪仏讚 (大正04 p.019中) ; 精巖隨所得 持鉢歸閑林 食訖漱清流 樂靜安白山
- ⑫BC. (10-01) ; ……王のいとし子は、(大王の) 祭事と政治を司るこの兩人を描いて、さざなみゆれるガンガー (Gaṅgā) 河を渡り、豪壯な家が軒を並べるラージャグリハ (Rājagrha) に赴いた。……マガダ領主シュレーニヤ (Śrenya) は(道路に面した) 外側の御殿から、(ときならず) 群衆が波をなして一杯集まっているのを見て……彼はこの山 (Pāñdava山) の上に結跏趺坐を組んで、……のごとき菩薩を見た。
- ⑫BC. (10-14) ; それから彼は、(与えられて) 得られたままに施物を受けとて、山の(なかの) 人気なき小川の清流(のほとり)にいたり、そこで作法に則って(つつましく)食事を摂ってから、パーンダヴァ (Pāñdava) 山(白山)に登っていった。
- ⑬行經 (大正04 p.071上) ; 時度恒水已 …… 入王舍分衛 …… 爾時其國王 厥號為瓶沙 時處高觀上 遙見太子行 …… 於城外食訖 上槃塔名山 …… 王至槃塔山 …… 王至下宝車 步歩而登山 見太子独坐
- ⑭過去 (大正03 p.637上) ; 爾時太子、往彼阿羅邏迦蘭仙人住処、渡於恒河、路由王舍城。……如是誼譁。徹頻毘婆羅王。……王便嚴駕、……至般茶婆山、遙見太子、……即便下馬、……前坐問訊太子。
- ⑮集經 (大正03 p.758上) ; 爾時菩薩、從優陀羅羅摩子処、辭別而行。……向般茶婆山(隋言黃白色)。
- ⑯集經 (大正03 p.758中) ; 爾時菩薩、從般茶山、安庠而行、至王舍城。……爾時摩伽陀國、王舍城主、姓施尼氏、名頻頭婆羅。……爾時頻頭婆羅王、在高楼上、……即從楼下、出宮門外、見菩薩身、威儀舉動、端正無匹。……
- ⑯集經 (大正03 p.764下) ; 爾時菩薩、從般茶婆山林而出、……向伽耶城。既到彼已、登上伽耶尸梨沙山(隋言象頭)。……鋪草而坐。

- ⑯MV. (vol. II p.198, Jones II p.189) ; 菩薩はアーラーダ・カーラーマ (*Ārāda Kālāma*) と別れ、ラージャグリハ (*Rājagṛha*) 向った。マガダ (*Magadha*) 国王であるシュレーニヤ (*Śreniya*) は王宮のテラスから彼を見た。菩薩はパーンダヴァ (*Pāñdava*) 山に向われた。王もパーンダヴァ山へ行き、菩薩に近づき挨拶するとともに一国の提供を申し出る。
- ⑯MV. (vol. II p.198, Jones II p.189) ; 菩薩はパーンダヴァ (*Pāñdava*) 向われた。そしてそこで彼の住処が見出されることになる。
- ⑰衆許 (大正03 p.947下) ; 時民彌娑囉王在高楼上、遙見菩薩身相端嚴……国王知已躬自臨幸、接見。……

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.028下) ; 爾時太子往彼阿羅遷迦蘭仙人住処。 (出因果經)
- ④統紀 (大正49 p.144下) ; 時太子北度……恒河、路經王舍城中。瓶婆娑羅王……聞太子至、願捨國相奉。
- ⑤JM. (p.028, 番中 p.104) ; 1日で30由旬の道を進み (ekadivasam eva tiṁsayojanikam maggam gantvā) 、アサンガ・ガンガー (*Asaṅga-gaṅgā*) と呼ばれる河を渡って、アーサールハ月の黒分8日目に (*Āśālhamāse kālapakkhassa atthamiyam*) ラージャガハ (*Rājagaha*) には入り、乞食して廻り、……パンダヴァ (*Pāñdava*) 山の日蔭に坐って食べた。彼はビンビサーラ (*Bimbisāra*) 王によって贈与された一切の王権を拒み、王に約束をして……。
- ⑤JM. (p.028, 番中 p.183) ; 菩薩は5才年長 (*Bimbisārato pañcavassādhiko*) 、15才で即位 (*paññarasavassuddesikakāle katābhiseko*) 、52年間治政 (*dvepaññāsavassāni rājjam kāre-si*) 。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.067, 赤沼 p.091) ; 菩薩はこれよりその地 (阿奴比耶 *Anupyia*) を出立して三十由旬を離るる王舍城 (*Radzagio*) へ向い給うた。……頻婆娑羅王 (*Peimpathara*) は王宮より街上を眺め、鉢を手にして歩みを運び給う菩薩を認め、……官臣を遣してその旅人の行状を一々注視せしめ……太子の許へ赴いた。

【20-01】 2仙人を訪問する——アーラーラ・カーラーマ仙人を訪問する

菩薩がアーラーラ・カーラーマ (*Ālāra Kālāma*) 仙人を訪問して無所有処定を得るが、これに満足しないで去る⁽¹⁾。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.163) ; 出家して善なるものを求め (kiṁkusalagavesin) 、無上の寂靜の境地を求めて (anuttaram santivarapadaṁ pariyesamāna) 、Ālāra Kālāmaの所に行った。
- ①MN.036 ‘Mahāsaccaka-s.’ (vol. I p.240) ; 同上
- ①MN.085 ‘Bodhirājakakumāra-s.’ (vol. II p.093) ; 同上
- ①MN.100 ‘Saṅgārava-s.’ (vol. II p.212) ; 同上
- ③中阿含204「羅摩經」 (大正01 p.776中) ; 更往阿羅羅伽羅摩所、問曰。阿羅羅、我欲於汝法行梵行為可爾不……。
- ⑦四分律「受戒捷度」 (大正22 p.780中) ; 時有人名阿藍迦藍、於衆人中為師首、與諸弟子說不用処定。時菩薩至阿藍迦藍所問言。汝今以何等法、……。
- ⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.119中) ; 詣歌羅羅仙所。既至彼已、合掌恭敬相對而坐。……

無想定……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.066, 南伝28 p.142) ; 菩薩は王に承諾を与え、次第に遊行しつつ、アーラーラ・カーラーマ (*Ālāra Kālāma*) [仙] とウッダカ・ラーマपッタ (*Uddaka Rāmaputta*) [仙] とを訪って禪定を得られたが、「これは菩提への道でない」と〔知り〕、……ウルヴェーラー (*Uruvelā*) に赴き……其処を安住の地として大精進に入られた。
- ②修行 (大正03 p.469中) ; 諸道士。一名為阿蘭。二名為迦蘭。学來積年。四禪具足。獲致五通。見光驚怖。此何瑞應。便共出觀。遙見太子是為悉達。今果出家。
- ⑥普曜 (大正03 p.510中) ; 訣迦羅無提所。……獲無用虛空三昧……不至正覺、非是泥洹。……便捨之去。
- ⑦方広 (大正03 p.578下) ; (菩薩) 次第至毘舍離城。城傍有仙名阿羅邏與三百弟子俱。……說無所有処定。……我時思惟仙人所說非能尽苦。
- ⑧LV. (Lef. p.238, 溝口 p.213) ; かの菩薩は旅を続けて大きな都ヴァイシャーリー (*Vaiśāli*) に到着した。ちょうどこの頃、アーラーダ・カーラーパ (*Ārāda Kālāpa*) も (声聞) 達の大きな集団、及び三百人の弟子達を伴って、都ヴァイシャーリーの中に住いを建て、弟子達に法を教えていた。その法は感覚の抑制を伴う清貧に導くものであった。……アーラーダのこの教義は解放するものではなく……。
- ⑪仏讚 (大正04 p.022中) ; 甘蔗月光胄 到彼寂靜林 敬詣於牟尼 大仙阿羅藍 迦藍玄族子 …… 安慰言善來 …… 是無所有処 …… 於阿羅藍説 不能悅其心
- ⑫BC. (12-02) ; カーラーマ (*Kālāma*) 姓のこの聖者は、遠方より彼を見つけるや、直ちに声高く「ようこそ」と呼びかけ、呼びかけられた王子はそのそばに近づいていった。……その結果、「何ものも存在しないのだ」とみるようになりますので、彼は「無一物（者）」と伝えられております。……このように彼はアーラーダ (*Ārāda*) の説く道を（この程度のものかと）さとって満足できなかった。（そして）「（これはなお）不充分、不徹底である」と考えて、彼はそこより去っていったのであった。
- ⑬行經 (大正04 p.074中) ; 如是菩薩 広肩長臂 安徐詳雅 師子応歩 訣阿蘭問
- ⑭過去 (大正03 p.637下) ; 爾時太子、即便前至彼阿羅邏仙人之所。
- ⑮集經 (大正03 p.751下) ; 爾時菩薩、捨其父王大臣……漸漸前行、安庠而向毘舍離城……於其中路、有一仙人、修道之所、名阿羅邏、姓迦藍氏。……爾時菩薩、如是思惟、此之法者、不能令人得至涅槃。……即便背捨羅邏而行。
- ⑯MV. (vol. II p.198, Jones II p.189) ; 菩薩はヴェーサーリー (*Vaiśāli*) に行き、アーラーダ・カーラーマ (*Ārāda Kālāma*) に身を寄せる。しかし彼の道は解脱への道ではないと考え、彼を離れてラージャグリハ (*Rājagrha*) に赴く。
- ⑰衆許 (大正03 p.948中) ; 爾時菩薩即往阿囉擎迦羅摩処而學道法。……有想天三摩地門……菩薩復思、今此行法而未究竟非為正道。即乃捨去。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.029下) ; 爾時太子即便前行、向彼阿羅邏仙人所住之処。(出因果經)
- ③氏譜 (大正50 p.091中) ; 経曰。……王臣即留五人伺察所在、便度恒河路遊王舍、……遂至迦蘭仙所。交論非奪、亦如上說。
- ④統紀 (大正49 p.144下) ; 太子前行至阿羅邏仙人処。聞說從得初禪、乃至入非想非非想処、名為解脱。太子知非究竟、即與仙別。

- ⑤JM. (p.028, 番中 p.105) ; アーラーラ・カーラーマ (*Ālāra-Kālāma*) とウッダカ・ラーマプッタ (*Uddaka-Rāmaputta*) に近づいて、諸々の定を生ぜしめた。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.070, 赤沼 p.094) ; 菩薩は王に別辞を告げて、その旅をつづけ、阿羅羅 (*Alara*) と呼ぶ隠者にめぐりあい、いろいろの禪定のことについて尋ね給うた。阿羅羅は第四禪定までのことについては菩薩を満足し奉るよう語り得たが……。

(1) 無所有処定以外の教えを受けたとするものもある。

【20-02】2仙人を訪問する——ウッダカ・ラーマプッタ仙人を訪問する

菩薩がウッダカ・ラーマプッタ (*Uddaka Rāmaputta*) 仙人を訪問して非想非非想処定を得るが、これに満足しないで去る。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 ‘*Ariyapariyesana-s.*’ (vol. I p.165) ; 出家して善なるもの求め (*kimkusalaagavesin*) 、無上の寂靜の境地を求めて (*anuttaram santivarapadam pariyesamāna*) 、*Uddaka Rāmaputta*の所に行った。
- ①MN.036 ‘*Mahāsaccaka-s.*’ (vol. I p.240) ; 同上
- ①MN.085 ‘*Bodhirājakakumāra-s.*’ (vol. II p.093) ; 同上
- ①MN.100 ‘*Saṅgārava-s.*’ (vol. II p.212) ; 同上
- ③中阿含204「羅摩經」(大正01 p.776下) ; 往詣鬱陀羅羅摩子所、問曰。鬱陀羅、我欲於汝法中學、為可爾不……。
- ④雜阿含604(大正02 p.167上) ; 此處問優藍弗仙人。
- ⑦四分律「受戒捷度」(大正22 p.780中) ; 時有鬱頭藍子、處大衆中而為師首。其師命終後、教師諸弟子、與說有想無想定。時菩薩往鬱頭藍子所問言。汝師以何等法教諸弟子。……
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.119中) ; 菩薩爾時遊行山林、見水獺端正仙子。旧云鬱頭藍者此誤也。即往親近恭敬問訊。
- ⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.299下) ; 往空林所修出家業依止仙人學殊勝定離欲界欲。次從曷羅摩子習無所有定、斷無所有處欲。
- *③中阿含114「優陀羅經」(大正01 p.603上) ; 優陀羅羅摩子、如是見如是說。有者是病是癰是刺。設無想者是愚癡也。若有所覺、是止息是最妙。謂乃至非有想非無想處。彼自樂身自受於身自著身已修習乃至非有想非無想處。身壞命終生非有想非無想天中。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.066, 南伝28 p.142) ; 【20-01】に含む。
- ②修行(大正03 p.469中) ; 【20-01】に含む。
- ⑥普曜(大正03 p.510中) ; 菩薩遙見鬱頭藍弗。……獲有想無想定。……藍弗無信、獨吾有信。藍弗無精進念定意智慧、獨吾有之。思惟是已便捨之去。
- ⑦方広(大正03 p.580上) ; 王舍城辺有一仙人、摩羅之子名烏特迦、與七百弟子俱。常說非想非非想定。……菩薩作是思惟、……非厭離法、……非涅槃法。
- ⑧LV. (Lef. p.243, 溝口 p.219) ; ちょうどこの時期に、ラーマの息子ルドラカという者 (*Rudrako nāma Rāmaputra*) が、ラージャグリハ (*Rājagṛha*) という都の中に隠棲していた。彼は七百人の弟子の集団と共に住んでいた。……その法は……(非想非非想処定)に導くもので

あった。……この道は嫌惡することに導かず、……ニルヴァーナ (nirvāṇa) にも導きません。

(修行中の五比丘、菩薩に従う)

- ⑪仏讚 (大正04 p.024上) ; 応行更求勝 往詣鬱陀仙 …… 離想非想住 更無有出塗 以衆生至彼 必當還退転 菩薩求出故 復捨鬱陀仙
- ⑫BC. (12-84) ; ……つぎにウドラカ (Udraka) 仙の庵に赴いた。でもこの人もまた靈魂 (の存在) に固執していたので、彼はその教えに納得することがなかった。……さらにより以上のものを求めて、ウドラカ (仙) を捨てたのであった。(この後王仙ガヤ [Gaya] のナガリー [Nagari] と名づける庵にその身を委ねた)
- ⑬行經 (大正04 p.075上) ; 於是復詣 迦蘭問法 為說八意 菩薩即了 …… 覚有是瑕 體解其意 是必還法 菩薩是故 捨迦蘭法
- ⑭過去 (大正03 p.638中) ; 次至迦蘭所住之處、論議問答、亦復如是。太子即便前路而去。
- ⑮集經 (大正03 p.757中) ; 爾時於此闇浮提地、復更別有一大導師、名曰羅摩、其命已終。彼徒衆主、即摩長子、名曰優陀羅羅摩子、……說生非想非非想法。近王舍城、一阿蘭若林中而住。……此法非是究竟、……即便背行。
- ⑯MV. (vol. II p.200, Jones II p.191) ; 菩薩はウドラカ・ラーマputra (Udraka Rāmaputra) と共に居る時、彼の道は解脱への道ではないと考えた。そこで彼から去り、ガヤ (Gayā) 山に来た。一ガヤーシールシャ (Gayāśīrṣa) 一ウルヴィルヴァー (Uruvilvā)
- ⑰衆許 (大正03 p.948中) ; 往烏捺囉迦囉摩子処學修法行。……至非非想處三摩地門。……此之法行亦未究竟非真覺路、速須捨彼別求明道……。

[C] 後世の仏伝資料

- ④統紀 (大正49 p.144下) ; 次至迦蘭住處。論議問答。亦復如是。太子調伏二仙人……。
- ⑤JM. (p.28, 番中 p.105) ; 【20-01】に含む。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.071, 赤沼 p.094) ; 第五禪定のことについては余儀なく、菩薩を鬱陀羅仙 (Oudaka) の許に行かしめねばならなんだ。鬱陀羅はこれを充分に説明して聞かせた。菩薩は今やこれらの師匠から何も学ぶべきものがないので……この黙想に身を委ねてみ様と決心し給った。

【21-01】苦行——ウルヴェーラへ

菩薩がウルヴェーラ (Uruvelā) のセナーニ村 (Senānigama) へ行き、苦行に入る⁽¹⁾。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.166) ; 出家して善なるものを求め (kiñkusalagavesin) 、無上の寂靜の境地を求めて (anuttaram santivarapadaṁ pariyesamāna) 、マガダ国を遊行しながら、UruvelāのSenānigamaに入った。
- ①MN.036 ‘Mahāsaccaka-s.’ (vol. I p.240) ; 同上
- ①MN.085 ‘Bodhirājakakumāra-s.’ (vol. II p.093) ; 同上
- ①MN.100 ‘Saṅgārava-s.’ (vol. II p.212) ; 同上
- ① ‘Apadāna’ 03-39-387 (p.301) ; その業の熟するままに、私は数多くの苦痛を舐めて、ウルヴェーラで6年を過ごし、その後に私は悟りに達した (tena kammavipākena acariṇ dukkaram bahūṇ chabbassān' Uruvelāyam tato bodhim apāpuṇīm) 。
- ③中阿含204「羅摩經」 (大正01 p.777上) ; 往象頂山南鬱陀羅梵志村名曰斯那。於彼中地至可愛

樂、山林鬱茂、尼連禪河清流盈岸……。

- ⑥增一阿含16-08（大正02 p.580中）；設吾無此二力（忍力・思惟力）者……終不於優留毘舍六年苦行。亦復不能降伏魔怨成無上正真之道。坐於道場以我有忍力・思惟力故、便能降伏魔衆成無上正真之道。
- ⑥增一阿含31-08（大正02 p.670下）；我昔未成仏道時。爾時依彼大畏山而住……。我六年之中勤苦求道而不剋獲。或臥荊棘之上、或臥板木鐵釘之上、或懸鳥身體遠地兩脚在上而頭首向地、或交腳躰踞……。
- ⑥增一阿含41-11（大正02 p.744上）；當知我昔日未成仏道在優留毘舍六年勤苦。不食美味身體羸瘦如似百年之人。
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.780下）；從摩竭界遊化南至象頭山、詣鬱毘羅大將村中、見一淨地。……見已便生念言。夫為族姓子、欲求斷結處、此是好處。我今求斷結處、此處即是。我今寧可於此處坐而斷結使。時有五人追逐菩薩、念言。若菩薩成道當與我等說法。爾時鬱毘羅有四女、一名婆羅、二名鬱婆羅、三名孫陀羅、四名金婆伽羅、皆繫心菩薩所。若使菩薩出家學道、我等當為弟子。若菩薩不出家學道、在家習俗者、我等為妻妾。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.119下）；我今欲於林間靜住。不可令其多人圍繞而求甘露。然我應留侍者五人、余者放還。是時菩薩、於母宗親中而留兩人、於父宗親中而留三人、而此五人承事菩薩、余者各令還國。爾時菩薩、與此五人圍繞、往伽耶城南、詣烏留頻螺西那耶尼聚落、四邊遊行於尼連禪河辺、見一勝地……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.067, 南伝28 p.142)；菩薩は……大精進に勤もうと思って、優樓頻羅 (Uruvelā) に赴き、……そこを安住の地として大精進に入られた。
- ②修行（大正03 p.469中）；復前到斯那河。
- ④瑞應（大正03 p.476下）；既歷深山、到幽閑處。
- ⑦方廣（大正03 p.580下）；次第巡行至優樓頻螺池側東面、而視見尼連河。
- ⑧LV. (Lef. p.248, 溝口 p.223)；かの菩薩は心ゆくまでガヤー (Gayā) の町に、ガヤーシルシャ (Gayāśīrṣa) 山の上に留まられてから、……ウルヴィルヴァー (Uruvilvā) のセーナーパティ村 (Senāpatigrāmaka) へ向って歩いていき、……ナイランジャナー (Nairāñjanā) という河を見られた。
- ⑪仏讚（大正04 p.024中）；更求勝妙道 進登伽闍山 城名苦行林 五比丘先住
- ⑫BC. (12-90)；……この聖者は、ひたすら孤独を愉しんで、ナイランジャナー (Nairāñjanā 尼連禪河) 河のほとりに……住んだ。
- ⑬行經（大正04 p.075上）；於是便至 尼連禪江
- ⑭過去（大正03 p.638中）；爾時太子、調伏阿羅邏迦蘭二仙人已、即更前進迦闍山苦行林中、是惣陳如等五人所止住處。即於尼連禪河側、靜坐思惟。
- ⑮集經（大正03 p.765上）；如是前行、至伽耶南有一聚落。其聚落、名優婁頻螺、……到一村主長者之家。然其長者、名難提迦(隨言自喜)……。自喜村主有一善女、名須闍多(隨言善生)……。時善生女、……、從菩薩手、而取瓦器入自家中、滿盛香美甘味飲食。……
- ⑯衆許（大正03 p.948下）；菩薩即時將此五人、往詣耶仙人聚落、名烏嚕尾螺西曩野禰。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.007中）；大善權經云。……菩薩往至尼連水辺、閑居寂然。
- ⑤JM. (p.28, 番中 p.105)；そして、「これは菩提への道ではない」と〔解って〕ウルヴェーラー

(Uruvelā) に行き、そこで6年間苦行の大精進に励んだ。

(1) 苦行の年数については、本研究の第1号中の「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」のpp.109~114を参照されたい。

【21-02】苦行——5人の侍者が菩薩と共に苦行に入る

淨飯王が派遣した5人の侍者（もとからウルヴェーラーにいたとするものもある）と共に苦行に入る。

[A] 原始聖典

①根本有部律「破僧事」（大正24 p.119下）；時淨飯王憶念菩薩令使尋訪相望道路、在所山林悉皆知處。既聞太子辭彼水瀨無有侍者獨行山林、即差童子三百人往侍太子。天示城王既聞是事。復差二百童子往侍太子。如是五百童子圍繞菩薩於諸山林隨意遊觀。爾時菩薩便作是念。我今欲於林間靜住。不可令其多人圍繞而求甘露。然我應留侍者五人餘者放還。是時菩薩於母宗親中而留兩人、於父宗親中而留三人而此五人承事菩薩。餘者各令還國。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.067, 南伝28 p.142) ; かの橋陳如（コンダンニヤ Konḍañña）を長とする5人の出家等も、大小の村邑王城などを行乞し廻って、此處で菩薩に巡り合った。〔そして〕この後六年、菩薩が大精進をされる間、彼等は「今に仏となられるであろう……」と思って、室を掃除したり、その他大小の勤をして仕えて、菩薩の従僕となった。
- ④瑞應（大正03 p.476上）；於是阿若拘隣等五人、受命追太子、及於深山、隨侍數年、太子不與語。
- ⑤異出（大正03 p.620上）；五子追求太子、得之於名山、隨而侍之。如是數歲、太子亦不問五人所從來。太子所行者。皆窮林之處。
- ⑥普曜（大正03 p.509中）；菩薩遂進深入名山、五人追之不能及逮。
- ⑦方廣（大正03 p.580中）；爾時菩薩出王舍城、與五跋陀羅……向尼連河次伽耶山。
- ⑧LV. (Lef. p.245, 溝口 p.221) ; ちょうどこの時、良い家柄（出身）の五人の人物が、ラーマの子ルドラカ（Rudraka Rāmaputra）のもとで清淨行を実践していた。……この良い家柄出身の五人はラーマの子ルドラカのもとを離れて、かの菩薩に付き従った。
- ⑪仏讚（大正04 p.024中）；更求勝妙道 進登伽闍山 城名苦行林 五比丘先住 見彼五比丘 善攝諸情根 持戒修苦行 居彼苦行林 尼連禪河 …… 五比丘知彼 精心求解脫 尽心加供養 …… 謙卑而師事 進止常不離
- ⑫BC. (12-91) ; 彼は（そこで）、彼（がくるより）以前から、（そこに住んでいて、自らの）五官制御力のほどを誇りながら、苦行に専念し、誓いの行に身を委ねている五人の比丘に会った。一方、解脱を求めていたこれらの比丘たちは、そこで彼を見るや、彼に近づき侍ったが……。
- ⑯衆許（大正03 p.948下）；【21-01】に含む。

[C] 後世の仏伝資料

- ③氏譜（大正50 p.091中）；太子調伏二仙人已、進伽闍山苦行林。橋陳如五人住處。

【21-03】苦行——6年間の苦行

菩薩は6年の間、断食などの厳しい修行をする。

[A] 原始聖典

- ①MN.012 ‘Mahāsihanāda-s.’ (vol. I p.077) ; 舍利弗よ、私は苦行者 (tapassin) 、最高の苦行者 (paramatapassin) 、貧穢行者 (lūkha) 、最高の貧穢行者 (paramalūkha) 、嫌惡行者 (je-gucchin) 、最高の嫌惡行者 (paramajegucchin) 、独住行者 (pavivitta) 、最高の独住行者 (paramapavivitta) であったことを認める。以下断食等の記述が続く。
- ①MN.036 ‘Mahāsaccaka-s.’ (vol. I p.245) ; 私は断食を修そう。……
- ①MN.085 ‘Bodhirājakakumāra-s.’ (vol. II p.093) ; 同上
- ①MN.100 ‘Saṅgārava-s.’ (vol. II p.212) ; 同上
- ④雜阿含604 (大正02 p.167上) ; 此處菩薩六年苦行。
- ⑥增一阿含31-08 (大正02 p.670下) ; 是時我復作是念、今可食麻米之余。爾時日食一麻一米。形體劣弱、骸骨相連、頂上生瘡、皮肉自墮、猶如敗壞瓠蘆……。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.717上) ; 爾時菩薩於六年中一無所有、修苦行。
- ⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.156下) ; 爾時世尊先六年苦行然後成無上覚。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.067, 南伝28 p.143) ; 菩薩は「極端な苦行をしよう」と思って、唯一粒の胡麻や米を摂って一日を過され、或は全く食を断たれることもあった。
- ②修行 (大正03 p.469下) ; 於是菩薩坐娑羅樹下、便為一切志求無上正真之道。諸天奉甘露、菩薩一不肯受。自誓日食一麻一米、以續精氣、端坐六年。形體羸瘦、皮骨相連、玄精靜冥、寂默一心、內思安般。
- ④瑞應 (大正03 p.476下) ; 天神進食、一不肯受。天令左右、自生麻米。日食一麻一米、以續精氣、端坐六年。形體羸瘦、皮骨相連、玄清靖漠、寂默一心、內思安般。
- ⑥普曜 (大正03 p.511上) ; 於時菩薩作是思惟、六年之中示大勤苦精進之行。日服一麻一米。……爾時菩薩定坐六年、現勤苦行、教授開化十二載天人、立之三乘。以是之故、坐六年耳。
- ⑦方広 (大正03 p.581中) ; 菩薩爾時修如是等最極苦行。……食一米乃至一麻。……菩薩六年苦行之時、於四威儀會不失壞。
- ⑦方広 (大正03 p.582中) ; 爾時菩薩六年苦行。魔王波旬常隨菩薩、伺求其過而不能得。
- ⑧LV. (Lef. p.250, 溝口 p.225) ; ……かの菩薩は、このように熟慮した後に、六年間 (*śad-varṣikam*) にわたる恐るべき苦行の実践を始められた。
- ⑧LV. (Lef. p.260, 溝口 p.236) ; 六年間にわたって悪魔パーピーヤス (Pāpiyas) は、かの菩薩の後ろに……付き随って、機会を求め、……しかし悪魔はどんな機会も見つけることができなかつた。
- ⑨僧伽 (大正04 p.137下) ; 是時語世尊言。汝本六年勤苦學道、日食一麻一米、猶不得道、況今隨心口自恣言得道耶。
- ⑪仏讚 (大正04 p.024中) ; 專心修苦行 節身而忘餐 …… 遂經歷六年 日食一麻米 形體極消羸 …… 苦形如枯木 垂滿於六年
- ⑫BC. (12-94) ; そこで彼は、死と誕生に終止符を打つためにはこれが（然るべき）手だてであろうと考え、食を断つことによって行じがたき苦行をはじめた。……六年間 (*varṣāṇi ṣat*) 、ひたすら心の平安を得ようと欲して、彼は自分の身体をやせ細らしめた。

- ⑬行經（大正04 p.075上）；於是便至 尼連禪江 修治淨行 求禪処坐 …… 日進一麻 半粒
粳米 日日省食 久羸形體 …… 具滿六年
- ⑭過去（大正03 p.638中）；爾時太子、調伏阿羅邏迦蘭二仙人已、即使前進迦闍山苦行林中。是橋
陳如等五人所止住処。……宜應六年苦行、而以度之。……日食一麻一米。
- ⑮集經（大正03 p.765中）；爾時菩薩、從善生女、乞得食已、……漸到一処。……見此地已。如是
思惟。……令諸衆生求解脫者、悉行種種衆雜苦行。
- ⑯集經（大正03 p.771中）；爾時菩薩六年既滿、至春二月十六日時。
- ⑰MV. (vol. II p.204, Jones II p.194)；全行為を停止して (karmakṣaye) 森の中で六年間の
苦行生活 (śadvarṣā duṣkaram) を送った時、この選ばれた人は、彼のたどっている道は解脫へ
の道ではないと考えるようになった。
- ⑱衆許（大正03 p.948下）；菩薩即時將此五人、往識耶仙人聚落、名烏嚕尾螺西囊野禰。……尼連
河次見一林野地土……即於樹下結跏趺坐、學修禪觀、閉口齧齒舌拄上齶。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.007中）；思惟六年示大勤苦、日服一麻一米。（出普曜經）
- ②釈迦（大正50 p.030中）；宜應六年苦行而以度之。（出因果經）
- ③歴代（大正49 p.024）；壬戌十八仏本行集經云。菩薩六年苦行既滿至春二月十六日。
- ④氏譜（大正50 p.091中）；尼連河側、靜慮六年度苦行者。天獻麻米淨心守戒、日食一麻米、或七
日食一麻米。
- ⑤統紀（大正49 p.144下）；伽闍山苦行林中橋陳如等五人住処、於泥連禪河側、靜坐思惟。宜應六
年苦行以度衆生……天神進食一不肯受。……日食一麻一米以續精氣、端座六年、形體羸瘦。
- ⑥JM. (p.028, 畑中 p.105)；そして、「これは菩提への道ではない」と解って、ウルヴェーラー
(Uruvelā) に行き、そこで6年間苦行 (chabbassāni dukkarakārikam) の大精勤に励んだ。
- ⑦Bigandet. (vol. I p.071, 赤沼 p.094)；この目的を成しとげるために、菩薩は優留毘羅林
(Ourouwela) の閑寂の場所に赴き、最深の默想に入りて夜と日とを費やし給うた。……かれこ
れしている中に思惟默想の六年は終ろうとした。

【22-01】苦行を捨てる——苦行が悟りに役立たないと知る

菩薩は若き日の樹下の禪定を想起して、苦行が成道に役立たないことを知り、食事を摂る決心
をする。

[A] 原始聖典

- ①MN.012 ‘Mahāsihanāda-s.’ (vol. I p.081)；私は苦行したけれども、最上知見 (alamariya-
ñāṇadassana) に達することができなかった。
- ②MN.036 ‘Mahāsaccaka-s.’ (vol. I p.247)；極度に痩せてしまった身体では悟りに到達する
のは容易ではない (na kho tam sukaram sukham adhigantum evam adhimattakasimānam pat-
takāyena)。粥のような食物を取ろう (yan nūnāham olārikam āhāram āhāreyyam odanakum-
māsam)。
- ③MN.085 ‘Bodhirājakakumāra-s.’ (vol. II p.093)；同上
- ④MN.100 ‘Saṅgārava-s.’ (vol. II p.212)；同上
- ⑤增一阿含31-08（大正02 p.671下）；爾時我復作是念。不可以此羸劣之體、求於上尊之道。多少
食精微之氣、長育身體氣力熾盛、然後得修行道。當食精微之氣。

- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.781上）；然我不由此自苦身得樂法。我今寧可食少飯麩得充氣力耶。爾時菩薩、於異時食少飯麩、得充氣力。
- ⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.911上）；是時菩薩住阿蘭若於六年中修苦行已、知是無益徒為勞倦。
- ⑫根本有部律「出家事」（大正23 p.1026下）；六年苦行、都無所獲。隨意喘息、便浪美味乳酪等食。酥油塗身、以香湯浴。便即往詣軍營聚落。
- ⑬根本有部律「破僧事」（大正24 p.121中）；我所受苦無人超過、此非正道非正智非正見、非能至於無上等覺。……我今不能善修成就。何以故。為我羸弱然。我應為隨意喘息、廣喫諸食飯豆酥等、以油摩體溫湯澡浴。是時菩薩作是念已、便開諸根隨情喘息、飲食諸味而不禁制、塗拭沐浴縱意而為。
- ⑭根本有部律「雜事」（大正24 p.299下）；更無尊者便於六年專修苦行、不別證悟將為無益。
- *①SN.04-01 (vol. I p.103)；私は苦行を離れた (Mutto vatamhi tāya dukkarakārikāya)。利益をもたらさない苦行を離れたのは実によかった (sādhu mutto vatamhi tāya anattha-samhitāya dukkara-kārikāya)。
- *④雜阿含1094 (大正02 p.287下)；我今解脫苦行。善哉、我今善解脫苦行。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.067, 南伝28 p.144)；大士が六年の苦行 (chabbassāni dukkarakāriyam) をなされたことは恰も空中に結目を作らんとするのと同じであった。菩薩は「この苦行は菩提への道ではない」〔ことを知って、〕滋養分のある食物を摂るために、大小の村邑を行乞して食を得られた。
- ⑦方広（大正03 p.583上）；復作是念。我今行此最極之苦、而不能證出世勝智、即知苦行非菩提因。（昔父王の園中の「若き日の禪定」を想起）……我今將此羸瘦之身不堪受道、……是故我今應受美食令身有力。
- ⑧LV. (Lef. p.263, 溝口 p.238)；これ（苦行）は智慧の道ではない。これは未来において、生・老・病・死を生み出すことを消失させるに至るための道ではあり得ない。（若き日の禪定を想起）……完全な智慧を身につけることに導くこの道は、肉体を疲労困憊させることによって獲得できるものではない。……充分な食べ物を摂って、私の体に力を回復させた後に、私は「悟りの場」に近づくことができるであろう。
- ⑪仏讚（大正04 p.024中）；自惟非由此 離欲寂觀生（若き日の禪定を想起）……道非羸身得……飲食充諸根 根悅令心安……如是等妙法 悉由飲食生
- ⑫BC. (12-101・102)；「この（苦行によって）善業・功德を積まんとする道は、離欲、さとり、解脱に導くものではない。（かつて）私があのときジャンブの樹の下で到達したやり方が、（もっと）確実なものである。ところで、この仕方は（体）力が弱くては到達できない」と（自身を）顧みて、体力増強のためにさらにつぎのように考えた。
- ⑯過去（大正03 p.639上）；修於苦行、垂滿六年、不得解脫、故知非道。（若き日の禪定）……我當受食然後成道。
- ⑰集經（大正03 p.770上）；（若き日の禪定を想起）菩薩更復如是思惟。我欲成就知見樂者、應得生樂。但我羸瘦無有氣力、……我今可為身求力故、而食麩食。
- ⑲衆許（大正03 p.949中）；今此所作亦非正行、於無上道而不相應。（若き日の禪定）……即取飲饌并湯藥等、節次服食、……澡浴眠寢安適身心增長勢力。

[C] 後世の仏伝資料

- ③氏譜（大正50 p.091中）；経云。菩薩自念、我今苦行形如枯木、將滿六年不得解脱。憶昔禪定是最真正。為滅外邪自餓非道、我當受食然後成仏。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.075, 赤沼 p.100) ; 菩薩は以上の経験に依って、断食と苦行とが、仏陀の証を開くためには価値のないものであることをさとり、鉢を取って食を乞わんが為に隣の村に赴き給うた。

【22-02】苦行を捨てる——5人の侍者が菩薩を見捨てる

菩薩が苦行を捨てたので、共に苦行していた5人の侍者が菩薩を見捨てて去る(1)。

[A] 原始聖典

- ①MN.036 ‘Mahāsaccaka-s.’ (vol. I p.247) ; 粥を取ったとき、5人の比丘たちたちは私を厭い、離れていった (atha me te pañca bhikkhū nibbjijāpakkamimsu) 。
- ①MN.085 ‘Bodhirājakakumāra-s.’ (vol. II p.093) ; 同上
- ①MN.100 ‘Saṅgārava-s.’ (vol. II p.212) ; 同上
- ⑥增一阿含31-08（大正02 p.671下）；時五比丘捨我還退、此沙門瞿曇性行錯亂以捨真法而就邪業。当我爾時即從坐起、東向經行。
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.781上）；時菩薩食少食時、五人各各厭捨而去。自相謂言、此瞿曇沙門狂惑失道、豈有真実道耶。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.121下）；于時其五侍者互相謂曰。此沙門喬答摩、懈怠懶墮而懷多事、受用無度斷惑錯亂、今既廣喫食飲豆酥油塗拭澡浴。今不能少許證獲、必無所得。便捨菩薩漸次而行。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.067, 南伝28 p.144) ; 五群比丘たちは、「この六年 (Chabbassāni) の苦行をしても一切智は獲られなかった〔のに〕、今村里に行乞して滋養分のある食物を得る〔ような〕人が、如何して〔一切智を成就することが〕出来よう。彼は豪奢で精進を放棄して了ったのだ。……」といって大士を見棄て、……、イシパタナ (Isipatana) に入った。
- ④瑞應（大正03 p.476上）；五人苦之言。此狂人耳、何道之有、行不択路、奚可隨也。設委還者、王滅吾家、不如止此。五人所止、有好泉水、甘果不乏。
- ⑤異出（大正03 p.620上）；五人患而告之、自相謂言。是王太子、不行學道、病狂癡耳、行不択道、我五人不能隨。還者王滅吾家、不如於此而止。
- ⑦方広（大正03 p.583上）；時五跋陀羅既聞菩薩欲受美食咸作是念。沙門瞿曇如是苦行尚不能得出世勝智、況復今者欲食美食受樂而住。……便捨菩薩詣波羅奈仙人墮處鹿野苑中。
- ⑧LV. (Lef. p.264, 溝口 p.239) ; よい家柄出身の五人の者は心の中で思った。この行為によつても、また彼が獲得したことによっても、かの修行者ガウタマ (Gautama) が人間の法を越えた尊敬するべき知の見方〔見解〕の識別を明らかに示すに至るということは不可能であろう。それどころか、今日、彼は充分な食べ物を摂ると言う。……彼らはかの菩薩のいる所から去って、ヴァーラーナシー (Vārāṇasi) に赴き、リシパタナ (Rśipatana) においてムリガダーヴァ (鹿野苑 Mṛgadāva) の森の中に居住した。
- ⑪仏讚（大正04 p.024下）；五比丘見已 驚起嫌怪想 謂其道心退 捨而択善居
- ⑫BC. (12-114) ; ……五人の比丘たちは、「彼は還俗してしまった」と考えて、思慮深き彼を捨ててしまった。

- ⑬行經（大正04 p.075中）；菩薩便起 増進飲食 長育其身 侍使五人 見菩薩食 捨棄避去
⑭過去（大正03 p.639中）；爾時五人、既見此事、驚而怪之。謂為退転。各還所住。
⑮集經（大正03 p.771上）；爾時菩薩、食麤食時、彼五仙人、共相謂言。悉達太子、今已失禪。…
…彼等如是平量訖已、……捨離菩薩、而別他行。漸至向於波羅奈國、入鹿野園、而修禪定。
⑯衆許（大正03 p.949中）；時彼五人而相謂曰。……於今恣情飲食、香油塗體澡身安寢、如是虧喪
云何出離。……聞波羅奈国有鹿野苑、羅漢聖衆恒住其中、宜往彼處各求明道。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.031上）；爾時五人既見此事。（出因果經）
②氏譜（大正50 p.091下）；五人見驚謂為退転、各還所止。
④統紀（大正49 p.145中）；二人（橋陳如、十力迦葉）執五欲樂。見太子初食麻麥、心不忍可即便
捨去。……三人（頗闍、跋提、摩訶男俱利）執苦行淨。太子後知非道、捨而受食羹飯酥乳。三人
謂其狂亂失志、亦復捨去。
⑥Bigandet. (vol. I p.075, 赤沼 p.101)；然し今まで菩薩と共に林に住うて菩薩のために御給
事を申し上げていた五人の比丘は語り合うには、「沙門喬答摩は六年の間苦行をして仏果を求め
たがそれはすべて無益となつた。……彼は食物の探索に出掛けた。……」ここに於て彼等は……
菩薩を捨てて十八由旬を行きて、ベナレス（Baranathee）に近き鹿野苑（Migadawon）に入った
のである。

(1) 菩薩の厳しい修行についていけないとして去ったとするものもある。[B] の④⑤である。

【23-01】成道——村の乙女の供養

成道しようとする菩薩に村の乙女（スジャーター [Sujātā] あるいはナンダバラ [Nanda-balā] など）が特別に精製した乳糜を供養する⁽¹⁾。

[A] 原始聖典

- ①‘Buddhavamsa’ 02–62 (p.013)；如來はアジャパーラニグローダ樹の下に坐って、そこで乳
糜を受け取り (pāyāsam-aggayha)、ネーランジャラー河に行くであろう (Nerañjaram upehiti)。
勝者はネーランジャラー河の岸辺で乳糜をすすり、菩提樹の下に近づき、菩提道場 (bodhimanda)
を右違して、アッサッタ樹の下で覚るであろう。
④雜阿含604（大正02 p.167上）；此處二女奉菩薩乳糜。
⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；修苦行已後便隨意欲受上妙飲食。即以
飯食及諸蘇油遍塗身體、以暖湯水而為沐浴。遂便往詣勝軍聚落二牧牛女所。一名歡喜、二名喜力。
受十六倍乳糜飽足食已。
⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.911上）；於歡喜歡喜力二牧牛女處、食十六倍乳
糜。
⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.948中）；爾時菩薩於六年中一無所有、修
苦行已後便隨意欲受上妙飲食。即以飯食及諸蘇油遍塗身體、以暖湯水而為沐浴、遂便往詣勝軍聚
落二牧牛女所、一名歡喜、二名歡喜力。受十六倍乳糜飽足食已。
⑪根本有部律「出家事」（大正23 p.1026下）；便即往詣軍營聚落、受歡喜歡喜力二牧牛女十六倍
乳糜、菩薩食已。
⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.121下）；菩薩爾時、漸加飲食身力強健。即往西那延村(唐言

会軍村也)彼有村主、名為軍將。將有二女、一名歡喜、二名歡喜力……。時二女人、即持其乳粥往尼連禪河、將施菩薩。

⑩根本有部律「雜事」(大正24 p.299下) ; 遂即住情而為遊縱、畋好飲食酥油塗身、湯水澡浴往聚落中、於難陀難陀力二牧牛女所、食十六倍上妙乳糜。

⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.395中) ; 菩薩觀知老病死已、情生憂惱依託林野修諸苦行後食二牧牛女十六転乳糜、氣力宣通食諸飲食、沐浴形體塗拭蘇油。

[B] 仏伝經典

①NK. (vol. I p.068, 南伝28 p.144) ; 優樓頻螺(Uruvelā ウルヴェーラー)のセナーニー(Senānī)村に、セナーニー長者の家に生まれたスジャーター(Sujātā)という年頃の娘があつて、……大士が苦行をして満六年に(chatthe vasse paripūṇṇe)達せられた時、彼女は毘舍併月の満月の日に(Visākha-pūṇṇamāya)捧げ物をしようと思って、……金の鉢と一緒に乳粥を大士の手の上に載せると……。

②修行(大正03 p.469下) ; 便感斯那二女、使於夢中見天下尽成為水、中有一花七宝光色。……天帝……為女解夢言。汝見天下水中生一花者、是白淨王太子初生時、今在樹下六年、身羸形瘦、是花萎時、見一人水灑更生者、是能獻食者。

④瑞應(大正03 p.479上) ; 復有長者女。……女令婢戴百味之糜置頭上、前長跪上食并金鉢。

⑥普曜(大正03 p.511下) ; 菩薩修勤苦行竟六年已。……時有丘聚名曰修舍慢加。有長者女。……即取乳糜盛滿金鉢。

⑦方広(大正03 p.583上) ; 菩薩苦行已來優婁頻螺聚落主、名曰斯那鉢底。有十童女、……其最小者。名曰善生……時善生女即以金鉢盛滿乳糜持以奉獻……。

⑧LV. (Lef. p.265, 溝口 p.239) ; かの菩薩が苦行の実践を始められた最初の月から、この村の村長の十人の若い娘達は、かの菩薩を見に来て、挨拶し、奉仕した。……村長の若い十人の若い娘の名はバラ(Balā)、バラグプター(Balaguptā)、スプリヤー(Supriyā)、ヴィジャヤセナー(Vijayasenā)、アティムクタカマラー(Atimuktakamalā)、スンダリー(Sundarī)、クンバカーリー(Kumbhakārī)、ウルヴィッリカ(Uluvillikā)、ジャティリカ(Jatīlikā)、及びスジャーター(Sujātā)である。……ウルヴィルヴァーのセナーパティ村の(uruvilvāse-nāpatigrāmake)ナンディカ(Nandika)村長の娘スジャーターは蜂蜜入りの乳粥を黄金の鉢に満たして菩薩に捧げた。

⑪仏讚(大正04 p.024下) ; 有一牧牛長 長女名難陀 清居天來告 菩薩在林中 汝應往供養 難陀婆羅闍 歡喜到其所 …… 敬奉香乳糜

⑫BC. (12-109) ; ……牛飼いの長の娘ナンダバラ(Nandabala)は神々に唆されて……その場にやってきた。……彼女は信心に歡喜いや増して、……頭を垂れてその足下にひれ伏し、彼に牛乳をさしげ、それを摂らせてだったのであった。

⑬行經(大正04 p.075中) ; 至他閑廈 於是便受 喜悅喜力 二女乳糜 甘露之施

⑭過去(大正03 p.639中) ; 時彼林外、有一牧牛女人、名難陀波羅。時淨居天、來下勸言、太子今者在於林中、汝可供養。女人……即取乳糜、至太子所、頭面禮足、而以奉上。

⑮集經(大正03 p.770中) ; 爾時軍將斯那耶那婆羅門家、有於二女、一名難陀(隋言喜)、二名婆羅(隋言力)。……爾時軍將二女、聞父如是勅已、將於家常所有之食及油酥等、至於菩薩苦行之處、……奉上菩薩。

⑯集經(大正03 p.771下) ; (苦行後)唯願尊者、受我此鉢和蜜乳糜。

⑰MV. (vol. II p.205, Jones II p.195) ; 徐々に体力を回復し、彼の欲する食物を求めてウルヴィルヴァー(Uruvilvā)へ向われた。その時、前世において彼(菩薩)の母親であったスジャーター

(Sujātā) が乳粥を持って、ニヤグローダ (Nyagrodha) 樹の根元に立った。

- ⑦衆許 (大正03 p.949中) ; 其聚落内有二童女、一名難那、二名難那末羅。……以鉢盛粥虔心上獻。
菩薩默然而受其供食已、擲鉢入尼連河。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.007下) ; 時有長者女、……即取乳糜盛満金鉢。 (出普曜經)
③氏譜 (大正50 p.091中) ; 有牧牛女、淨居天勸令施乳糜、……呪願受食。
④統紀 (大正49 p.145中) ; 時彼林外有一牧牛女、名難陀婆羅。有淨居天、來下勸言、汝可供養。
女人聞……上有乳糜即取奉上。
⑤JM. (p.028, 番中 p.105) ; ヴェーサーの月の満月の日に (Visākhapuṇṇamāya) スジャーター (Sujātā) によって与えられた蜜粥を食べ……。
⑥Bigandet. (vol. I p.077, 赤沼 p.103) ; その時、優留毘羅聚落には斯那 (Thena) と名くる富者が住っていたが、彼に修闇多 (Thoodzata) という娘があった。……「酥油を盛った金の鉢を献り……。」

(1) 村の乙女の供養は5人の侍者が立ち去る前とするものもある。 [A] の⑪、[B] の⑪⑫⑭⑮である。

【23-02】成道——ネーランジャラー河で沐浴する

菩薩がネーランジャラー (Nerañjarā) 河に入り、沐浴した後で、村の乙女から供養されていた食事を食す。

[A] 原始聖典

- ⑦四分律「受戒捷度」 (大正22 p.781上) ; 時菩薩氣力已充、復詣尼連禪水側、入水洗浴身已出水上岸、往菩提樹下。
⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.717上) ; 修苦行已後便隨意欲受上妙飲食即以飯食及諸蘇油遍塗身體、以暖湯水而為沐浴。
⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.122上) ; 時二女人、即持其乳粥往尼連禪河、將施菩薩。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.070, 南伝28 p.148) ; そこで菩薩は、自分の坐って居る処から立ち上がり、…尼連禪河 (ネーランジャラー Nerañjarā) 河の岸に行き、……スッパティッティタ (Suppatiṭṭhitā) という水浴場……下りて行って水浴をなし、……衣服……を着けて……東の方を向いて坐し、……乳粥を残さず召し上った。
②修行 (大正03 p.470上) ; 菩薩意念、欲先沐浴然後受糜。行詣流水側、洗浴身形、浴訖欲出水、天神按樹枝。
④瑞應 (大正03 p.479上) ; 仏初得道、自知食少身體虛輕。徐起入水洗浴、畢欲上岸。天按樹枝、得攀而出、旋往樹下。
⑥普曜 (大正03 p.512上) ; 菩薩知之、即以神通慧力、還江水辺、忽然而度。隨其習俗示現、入水而自洗浴。時八萬天子各按樹枝供養菩薩、菩薩牽枝出在岸邊。
⑦方広 (大正03 p.583下) ; 爾時菩薩擎彼乳糜、出優婁頻螺聚落、往尼連河置鉢岸上、剃除鬚髮入河而浴。

- ⑧LV. (Lef. p.269, 溝口 p.242) ; そこで、かの菩薩は施し物の入ったこの鉢をもって、ウルヴィルヴァー (Uruvilvā) から出て、午前中にナーガ (龍) の河であるナイランジャナー (Nairāñjanā) 河の辺に達し、施し物の入った鉢と衣とを傍らに置いて、手足をさっぱりさせるために流れの中に入れられた。
- ⑪仏讚 (大正04 p.024下) ; 思惟斯義已 澡浴尼連濱 浴已欲出池 瘦劣莫能起 天神按樹枝 挙手攀而出
- ⑫BC. (12-108) ; (川で) 沐浴をなしたのち、……枝々の先を垂らしている河畔の木々に手を差し伸べられて、この瘦躯を持する彼はナイランジャナー (Nairāñjanā) 河のほとりより静かに立ち上がり、河を越えていった。
- ⑭過去 (大正03 p.639中) ; 即從坐起、至尼連禪河、入水洗浴。洗浴既畢、身體羸瘠、不能自出。天神來下、為按樹枝、得攀出池。
- ⑮集經 (大正03 p.772上) ; 從於優婁頻蠡聚落正念而出、安庠漸至尼連河岸、……脫衣入彼河中、澡浴除身熱氣。……六年精勤苦行、身力劣弱、不能得濟彼河之岸。……菩薩、執樹神手、(一大樹名頗誰那(隋言今者)、彼樹之神、名柯俱婆(隋言小峰)。) 得渡彼河。
- ⑯MV. (vol. II p.263, Jones II p.248) ; その時、夜明けに向うころ菩薩はナイランジャナー (Nairamjanā) 河に入られた。河の中で手足を冷やし、菩提樹に向けて出発された。
- ⑰衆許 (大正03 p.949中) ; 爾時菩薩浴尼連河水、體羸力弱拳步攸艱、岸樹垂枝攀而得出。即往西囊野爾聚落之所。

[C] 後世の仏伝資料

- ③氏譜 (大正50 p.091中) ; 即從坐起、入河洗浴。身体羸瘦天為按樹、得攀出池。
- ④統紀 (大正49 p.145上) ; 四年癸未……即至泥連禪河、洗浴身體。
- ⑤JM. (p.028, 番中 p.105) ; ヴィサーカ一月の満月の日に (Visākha-puṇyamāya) 、……ネーランジャラー (Nerañjarā) の岸辺にあるサーラ (Sāla) 樹林において昼夜をして、……。(沐浴したとの記述なし)
- ⑥Bigandet. (vol. I p.082, 赤沼 p.110) ; 菩薩は立ち上り、自ら金鉢を取り、尼連禪河 (Neritza) の辺に赴き給うた。その場所は嘗て十萬の過去の諸仏がその成道前に沐浴し給うた場所であつて、この河の岸に沐浴場があった。

【23-03】成道——前正覚山に上る

菩薩が石山上って成道しようとするが、そこが金剛座ではなかったので碎ける。

[A] 原始聖典

- ⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.122中) ; 菩薩因食乳粥、氣力充盛六根満実、於尼連禪河岸遊行觀察、覓清淨處將欲安止、見孤石山有雜華菓莊嚴周匝。菩薩見已即登此山、平整石上結跏趺坐。爾時此山忽自裂碎……。今之此地、非是菩薩成菩提處。……所以此山自然摧碎。今過尼連禪河東有金剛地。彼處過現未來諸如來等皆於其上得最勝智。

[B] 仏伝經典

- ⑰衆許 (大正03 p.949下) ; 菩薩拳身登一石山、峭峻孤拔林樹甚衆。於此安坐未逾時刻、山即摧毀。菩薩驚怪茲何業緣。時淨光天子白菩薩曰、萬行今圓四智將就、此地薄祐而不能勝、去此不遠有金剛座、三世如來成正覺處。

[C] 後世の仏伝資料

【23-04】成道——龍王カーリカの讚歎

菩薩が悟りを開くことを知った盲目の龍王カーラ (Kāla) (あるいはカーリカ [Kālika]) が河底から出てきて、菩薩を讃歎する。

[A] 原始聖典

- ④雜阿含604（大正02 p.167上）；此迦梨波讚歎菩薩。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；復詣善行男子所取吉祥草。時黒龍王讃歎菩薩。向菩提樹……。
- ⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.911上）；龍王讃歎於負芻人吉祥之迦受柔軟草。即便往詣菩提樹下。
- ⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.948中）；復詣善行男子所取吉祥草。時黒龍王讃歎。菩薩向菩提樹下。
- ⑪根本有部律「出家事」（大正23 p.1026下）；便即往詣軍營聚落、受歎喜歡喜力二牧牛女十六倍乳糜、菩薩食已。時有黑色龍王、讚言善哉。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.122下）；尼連禪河龍、名伽陵伽、以先業緣住此河中。兩目皆盲。若仏出世眼即得明、若仏滅後其眼還盲。聞地震聲疑仏出世、從宮出看。忽見菩薩具三十二相八十種好圓光一尋、如千日輝、如大寶山周遍嚴飾。
- ⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.299下）；於難陀難陀力二牧牛女所食十六倍上妙乳糜。迦利迦龍王尊重讃歎。於善吉迦取吉祥草。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.070, 南伝28 p.149)；（乳粥を喫したて金の鉢を河に投げる）鉢は……逆流して上って……沈んで迦羅龍王 (Kālanāgarājan) の宮殿に至り、……音を立てて……止った。迦羅龍王はその音を聞いて、「……今日亦一人〔の仏〕が出で給う」と……数百句〔の詩〕を以て讃意を述べた。
- ②修行（大正03 p.470上）；當過瞽龍池時、龍大歡喜、出見菩薩。便說偈言……。
- ④瑞應（大正03 p.479上）；……今皆在文隣龍所、仏即擲鉢水中。龍王歡喜、知復有仏。仏定意七日、不動不搖。
- ⑥普曜（大正03 p.514中）；菩薩身光照迦林龍王宮。……爾時龍王見斯光明、目即得開、與眷屬前而讃歎曰。
- ⑦方広（大正03 p.586中）；此光又照迦利龍王宮。時彼龍王遇斯光明、於龍衆中而說偈言……。
- ⑧LV. (Lef. p.281, 溝口 p.253)；ナーガの王であるカーリカ (Kālika-Nāgarājan) の住いが、かの菩薩の体から発する光によって照らされた。……これを見て、龍の王であるカーリカは従者達がいる所で次の詩句を唱えた。
- ⑪仏讚（大正04 p.024下）；步步地震動 地動感盲龍 歓喜目開明 言…… 牟尼德尊長 大地所不勝
- ⑫BC. (12-116)；そのとき、……蛇の長 (bhujagottama) カーラ (Kāla) は、この（近づいてくる）偉大なる聖者の比類なき足音に眼を醒まされ、彼がさとりに決意を固めたのを知って、つぎのように彼に賛辞を呈した。「……あなたは、かならずや今日覚者となられるであります」

- ⑬行經（大正04 p.075中）；於是大鱉 衆龍之王 聞足触地 震動好声 …… 世之將導 衆師之師 其足触地 震動如是
- ⑭過去（大正03 p.639中）；爾時盲龍、聞地動響心大歡喜、兩目開明。……從地踊出、禮菩薩足。
- ⑮集經（大正03 p.772上）；爾時彼河尼連禪主、有一龍女、名尼連茶耶(隋言不寡)。……筌提、奉獻菩薩。
- ⑯集經（大正03 p.774上）；爾時彼地、有一龍王、名曰迦茶(隋言黑色)……。見大地動、……知此菩薩大士、當得證於阿耨多羅三藐三菩提。
- ⑰集經（大正03 p.800上）；爾時迦羅龍王(隋言黑色)、詣於佛所。……（成道後）佛受三自歸依、歸依佛歸依法歸依僧。復受五戒、於世間中、最初而得優婆塞名。
- ⑱MV. (vol. II p.265, Jones II p.249)；竜王 (*nāgarājan*) カーラ (*Kāla*) は、菩薩が畏れなく堂々として進まれるのを見て言った。「自分の道を進まれよ、救済者よ。今日中に無上の完全な悟りに目覚められるであろう」
- ⑲衆許（大正03 p.950上）；至一大窟内有黒龍。昔無兩目、聞地振海潮、……双眼頓明。……龍大歡喜瞻視恋仰、而說偈言。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.031上）；爾時盲龍聞地動響、心大歡喜……。
- ③氏譜（大正50 p.091下）；盲龍得眼見瑞讚頌。
- ⑤JM. (p.028, 畑中 p.105)；黄金の容器を取ってネーランジャラー (*Nerañjarā*) 河の流れに逆らって投げて、眠っているカーラ (*Kāla*) 竜王を起こし……。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.083, 赤沼 p.111)；菩薩は直にその金鉢を水上に投げ入れ給うたが、……黄金の鉢は……竜宮城に下って行いた。……この異常の物音を聞いて、龍王 (*Nagas*) はその長い眠りより醒め、……一百句よりも多い讃歌を我が仏陀に奉ったのである。

【23-05】成道——草刈り人のクサ草献上

菩薩が菩提樹下に向う途中で草刈り人に遇い、クサ草 (kusa、吉祥草) を貰ってこれを敷き、禪定に入る。

[A] 原始聖典

- ③中阿含204「羅摩經」（大正01 p.777上）；即便持草往詣覺樹、到已布下敷尼師檀結跏趺坐。
- ⑥增一阿含31-08（大正02 p.671下）；是時去我不遠有吉祥梵志在側刈草。即往至彼、問。汝是何人、為名何等、為有姓耶。梵志報曰。我名吉祥、其姓弗星。……爾時吉祥躬自執草詣樹王所。
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.781上）；時去樹不遠、有一人刈草、名曰吉安。菩薩前至此人所語言。我今須草見惠少多。吉安報曰、甚善不為愛惜。即授草與菩薩。菩薩持草、更詣一吉祥樹下、自敷而坐。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.102下）；菩薩便向菩提樹。去樹不遠見一人刈草。名曰吉安從乞少草、持至樹下敷已結跏趺坐。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；復詣善行男子所取吉祥草。時黑龍王讚歎菩薩。向菩提樹下手自布草不令聊亂。跏趺而坐。
- ⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.911上）；龍王讚歎於負芻人吉祥之処受柔軟草。即便往詣菩提樹下。
- ⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.948中）；詣善行男子所、取吉祥草。

- ⑪根本有部律「出家事」（大正23 p.1026下）；復有一人、名曰常住。授與菩薩吉祥草已、即詣菩提樹下自敷斯草。其草不亂、便即右旋。於此草上結跏趺坐、端身正念、便即發要期之心我若諸漏不尽。
- ⑫根本有部律「破僧事」（大正24 p.122下）；爾時菩薩聞伽陵伽龍王讚已、詣金剛地作是念云。我應須草。于時帝釈知菩薩心、即往香山、取彼柔軟吉祥妙草、即自變身作傭力者、持吉祥草至菩薩前。菩薩見已即從乞之。帝釈前跪奉施菩薩。既得草已。即詣菩提樹下欲敷草坐、草自右旋。
- ⑬根本有部律「雜事」（大正24 p.299下）；迦利迦龍王尊重讚歎。於善吉辺取吉祥草、詣菩提樹下自敷草已、端身正念加趺而坐。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.070, 南伝28 p.150)；この時、ソッティヤ (Sotthiya 吉祥) という草刈男が草 (tīṇa) を持つて向うの方からやって来て、大士の様子を見てそれと知って、八攫みの草を献じた。
- ②修行（大正03 p.470上）；見一刈草人、菩薩便問曰。今汝名何等、我名為吉祥、今刈吉祥草。今汝施我草、十方皆吉祥。
- ③瑞應（大正03 p.476下）；菩薩即拾藁草、以用布地。
- ④異出（大正03 p.620上）；太子遂入深山無人之處、取地高草、於樹下正坐。
- ⑤普曜（大正03 p.514下）；於時菩薩見路右邊、有一人名曰吉祥、刈生青草柔軟滑沢。……時菩薩見、即便越道詣吉祥所、……吾欲得草吉祥與我、今日欲得。
- ⑥方広（大正03 p.587上）；時釈提桓因即變其身、為刈草人……持草而立。……我名吉祥。
- ⑦LV. (Lef. p.286, 溝口 p.257)；かの菩薩は道の右側に牛飼いのスヴァースティカ (Svastika) を認められた。この男は緑の芝草、柔らかくて新しく、気持ちの良い芝草を刈っていた。
- ⑧仏讚（大正04 p.025上）；從彼穫草人 得淨柔軟草 布施於樹下 正身而安坐
- ⑨BC. (12-119)；蛇の長によって（このように）たたえられてから、彼は草穫人より清浄な草を受けとり、さとりに向って誓いを新たにし、清浄な大樹の根元によって（その草を敷き、その上に）坐した。
- ⑩行經（大正04 p.075下）；吉祥持草 奉迎而進 …… 受柔軟草 散金剛座 草皆齊整 結跏趺坐
- ⑪過去（大正03 p.639下）；釈提桓因、化為凡人。執淨軟草、……名吉祥。……於是吉祥、即便授草、以與菩薩。
- ⑫集經（大正03 p.773上）；是時忉利帝釈天王、……即化其身、為刈草人。……我名吉利。
- ⑬MV. (vol. II p.264, JonesII p.249)；ナイランジャナー (Nairamjanā) 河と菩提樹との間の途中で、菩薩は吉祥草刈人 (Svastika Yāvasika) が藁の束を持っているのを見た。菩薩は彼に近づき藁を求めた。彼は菩薩に藁を差し上げた。
- ⑭衆許（大正03 p.950上）；……菩薩思念、以吉祥草鋪金剛座。天主帝釈即時化身、往香醉山取吉祥草。其草柔軟如兜羅綿、詣菩提樹前陳金剛座上。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.007下）；路右一人名曰吉祥。又生青草柔滑不亂。（出普曜經）
- ②釈迦（大正50 p.031中）；釈提桓因化為凡人。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.091下）；同過去佛以草為座。帝釈化人執淨軟草。受已敷坐。
- ④統紀（大正49 p.145中）；釈提桓因化為凡人、執淨軟草至菩薩前。……名吉祥。……乃敷以為座結跏趺坐。

- ⑤JM. (p.028, 畑中 p.105) ; 夕暮れ時、菩提樹に向かって出発した。そして、彼が入るときに草刈り人ソッティヤ (Sotthiya) によって与えられた手いっぱいの草を敷いて東方に向かって坐った。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.084, 赤沼 p.111) ; 菩薩はこの菩提樹へ赴く途中、野にて刈り集めた草を持って帰り来る若者に遇い給うたが、若者は菩薩の草を要し給うを知て、八抱の草を奉った。

【23-06】成道——菩提樹下の誓い

菩薩が菩提道場に坐し、悟りを開くまで座を立たないと誓う。

[A] 原始聖典

- ③中阿含204「羅摩経」(大正01 p.777上) ; 結跏趺坐、要不解坐至得漏尽。我便不解坐至得漏尽。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.717上) ; 向菩提樹下手自布草不令聊乱、跏趺而坐、端身正意、心念口言。若我諸漏未断尽者我終不解此跏趺坐。是時菩薩未解跏趺衆惑皆尽。
- ⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.948中) ; 菩薩向菩提樹下、手自布草不令撩乱、加趺而坐、端身正意心念口言。若我諸漏未断尽者我終不解此加趺坐。
- ⑪根本有部律「出家事」(大正23 p.1026下) ; 即詣菩提樹下自敷斯草。其草不亂便即右旋。於此草上結跏趺坐、端身正念。便即發要期之心我若諸漏不尽、終不起于此座。爾時菩薩応未證悟。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.122下) ; 自念云。我於今日證覺無疑、即昇金剛座結跏趺坐猶如龍王、端嚴殊勝其心專定。口作是言。我今於此不得盡諸漏者不起此座。
- ⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.299下) ; 詣菩提樹下自敷草已、端身正念加趺而坐、心念口言若不斷尽諸漏我終不解加趺。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.071, 南伝28 p.151) ; 菩薩は菩提樹の幹を後にして東の方に向い堅い心を以て「仮令我が皮膚も筋の骨も乾び、全身の肉も血も干枯びるとも、我は正覚を成せばこの跏趺坐を解くまい」
- ②修行 (大正03 p.470中) ; 若我不得道 終不離三誓 言我肌骨枯 不動会当成。
- ④瑞應 (大正03 p.476下) ; 一心誓言。使吾於此肌骨枯腐、不得佛終不起。
- ⑤異出 (大正03 p.620上) ; 一心自念言。今日飢骨筋髄、皆枯腐、於此不得佛不起。
- ⑥普曜 (大正03 p.515中) ; 菩薩自誓。使吾身壞肌骨枯腐其身碎尽、不成佛道終不起也。
- ⑦方広 (大正03 p.588上) ; 端身正念 発大誓言 我今若不證 無上大菩提 寧可碎是身 終不起此座
- ⑧LV. (Lef. p.289, 溝口 p.260) ; ここで、この座の上で、たとえ私の体が干からびようとも、私の皮膚が、骨が、肉が溶け去ろうとも！この、幾多のカルバの時間の中で、獲得することの困難な智慧を獲得することなしに、私の体がこの座から動くことはない！
- ⑨僧伽 (大正04 p.123上) ; 復作是念。我不解加趺坐、不逮一切智不起于座。
- ⑪仏讚 (大正04 p.025上) ; 要不起斯坐 究竟其所作 発斯真誓言
- ⑫BC. (12-120) ; ……「余は目的を完遂するまでは断じてこの坐をくずすことなかるべし」と念じて、彼は眠れる蛇のとぐろのように身体を凝縮して、最上かつ不動なる結跏趺坐を組んだ。
- ⑬行經 (大正04 p.076上) ; 仮令四大 捨其本性 日月墮地 須彌昇空 如是衆事 可有變異 吾終不違 是願要誓 歎誓願已
- ⑭過去 (大正03 p.639下) ; 而於草上、結加趺坐、如過去佛所坐之法、而自誓言。不成正覺、不起

此座、我亦如是發此誓時。

- ⑯集經（大正03 p.779中）；爾時菩薩、坐彼菩提樹下之時、發是要誓。我不成道、不起此座。
- ⑰MV. (vol. II p.268, Jones II p.252)；菩薩は菩提樹の下に来て、藁を敷いて坐処を作った。足を組み、身体を立て、東を向いて禪定に入った。するとすぐに五の考えが生じた。平安 (ksema)・幸福 (sukha)・純潔 (śubha)・利他 (hita)、そしてその日に無上の完全な悟りに目覚めるであろうという五つの考えである。
- ⑲衆許（大正03 p.950上）；爾時菩薩拳相好身、登金剛座結跏趺坐、而發誓言。我不起此座直至漏盡。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.031上）；坐彼樹下、我道不成、要終不起。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.091下）；如過去佛結跏趺坐。不成正覺不起此座。
- ④統紀（大正49 p.145中）；即趣畢鉢羅樹、自發願言。我坐樹下若道不成要終不起。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.086, 赤沼 p.112)；その時、菩薩は東に向うて次の誓言をなし給うた。
「もしこの座に於て仏果をひらくことが出来ないならば、私の骨も、血管も、皮膚も永久にこの座に止まるであろう。血も肉も乾き切って仕舞うであろう」と。

【23-07】成道——降魔

悪魔が現われ、成道しようとする菩薩を妨げようとして、脅し、誘惑するが、菩薩がこれを降伏する。

[A] 原始聖典

- ①SN.04-024、025 (vol. I p.122)；一時世尊はウルヴェーラーのネーランジャラー河の岸辺のアジャパーラニグローダ樹の下に住されていた (ekam samayaṁ Bhagavā Uruvelāyām viharati najjā Nerañjarāya tīre Ajapāla-nigrodhe)。その時悪魔パーピマントは7年の間世尊につきまとっていたが隙を得ることができなかった (Māro pāpimā sattavassāni Bhagavantam anubaddho hoti otārāpekkho otāram alabhamāno)。
- ②‘Suttanipāta’ Vs.446 (p.077)；(尼連禪河にて) 7年間我(悪魔ナムチ Namuci)は世尊に付き纏わり従った。〔しかし〕念ある正覺者に〔乗すべき〕機会を得なかつた (Satta vassāni bhagavantam anubandhim padā padam, otāram nādhigaccaṁ Sambuddhassa satimato)。
- ③雜阿含604（大正02 p.167中）；尊者將王至道樹下、語王曰。此樹菩薩摩訶薩以慈悲三昧力破魔兵衆、得阿耨多羅三藐三菩提。
- ④增一阿含16-08（大正02 p.580中）；設吾無此二力(忍力・思惟力)者……終不於優留毘舍六年苦行。亦復不能降伏魔怨成無上正真之道。坐於道場以我有忍力・思惟力故、便能降伏魔衆成無上正真之道。
- ⑤根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；若我諸漏未斷尽者、我終不解此跏趺坐。是時菩薩未解跏趺衆惑皆尽。爾時世尊降伏三十六億魔軍兵已、證一切智。
- ⑥根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.911上）；於金剛座自敷草座、結跏趺坐端身正念如睡龍王。以慈悲仗降彼三十六億魔兵衆、證無上覺。
- ⑦根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.948中）；是時菩薩未解加趺、衆惑皆尽。爾時世尊降伏三十六億魔軍兵已證一切智。
- ⑧根本有部律「出家事」（大正23 p.1027上）；爾時菩薩未證悟、便即降伏三十六萬俱胝惡魔。

其魔各有百千鬼神眷属。爾時菩薩以慈鎧仗、降伏魔已、便證無上正等菩提。

- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.123上）；魔王常法、有二種幢。一為喜幢、二為憂幢。……爾時世尊、舉輪萬網縵無量福生慰喻一切恐怖、手指於大地曰。此當證我……。
- ⑫根本有部律「雜事」（大正24 p.165上）；爾時世尊在菩提樹下、降伏三十六俱胝魔軍、證得無上正遍知覺。
- ⑬根本有部律「雜事」（大正24 p.299下）；是時菩薩以慈心器仗、降伏三十六億千魔衆已證無上智。
- ⑭根本有部律「雜事」（大正24 p.395中）；世尊降彼三十六億天魔軍衆成無上智。
- ⑮施護訣「給孤長者女得度因緣経」（大正02 p.846中）；捨輪王位出家修道、厭彼世間富貴等事、歷修衆行菩提樹下降魔成仏。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.071, 南伝28 p.151)；その時摩羅（マーラ Māra）天子は「悉達太子（シッダッタ Siddhattha）は俺の領分を出ようとしている。だが彼を出させてたまるものか」と云つて、……魔軍を率き伴れてやって来た。（風、雨、石、乱打、熱炭、砂、泥土、暗闇の雨による攻撃）……魔王の眷属は……四方八方へ逃げ散った。
- ②修行（大正03 p.470下）；菩薩心自念言、今当降魔官属。即放眉間毫相光明、感動魔宮。魔大惶怖。……魔子須摩提（漠言賢意）、前諫父曰。……三女自占、一名恩愛、二名常樂、三名大樂。……魔見三女還皆成老母。……更召鬼神王、……鬼兵不能得近。
- ③中本（大正04 p.147下）；一時仏在摩竭提界善勝道場元吉樹下。徳力降魔。
- ④瑞應（大正03 p.477上）；於是第六化応声天。天上魔王、見菩薩清淨無欲、……心中煩毒、……當壞其道意。魔子薩陀、前諫父曰。……召三玉女、一名欲妃、二名悅彼、三名快觀。……其三玉女、化成老母。……更召諸鬼神、……不能得近。
- ⑤普曜（大正03 p.517上）；時魔波旬聞是頌教、臥寐夢中見三十二變……以何方便斷其徑路令不成就、以大兵衆而往伏之。
- ⑥方広（大正03 p.590中）；菩薩坐菩提座已作是思惟、我於今者当成正覺、魔王波旬居欲界中最尊最勝、応召來此而降伏之。……時魔波旬聞是偈已、復於夢中見三十二不祥之相。
- ⑦LV. (Lef. p.299, 溝口 p.268)；彼（菩薩）の心に次のような考えが浮かんだ。ここ、欲望の領域においては、悪魔マーラ（Māra）がその王国を支配する首領であり、領主であるに違いない。……私は悪魔パーピーヤス（Pāpiyas）に対して挑発を行う必要がある。……こうして……悪魔パーピーヤスはこれらの挑発する詩句によって刺激されて、三十二の光景からなる夢を見た。
- ⑧僧伽（大正04 p.124上）；爾時世尊云何降伏魔衆。……猶羅刹鬼露現牙爪、……作如是変怪。……以智慧刀降伏彼怨。
- ⑨仏讚（大正04 p.025上）；仙王族大仙 於菩提樹下 建立堅固誓 要成解脱道 …… 法怨魔天王 独憂而不悅 五欲自在王 具諸戰鬪藝 憎嫉解脱者 故名為波旬 魔王有三女 …… 第一名欲染 次名能悅人 三名可愛樂 …… 衆魔既退散 菩薩心虛靜
- ⑩BC. (13-01)；連綿たる王仙の家柄の出身であるこの大仙が、解脱せんとかく誓いをたててそこに座ったとき、世界は歓喜したが、一方……マーラ（Māra）はおそれ戦いた。……したがって彼が（解脱の道に）開眼する以前に……私は彼の誓いを粉碎するために出立しようと思っているのだ。
- ⑪行經（大正04 p.076上）；時菩薩始坐 …… 魔天見地震 疑問何故爾……魔王聞其言 情即慘然坐 三女來問訊 第一名愛 第二名志悅 第三名亂樂 …… 魔王見女老 …… 即召重傍臣 令合召大軍 …… 不能搖動菩薩意
- ⑫過去（大正03 p.639下）；時第六天魔王宮殿、自然動搖。……魔子薩陀、……魔有三女、……一

名染欲、二名能悦人、三名可愛樂。……時三天女、變成老姥。

⑯集經（大正03 p.769中）；爾時欲界魔王波旬、欲為菩薩生擾亂故、於彼六年苦行之内、恒常密近菩薩左右、伺求其便、微毫過失而不能得。

⑯集經（大正03 p.774下）；心如是念。此欲界内、是彼魔王波旬為主自在統領、我今應當語彼令知。……爾時欲界魔王波旬、……於睡眠中、心忽驚動、自然夢見、三十二種、不吉祥相。

⑯MV. (vol. II p.237, Jones II p.224)；菩薩がナイランジャナー (Nairamjanā) 河畔で苦行生活を送っていたとき、マーラ (Māra) が近づいて言った。「このような努力で何を獲ようとしているのか。家に帰れば世界の王になるでしょう」と。

⑯MV. (vol. II p.281, Jones II p.264)；マーラ (Māra) は四重の軍を將いて、菩提樹に向つて進軍した。……マーラは杖をもって地面に「ガウタマ (Gautama) は自分の力の及ばぬ所へ行ってしまうだろう」と書いた。

⑰衆許（大正03 p.950上）；時魔宮中有二種旗、一名喜相。二名疑相。……時魔波旬……變身為人詐作淨飯王書。……三種不善、……三善。……魔王……旋歸天宮別作魔計、即化三女……變成老母。……三十六俱胝鬼魅兵將。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦（大正50 p.007下）；時魔波旬臥寐夢中見三十二変。（出普曜經）

①釈迦（大正50 p.032中）；時第六天魔王宮殿自然動搖。（出因果經）

③氏譜（大正50 p.091下）；処胎經云。……波旬臥夢見三十二變。……從覺恐怖召會臣兵、并召千子。……又告四女、……變成老母。觀佛三昧云。三女莊飾……、……菩薩以智慧力、伸手按地應時地動、魔與兵衆顛倒而墮。

④統紀（大正49 p.145中）；時魔王宮殿自然動搖、……於是手執弓箭。……語菩薩言、……捨出家法。……魔王挽弓放箭、……變成蓮華。魔王復遣三女、……時三天女變成老姥、……將八十億衆。……波旬長子商主即頂禮菩薩求乞懺悔。

⑤JM. (p.028, 番中 p.105)；そして摩訶薩は太陽が沈む前の夕暮れ時に (suriye dharamāneyeva sāyañhasamaye) マーラをその軍勢と共に確破して……。

⑥Bigandet. (vol. I p.086, 赤沼 p.115)；かくて菩薩がその高座に趺坐して居給う時、惡魔 (Manh Nat) は自ら思う様、悉達多太子は今や我が王国の境域を脱せようとして居る。どうしてこれを黙視することが出来よう。……「菩薩が、この憍慢なる敵に対して光輝ある勝利を得給うたのは日没の少し前であった。」

【23-08】成道——菩提樹下の成道

明星が現れたとき、菩薩が菩提樹下において正覺を成じて仏となる⁽¹⁾。

[A] 原始聖典

①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (大本經 vol. II p.052)；友よ、世尊はアッサッタ樹の根方で正覺された (bhagavā mārisa assatthassa mūle abhisambuddho)。

②MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.167)；私は生法 (jātidhamma)、老法 (jarādhamma)、病法 (byādhidhamma)、死法 (maraṇadhamma) において患を知り、無上安穩涅槃を得た (anuttaram yogakkhemam nibbānam ajjhagamam)。

③SN.12-10 (vol. II p.010)；私（釈尊）は12因縁を順逆に觀察して智慧を生じた。

④SN.12-65 (vol. II p.104)；私（釈尊）は12因縁を順逆に觀察して智慧を生じた。

- ① ‘Udāna’ 01–001～003 (p.001) ; 世尊は12因縁を順逆に観察して智慧を生じた。
- ① ‘Udāna’ 03–010 (p.032) ; 世尊は菩提樹の下で、有 (bhava) によって苦しみがあるというウダーナを唱えられた。
- ① ‘Buddhavamsa’ 26–20 (p.098) ; 私はアッサッタ樹の根方で無上菩提に達した (aham assat-thamūlamhi patto sambodhim uttamam)。
- ① Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.001) ; その時仏はウルヴェーラー (Uruvelā) の尼連禪河 (Nerañjarā) の岸辺の菩提樹の根方 (bodhirukkhamūla) で初めて正覚されて住されていた。
- ② 長阿含001「大本経」(大正01 p.007下) ; 爾時菩薩逆順觀十二因縁、如実知、如實見已、即於座上成阿耨多羅三藐三菩提。
- ④ 雜阿含285 (大正02 p.079下) ; 爾時世尊告諸比丘。我憶宿命、未成正覺時。獨一靜処、專精禪思、生如是念。世間難入、所謂若生若老若病若死、若遷若受生。然諸衆生生老死上及所依、不如實知。我作是念、何法有故生有、何法緣故生有……。
- ④ 雜阿含287 (大正02 p.080中) ; 爾時世尊告諸比丘。我憶宿命、未成正覺時、獨一靜処、專精禪思、作是念。何法有故老死有。何法緣故老死有……。
- ④ 雜阿含370 (大正02 p.101下) ; 一時仏住鬱毘羅尼連禪河側大菩提所、不久當成正覺。往詣菩提樹下敷草為座結跏趺坐正身正念。如前廣說 (十二縁起を逆順に観察した)。
- ④ 雜阿含604 (大正02 p.167中) ; 此樹菩薩摩訶薩、以慈悲三昧力破魔兵衆、得阿耨多羅三藐三菩提。
- ⑥ 増一阿含31–08 (大正02 p.671下) ; 吾即坐其上正身正意結加趺坐計念在前。爾時貪欲意解、除諸惡法、有覺・有觀遊志初禪。有覺、有觀除盡。遊志二・三禪、護念清淨憂喜除盡。遊志四禪。我爾時以清淨之心除諸結使得無所畏。……有漏盡成無漏心解脫智慧解脫、生死已盡、梵行已立、所作已辦、更不復受胎、如實知之即成無上正真之道。
- ⑥ 増一阿含38–04 (大正02 p.718上) ; 世尊告諸比丘。我本為菩薩時、未成仏道中有此念。此世間極為勤苦。有生有老有病有死。然此五盛陰不得盡本原。是時、我復作是念。由何因縁有生老病死、復由何因縁致此災患……。
- ⑥ 増一阿含48–04 (大正02 p.790下) ; 如我今日如來坐吉祥樹下而成仏道。
- ⑦ 四分律「受戒犍度」(大正22 p.781下) ; 爾時世尊、於彼廻盡一切漏、除一切結使。即於菩提樹下、結跏趺坐、七日不動、受解脫樂。
- ⑧ 五分律「受戒法」(大正22 p.102下) ; 如瑞應本起中說、於是起到鬱鞞羅聚落、始得仏道坐林樹下。
- ⑩ 僧祇律「雜誦跋渠」(大正22 p.412中) ; 自具足者。世尊在菩提樹下、最後心廓然大悟、自覺妙證善具足。如線經中廣說。是名自具足。
- ⑪ 根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.717上) ; 若我諸漏未斷尽者、我終不解此跏趺坐。是時菩薩未解跏趺衆惑皆盡。爾時世尊降伏三十六億魔軍兵已、證一切智。
- ⑪ 根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」(大正23 p.911上) ; 於金剛座自敷草座、結跏趺坐端身正念如睡龍王。以慈悲仗降彼三十六億天魔兵衆、證無上覺。
- ⑪ 根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.948中) ; 是時菩薩未解加趺、衆惑皆盡。爾時世尊降伏三十六億魔軍兵已、證一切智。
- ⑪ 根本有部律「破僧事」(大正24 p.124中) ; 菩提樹下於夜分中……證斯道已、於欲漏有漏無明漏、心得解脫、既得解脫、證諸漏盡智、我生已盡梵行已立、應作已作不受後有、即證菩提。
- ⑪ 根本有部律「雜事」(大正24 p.165上) ; 爾時世尊在菩提樹下、降伏三十六俱胝魔軍、證得無上正遍知。
- ⑪ 根本有部律「雜事」(大正24 p.299下) ; 是時菩薩以慈心器仗、降伏三十六億千魔衆已證無上智。

- ⑪失訣「七仏父母姓字経」（大正01 p.159下）；今我作釈迦文尼仏時於阿沛多樹下。
- ⑫法顯訣「大般涅槃經」（大正01 p.199下）；常在人天受樂果報無有窮盡。何等為四。一者如來為菩薩時、在迦比羅施兜國藍毘尼園所生之處。二者於摩竭提國、我初坐於菩提樹下得成阿耨多羅三藐三菩提。三者波羅捺國鹿野苑中仙人所住転法輪處。四者鳩尸那國力士生地熙連河側娑羅林中雙樹之間般涅槃處。
- *①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ （大本經 vol.II p.030）；Vipassin菩薩は十二縁起を順逆に觀察して、心解脱した。
- *④雜阿含369（大正02 p.101中）；昔者毘婆尸仏未成正覺時、住菩提所、不久成仏。詣菩提樹下、敷草為座。結跏趺坐、端坐正念、一坐七日、於十二縁起逆順觀察。所謂此有故彼有、此起故彼起、縁無明行乃至縁生有老死、及純大苦聚集、純大苦聚滅。
- *④雜阿含366（大正02 p.101上）；毘婆尸仏未成正覺時、獨一靜處、專精禪思、作如是念。一切世間皆入生死、自生自熟自滅自沒。而彼衆生於老死之上出世間道不如實知。即自觀察。何縁有此老死……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.075, 南伝28 p.159)；斯くて太陽がまだ〔西に〕傾かない間に、大士は魔軍を打ち亡ぼし……初夜に宿住智を〔獲〕、中夜に天眼を清め、後夜に縁起を觀せられた。……太陽がさし昇る頃、……菩薩は一切智を得られ……。
- ②修行（大正03 p.471中）；菩薩累劫清淨之行、至儒大慈、道定自然、忍力降魔、鬼兵退散。……是日夜半後、得三術闇（三術闇者漢言三神満具足）。……明星出時、廓然大悟。得無上正真道。
- ③中本（大正04 p.147下）；覺慧神靜、三達無碍。
- ④瑞應（大正03 p.478上）；菩薩累劫清淨之行、至儒大慈、道定自然、忍力降魔、鬼兵退散。……是日初夜得一術闇至三夜時得三術闇。……明星出時廓然大悟得無上正真之道。
- ⑥普曜（大正03 p.521下）；菩薩坐仏樹下、以降魔怨成正真覺、……示現四禪。……明星出時廓然大悟、得無上正真道、為最正覺。
- ⑦方広（大正03 p.595上）；爾時菩薩降伏魔怨、……建立法幢。……至初夜分得……天眼通、……於中夜分……宿命智。……於後夜分明星出時、……成等正覺、具足三明。
- ⑧LV. (Lef. p.343, 溝口 p.301)；かの菩薩は惡魔の反対（妨害）を乗り越え、敵を屈服させ、戦いの先頭に立って完全な勝利をおさめられた。……夜の第一の時刻（第一分）に人間の眼を遠く超越した完全に清淨な眼……真夜中の時刻（第二分）において過去世の住いを正確に思い起こす賢明さの見解の知……夜の最後の時刻（第三分）において夜明けの光が現れる時、……苦痛の集積の消滅を獲得するために、煩惱の破壊を行う知の見解の認識……三重の知（三明）を獲得された。
- ⑨僧伽（大正04 p.123上）；一切智成等正覺時、觀世無常苦空。彼已成等正覺無有衆惱。
- ⑩十二（大正04 p.146下）；仏以二十九出家、以三十五得道。從四月八日至七月十五日、坐樹下為一年。
- ⑪仏讚（大正04 p.026下）；菩薩降魔已 …… 入於深妙禪 …… 初夜入正受 憶念過去生 …… 即於中夜時 逮得淨天眼 …… 即彼第三夜 入於深正受 …… 大仙正覺成 如是正覺成 仏則興世間
- ⑫BC. (14-01)；そこで、強い意志と心の安らぎでもってマーラ（Māra）の軍勢に打ち勝った瞑想の名手は、最高の真実を勝ち取ろうとして瞑想にふけった。あらゆる瞑想法を完全に修得した後、日が暮れてからしばらくして、前世で何回も繰り返した生涯を次々と思いだした。……真夜中近く……最高の超視力を得た……その夜の三更真夜中に至って……この世間の本性を瞑想された。……夜も四更、暁の明けをそめるその刹那……不变の地位と一切知とを獲得された。

- ⑬行經（大正04 p.078中）；於是現歷觀諸禪 …… 憶念久遠初始事 …… 時至夜半天眼觀 …… 於其夜至第三時 審諦思惟意要妙 …… 一切智成最仏道 …… 達仏第一最処已
- ⑭過去（大正03 p.641中）；爾時菩薩、以慈悲力、於二月七日夜、降伏魔已。……即便入定思惟真諦、……悉知過去所造善惡。……至初夜尽……既至中夜、即得天眼。……至第三夜、……觀十二因縁。……明相出時、……成一切種智。
- ⑮集經（大正03 p.771中）爾時菩薩六年既滿、至春二月十六日時、内心自作如是思惟、我今不應將如是食。食已而證阿耨多羅三藐三菩提。……爾時菩薩、至於二月二十三日、於晨朝時、齊整着衣、欲向優婁頻蠡聚落而行乞食。……
- ⑯集經（大正03 p.792下）；爾時菩薩、既已降伏一切魔怨。……於彼初夜初更之中、得宿命智、正念證知。心成就行……於彼夜半、……彼天眼……後夜、欲得證知漏盡神通。……第四於夜後分、明星將欲初出現時、……既成阿耨多羅三藐三菩提。
- ⑰MV. (vol. II p.284, Jones II p.266)；菩薩は最後の夜分に於て、暁方夜明けの光の中で無上の完全な悟りを得た。
- ⑱衆許（大正03 p.950下）；即於三摩地運神通力、……以宿命通、……以天眼通……四諦行相、… …如是思已。無漏智觀速得現前、見修二道頓捨不生、成無上覺。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.034下）；爾時菩薩以慈心力、於二月七日……。（出因果經）
- ②歴代（大正49 p.023中）；十九年癸亥年三十。二月八日明星出時、朗然覺悟成無上道(般泥洹經下卷、仏語阿難、我成道來年亦自至四十有九。)……禪要云。如來成道四十九年、是為一味。長阿含(第五卷云、仏語須跋、我成仏已來已五十年。)
- ③氏譜（大正50 p.092上）；經云。爾時菩薩以慈善力、二月七日夜降魔放光、……明星出時霍然大悟得成正覺。
- ④統紀（大正49 p.146上）；二月七日惡魔退散之時、菩薩心淨湛然不動。……明星出時霍然大悟… …得無上道為最正覺。
- ⑤JM. (p.028, 畑中 p.105)；初夜分に宿住を隨念し、中夜分には天眼を清め、早朝時に智を縁相に下ろして出入息に基づく第四禪を生ぜしめ……夜明けの時、全ての仏陀の徳に飾られた一切知性智に通達した。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.091, 赤沼 p.121)；「その時、菩薩は最深奥なる默想に入り給うた。」… …こういう考えが菩薩の心中に集まり起ったのはアニュジャーナ紀元 (Eatzana) 百三年、カチヤン (Katson 四月) 満月の日夜明の少し前であった。この時、正しき全智一時に菩薩の心中に起って、菩薩は遂に仏陀になり給うた。

(1) 成道年齢については項目を立てなかった。本研究の第1号中の「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」のpp.109~115を参照されたい。

【24-01】解脱を楽しむ——惡魔が涅槃に入れと誘惑する

惡魔が悟りを開いた釈尊に、成道したのだから涅槃に入れ、と誘惑する。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.112)；ある時、初めて正覚を得て、ウルヴェーラーのネーランジャラー河の岸辺のアジャパーラ・ニグローダ樹の下に住していたときのこと、惡魔

パーピマントが私に近づいてきて、「尊者よ、世尊は今般涅槃しなさい、善逝は般涅槃しなさい、今世尊が般涅槃されるべきときです (parinibbātu dāni bhante Bhagavā, parinibbātu Sugato, parinibbāna-kālo dāni bhante Bhagavato) 」といった。

- ① ‘Suttanipāta’ Vs.425～ (p.074) ; 尼連禪河のほとりでヨーガを修している正覺を得た私に（悪魔）ナムチ (Namuci) は近づいてきて、世間の福を受けよと誘惑した。
- ②長阿含002「遊行經」(大正01 p.015下) ; 魔波旬復白仏言。仏昔於欝闍羅尼連禪水辺、阿遊波尼俱律樹下初成正覺。我時至世尊所、勸請如來可般涅槃、今正是時、宜速滅度。爾時如來即報我言。止、止、波旬……。
- ④雜阿含1092 (大正02 p.286中) ; 於菩提樹下、成仏未久。時魔波旬作是念。……瞿曇若自知 安隱涅槃道 独善無為樂 何為強化人。
- ⑩根本有部律「破僧事」(大正24 p.125下) ; 爾時世尊。持此石鉢於尼連禪河岸以水泥壇如法而食。食已還菩提樹下、収鉢洗足。以麁酪漿蜜性冷故爾時世尊患於風氣。魔王見佛患冷風氣、來詣佛所頂禮佛足白仏言。世尊、涅槃時至、何用久住於世、可早入涅槃。世尊知為魔王所惱、告言。汝罪魔王我未入涅槃。何以故。我未有聲聞弟子聰明智慧。若有他問如法而答、善破異論廣建正法、具足四部衆、苾芻苾芻尼鄖婆索迦鄖婆斯迦。上天下界及諸十方廣知我法修諸梵行、悉皆了知。若未如此、我未入涅槃。魔王聞佛此語心生懊惱隱身而去。
- *①SN.04-001～003 (vol. I p.103) ; 一時世尊は尼連禪河のアジャパーラニグローダ樹の下に住されていた。初めて成道された時であった (pathamābhisaṃbuddho)。時に悪魔パーピマントは (atha kho Māro pāpimā) 苦行でこそ人は清められると言った。世尊はそれを破された。
- *①‘Udāna’ 03-10 (p.032) ; 世尊がウルヴェーラのネーランジャラー河の岸辺の菩提樹の下で初めて正等覚されたとき、次のようなウダーナを唱えられた。……涅槃に至った比丘には再び生まれることはない、悪魔は打ち勝たれ、戦いに敗れた。
- *④雜阿含1093 (大正02 p.287下) ; 一時仏住欝闍羅尼連禪河側、大菩提樹下、初成仏道。天魔波旬……説偈言。長夜生死中 作淨不淨色 汝何為作此 不度苦彼岸 ……
- *④雜阿含1094 (大正02 p.287下) ; 一時仏住欝闍羅尼連禪河側、大菩提樹下、初成正覺。……魔波旬……説偈言。大修苦行処 能令得清淨 而今反棄捨 於此何所求 欲於此求淨 净亦無由得
- *⑤別訳雜阿含031 (大正02 p.383上) ; 一時仏在優樓比螺聚落尼連禪河菩提樹下、成仏未久。爾時魔王而作是念。…… 汝已獲正道 安穩向涅槃 既以得妙法 宜常戢在懷 誠心獨了知 何以教衆人。

[B] 仏伝經典

- ⑦方広 (大正03 p.601上) ; 至第四七日……爾時魔王至世尊所、作如是言。世尊、無量劫來精勤苦行、方得成仏入般涅槃、今正是時。……仏言、波旬我……欲利益諸衆生故……未説妙法。
- ⑧LV. (Lef. p.377, 溝口 p.332) ; 第四週において (caturthe saptāhe) ……悪魔パーピーヤス (Pāpiyas) は如来がおられる場所に近づいて、如来に向かってこの言葉を述べた。世尊、どうかパリニルヴァーナにお入り下さい！……今こそ世尊にとってパリニルヴァーナに赴かれる時です。……如来は……答えられた。否、パーピーヤスよ、私はパリニルヴァーナには入らないであろう。私の修行者（弟子）達がよく調御され、教化され……ない間は。
- ⑯集經 (大正03 p.807下) ; 爾時世尊、……向波羅奈国。……爾時魔王波旬、見仏欲捨於此菩提樹起、……而白仏言。善哉世尊、唯願世尊、莫離此處。
- ⑯MV. (vol. III p.281 JonesIII p.269) ; 第三の七日を (trtīyam saptāham) 世尊は喜びと安樂の中で経行して過された。その時マーラは遠からざるところに座り、苦しみ、気落ち、後悔していた。マーラ (Māra) の娘タントゥリー (Tantrī) とアラティー (Aratī) が誘惑せんと近づく（後文ではラティー [Ratī] も加えられる）が退けられる。

⑦衆許（大正03 p.952上）；爾時世尊受得商主布薩婆梨迦所施之食、……覺體中而發風病。……是時天魔、……至仏所、而作是言。善逝、汝今不安涅槃時至。……仏謂魔言。我涅槃未至、……待聲聞弟子、……智慧明達。

[C] 後世の仏伝資料

- ③氏譜（大正50 p.093上）；魔王白仏宜可涅槃。仏言、我四部未具外道未降。（三迦葉教化中に）
④統紀（大正49 p.154中）；時魔王求請入般涅槃、至於三請。世尊答曰。所應度者、皆未究竟。
(三迦葉教化中に)

【24-02】解脱を楽しむ——アジャパーラ樹下にて

釈尊がアジャパーラニグローダ（Ajapāla nigrodha）樹下で7日間を過ごし、解脱を楽しむ⁽¹⁾。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.002)；菩提樹の下で7日間の禪定を過ごした後、アジャパーラニグローダ樹（Ajapāla nigrodha）の下に赴かれ、また7日の間解脱の楽しみを受けられた（vimuttisukhapatiṣamvedin）。
- ③中阿含032「未曾有經」（大正01 p.471下）；我聞世尊一時在鬱鬱羅尼連然河辺、阿闍梨羅尼拘類樹下初得仏道。爾時大雨至于七日。高下悉滿潢澇橫流。世尊於中露地經行、其處塵起。若世尊潢澇橫流。世尊於中露地經行、其處塵起者、我受持是世尊未曾有法。
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.786中）；爾時世尊、遊文驥龍王樹下住已、便往詣阿踰波羅尼拘律樹下。到已敷坐具結加趺坐、作是念言。我今已獲此法、甚深難解難知永寂休息微妙最上智者、能知非愚者所習。衆生異見異忍異欲異命。依於異見樂於樸窟衆生、以是樂於樸窟故、於緣起法甚深難解、復有甚深難解處、滅諸欲愛盡涅槃、是處亦難見故、我今欲說法、余人不知。則於我唐勞痛苦耳。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.103下）；仏食已復還菩提樹下三昧七日。起向阿豫波羅尼拘類樹。中路見一女人鑽酪作酥、便從乞食。彼女取鉢盛滿酪奉仏。受二自歸亦如上說。
- *①DN.021 ‘Sakka-pañha-s.’ (vol. II p.273)；ガンダルヴァ（Gandhabba）のパンチャシカ（Pañcasikha）が世尊が成道直後アジャパーラ・ニグローダ樹の根方に住されていたときにあったことを物語っている。ただし本項のエピソードとは直接関係がない。
- *①AN.04-022 (vol. II p.022)；ある時、初めて正覚を得て、ウルヴェーラーのネーランジャラー河の岸辺のアジャパーラ・ニグローダ樹の下に住していたときのこと、年取った婆羅門がやって来て、本当の智者（pañdita）・上座（thera）とは何かという問答をした。
- *①‘Udāna’ 01-004 (p.003)；アジャパーラニグローダ樹の下で7日間禪定し終わったとき、驕慢な生まれつきのバラモン（huhuṅkajātika brāhmaṇa）にバラモンとは何かを説かれた。
- *②長阿含014「釈提桓因問經」（大正01 p.063上）；同上
- *③中阿含134「釈問經」（大正01 p.633中）；同上
- *③中阿含093「水淨梵志經」（大正01 p.575上）；「一時仏遊鬱鬱羅尼連然河岸在阿耶想羅尼拘類樹下、初得道時」に、水淨梵志と問答したことが記されている。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.078, 南伝28 p.165)；斯うして菩提樹の附近だけで、四七日を過して（cattāri sattāhāni）、第五七日には（pañcame sattāhe）菩提樹の下からアジャパーラ（Ajapāla）榕樹

のある所に行き、此処でもまた法を探り解脱の樂を享けつつ坐し給うた。(魔王の三人の、娘がきて誘惑するも失敗)

⑦方広(大正03 p.601中) ; 爾時世尊於第六七日、往尼俱陀樹下近尼連河。是処多諸外道、彼外道衆皆來親觀、慰問世尊。

⑧LV. (Lef. p.380, 溝口 p.334) ; 第六週において (*śaṣṭhe saptāhe*)、如來はムチリンダ (Mucilinda) の住いから出て、「雌ヤギを飼う者 (アジャパーラ Ajapāla)」という名前のイチジク (ニヤグローダ Nyagrodha) の木の下へ赴かれた。……ナイランジャナー (Nairāñjanā) 河の岸の上で、チャラカ (Caraka) ……及びその他の諸宗教の修行者達が如來を見て、如來に言つた。

⑨集經(大正03 p.800下) ; 爾時彼処有牧羊子。……在彼苦行六年之中、以向世尊、淨心供養。……折尼拘陀枝、為作蔭涼。……其羊子、……隨此多少信心福業善根因縁、命終已後、即得生於三十三天、便成大德威力天子。(成仏道を開いて仏の所へ詣り) 受三自歸及五戒已。……最初天中、成優婆塞。

⑩MV. (vol. III p.301, JonesIII p.288) ; 世尊がナイランジャナー (Nairāñjanā) 河畔で苦行生活をされていた時、一人の羊牧子 (Ajapālaka) がこれをみて信心を起し、一本のニヤグローダ (Nyagrodha) 樹を世尊の為に植えた。その功徳により、滅後三十三天に生まれニヤグローダという名の天子となる。どのようなカルマの果によって昇天したかを考えた時、世尊の為に植えたニヤグローダ樹を見て、ムチリンダ (Mucilinda) 竜王の住所に世尊を訪ね、慈悲を以てこの樹を利用いただきたいと申し上げる。世尊が黙然として承諾されたので、彼は喜んで拝礼し立ち去る。

[C] 後世の仏伝資料

⑪JM. (p.029, 畑中 p.118) ; そしてそのジェッタ (Jetṭha) 月の白分の14日目以降7日間は (Jetṭhamāsassa sukkapakkhe … tassa ca pakkhassa cuddasamito paṭṭhāya)、アジャパーラ・ニグローダ (Ajapālanigrodha) 樹のもとで……過ごした。

⑫Bigandet. (vol. I p.102, 赤沼 p.134) ; かくして七日の間を、菩提樹に近きその場所に過し給うて、菩薩は阿闍波羅の樹即ち牧羊者の樹と呼ばれる尼拘律陀樹の下に移り給うた。この樹は、日中の間牧羊者とその山羊の群とが、涼しき影に憩うたから牧羊者の樹と呼ばれたのであるが、…仏陀は其の処に、趺坐して…七日の間を過し給うた。

(1) この間の出来事と順序には様々な伝承がある。詳細は付表2を参照されたい。

【24-03】解脱を楽しむ——ムチャリンダ樹下にて

釈尊がムチャリンダ樹下で7日間を過ごす。この間、雨が降ったので、ムチャリンダ龍王 (Mucalinda nāgarāja) が釈尊を守護する(1)。

[A] 原始聖典

① ‘Udāna’ 02-001 (p.010) ; ムチャリンダ樹の下で (Mucalindamūle) 7日間坐禪されたとき、雨が降ったので、ムチャリンダ龍王 (Mucalinda nāgarāja) が鎌首をもたげて保護した。

②Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.003) ; アジャパーラニグローダ樹の下で7日間を過ごされた後、ムチャリンダ樹の下で7日間を過ごされた。そのとき雨が降り寒かったので、ムチャリンダ龍王 (Mucalinda nāgarājā) が世尊の身体を七匝して保護した。

③四分律「受戒犍度」(大正22 p.786中) ; 時世尊食彼食已、即詣文駢樹文駢水文駢龍王宮。到彼

已結跏趺坐七日思惟不動。遊解脱三昧而自娛樂。爾時七日天大雨極寒。文鱗龍王自出其宮、以身
遶仏頭蔭仏上……。

⑧五分律「受戒法」（大正22 p.103中）；爾時世尊說此偈已。更為賈人說種種妙法、示教利喜已。
復至一樹下食麁蜜。食麁蜜已。復結跏趺坐入定七日受解脱樂。過七日已、到文鱗龍所坐一樹下。
龍從水出以非人食奉上世尊。仏受食已、復入定七日受解脱樂。時雨七日其雲甚黑、使人毛豎。龍
作是念。今雨可畏、我寧可化作大身繞仏七匝、頭覆仏上勿使風雨蚊虻惱亂世尊……。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.125下）；爾時世尊、便受服之所患尋愈。爾時世尊所患既差、
從菩提樹下起、往牟枝鱗陀龍王池邊、坐一樹下念三摩地。時此池中合有七日雨下、牟枝鱗陀龍王、
知七日雨下不絕。從池而出、以身繞仏七匝、引頭覆仏頭上。

*①SN.04-02 (vol. I p.104)、04-03 (vol. I p.104) には、釈尊が正覚を成じられて、アジャパ
ーラニグローダ樹の下に住されていたとき、雨が降った (devo ekam ekam phusāyati) とされてい
る。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.080, 南伝28 p.169)；仏は其處に在して七日を (sattāham) 過し、次に文鱗
陀（ムチャリンダ Mucalinda）に赴き給うた。其處でまた七日間 (sattāham)（第六）を過し、
大雨のために起った寒氣を防ぐために、文鱗陀龍王（Mucalinda-nāgarāja）が七巻蟠局で以て
〔仏を〕巻き上げ奉ったので、〔仏は〕少しの害をも受けず……。
- ④瑞應（大正03 p.479中）；起到文鱗瞽龍無提水辺、坐定七日。……龍目得開、……前繞仏七匝。
……龍有七頭、羅覆仏上、欲以障蔽蚊虻寒暑、時雨七日。……即受三自歸、諸畜生中、是龍為先
見仏。
- ⑤異出（大正03 p.620上）；得仏道、便到龍水所。龍名文隣、文隣者所止水辺有樹。……文隣龍、
便前趣仏、繞仏七匝。龍有七頭、便以覆仏上。龍出水侍仏、便風雨七日。……畜生中、文隣為於
前自歸仏。
- ⑦方廣（大正03 p.601中）；於第五七日住目真鱗陀龍王所居之處。是時寒風霖雨七日不霽、龍王…
…以身衛仏纏遶七匝、以頭為蓋蔽覆仏上。四方復有無量龍王皆來護仏。
- ⑧LV. (Lef. p.379, 溝口 p.334)；第五週において (pañcame saptāhe)、……如來は龍の王で
あるムチリンダ (Mucilinda) の家に住まわれた。この時、非常な悪天候のこの週に、龍の王ムチ
リンダはその住いから出て、如來の体を七回ぐるぐる巻いて包み、頭を如來の上にさしかけて如
來を守り、……同様に、東……西……南……北の領域からも別の龍王達がやって来て……
- ⑩過去（大正03 p.644上）；爾時世尊即復前行、次到阿闍婆羅水側。……當於爾時、七日風雨。時
彼水中、有大龍王、名目真鱗陀。見仏入定、即以其身圍繞七匝滿七日已。
- ⑪集經（大正03 p.800上）；爾時復更有一龍王、名目真鱗陀。……於七日内、雨不暫停、遂成寒凍。
爾時目真鱗陀龍王、從宮殿出、以其大身、七重圍遶、擁蔽仏身。復以七頭、垂世尊上、作於大蓋。
- ⑫MV. (vol. III p.300 JonesIII p.287)；世尊は第四週を (caturthañ saptāham) 龍王カーラ
(Kāla) の住處で過される。第五週を (pañcamāñ saptāham) ムチリンダ (Mucilinda) 龍王の
住處で過される。その週季節外れの豪雨が降るが、ムチリンダ龍王は世尊の周りを七重に囲み覆
う。ヴィニパータ (Vinipāta) 龍王も又、七日間 (saptāham) 巨大なコイルを提供し、同様の功
徳を得る。
- ⑬衆許（大正03 p.952中）；爾時世尊又復離菩提樹、往彼母啞鱗那龍王宮。……是時彼處七日七夜
降霖大雨、……龍王、……遂以自身纏繞七匝卯首上覆、如傘蓋相、經七昼夜不動不搖。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.038下）；時彼水中有大龍王、名曰真隣陀見仏入定。（出因果經）
③氏譜（大正50 p.092中）；本起云。行至文鱗盲龍水辺、坐定七日風雨大至。……龍目得開……。
④統紀（大正49 p.152下）；二月三十日、世尊到文鱗盲龍無提水辺、坐定七日。……龍目得開……。
⑤JM. (p.029, 番中 p.118)；Jetṭha月の黒分の6日目以後7日間はMucalinda樹のもとで〔過ごした〕（Jetṭhamāsassa kālapakkhe chaṭṭhdevasato paṭṭhāya Mucalinde sattāham）。（龍王の記述なし）
⑥Bigandet. (vol. I p.106, 赤沼 p.140)；その場所に七日間を過してナヨン（Nayon）月の満月の後第六日三昧より出で……その場所に目真隣陀（Hidza-Ieeda）という貯水池があった。……その七日の間、非常な大雨があった。その池の主である龍王は仏陀の御身の上に注ぎかかるこの大雨を防ぎ奉らんがために、……世尊の御身を七巻きに捲いて、自分の大きな頭を以て、仏陀の頭を蔽い奉ったのである。

(1) この間の出来事と順序には様々な伝承がある。詳細は付表2を参照されたい。

【24-04】解脱を楽しむ——タップサとバッリカの供養と帰依

タップサ（Tapussa、あるいはタパッス〔Tapassu〕）・バッリカ（Bhallika）⁽¹⁾の2商人が通りがかりに釈尊と遇い、食事を供養する。このとき四大天王が石鉢を布施する⁽²⁾。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.003)；ムチャリンダ樹の下で7日間を過ごされた後、ラージャーヤタナ樹（Rājāyatana）の下に赴かれ、七日の間解脱の楽しみを楽しまれた。この時、タップサとバッリカ（Tapussabhallika）の二人の商人がウッカラ村（Ukkala）からやって来て、二帰依を唱えた初めての優婆塞となった（teva loke paṭhamam upāsakā ahesum dvevācikā）。
①AN.01-14-01 (vol. I p.025)；声聞優婆塞で最初に帰依した者の最上は商人タパッスとバッリカである（etad aggam mama sāvakānam upāsakānam paṭhamam saranam gacchantānam yadidañ Tapassu-Bhallikā vāñijā）。
④雜阿含604（大正02 p.167中）；此處四天王各持一鉢奉上於佛、合為一鉢。此處於賈客兄弟所受諸飯食。
⑥增一阿含06-01（大正02 p.559下）；我弟子中初聞法藥成賢聖證三果商客是⁽³⁾。
⑦四分律「受戒捷度」（大正22 p.781下）；時有二賈客兄弟二人。一名瓜二名優波離。將五百乘車載財寶、去菩提樹不遠而過。時樹神篤信於佛、曾與此二賈客旧知識。欲令彼得度、即往至賈人所語言……。是為優婆塞中最初受二帰依、是賈客兄弟二人為首。
⑧五分律「受戒法」（大正22 p.103上）；爾時世尊身有風患。摩修羅山神即取訶梨勒果奉佛。願佛食之以除風患。佛受為食風患即除。結跏趺坐七日受解脱樂。過七日已從三昧起遊行人間。時有五百賈客、乘五百乘車。中有二大人、一名離謂、二名波利……。
⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.125上）；爾時有二商主。一名黃菴、二名村落。各有百兩車及多人衆、共為與販路由佛所。
*①‘Buddhavamsa’ (p.023)；Tapassu-bhallikaはDīpankara佛の最高の給仕者（upatthāka）とされている。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.080, 南伝28 p.170)；その時帝梨富沙（タップサ）と跋梨迦（バッリカ）と

いう二人の商人が五百輛の車を曳いて、ウッカラ（Ukkalā）地方から中部地方へ行く途中……（天人が食を献ずるよう勧め）麁と蜜丸とを……（四天王が各一鉢を献じ、一鉢となる）……兄弟なる二人の商人等は、仏と法とに帰依し、二帰依を唱える信士となった。

- ②修行（大正03 p.472中）；是時仏在摩竭提界善勝道場貝多樹下、……度二賈客、提謂波利。授三自歸、及與五戒、為清信士。
- ③中本（大正04 p.147下）；度二賈客、提謂波利。授三自歸、然許五戒、為清信士。
- ④瑞應（大正03 p.479上）；樹神念仏。新得道快坐七日、未有獻食者、我當求人令飯仏。時適有五百賈人、從山一面過。……中有兩大人、一名提謂、二名波利。……即和麁蜜。（四天王各取一鉢。……合成一鉢。）……即皆受教、各三自歸。
- ⑤普曜（大正03 p.526中）；爾時提謂波利之等與賈人俱五百為侶。（天子識乾が献食勧める）即和麁蜜（四天王が各一鉢献じ、合して一鉢となる）……即以其鉢受賈麁蜜呪願賈人言。
- ⑥方広（大正03 p.601下）；時北天竺國兄弟二人為衆商之主、一名帝履富婆、一名婆履。……以五百乘車載其珍寶還歸本国。（護林の神が献食を勧める）……辦諸美味酥蜜甘蔗乳糜之属……諸商人……我從今者歸依如來。
- ⑦LV. (Lef. p.381, 溝口 p.335)；第七週の間 (saptame saptāhe)、如來はターラーヤナ (Tārāyaṇa) 樹のもとに留まっておられた。ちょうどこの時、北の国の二人の兄弟、トラプシャ (Trapuṣa) とバッリカ (Bhallika) という名前の有能で学識のある商人が、……五百台の車からなる大きな隊商を率いて、南の国から北の国に向って進んでいた。……彼らは蜂蜜と菓子と砂糖黍とを手に取って、……（ブッダと法とに帰依した。）
- ⑧佛讚（大正04 p.028下）；時有商人行 善友天神告 大仙牟尼尊 在彼山林中 世間良福田 汝應往供養 聞命大歡喜 奉施於初飯
- ⑨BC. (14-105)；……そのとき旅行く隊商の二人の資産家がその親しい神に勧められて、高貴な心を持つ大仙（ブッダ）に喜んで頂礼し、初めて施食をさしあげたのである。
- ⑩行經（大正04 p.087下）；於是便受 二賈客施 始受五戒 為清信士
- ⑪過去（大正03 p.643中）；爾時有五百商人。二人為主。一名跋陀羅斯那。二名跋陀羅梨。（天神供養を勧める）……即以蜜而奉上佛。……（時四天王、……各持一麁、……按令成一。）……即授商人三歸、一……三歸依將來僧。
- ⑫集經（大正03 p.801上）；如是世尊、經七七日。……爾時彼處、從北天竺、有二商主、一名帝(当梨反)梨富婆(隋言胡瓜)、二名跋梨迦(隋言金挺)。……爾時世尊、於新淨潔天施鉢内、……二商主辺、受於麁酪蜜和之搏。……彼二商主、於人世間、最初而得三歸五戒優婆塞名。
- ⑬MV. (vol. III p.302 Jones III p.290)；世尊は第六週を羊牧子のニヤグローダ樹下で過し、第七週を (saptamam̄ saptāham) クシリカ一樹 (Kṣirikā) の林の中で断食しながら過す。そこへ北方の町ウッカラ (Ukkala) の二商人トラプサ (Trapusa) とバッリカ (Bhallika) が五百の積荷をもって南方からの帰途通りかかる。天子の勧めにより、二商人はバターを混ぜた蜜を差し上げる。世尊は三歸依を与える。
- ⑭衆許（大正03 p.951中）；爾時世尊於七昼夜、跏趺而坐……當爾之際亦無有人持食供養、纔說偈已。忽有商主、名布薩婆梨迦、將五百量車載諸寶貨、欲往他國經過近地。（天人献食を勧める）……辦造種種飲食美妙香潔品味、……以奉佛。（四天王の献鉢）……三歸、……歸依未來僧伽。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.038上）；爾時有五百商人、二人為主。（出因果經）
- ②氏譜（大正50 p.092中）；經本起云。樹神念仏得道七日未有獻者。
- ③統紀（大正49 p.152下）；三月七日、樹神知仏七日坐定……未有奉食。……三歸依將來僧。

- ⑤JM. (p.029, 番中 p.118) ; アーサールハ月の白分の8日目に (*Āsālhamāsassa sukkapakkhe at-thamiyam*) ……タップサ (Tapussa) とバッリカ (Bhallika) の蜂蜜と麦菓子を食べ……。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.108, 赤沼 p.142) ; 仏陀が羅闍耶多那樹の下に趺坐してい給うた時であった。帝梨富婆 (Tapoosa) 、跋梨迦 (Palekat) という二人の商人が、五百輛の車を引いて、優留毘羅聚落の仏陀の停り給う所へ来た。…… (二商人による甘いパンと麩蜜の供養……四天人による四個の鉢の供養……二商主、優婆塞となる。)

- (1) PTSではタパス (Tapassu) 、バッルカ (Bhalluka) でセイロン、タイ版ではタップサ、バッリカとする。
- (2) この間の出来事と順序には様々な伝承がある。詳細は付表2を参照されたい。
- (3) 明示されていないが、2人の商人を指すものと理解した。

【24-05】解脱を楽しむ——ディーパンカラ仏の因縁

昔、ディーパンカラ (Dīpamkara) 仏から記別を受けたことを想起する。2商人の帰依と関連させるものとさせないものがある⁽¹⁾。

[A] 原始聖典

- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.782上) ; 時二賈人白仏言。我今從此欲還本生処、若至彼間當云何作福、何所禮敬供養。時世尊知彼至意、即與髮爪語言。汝等持此往彼作福禮敬供養。時賈人雖得髮爪、不能至心供養言、此髮爪世人所賤除棄之法、云何世尊持與我等供養。時世尊知賈人心中所念、即語賈人言……。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.782上) ; 仏告賈人言。過去久遠世時、有王名曰勝怨、統領閻浮提。爾時……即号曰定光菩薩……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.081, 南伝28 p.171) ; 二人 (二商人) が、「尊師、[何か] 私どもの捧持すべきものを頂きとう存じます」といったので、仏は右手でお自分の頭を撫でて、髪の記念物を与え給うた。二人は自分たちの都に [還ってから] この記念物を中に納めてその上に塔を立てた。
- ②修行 (大正03 p.472中) ; 度二賈客、提謂波利、授三自帰、及與五戒、為清信士。念昔鋌光別我為仏。汝後百劫、當得作仏、名釈迦文如來。……吾從是來、建立弘誓、奉行六度四等四恩三十七品、……大願果成。
- ③中本 (大正04 p.147下) ; 度二賈客、提謂波利、授三自帰、然許五戒、為清信士。已惟昔先仏、名曰定光、拜吾仏名。汝於來世九十一劫、當得作仏、字釈迦文、號如來……度人如我今也。吾從是來、修治本心、六度無極……功報無遺、大願果成。
- ④瑞應 (大正03 p.478下) ; 昔定光仏時、別我為仏、名釈迦文、令果得之。從無數劫、勤苦所求、適今得耳。 (成道直後)⁽²⁾
- ⑤異出 (大正03 p.620上) ; 仏便正坐自念言。昔往無數劫時、有題和竭羅仏言、我當為釈迦文仏。我今日已得仏矣、我從無數劫以來求仏、適今得仏耳。……為入六波羅蜜、不忘我功德也。今皆得之、仏適念是。 (文隣龍王の箇所)⁽³⁾
- ⑯集經 (大正03 p.803上) ; 爾時世尊、即與諸商仏身髮爪……而告之言。……若見此物、與我無異、……當還起塔供養尊重。……爾時世尊、知彼一切商人心已、告彼等言。汝等商主、莫作是念、我憶往昔、……有一世尊、出現於世、名曰然灯如來、……時彼世尊、即授我記。

⑯MV. (vol. III p.310, JonesIII p.297) ; その時、二商人は世尊に申し上げた。「我々は多くの国々にまたがる広範囲の商人であります。もし許されるならば、我々の崇拜する聖遺物をいただきたい。」世尊は自ら頭髪を取り、それを与えて「髪の為の塔を立てよ」と言わされた。又、次に爪を切りそれを与えて「自分の爪の塔を立てよ。石が出現するからそれを組み立てよ」と言わされた。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦（大正50 p.066中）；釈迦髪爪塔縁記。（出十誦律）

- (1) 2商人の帰依と関係ないものに、[B] の②③④⑤。2商人の髪爪塔の献上と関連させるものに、[A] の⑦、[B] の⑯。2商人の髪爪供養のみを記し、ディーパンカラ仏からの記別にふれないものに、[B] の①⑯。
- (2) これは2商人の帰依とは関係なく、成道直後に定光仏の授記を想起する。
- (3) 同上（2）。

【24-06】解脱を楽しむ——天神が呵梨勒果を献じる

天神（帝釈天、あるいは樹神）が、腹をこわした釈尊に呵梨勒果を献上する(1)。

[A] 原始聖典

- ⑦四分律「受戒捷度」（大正22 p.786上）；去彼不遠有呵梨勒樹。彼樹神篤信於仏、即取呵梨勒果來奉世尊……。諸神受歸依者呵梨勒樹神最初。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.103上）；爾時世尊身有風患。摩修羅山神、即取訶梨勒果奉仏。願仏食之以除風患。仏受為食風患即除。
- ⑩根本有部律「破僧事」（大正24 p.125下）；釈提桓因見仏世尊患於風氣即往瞻部樹下。遠有訶梨勒林、於其林中取色香美味具足者訶梨勒果。速詣仏所頂禮仏足在一面立白仏言。我見世尊身患風氣故取訶梨勒果、今以奉施。若食此果風氣即除、唯願世尊受我此藥。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.080, 南伝28 p.170) ; それから〔仏は〕ラージャーヤタナ (Rājāyatana) 樹の所に赴いて、此處でも解脱の樂を享けながら、〔七日の間〕坐し続け給うた。これまで七七日 (sattasattāni) になる。この七七日の間に〔仏は〕洗面も大小便も食事もせず、……最後の四十九日目に (ekūnapaññāsatime divase) ……「面を洗おう」というお考えが浮かんで来た。帝釈天王は阿伽陀、訶梨勒 (agadaharīṭaka 薬果) をもって来て〔仏に〕献じた。仏は……それによつて便を通じ給うた。
- ④瑞應（大正03 p.479中）；時麁蜜冷、仏腹内風起。帝釈即知、応時到閻浮提界上、取藥果名呵梨勒、來白仏言。是果香美可服、最除內風。仏便食之、風即除去。
- ⑯集經（大正03 p.803中）；如是世尊、四十九日、不得飲食。既始於彼商人等辺、得於此食。世尊食後、往昔業力、忽然患腹而不消化。爾時山居有一藥神、將彼新出微妙甘美呵梨勒果、往詣仏所。……世尊食此呵梨勒後、腹内有病即得除愈。……為彼藥神。……即受三歸并及五戒、……一切藥神諸女天中、……最初為首作優婆夷。
- ⑯MV. (vol. III p.310 JonesIII p.298) ; 世尊は四十九日の (saptasaptāhehi ekūnapañcāsaddi-vasāni) 断食の後、二商人の供養した飲物を飲まれたが、その時世尊の胆汁があふれた。そこ

で帝釈天がハリータキー樹 (harītakī) の実を「これで気分がよくなるでしょう」と言って差し上げた。

[C] 後世の仏伝資料

(1) この間の出来事と順序には様々な伝承がある。詳細は付表2を参照されたい。

【24-07】解脱を楽しむ——天女が糞掃衣を献じる

釈尊の苦行時代に自分の着ていた衣を布施した女が、死後に天女となり、改めて糞掃衣を布施する。そこで帝釈天（あるいは四天王）が洗濯石と水を化作する。

[A] 原始聖典

[B] 仏伝經典

⑯集經（大正03 p.803下）；爾時世尊、從彼差梨尼迦林出、安庠還至菩提樹下。（その頃その地方では病人多く、末期の病人を林中に葬送していた）而菩薩在苦行之時、於彼林内、有一婦女。名羅娑耶、氣猶未斷、……而其眷屬、棄捨委地。（菩薩の苦行を見て自分の糞掃衣を布施し、その後命終。その善根により三十三天上生、天の玉女となる。成道後王女天として糞掃衣を布施し、三帰並びに五戒を受ける）爾時世尊、……我今將此糞掃之衣、何處而洗。……帝釈天王、……化出一河、……更復化作三片大石。

⑰MV. (vol. III p.311, JonesIII p.299)；世尊がウルヴィルヴァー (Uruvilvā) で苦行中、一人のガヴァー (Gavā) という名の洗濯女 (nagarāvalambikā) が「目的を達せられた時お使い下さい」と糞掃衣を差しだし、樹の枝にかけた。彼女は滅後、すぐに三十三天に再生した。そして天から下り、樹枝にかけた糞掃衣を取り「今やお使い下さい」と差し出す。世尊は糞掃衣を洗いたいと思われた。必要な水は帝釈天が必要な石塊は四天王によって提供される。

[C] 後世の仏伝資料

【25-01】梵天勧請——説法を決心する

悟った法は深甚難解で、人々に判ってもらえるかどうかと逡巡する釈尊に、梵天が説いてくれるようにと頼み、説法を決意する。

[A] 原始聖典

①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.168)；説法を躊躇していた私に、梵天は「善逝よ、法を説いて下さい。汚れ少なき有情があつても、法を説かれないと衰退します。法を説いていただければ法を知る者となるでしょう」と言った。

②SN.06-001 (vol. I p.136)；世尊が初めて正覚された時のこと。世尊は躊躇されて法を説くことに心が傾かなかった。そこで婆娑世界の主ブラフマンは世尊の前に現れた。

③‘Buddhavamśa’ 26-02 (p.097)；梵天の勧請によって法輪を転じた (Brahmūnā yācito santo dhammacakkhaṇ pavattayim)。

④Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.004)；世尊はアーラヤを楽しむ衆生 (ālayarāmā pajā

ālayaratā ālaysammuditā) には、縁起の理法を説いても分らない、それは疲労をもたらすだけだと考えられた。そこで梵天 (Brahmā sahampati) が説法されることを説得した。

⑥増一阿含19-01 (大正02 p.593上) ; 一時仏在摩竭國道場樹下。爾時世尊得道未久。便生是念。我今甚深之法難曉難了。……爾時梵天在梵天上、遙知如來所念……。

⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.786下) ; 爾時世尊作是思惟已、默然而不説法。時梵天王於梵天上、遙知如來心中所念已、念世間大敗壞。如來今日獲此妙法、云何默然而住、令世間不聞耶……。

⑧五分律「受戒法」(大正22 p.103下) ; 仏食已前到樹下三昧七日。過七日已從三昧起。作是念。我所得法甚深微妙難見寂寞無為、智者所知非愚所及。衆生樂著三界窟宅集此諸業、何緣能悟十二因緣甚深微妙難見之法。又復息一切行截斷諸流、恩愛源無余泥洹、益復甚難。若我說者徒自疲勞唐自枯苦……。時梵天王……。

⑩根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.717上) ; 受梵王請往婆羅痖斯、三轉十二行法輪……。

⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.948中) ; 受梵王請往婆羅痖斯。

⑫根本有部律「出家事」(大正23 p.1027上) ; 便證無上正等菩提、時有梵天、來請世尊。

⑬根本有部律「破僧事」(大正24 p.126中) ; 爾時世尊如上思惟、止心住已不念説法。時娑婆世界主梵天王、知佛心念即自思惟……。

⑭根本有部律「雜事」(大正24 p.299下) ; 受梵天請往婆羅痖斯三轉十二行法輪。

⑮根本有部律「雜事」(大正24 p.395中) ; 梵王來請詣婆羅痖斯。

* ①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (大本經 vol. II p.035) ; 縁起法の深甚なることを考えて説法を躊躇されていたビパッシン仏を梵天が勧請した。

* ①SN.06-002 (vol. I p.138) ; 世尊が初めて正覚されて、ウルヴェーラーの尼連禪河のアジャパーニグローダ樹の下に住されていたときのこと、梵天と尊敬することがないのは苦しみである、という問答をした。

* ①SN.47-018 (vol. V p.167) ; 世尊が初めて正等覚して、ウルヴェーラーの尼連禪河の岸辺のアジャパーーラニグローダ樹の根方に住していたとき、梵天と一緒に (ekāyana magga) とは四念處 (cat-tāro satipatṭhāna) であるという問答をした。

* ①SN.47-043 (vol. V p.185) ; 同上

* ①SN.48-057 (vol. V p.232) ; 世尊が初めて正等覚して、ウルヴェーラーの尼連禪河の岸辺のアジャパーーラニグローダ樹の根方に住していたとき、梵天と五根を修習すると不死に至る (Pañcindriyāni bhāvitāni bahulikatāni amatogadhāni honti amataparāyanāni amatapariyosānāni) と問答した。

* ①AN.04-021 (vol. II p.020) ; 世尊は初めて正覚されて尼連禪河のアジャパーーラニグローダ樹の根方に住されていた。そのとき世尊に不恭敬は苦である……という思いが生じた。娑婆世界の主ブラフマンは世尊の思いを知って世尊の前に現れた。

* ②長阿含001「大本經」(大正01 p.008中) ; (毘婆尸仏) 我今已得此無上法、甚深微妙難解難見……時梵天王知毘婆尸如來所念……。

* ③中阿含204「羅摩經」(大正01 p.777上) ; 我初覺無上正盡覺已便作是念。我當為誰先説法耶。

* ④雜阿含1188 (大正02 p.321下) ; SN.06-002と同じ

* ④雜阿含1189 (大正02 p.322上) ; SN.47-018と同じ

* ④雜阿含1190 (大正02 p.322下) ; 世尊は鬱毘羅聚落尼連禪河側菩提樹下、成仏未久のころ、梵天とクシャトリヤの両足尊がもっとも勝れているという問答をした。

* ⑤別訳雜阿含101 (大正02 p.410上) ; SN.06-002と同じ

* ⑤別訳雜阿含102 (大正02 p.410中) ; SN.47-018と同じ

- *⑤別訳雜阿含103（大正02 p.410下）；雜阿含1190に同じ
*⑥增一阿含24-05（大正02 p.618上）；爾時世尊便作是念。我今以此甚深之法、難解難了難曉難知、極微極妙智所覓智。我今當先與誰說法。使解吾法者是誰。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.081, 南伝28 p.171) ; 正等覺者は、その後またアジャパーラ榕樹 (Ajapāla-nigrodha) の所に赴いて、榕樹の下に坐し給うた。……他人のために法を説き給うのをしたくないような心持になり給うた。すると娑婆世界の主大梵王は……帝釈、善侍、……他化自在及び大梵天を引き連れて仏の所へ行き、……仏に説法を願った。
③中本（大正04 p.147下）；世尊念曰。吾本發心、誓為群生梵釈請法、甘露當開。
④瑞應（大正03 p.479下）；佛以神足、移坐石室。……設當為說、天下皆苦、空無所有、誰能信者、……意欲默然、不為世間說法。……梵天知佛欲取泥洹、……梵天白佛言。……欲聞佛法。、當為世間說經、願莫般泥洹。
⑤異出（大正03 p.620中）；佛神通洞達。諸天集会、皆稽首前謁、佛閑居実処、精念天下衆善悼哀萬民。
⑥普曜（大正03 p.528中）；世尊默然不肯說法。梵天心念、今我寧可往詣佛所勸請如來轉正法輪。
⑦方廣（大正03 p.602下）；如來初成正覺、住多演林中獨坐一処。……爾時娑婆世界主螺髻梵王……惟願世尊轉于法輪、……往詣佛所。……釈提桓因、四天王天、三十三天。
⑧LV. (Lef. p.392, 溝口 p.345) ; 如來が完全にして成就されたブッダの状態に達せられた最初の時期において、ターラーヤナ (Tārāyaṇa) 樹の根元に留まっておられた間……馬の「たてがみ」を持つ大梵天王が、ブッダの神通力そのものによって如來の心の躊躇を知り……どうか世尊、法をお教え下さい。……帝釈天、……四天王衆天の神々、三十三天の神々……かの如來のおられる場所に近づき……。
⑪仏讚（大正04 p.028中）；佛於彼七日 禪思心清淨 観察菩提樹 …… 安住於默然 願惟本誓願 復生說法心 …… 梵天知其念 法應請而轉 …… 合掌勸請言
⑫BC. (14-98) ; ……天界に住む二人の首長〔最高神ブラフマンとインドラ神（帝釈天）〕は、静寂のために教えを説こうと決意された善く逝ける人（ブッダ）の心を知って、……〔ブッダのところへ〕近づいてきた。……牟尼よ、生存の大海上を自ら渡りおわられたからには、苦惱に沈んでいる群生を濟い上げられよ。
⑬行經（大正04 p.087上）；願成懷歡喜 悅澤樹王下 坐觀樹七日 …… 法微妙難解 …… 意欲默然寂 最神妙梵天 …… 願憶果敢誓 施甘露於世
⑭過去（大正03 p.642下）；爾時如來、於七日中、一心思惟、觀於樹王。……我寧默然、入般涅槃。……大梵天王、……以大悲力、轉妙法輪。釈提桓因、乃至他化自在天、亦復如是、勸請如來、……乃至三請。爾時如來、至滿七日、默然受之。
⑮集經（大正03 p.805下）；爾時世尊、作如是念。……但衆生輩、着阿羅耶(隋言所着処)。……爾時娑婆世界之主、大梵天王、……慈悲說法。……以仏眼觀……已見諸衆生、……利根……鈍根……優鉢羅、……分陀利等、……我今欲開甘露門。
⑯MV. (vol. III p.313 JonesIII p.302) ; 世尊はアジャパーラ・ニヤグローダ樹に向われ、樹下に止って世間を熟考された。「自分の悟った法は甚深難解で理解しがたい。……山に入って沈黙して住することにしよう」その時大梵天は帝釈天の所へ行き、世尊に転法輪をお願いしようと言う。彼等はその他の諸天、夜叉と仏所へ詣り、……大梵天の要請を許される。……「我、不死の門を開いたり」
⑰衆許（大正03 p.952下）；是時娑婆世界主大梵天王、知於世尊不云說法亦不生心、……至仏所…

…。…… 悉開甘露門 演法濟衆生 ……利根鈍根……青蓮花或白蓮花等……我今降法甘露雨
當潤樂聞及一切。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.036中）；爾時如來於七日中一心思惟觀於樹王而自念言。（出因果經）
③氏譜（大正50 p.092上）；經云。時大梵王見成聖果、默然而住心懷憂惱。……今當往請轉大法輪、
……如是者三。至滿七日、默然受已……。
④統紀（大正49 p.152中）；二月九日、如來於七日中一心思惟觀於樹王、而自念言。……我寧般涅槃。
⑤JM. (p.029, 番中 p.119)；梵天に乞われた太子は法輪を転じた。
⑥Bigandet. (vol. I p.111, 赤沼 p.147)；「私の今有する法の智慧、四真諦智慧は甚だ得難い
ものである。……」かくの如く思い来つて仏陀は大法宣伝の大行を企てんことを思い止まり給う
た。その時大梵天王は仏陀の心中を推知して、……仏陀のみ許に赴いた。……梵天の勧請をきいて、
仏陀は一切有情に対して、同情の念を起こし、……大法を宣伝すべきことを厳に約束し給う
た。

【25-02】梵天勧請——アーラーラ・カーラーマと ウッダカ・ラーマプッタの死を知る

最初にアーラーラ・カーラーマ (*Ālāra Kālāma*) とウッダカ・ラーマプッタ (*Uddaka Rāma-putta*) に説法しようとするが、彼らがすでに死んでいることを知る。そこで共に修行した5人の比丘に説法することとする。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.169)；最初に説法すべきものとしてアーラーラ・カーラーマ (*Ālāra Kālāma*) を思いつかれたが、彼は死んで7日であった (*sattāhakālakata*)。…
…ウッダカ・ラーマプッタ (*Uddaka Rāmaputta*) は昨夜死んでいた (*abhidosakālakato*)。
②Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.007)；説法を決心された世尊は、まずアーラーラ・カーラーマに説法しようとしたが、彼は死んで7日であった (*sattāhakālamkata*)。そこでウッダカ・ラーマプッタに説法しようとしたが、彼は昨夜亡くなっていた (*abhidosakālamkato*)。
③中阿含204「羅摩經」（大正01 p.777上）；我當為誰先說法耶。我復作是念、我今寧可為阿羅羅加摩先說法耶。爾時有天住虛空中而語我曰。大仙人當知、阿羅羅加摩彼命終來至今七日……。鬱陀羅羅摩子、命終已來二七日也。
④增一阿含24-05（大正02 p.618上）；一時佛在摩竭國道場樹下、初始得佛。爾時世尊便作是念、我今以得此甚深之法、難解難了難曉難知、極微極妙智所覺知。我今當先與誰說法。使解吾法者是誰。爾時世尊便作是念。羅勒迦藍諸根純熟、應先得度。又且待我有法。作此念已、虛空中有天白世尊曰、羅勒迦藍死已七日……。今鬱頭藍弗先應得度。當與說之。聞吾法已、先得解脫。世尊作是念、虛空中有天語言、昨日夜半以取命終……。
⑤四分律「受戒犍度」（大正22 p.787中）；爾時世尊復作是念。我今當先與誰說法。聞便即解、即念阿蘭迦蘭垢薄利根聰明有智。我今寧可先與說法。念已復更智生、今阿蘭迦蘭命終已經七日……。
鬱頭藍子垢薄、利根聰明有智。我今寧可先與說法。作是念已、復更智生、鬱頭藍子昨日命終……。
⑥五分律「受戒法」（大正22 p.104上）；佛作是念。甘露當開誰應先聞。鬱頭藍弗聰明易悟、此人應先。念已欲行、天於空中白言。鬱頭藍弗亡來七日。佛言。苦哉彼為長衰。甘露法鼓如何不聞。

復更惟曰。甘露當開誰應次聞。阿蘭迦蘭聰明易悟。次應得聞、適起欲行。天復白言。阿蘭迦蘭昨夜命終。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.126下）；時仏世尊復作是念、我於今者為誰先說。……其哥羅哥命終已來經今七日。……此喩達羅摩子昨夜命過。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.081, 南伝28 p.172) ; 仏はこれに承諾を与え、「我は先ず最初に誰に法を説いたらよからう」と考え、……阿羅邏・迦蘭（Ālāra アーラーラカーラーマ）……死んでから已に七日（tassa sattāhakālakatabhāvam）……優陀羅羅摩子（Uddaka ウッダカラーマップタ）……前夜死んで了つことを（tassāpi abhidosakālakatabhāvam）知つて……。
- ③中本（大正04 p.147下）；昔吾出家、路由梵志阿蘭迦蘭、待吾有禮二人應先。……彼二人者、亡來七日。……鬱頭藍弗、……此人者、昨暮命終。
- ⑥普曜（大正03 p.528下）；以仏道眼普觀世間、今當為誰第一説法。……仏即念知鬱曇藍弗三垢歟。……物故已來已復七日、第二學仙今日壽終。
- ⑦方広（大正03 p.605中）；五眼清淨觀察世間、作是思惟、誰應最初堪受我法。……彼外道羅摩之子……其命終已經七日。……彼外道阿羅邏仙人……其命終已經三日。
- ⑧LV. (Lef. p.403, 溝口 p.355) ; 五つの眼を身にそなえ、何物も覆い疊らすことのできないブッダの觀察力をもって世間全体を考察して、……誰の為に、先ず最初に、私はこの法を教えることができようか？……ルドラカ・ラーマプトラ（Rudraka Rāmaputra）……七日前（sapatāha-kālagata）に死んだ……アーラーダ・カーラーパ（Ārāda Kālāpa）……三日前（trīny ahāni kālagata）に死んだということを知られた。
- ⑪仏讚（大正04 p.028下）；食已顧思惟 誰應先聞法 唯有阿羅藍 鬱頭羅摩子 彼堪受正法 而今已命終
- ⑫BC. (14-106) ; アーラーダとウドラカとの二人は、〔ブッダの〕教えを理解しうる知恵をもつてゐる、と牟尼は見そなわした。しかし、その二人はすでに天に逝つた、と心でごらんになつて、〔ブッダの〕心は五人の比丘に向けられた。
- ⑬行經（大正04 p.087下）；應得度者 阿蘭命過 已至七日 見鬱陀羅 昨夜命終
- ⑭過去（大正03 p.643上）；爾時世尊、受梵王等請已、……滿二七日。爾時世尊、又復思惟、……誰應在先、而得聞者、阿羅邏仙人。……阿羅邏仙人昨夜命終。……迦蘭仙人昨夜命終。
- ⑮集經（大正03 p.807上）；爾時世尊、作如是念。我今於先初説法處。……優陀羅迦羅摩子、……命終來、已經七日……生於非非想天。……阿羅邏迦羅摩種、……昨日命終……知阿羅邏此處命終、生不用處。
- ⑯MV. (vol. III p.322 JonesIII p.312) ; その時世尊は考えられた。「最初にこの法を説いた時、誰が理解出来るだろうか？」……ウドラカ・ラーマプトラ（Udraka Rāmaputra）……彼は七日前に（satāham kālagato）亡くなつた……アーラーダ・カーラーマ（Ārāda Kālāpa）……彼は三日前に（tryaham kālagato）亡くなつた。
- ⑰衆許（大正03 p.953上）；爾時世尊即自思惟、今者何人先得聞法。……阿囉拏迦羅摩等仙人……皆已命終方今七日。……嚕捺囉迦羅摩子亦趣無常。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.037下）；爾時世尊受梵王等請已。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092上）；經云。……即以道眼、念彼二仙並已壽終。
- ④統紀（大正49 p.152中）；二七日。以仏眼觀諸衆生上中下根及諸煩惱。三七日思惟、……誰先得

聞。阿羅遷……昨日命終、……迦蘭……昨夜命終。

⑥Bigandet. (vol. I p.113, 赤沼 p.149) ; 仏陀は次に考え給うよう。「私は先づ誰に向って仏法を宣伝したらよかろうか」……阿羅羅仙……七日以前に逝く……鬱陀羅仙……昨日中夜命終。

[26] ウパカに遇う

バーラーナシー (Bārāṇasī) に行く途中で、アージーヴィカ教徒 (ājīvika) のウパカ (Upaka) と遇う。釈尊は成仏したことを宣言するが、ウパカはそのまま行ってしまう。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.170) ; 邪命外道のUpakaはガヤーと菩提樹の中間の道を行く私を見た。……
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.008) ; 世尊はバーラーナシーに行く途中のガヤーと菩提樹の間で (antarā ca Gayam antarā ca bodhim addhānamaggapatiṇnam) 邪命外道のウパカ (Upaka ājīvika) に会った。
- ③中阿含204「羅摩経」(大正01 p.777中) ; 摺衣持鉢往波羅捺加尸都邑。爾時異学優陀遙見我來、而語我曰……。
- ④雜阿含604(大正02 p.167中) ; 此処如來詣波羅奈國時、阿時婆外道問仏。
- ⑥增一阿含24-05(大正02 p.618中) ; 便從坐起而去、欲向波羅捺國。是時優毘伽梵志遙見世尊光色炳然、翳日月明。見已白世尊曰……。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.787中) ; 見已即往詣彼仙人鹿苑所。時見優陀耶梵志、亦在路行。遙見世尊、前白仏言。瞿曇、諸根寂靜顏色怡悅。汝師是誰、為從誰學、為學何法。爾時世尊以偈報言……。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.104上) ; 今此五人在波羅捺國仙人鹿苑中。念已便行、未至中間道逢梵志、名優婆耆婆。遙見世尊姿容挺特諸根寂定、圓光一尋猶若金山。便問曰。本事何師行何道法以致斯尊……。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.127上) ; 往詣迦施那國波羅痩斯城。乃路逢一外道、名為親近。彼見世尊形容端嚴清淨色相善好。問曰。具壽喬答摩、諸根端正清淨顏容皮膚細滑、於何教師而得出家受誰法教。……

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.081, 南伝28 p.173) ; 十八由旬の道 (atṭhārasayojanamagga) を旅して、途中で優波迦 (ウパカ Upaka) という活命 (ājīvika アージーヴィカ) [派] の苦行者に遇い、彼に自分が仏と成ったことを語られ……。
- ③中本 (大正04 p.148上) ; 径詣波羅奈國、未至中間、道逢梵志、名曰優吁。
- ⑦方広 (大正03 p.605下) ; 爾時如來作是念已、從菩提樹向迦尸國波羅奈城。……是時伽耶城傍有一外道、名阿字婆。
- ⑧LV. (Lef. p.405, 溝口 p.357) ; かの如来は、このように熟考された後に、「悟りの場」から立ち上がり、……カーシ (Kāśi) の国に到着された。この時、「悟りの場」の近くのガヤー (Gayā) 山の上(近く)で、一人のアージーヴィカ (ājīvaka) がこうして歩いて来られる如来を遠くから認めた。
- ⑪仏讚 (大正04 p.028下) ; 道逢一梵志 其名憂波迦
- ⑫BC. (15-01) ; なすべきことをすべて成就して、静寂にして光輝にみちた彼 (ブッダ) はただひ

とり行くにもかかわらず、あたかも衆人と共なるかのごとくであった。道で、ある敬虔な比丘が〔ブッダを〕見て、奇異の念をいだき、合掌してこう話しかけた。

⑬行經（大正04 p.087下）；行詣大城 波羅奈界 …… 有一達士 名曰尼撻 於路逢之

⑭過去（大正03 p.643下）；路逢外道、名優波伽。

⑮集經（大正03 p.808上）；爾時世尊從道樹下起已、安庠漸漸行到施陀羅村（隋言嚴熾）。……至純（之詢反）陀私湊（他梨反）羅聚落（隋言無角堆）中、於其路上、見有一乞婆羅門、名優波伽摩（隋言來事）。

⑯MV. (vol. III p.325 JonesIII p.316) ; (ウルヴィルヴァー [Uruvilvā] →ガヤー [Gayā] →アパラガヤー [Aparagayā] →ヴァシャーラー [Vaśalā] →チュンダドゥヴィーラ [Cundadvīla] と移動) アージーヴァカのウパカ (Upaka ājīvaka) は路の途中で世尊を見た。

⑰衆許（大正03 p.953中）；於是世尊自菩提樹、往波羅奈國鹿野之苑。時於路次有一仙人、名烏波謔。

[C] 後世の仏伝資料

③氏譜（大正50 p.092中）；經云。……路逢外道名優波伽。

⑥Bigandet. (vol. I p.115, 赤沼 p.150) ; そこで阿闍波羅尼拘律陀樹の地を離れて、婆羅那斯に赴き給うた。……迦耶村（Gaya）への途中……異教の沙門優波迦（Upaka）に遇い給うた。

【27-01】初転法輪——五比丘と会う

バーラーナシー（Bārāṇasī）の仙人墮処（Isipatana）・鹿野苑（Migadāya）についた世尊を、5人の比丘は約束に反していそいそと出迎える。

[A] 原始聖典

①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.171) ; 私は次第に遊行して、バーラーナシーの鹿野苑の5人の比丘たちのところに近づいた……。

① ‘Suttanipāta’ Vs.684 (p.133) ; (菩薩は) 仙人墮処という園林で法輪を転じられるであろう (vattessati cakkam Isipatane vane) 。

① ‘Buddhavamsa’ 26–17 (p.098) ; バーラーナシーの仙人墮処において法輪を転じた (Bārāṇasī Isipatane cakkam pavattitam mayā) 。

①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.008) ; 世尊は次第に遊行して、バーラーナシーの仙人墮処・鹿野苑 (Bārāṇasī Isipatana Migadāya) の五比丘の所に近づかれた。

③中阿含204「羅摩經」（大正01 p.777下）；時五比丘遙見我來、各相約勅而立制曰。諸賢、當知、此沙門瞿曇來、多欲多求……。

⑥增一阿含24–05（大正02 p.618下）；是時五比丘遙見世尊來。見已、各共論議。此是沙門瞿曇從遠而來。情性錯亂、心不專精。我等勿復共語、亦莫起迎、亦莫請坐……。

⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.787下）；時世尊捨去、往仙人鹿苑所。五比丘遙見世尊來、各各相誠勅言。此瞿曇沙門、行不著路迷荒失志、若來至此。汝等莫與言語、亦莫禮敬、更別施小座令坐……。

⑧五分律「受戒法」（大正22 p.104中）；於是世尊之波羅捺趣五人所。五人遙見佛來共作要言。瞿曇沙門昔日食一麻一米、尚不得道。今既多欲去道遠矣。但為敷一小座慎莫起迎禮拜問訊……。

⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；受梵王請往婆羅痖斯。三転十二行法輪、度五苾芻及以隨五苾芻已。

⑫根本有部律「破僧事」（大正24 p.127上）；詣迦施那國波羅痖斯城仙人墮處施鹿林中。是時五人

在彼林中、遙見世尊、各相謂言、共立一制。……

⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.156下）；往詣波羅痩斯城度橋陳如五苾芻衆。次度耶舍五人。次度賢衆六十人民。

⑫根本有部律「雜事」（大正24 p.292下）；時五苾芻於如來處、頻喚名字及以氏族、或云具壽。仏告諸苾芻。汝等不應於如來處喚其名字及以氏族或云具壽。

⑬法顯訳「大般涅槃經」（大正01 p.199下）；常在人天受樂果報無有窮盡。何等為四。一者如來為菩薩時、在迦比羅施兜國藍毘尼園所生之處。二者於摩竭提國、我初坐於菩提樹下得成阿耨多羅三藐三菩提。三者波羅捺國鹿野苑中仙人所住転法輪處。四者鳩尸那國力士生地熙連河側娑羅林中雙樹之間般涅槃處。

⑭法顯訳「大般涅槃經」（大正01 p.204中）；我於道場成阿耨多羅三藐三菩提、最初說法、度阿若橋陳如等五人。

*①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’（大本經 vol. II p.040）；ヴィパッシン仏は鹿野苑において初転法輪された。

*⑦四分律「衣捷度」（大正22 p.849中）；爾時世尊、在波羅捺國鹿野苑中。時五比丘往世尊所、頭面禮足却住一面。五人白仏。我等當持何等衣。仏言。聽持糞掃衣及十種衣……。

*⑦四分律「房舍捷度」（大正22 p.936中）；爾時世尊在波羅捺。時五人從坐起、偏露右肩右膝著地合掌白言。世尊。我等當住何等房舍臥具。仏言。聽在阿蘭若處樹下。若空房若山谷窟中、若露地若草蓐草積邊、若林間若塚間若水邊、若敷草若葉……。

*⑦四分律「雜捷度」（大正22 p.945上）；爾時世尊在波羅捺。五比丘來至仏所、頭面禮足却坐一面。白仏言。我等應持何等。仏言。聽持迦羅鉢舍羅鉢。時有比丘入僧中食無鉢。仏言聽比坐與……。

*⑧五分律「食法」（大正22 p.147下）；仏在波羅捺國。爾時五比丘、到仏所頭面禮足。白仏言。世尊。我等當於何食。仏言。聽汝等乞食。復白仏言。當用何器。仏言聽用鉢……。

*⑨十誦律「臥具法」（大正23 p.243上）；仏在波羅捺國。爾時五比丘白言。世尊。我等當何處住。仏言。汝等應山巖竹林樹下住。諸比丘於山巖竹林樹下宿……。

*⑪根本有部律「衆多學法」（大正23 p.901中）；仏在婆羅痩斯仙人墮處施鹿林中。時五苾芻雖復出家尚同俗服、威儀容飾甚不端嚴。爾時世尊作如是念。過去諸仏云何教聲聞衆著衣服耶。是時諸天前白仏言。如淨居天所著衣服。世尊即以天眼觀知如諸天所說事無差異。即告苾芻曰。汝從今後應同淨居天圓整着泥婆珊。

*⑫法天訳「毘婆尸仏經」（大正01 p.156下）；時毘婆尸仏既成道已、即作是念。我於何處先應說法利益有情。諦觀思惟、滿度摩王所都大城、人民熾盛機緣純熟。作是念已、即從座起整衣服手執應器次第行乞、往滿度摩城、詣安樂鹿野園中……。

[B] 仏伝經典

①NK. (vol. I p.081, 南伝28 p.172)；「阿沙陀（アーサールハ）月の満月の日に (*Āsālhiṇipūṇ-namāsiyam*) 波羅奈（*Bārāṇasī* バーラーナシー）へ行こう」と、十四日の朝早く夜の明け方に (*cātuddasiyam paccūsasamaye pabbhātāya rattiyā kālass' eva*) (途中ウパカ〔Upaka〕に会い) その日の夕方、イシパタナ（Isipatana）に著き給うた。五群の長老たちは、……礼拝致すまい。……「友よ」と呼びかけたり……してはならない。……仏は……五群の長老たちを呼んで、転法輪經（Dhammacakkappavattanasutta）を説き給うた。

②中本（大正04 p.148上）；於時如來、便詣波羅奈國古仙人處鹿園樹下、趣彼五人（拘憐、頗陞、拔提、十力迦葉、摩南拘利）。

③瑞應（大正03 p.480下）；仏已可梵天念誰可先度者。昔者父王遣五人侍我、今在山中、即復道還。五人見仏、自相謂言、是人來者、慎莫與起也。仏到、五人皆起、不覺作禮。……五人不對、願為

弟子、仏即手摩其頭、以為沙門。

- ⑤異出（大正03 p.620中）；意欲教之、當先教誰。吾王遣五人侍我、……仏即復故道而還。五人遙見仏來、不知何人、自相謂、是人來者、慎無作禮。……仏將五人俱去、行數日、仏以手摩五人頭鬚、皆為沙門。
- ⑥普曜（大正03 p.529上）；從次前行至波羅奈神仙鹿苑、詣五人所。於時五人遙見仏來、転相謂言、……假使來者慎莫為起亦勿迎逆。……於時五人稽首仏足悔過自責。
- ⑦方広（大正03 p.606上）；時阿字婆辭仏南行如來北逝經伽耶城。……龍名曰善見、明日設齋……盧醯多婆蘇都村、……多羅聚落……經娑羅村、……恒河辺。（船人との問答）……如來至波羅奈、……詣鹿野苑中。時五跋陀羅遙見世尊。
- ⑨僧伽（大正04 p.137下）；是時五人逢見如來、見已便相告言。……廣說如契經。
- ⑩十二（大正04 p.147上）；二年於鹿野園中為阿若拘隣等說法。復為畢婆般等說法。復為迦者羅等十七人說法。復為大才長者及二才念優婆夷說法。復為正念尼 說法。復為提和竭羅仏時四十二人說法。
- ⑪仏讚（大正04 p.028下）；次有五比丘 応聞初說法 …… 行詣波羅奈 古仙人住処 …… 隣如族子 次十力迦葉 三名婆瀧波 四阿濕波誓 五名跋陀羅 …… 遠見如來至 集坐共議言
- ⑫BC. (15-16)；そのとき、カウンディニヤ族の者、マハーナーマン、ヴァーシュバ、アシュヴァジト、およびバドラジトの五人の比丘は、遠くから彼（ブッダ）を見て、お互に次のような言葉を語り合った。
- ⑬行經（大正04 p.088上）；至波羅奈 …… 鹿野之園 …… 億寶意好 边方第三 第四馬氏 第五賢居 爾時五人 遙見仏來 還共論議 而相謂言 …… 不足起迎 亦莫禮待
- ⑭過去（大正03 p.644上）；爾時世尊、即復前行、往婆羅奈國、至橋陳如摩訶那摩跋波阿捨婆闍跋陀羅闍所止住處。時彼五人、遙見仏來、共相謂言。
- ⑮集經（大正03 p.808下）；爾時世尊、安庠漸行、從周蘭那娑陀羅去(即是無角堆)至迦蘭那富羅聚落(隋言耳城)。……至娑羅湊聚落(隋言調御城)、……至盧醯多柯蘇兜聚落(隋言閉塞城)、從閉塞城至恒河岸。（船師と問答）時從西門、入波羅奈城、……從城東門、……向鹿苑林。……爾時五仙、……唯橋陳如、獨一人心、不同此誓。……箕宿月初十五日内、十二日昊過半人影、當如是時、……合於鬼宿及房宿時。
- ⑯MV. (vol. III p.328 JonesIII p.320)；リシパタナ (Rśipatana) には五人のグループが滞在していた。即ち、Ājñāta Kauṇḍinya、Aśvakin、Bhadraka、Vāśpa、Mahānāmanである。
- ⑰MV. (vol. III p.340 JonesIII p.335)；アシャーダ月の第二の二週間の十二日、日影が人の長さの半分で、アヌラーダ星座が昇るとき (āśādhamāsasya uttarapakṣe dvādaśīyam ... dhyar-dhapapuruṣāyam chāyāyām anurādhe nakṣatre vijaye muhūrte)、その瞬間に法輪を転じた。
- ⑲衆許（大正03 p.953下）；爾時世尊即自往彼波羅奈國鹿野之苑。時彼五人其名灑替梨迦摩斛梨迦未斛羅囉囉鉢囉賀擎尾婆囉多等、……遙見世尊。……時彼五人常行乞食。世尊到已、或三人乞食二人奉事、或二人乞食三人奉事、互為給侍精進無懈。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.039上）；爾時世尊、即復前往波羅捺國、至橋陳如摩訶那摩跋波 阿捨婆闍跋陀羅闍 所止住處……。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092中）；經云、即復往波羅奈五人所。
- ④統紀（大正49 p.153下）；三月八日、世尊前行至波羅奈國鹿野園中……仏自二月八日成道、自九日至二十九日。為寂場三七滿、至三月六日、為水界定。四七日滿、三月七日、受提謂長者食。然後至鹿野園、正五七日内、三月八日也。涅槃云。初生出家成道轉法輪、皆以八日。

- ⑤JM. (p.029, 畑中 p.118) ; そしてアーサールハ月の満月の日 (*Āsālhapuṇṇamiyam kālass' eva*) 、早朝に衣鉢を持って 18 由旬の道 (*aṭṭhārasayojanamaggam*) を行道し、その日のうちの夕暮れ時に (*tam divasam yeva sāyañhasamaye*) 、イシパタナ (Isipatana) に至った。彼は五群の長老たちに法輪を転ずる談話をもって呼びかけた。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.117, 赤沼 p.155) ; 仏陀は優波迦にわかれ、歩を進めて、婆羅那斯の方へ赴き……鹿野苑に入って、不信の五比丘の住居の方へ進み給うた。…五人の最初の比丘は、橋陳如 (Kautagnya) 、跋提迦 (Baddha) 、婆沙波 (Wappa) 、摩訶那摩 (Mahanan) 、阿說示 (Asadzi) である。

【27-02】初轉法輪——中道を説く

釈尊は 5 人の比丘たちに苦行と樂行に近づいてはならないと、中道（八正道）を説く。

[A] 原始聖典

- ①SN.56-11 (vol.V p.420) ; 世尊は五比丘 (*pañcavaggiye bhikkhū*) に語られた。出家者はこれらの二つの極端に親しんではならない (*dve me bhikkhave antā pabbajitena na sevittabbā*) 。
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.010) ; 世尊は五比丘に告げられた。比丘らよ、二つの極端 (*dve' me antā*) があって、出家者は近づいてはならない。二つとは何か。愛欲において貪着すること (*kāmesu kāmasukhallikānuyogo*) 、自らを苦しめること (*attakilamathānuyogo*) である。如来はこの二つの極端を捨てて中道 (*majjhimā paṭipadā*) を覚った。
- ③中阿含204「羅摩經」(大正01 p.777下) ; 五比丘當知、有二辺行、諸為道者所不当学。一曰著欲樂下賤業凡人所行、二曰自煩自苦非賢聖求法無義相應。五比丘、捨此二辺有取中道、成明成智成就於定而得自在。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.788上) ; 比丘出家者、不得親近二辺。樂習愛欲、或自苦行、非賢聖法、勞疲形神不能有所辦。比丘除此二辺已、更有中道、眼明智明永寂休息、成神通得等覺、成沙門涅槃行。云何名中道……。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.104中) ; 仏復告曰。世有二辺不應親近。一者貪著愛欲說欲無過。二者邪見苦形無有道迹。捨此二辺便得中道、生眼智明覺向於泥洹……。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.127中) ; 爾時世尊告五人曰、出家之人不得親近二種邪師。云何為二、一者樂著凡夫下劣俗法及耽樂婬欲處。二者自苦己身造諸過失、並非聖者所行之法。
- ⑫安世高訳「転法輪經」(大正02 p.503中) ; 一時仏在波羅捺國鹿野樹下坐。……於是仏告諸比丘。世間有二事墮辺行。行道弟子捨家者、終身不當與從事。何等二……。

[B] 仏伝經典

- ③中本 (大正04 p.148中) ; 仏告五人、世有二事。…… 何謂為二、殺生婬泆、恃豪貪欲、極身勞苦、內無道跡。無是二事、是真道人不。…… 何謂取中。…… 具八正行、是名取中、止宿泥洹。
- ⑦方広 (大正03 p.607中) ; 如來……至後夜已喚五跋陀羅而告之言、……出家之人有二種障。何等為二、一者心着欲境而不能離、……二者……自苦其身而求出離。……汝等當捨如是二辺。我今為汝說於中道、……如是八法名為中道。
- ⑧LV. (Lef. p.416, 溝口 p.367) ; 夜の最後の区分（後夜）において (*rātryāḥ paścime yame*) 、如來はかの良い家柄出身の五人を呼んで、こう言わた。これら二つの極端は、出家修行者にとって、入ってはならない所である。……これら二つの極端を離れて進んだ後に、如來が法を教えられるのは、真ん中の道をもってである。つまり、例えば完全な視力（正見）……完全な瞑想（正

定) である。

- ⑨僧伽 (大正04 p.123中) ; 布現八賢聖道而転法輪。彼喻如影不在日前在闇前。此亦如是、一切結使不與道共相應、是故而転法輪。
- ⑩仏讚 (大正04 p.029下) ; 如來即為彼 略說其要道 愚夫習苦行 樂行悅諸根 見彼二差別 斯則為大過 非是正真道 …… 我已離二邊 心存於中道 …… 八道坦平正
- ⑪BC. (15-27) ; 愚かな人は自らを困憊させたり、あるいはまた感官の対象に執着したりする。不死に到達する道ではない、誤りにみちたこの二つの極端〔な方法〕をよく見なさい。……この二つの極端な道をともに棄てさり、私は中なるもう一つの道によってさとった。……八正道……。
- ⑫行經 (大正04 p.079上) ; 何由致道 願示其意 猶如有人 撒圧沙水 唐勞其力 終不得蘇 譬人穀牛 捨乳穀角 以其行憊 終不得乳 …… 猶如盛火 得風吹動 燒然乾薪 終不休滅
- ⑬過去 (大正03 p.644中) ; 爾時世尊、語橋陳如言。……是以苦樂、兩非道因。……今者若能棄捨苦樂、行於中道、心則寂定、堪能修彼八正聖道、離於生老病死之患。我已隨順中道之行、得成阿耨多羅三藐三菩提。
- ⑭集經 (大正03 p.811上) ; 世尊……告諸五比丘言。……出家之人、恒常須捨世間二事。何等為二。一受欲樂。……第二捨者、自身所困、受苦之處、非聖所歎。……我如是捨彼二邊已、說有中路。……八正聖道、……是中路。
- ⑮MV. (vol. III p.331 Jones III p.323) ; 世尊は五人の比丘達に説かれた。「宗教的生活を進める人にとって、この両極端がある。二つとは何か。感覚的快楽への耽溺……自身の苦行への耽溺がある。……これらの両極端を避け、如来の聖なる法と規律によるのは中道である。」
- ⑯衆許 (大正03 p.954上) ; 仏因制之曰。有二事法、修行之人而不得行。云何二事、為於色欲生貪、……若……修其苦行、……離於苦樂行於中道。……於此八正而廣修習、……趣無上正等正覺。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.039中) ; 爾時世尊語橋陳如言。 (出因果經)

【27-03】初転法輪——四諦三転十二行相を説く

釈尊は中道に統いて四諦を三転十二行相の形で説く。

[A] 原始聖典

- ①SN.56-11 (vol. V p.421) ; 比丘らよ、これが苦の聖諦である。……
- ②Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.010) ; また比丘らよ、これが苦聖諦である……。
- ③中阿含204「羅摩經」(大正01 p.778中) ; 彼如是定心清淨無穢無煩、柔軟善住得不動心、修學漏盡智通作證、彼知此苦如真……。
- ④雜阿含379 (大正02 p.103下) ; 一時仏住波羅捺鹿野苑中仙人住處。爾時世尊告五比丘。此苦聖諦、本所未曾聞法。當正思惟時、生眼智明覺……。
- ⑤雜阿含604 (大正02 p.167中) ; 此處仙人園鹿野苑。如來於中為五比丘三転十二行法輪。而說偈言。

此處鹿野苑 如來転法輪 三転十二行 五人得道跡
時王於是處興種種供養及立塔廟。

- ⑥增一阿含24-05 (大正02 p.619上) ; 是時世尊告五比丘。汝等當知、有此四諦。云何為四。苦諦、苦習諦、苦盡諦、苦出要諦……。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.788上) ; 四聖諦。何謂為聖諦。苦聖諦、苦集聖諦、苦盡聖諦、

苦出要聖諦。何等為苦聖諦……。

- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.104中）；復有四聖諦。苦聖諦苦集聖諦苦滅聖諦苦滅道聖諦。何謂苦聖諦……。
- ⑨十誦律「五百比丘結集三藏品」（大正23 p.448中）；一時仏在波羅奈仙人住處鹿林中……是時仏告五比丘、是苦聖諦、我先不從他聞法、中正憶念時、於諸法中、生眼生智生明生覺……。
- ⑩根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；受梵王請王婆羅彌斯、三転十二行法輪、度五苾芻及以隨五苾芻已。
- ⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.911上）；往婆羅彌斯國仙人墮處施鹿林中、為五苾芻及以隨五、三転十二行法輪。
- ⑫根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.948中）；受梵王請往婆羅彌斯、三転十二行法輪度五苾芻及以隨五苾芻已。
- ⑬根本有部律「出家事」（大正23 p.1027上）；時有梵天、來請世尊。於波羅彌斯、三転法輪。時會聽者、有大臣子五十餘人。既聞法已、並請出家及受近圓。
- ⑭根本有部律「破僧事」（大正24 p.127下）；爾時世尊告五人曰。此苦聖諦法、我未曾聞、由如理作意精勤力故、得淨慧眼智明覺生。……
- ⑮根本有部律「雜事」（大正24 p.292上）；如是我聞。一時薄伽梵在婆羅彌斯仙人墮處施鹿林中。爾時世尊告五苾芻曰。汝等苾芻、此苦聖諦於所聞法、如理作意、能生眼智明覺……。
- ⑯根本有部律「雜事」（大正24 p.299下）；受梵天請往婆羅彌斯三転十二行法輪。
- ⑰根本有部律「雜事」（大正24 p.399下）；至婆羅彌斯國為五苾芻、三転十二行四諦法輪。
- ⑱根本有部律「雜事」（大正24 p.406下）；一時薄伽梵在婆羅彌斯仙人墮處施鹿林中。爾時世尊告五苾芻曰。此苦聖諦於所聞法如理作意、能生眼智明覺。此中廣說如上三転法輪經。
- ⑲法顯訣「大般涅槃經」（大正01 p.204上）；於菩提樹下思八聖道究竟源底、成阿耨多羅三藐三菩提、得一切種智。即往波羅捺國鹿野苑中仙人住處、為阿若憍陳如等五人転四諦法輪、其得道跡。爾時始有沙門之稱出於世間福利衆生。
- ⑳安世高訣「転法輪經」（大正02 p.503中）；若諸比丘本末聞道、當已知甚苦為真諦……。
- ㉑義淨訣「三転法輪經」（大正02 p.504上）；一時薄伽梵在婆羅彌斯仙人墮處施鹿林中。爾時世尊告五苾芻曰、汝等苾芻、此苦聖諦……。
- *④雜阿含380～402（大正02 p.104中）；「一時仏住波羅捺仙人住處鹿野苑中」としてさまざまに形で四諦説が説かれている。初転法輪をイメージしたものと考えられる。

[B] 仏伝經典

- ③中本（大正04 p.148中）；若能斷貪、精進修明、可得泥洹。何謂泥洹。先知四諦。何謂為四、……何謂為苦、……何謂為習、……何謂為盡、……何謂入道。
- ⑦方廣（大正03 p.607中）；有四聖諦。何等為四、所謂苦諦、苦集諦、苦滅諦、證苦滅道諦。
- ⑧LV. (Lef. p.417, 溝口 p.367)；ここに四つの尊敬るべき真理がある。その四つとは何々であるか？それらは、苦しみ（苦）、苦しみの起源（集）、苦しみの妨げ（滅）、苦しみの妨げに導く道（道）である。
- ⑨僧伽（大正04 p.124下）；以四賢聖諦觀察四方分別決了。以無漏等見山踞生死岸、已踞彼生死岸。至善業等業等方便娛樂三昧、八賢聖道皆悉分別。
- ⑩仏讚（大正04 p.030中）；我知苦斷集 證滅修正道 観此四真諦 遂成等正覺
- ⑪BC. (15-38)；これはすべて苦である。これは〔苦の〕原因である。……これはその〔滅に至る〕道である。このように、解脱のための、先例のない、いまだ聞いたこともない真理の道について、私の目が開いたのである。

- ⑬行經（大正04 p.079中）；以是四諦 為是五人 三明解脱 以堅金剛 正法慧杵 壊碎五人 鹿
勞之山
- ⑭過去（大正03 p.644中）；爾時世尊、觀五人根堪任受道、而語之言。……橋陳如、我以知苦、以
斷習、以證滅、以修道故、得阿耨多羅三藐三菩提。……當知……若人不知四聖諦者。
- ⑮集經（大正03 p.811中）；爾時仏告諸比丘言。汝等比丘、至心聽聞。有四聖諦、何等為四、謂苦
聖諦、苦集聖諦、苦滅聖諦、得道聖諦。……
- ⑯MV. (vol. III p.331 Jones III p.324)；さて比丘達よ、ここに四つ聖なる真理がある。四とは何
か。
- ⑰衆許（大正03 p.954上）；爾時世尊……觀知五人堪能受法、即復告曰……是苦汝須知、……此是
集汝應斷、……此是滅汝應證、……此是道汝應修。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.039中）；爾時世尊觀五人根、堪任受道。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092中）；……仏具為解脫、五陰輪廻三有諸苦。陳如最初悟解四諦……。
- ④統紀（大正49 p.153下）；初為橋陳如說四聖諦法、汝今應當知苦斷集証滅修道。當仏三転四諦十
二行法輪。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.118, 赤沼 p.156)；私は今阿羅漢となった。世の中に、四真諦の理を知
るものは私のみである。

【27-04】初転法輪——コンダンニヤに法眼生ず

四諦の三転十二行相を聞いた5比丘の一人のコンダンニヤ（Konḍañña）に法眼が生じる（預
流果を得る）。これによってコンダンニヤはアンニャータコンダンニヤ（Aññātakonḍañña）
と呼ばれるようになる。

[A] 原始聖典

- ①SN.56–11 (vol. V p.423)；この教えを説かれたとき、具寿コンダンニヤに遠塵離苦の法眼が
生じた (āyasmato Konḍaññassa virajam vītamalam dhammacakkhum udapādi)。
- ①‘Theragāthā’ Vs.679 (p.069)；激しく精進する長老Konḍaññaはブッダに次いで正覚し、生死
を捨てて梵行を完成した (buddhānubuddho yo thero Konḍañño tibbanikkhamo, pahīnajātimar-
raṇo brahmaçariyassa kevali)。
- ①‘Theragāthā’ Vs.1246 (p.111)；激しく精進する長老Konḍaññaはブッダに次いで正覚し、常
に安樂住と遠離を得ている (lābhī sukhavihārānaṁ vivekānaṁ abhiñhaso)。
- ①‘Apadāna’ 03–01–007 (p.049)；（出家してから）7年目に仏は真実を説かれ、その名を
Konḍaññaと称する者は、最初に覚る (tato sattamake vasse Buddho saccam kathessati Kon-
ḍañño nāma nāmena paṭhamam sacchikāhi)。
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.011)；この教えを説かれたとき、Konḍaññaに遠塵離
苦の法眼 (viraja vītamala dhammacakkhu) が生じた。生じたものはすべて滅するものである
(yam kiñci samudayadhammaṁ sabbam tam nirodhadhammam) と。
- ④雜阿含379（大正02 p.104上）；爾時世尊說是法時、尊者橋陳如及八萬諸天、遠塵離垢得法眼淨。
- ⑥增一阿含24–05（大正02 p.619中）；爾時說此法時、阿若拘隣諸塵垢尽、得法眼淨。
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.788中）；爾時世尊說此法。時五比丘阿若橋陳如、諸塵垢尽得
法眼生。

- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.104下）；說是法時。地為六返震動。橋陳如遠塵離垢、於諸法中得法眼淨。
- ⑨十誦律「五百比丘結集三藏品」（大正23 p.448下）；說是法時、長老橋陳如及八萬諸天、遠塵離垢諸法中得法眼淨。
- ⑩根本有部律「僧伽伐尸沙002」（大正23 p.682中）；至余房而告之曰。此是上座阿若橋陳如所住之房。諸妹、然此世間盲冥無識、既罕將導長夜輪迴。爾時世尊初成正覺以妙智藥為開法眼、三転法輪令其啓悟。於大師衆弟子之中最為上首。耆年宿德善修梵行、受持法衣此為初首。汝應至心禮敬其足。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.128上）；世尊說此法時、具壽橋陳如、證於無垢無塵法中得法眼淨。及八萬天衆、於法中亦證法眼。
- ⑫根本有部律「雜事」（大正24 p.292中）；爾時世尊說是法時。具壽橋陳如及八萬諸天遠塵離垢得法眼淨。
- ⑬安世高訳「転法輪經」（大正02 p.503下）；佛說是時、賢者阿若拘鄰等及八千垓天、皆遠塵離垢諸法眼生。
- ⑭義淨訳「三転法輪經」（大正02 p.504上）；爾時世尊說是法時、具壽橋陳如及八萬諸天、遠塵離垢得法眼淨。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.174)；五群中の阿若橋陳如（アンニヤーコンダンニヤ Aññā-konḍāñña）長老は、その説法を聞いて智慧を獲、〔仏が〕この経の説を終え給うと、……預流果に入った。
- ③中本（大正04 p.148下）；說是法已、拘憐等五人、逮得法眼。
- ⑥普曜（大正03 p.530中）；拘憐知之。拘憐者知本際也。
- ⑧LV. (Lef. p.421, 溝口 p.371)；こうして十二の面を持つ法の車輪は立派に廻された。それはカウンディンヤによってよく認識された。カウンディンヤ（Kaundinya）を五人の修行者の中の第一人者として、法の眼が六十億の神々の所で立派に清められた。
- ⑪仏讚（大正04 p.030中）；說是真實時 橋憐族姓子 八萬諸天衆 …… 清淨法眼成 …… 於 佛弟子中 最先第一悟
- ⑫BC. (15-51)；このようにここ（鹿の園）で慈しみの心にみちた偉大な仙人がこの教えをお説きになったとき、カウンディニヤ氏族の者と百の神々とは……塵を離れた〔真理を見る〕眼（法眼）を得た。
- ⑯過去（大正03 p.644下）；橋陳如、汝等解未。橋陳如言、解已世尊、知已世尊。以於四諦得解知故、故名阿若橋陳如。當佛三転四諦十二行法輪時、阿若橋陳如、於諸法中、遠塵離垢、得法眼淨。
- ⑮集經（大正03 p.811下）；佛說如是法相之時、……彼橋陳如、即於坐處、諸垢皆除、煩惱盡滅、得法眼淨、如實而知。
- ⑯MV. (vol. III p.333 JonesIII p.327)；この説法によって、尊者アージュニヤータカウンディンヤ（Ājñātakaundinya）は損なわれることのない、汚れのない法眼淨を得た。
- ⑰衆許（大正03 p.954中）；爾時世尊如是三転十二行法輪。時尊者鉤掘等、除去塵垢得法眼淨。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.039下）；橋陳如、汝等解未。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092中）；經云。……陳如最初悟解四諦得法眼生。
- ④統紀（大正49 p.154上）；時橋陳如得法眼淨。

⑤JM. (p.029, 番中 p.119) ; 「転法輪経」が終わったとき、アンニヤータ・コンダンニヤ (Aññāta-Konḍañña) が18俱底の諸梵天とともに預流果に安立した。

【27-05】初転法輪——善来比丘戒

出家を希望するアンニヤータコンダンニヤに釈尊は「來れ、比丘よ。法はよく説かれた、正しく苦を滅するために梵行を行ぜよ」（善来比丘戒）と許される。これが彼の具足戒である。

[A] 原始聖典

①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.012) ; 世尊は言られた。「來れ、比丘よ。法はよく説かれた、正しく苦を滅するために梵行を行ぜよ (ehi bhikkhu, svākkhāto dhammo, cara brahma-cariyam sammā dukkhassa antakiriyāya) 」と。これが具寿（コンダンニヤ）に対する具足戒であった (sā 'va tassa āyasmato upasampadā ahosi) 。

②AN.01-014 (vol. I p.023) ; 私の弟子の中で出家してもっとも久しい者の第1はアンニヤー・コンダンニヤである。

⑦四分律「受戒捷度」（大正22 p.788下）；爾時尊者阿若橋陳如、見法得法成辦諸法已獲果実。前白仏言。我今欲於如來所修梵行。仏言來比丘、於我法中快自娛樂、修梵行盡苦原。時尊者橋陳如即名出家受具足戒。是謂比丘中初受具足戒、阿若橋陳如為首。

⑧五分律「受戒法」（大正22 p.105上）；於是橋陳如、從坐起頂禮仏足、白仏言。世尊、願與我出家受具足戒。仏言。善來比丘受具足戒。於我善說法律能盡一切苦淨修梵行。橋陳如鬚髮自墮、袈裟著身鉢盂在手。是為橋陳如已得出家受具足戒。

⑩僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.412下）；仏告舍利弗。如來所度阿若橋陳如等五人善來出家善受具足。共一戒一竟一住一食一學一說。次度滿慈子等三十人。次度波羅奈城善勝子。次度優樓頻螺迦葉五百人。次度那提迦葉三百人。次度伽耶迦葉二百人。次度優波斯那等二百五十人。次度汝大目連各二百五十人。次度摩訶迦葉闍陀迦留陀夷優波離次度釈種子五百人。次度跋度帝五百人。次度群賊五百人。次度長者子善來。如是等如來所度善來比丘出家善受具足、共一戒一竟一住一食一學一說。舍利弗。諸比丘所可度人亦名善來出家善受具足乃至共一說。是名善來受具足。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.129下）；仏告諸長者子曰。今正是時、善來苾芻、汝便出家修諸梵行。作是語已彼長者子等鬚髮自落袈裟著身成苾芻相。如經七日曾出家者其所悟解如百歲苾芻。

[B] 仏伝經典

③中本（大正04 p.148中）；五人便解、願為弟子。仏言、善來比丘、皆成沙門。

⑦方広（大正03 p.606下）；五跋陀羅俱白仏言、世尊我今願得於仏法中而為沙門。仏言、善來比丘、鬚髮自落法服着身便成沙門。

⑪仏讚（大正04 p.031上）；即命比丘來 応聲俗容廢 具足出家儀 皆成於沙門

⑫BC. (16-15) ; それから如来は彼（ヤシャス）に向かって、「比丘よ、来たれ」とおっしゃった。彼は比丘のしるし（出家の姿）をとったが、その瞬間に解脱した。

⑯過去（大正03 p.645上）；時彼五人、……而白仏言。世尊我等五人……我等今者欲於仏法出家修道、唯願世尊、慈愍聽許。於時世尊、喚彼五人、善來比丘。鬚髮自落、袈裟着身、即成沙門。

⑰集經（大正03 p.812下）；時橋陳如……而白仏言。善哉世尊、我入仏法、世尊度我、以為沙門。與具足戒、願作比丘。爾時仏告橋陳如言。善來比丘、入我法中、行於梵行。……是時長老橋陳如、身即便出家、成具足戒。

⑲衆許（大正03 p.954中）；於是五人既悟道已、乃白仏言。我等欲於仏法出家、願賜聽許。爾時如

來謂五人曰、善来苾芻。於是五人鬚髮自落、袈裟着身成沙門形。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.040上）；於時世尊、喚彼五人善来比丘……。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092下）；經云。時彼五人、既見道跡欲求出家。世尊喚言善来比丘、鬚髮自墮即成沙門。
- ④統紀（大正49 p.154上）；時五人白佛、欲求出家。世尊呼彼五人、善来比丘。須髮自落、袈裟著身、即成沙門。
- ⑤JM. (p.030, 番中 p.120)；「来たれ、比丘」の出家方法によって出家せしめ……。

【27-06】初転法輪——他の4人に法眼生ず

続いてヴァッパ（Vappa）、バッディヤ（Bhaddiya）、マハーナーマ（Mahānāma）、アッサジ（Assaji）の4人に法眼が生じる。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.012)；時にVappaとBhaddiyaに法眼が生じた。時に世尊はもたらされた食を食して、余の比丘らに説法し、3人の比丘らが乞食してもたらされたものによって、これら6人は生活した (yam tayo bhikkhū piṇḍāya caritvā āharanti, tena chabbaggo yāpeti)。時にMahānāmaとAssajiに法眼が生じた。
- ⑦四分律「受戒捷度」（大正22 p.788下）；爾時世尊、與尊者阿濕卑摩訶摩男比丘説法……即於座上諸塵垢尽得法眼淨。……時世尊與婆提婆敷二人説法……即於座上諸塵垢尽得法眼淨。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.105上）；仏便為四人説法教誡。跋提婆頗二人得法眼淨、見法得果、見法得果已。從坐起頂禮仏足、白仏言。世尊、願與我出家受具足戒。仏言。善来比丘。乃至鉢盂在手、亦如上說。復為二人説法教誡。頗鞞摩訶納得法眼淨、見法得果。見法得果已、從坐起頂禮仏足。白仏言。世尊、願與我出家受具足戒。仏言。善来比丘。乃至鉢盂在手、亦如上說。
- ⑩根本有部律「破僧事」（大正24 p.128中）；世尊説此四諦法時阿若憍陳如證諸漏尽心得解脫。四人於此法中離諸塵垢證清淨眼。爾時世間中有二應供。一是世尊、二是憍陳如。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.174)；仏はその処で安居に入り給うた。〔翌日〕仏は婆沙波（ヴァッパ Vappa）長老を教えて、精舎の中に在し、他の四人の比丘達は托鉢に出歩いた。〔そして〕婆沙波長老は午前中に預流果に達した。斯ようにして、その翌日は跋提耶（バッディヤ Bhaddiya）長老、その翌日は摩訶那摩（マハーナーマ Mahānāma）長老、又その翌日は阿説示（アッサジ Assaji）長老を、皆預流果に入らしめ、分月の五日に (pañcamiyam pakkhassa)、五人の比丘衆を集めて、無我相經（Anattalakkhaṇasttanta）を説き給うた。
- ⑥普曜（大正03 p.530中）；拘隣之等五人比丘、六十億天得法眼淨。
- ⑪仏讚（大正04 p.030下）；如來善方便 次令入正法 前後五比丘 得道調諸根
- ⑫BC. (16-01)；かくて一切知者（ブッダ）はアシュヴァジトを始めとする、心に〔教えを受け容れる〕用意のできた、かの比丘たちすべてを解脱への教え（法）に悟入させた。
- ⑭過去（大正03 p.644下）；時彼摩訶那摩等四人、……阿若憍陳如、獨悟道跡、……世尊若更為我説法、我等亦當復悟道跡。……爾時世尊、……即便重為廣説四諦。于時四人、於諸法中、亦離塵垢、得法眼淨。

- ⑯集經（大正03 p.812下）；余四比丘、各說法要、隨機教授。……當是之時、次一長老、跋提梨迦（隋言小賢）、其次長老名婆沙波（隋言起氣）、……得法眼淨。……彼之長老摩訶那摩（隋言大名）、并及長老阿奢陀（隋言調馬）、……得淨法眼。
- ⑰MV. (vol. III p.337, Jones III p.330) ; この法が説かれた時、他の四人の比丘も法眼淨を得た。
- ⑯衆許（大正03 p.954中）；【27-04】に含む。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.040上）；即便重為廣說四諦。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092下）；經云。……次為四人重說四諦、亦離塵垢得法眼淨。
- ④統紀（大正49 p.154上）；世尊知四人心念、重為廣說四諦亦得法眼淨。
- ⑤JM. (p.029, 番中 p.119) ; 白月の最初の日には (Pāṭipadadivase) ヴァッパ (Vappa) 長老に、翌日にはヴァッディヤ (Bhaddiya) の長老に、3日目には (tatiyodivase) マハーナーマン (Mahānāman) 長老に、4日目には (catutthiyam) アッサジ (Assaji) 長老に法眼が生じた。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.119, 赤沼 p.158) ; この氷の様な不信が解けて仏道を信するに至った五比丘は、豫流果に入った。

【27-07】初転法輪——無常・苦・無我を説く

釈尊が法眼を生じた5人の比丘らに、一切は無常であり、苦であり、無我であると説く。

[A] 原始聖典

- ①SN.22-059 (vol. III p.66) ; バーラーナシーの鹿野苑の因縁。世尊は五人の比丘に説かれた。色は無我である。若し色が無我ならば色は病気をしない……。五人の比丘は心解脱した (cittāni vimuccim̄su) 。
- ②Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.013) ; 時に世尊は五人の比丘に説かれた。「比丘らよ、色は無我である。もしこの色が我であるならば、この色は病気となることはないであろう。色においてこうしよう、こうしないでおこうということができるであろう。しかし色は無我であるがゆえに、病気ともなり、色においてこうしよう、こうしないでおこうということができない。…
- …
- ③雜阿含034（大正02 p.007下）；一時仏住波羅捺國仙人住處鹿野苑中。爾時世尊告余五比丘、色非有我、若色有我者、於色不應病苦生……。仏說此經已、余五比丘不起諸漏、心得解脱。
- ④四分律「受戒捷度」（大正22 p.789上）；時世尊食後告五比丘。比丘、色無我。若色是我者、色不增益、而我受苦。若色是我者、應得自在。欲得如是色不用如是色。以色無我故、而色增長。故受諸苦。亦不能得随意欲得如是色便得、不用如是色便不得。受想行識亦復如是。云何比丘、色是常耶、色無常耶……。
- ⑤五分律「受戒法」（大正22 p.105上）；於意云何、色為是常為無常乎。答言無常……。
- ⑥根本有部律「破僧事」（大正24 p.128中）；爾時世尊復告四人曰。汝等當知、色無我。若色有我、不應生諸疾苦、能於色中、作如是色、不作如是色。是故汝等、知色無我故、生諸疾苦、不能作如是色、不作如是色。受想行識亦復如是應知。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.174) ; (サヴァナ月の黒) 分月の五日に (pañcamiyam pak-khassa) 五人の比丘衆を集めて、無我相經 (Anattalakkhanasttanta) を説き給うた⁽¹⁾。

- ⑦方広（大正03 p.607下）；語橋陳如等言、眼是無常苦空無我無人無衆生無寿命。
- ⑧LV. (Lef. p.417, 溝口 p.370) ; 眼は永続的なものでもなく……。
- ⑨僧伽（大正04 p.138下）；是時云何復生此苦。……於苦觀空最初微妙等度彼処、……於苦觀無我。
- ⑩過去（大正03 p.645上）；爾時世尊、問彼五人。汝等比丘、知色受想行識為是常為無常耶。為是苦為非苦耶、為是空為非空耶、為有我為無我耶。
- ⑪集經（大正03 p.813上）；爾時世尊、……告五比丘言。……若知諸色是無我者、是色則不作惱壞相、當不受苦。……受想行識、亦復如是……此識無常、……此識是苦。
- ⑫衆許（大正03 p.954中）；爾時世尊復謂鉤掘等言。色是常是無常、是苦是非苦、是空是非空、是有我是無我、受想行識是常是無常。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.040上）；爾時世尊問彼五人。（出因果經）
- ②統紀（大正49 p.154上）；佛復為說五陰無常苦空無我。

(1) 原文にはpañcamiyam pakkhassaという表現しかないが、バーラーナシーに到着したのがアーサルハ月の満月の日（自分15日）とするから、その第5日目はサヴァナ月の第5日と解釈した。

【27-08】初転法輪——五比丘心解脱す

無常・苦・無我の教えを聞いた5人の比丘たちが心解脱して、阿羅漢果を得る。釈尊を含めて阿羅漢は6人となる。

[A] 原始聖典

- ①MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ (vol. I p.173) ; 彼ら（5人の比丘）に知見が生じた、我らの解脱は不動であり、これが最後の生であり、再びこの生に戻らない (akuppā no vimutti, ayam antimā jāti, na'tthi dāni punabbhavo) 、と。
- ②Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.014) ; 世尊が教えを説かれたとき、5人の比丘は取著なく漏から心解脱した (anupādāya āsavehi cittāṇi vimuccim̄su) 。その時世間に阿羅漢は6人となった (tena kho pana samayena cha loke arahanto honti) 。
- ③中阿含204「羅摩經」（大正01 p.778中）；如是五比丘、比丘漏盡得無漏、心解脱慧解脱、自知自覺自作證成就遊、生已盡梵行已立、所作已辦不更受有知如真。
- ④增一阿含24-05（大正02 p.619中）；是時五比丘盡成阿羅漢。是時三千大千刹土有五阿羅漢、佛為第六。
- ⑤四分律「受戒捷度」（大正22 p.789中）；爾時世尊說此法時、五比丘一切有漏心解脱、得無礙解脱智生。爾時此世間有六羅漢、五弟子如來至真等正覺為六。
- ⑥五分律「受戒法」（大正22 p.105上）；說是法時、五比丘一切漏盡、得阿羅漢道。爾時世間有六阿羅漢。
- ⑦根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；受梵王請王婆羅痖斯、三転十二行法輪、度五苾芻及以隨五苾芻已。
- ⑧根本有部律「破僧事」（大正24 p.128下）；爾時世尊說此法時、彼四人等聞此法已、心得解脱證阿羅漢果。是時世間有六阿羅漢。佛為第一。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.174) ; この説法（無我相経）が終ると、五人の長老たちは皆阿羅漢果に入った。
- ③中本（大正04 p.149上）；説是法時、拘憐等五人、漏尽意解、皆得羅漢。
- ⑦方広（大正03 p.608上）；爾時世尊為橋陳如、三転十二行法輪已。橋陳如等悉了達諸法因縁、漏盡意解成阿羅漢。即於是時三寶出現、婆伽婆為仏宝、三転十二行法輪為法宝、五跋陀羅為僧宝。
- ⑬行經（大正04 p.079中）；以是四諦 為是五人 三明解脱 以堅金剛 正法慧杵 壊碎五人 塵勞之山 億宝始初 覚正諦法
- ⑭過去（大正03 p.645上）；時五比丘、聞仏説是五陰法已、漏盡意解、成阿羅漢果。……於是世間、始有六阿羅漢。仏阿羅漢是為仏宝、四諦法輪是為法宝、五阿羅漢是為僧宝、如是世間三寶具足、為諸天人第一福田。
- ⑮集經（大正03 p.813下）；爾時世尊、説是法已。時五比丘、於有為中、諸漏滅尽、心得解脱。當於是時、此世間有六阿羅漢。
- ⑯衆許（大正03 p.954中）；爾時五苾芻聞仏説是五蘊之法、乃得漏盡證於無學。……三寶之名今已具足。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.040上）；漏盡意解成阿羅漢果。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092下）；經云。……重説五陰解成羅漢。世間有六仏是仏宝、四諦法寶、五人僧寶、是世間三寶、具足天人第一福田。
- ④統紀（大正49 p.154上）；仏復為説五陰無常苦空無我、漏盡意解成阿羅漢。
- ⑤JM. (p.030, 番中 p.119) ; 5日目に (*pañcamiyam*) 、その全ての五群比丘は「無我相経 (Anattalakkhaṇasttanta)」が終わったとき、阿羅漢果に安立した。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.120, 赤沼 p.158) ; 其等の五比丘の入道は同じ一つ場所に一時に六人の阿羅漢が集まり給うたという光輝ある驚くべき光景を世界に示したのである。

【28-01】ヤサの教化——ヤサに法眼生ず

バーラーナシー (Bārāṇasī) の長者の子ヤサ (Yasa) が釈尊に会いに来て説法を聞き、法眼を生じる。

[A] 原始聖典

- ① ‘Theragāthā’ Vs.117 (p.017) ; (Yasa theraの詩) 油を上手に塗り、よい衣服を着、あらゆる装身具で飾られていた（在家の）私は、三明に到達した、仏の教えは実行された (suvinutto suvansano sabbābharaṇabhūsito, tisso vijjā aijhagamim, katam buddhassa sāsanam)。
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.015) ; そのときバーラーナシーにヤサという纖細な性質の良家の子、長者の子があった (Bārāṇasiyaṁ Yaso nāma kulaputto setṭhiputto sukhumālo hoti) ……。世尊が四聖諦を説かれたとき、ヤサに法眼が生じた。「生じるものはすべて滅するものである」と。
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.789中）；爾時世尊遊波羅捺國。時波羅捺国有族姓子、名耶輸伽。父母只有此一子、愍念瞻視不去目前……。世尊漸與説法、勸令發歡喜心……。即於座上諸塵垢尽得法眼淨、見法得法成就諸法、自身得果證。前白仏言、我欲於如來所淨修梵行。仏言、比丘來、於我法中快自娛樂、修梵行盡苦源。時耶輸伽、即受具足戒。

- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.105上）；復有長者子、名曰耶舍。本性賢善。厭離世間。喜樂聞法。世尊作是念。彼耶舍長者子、當以信出家……。佛為說種種妙法示教利喜、次說四諦苦集滅道。即於坐上遠塵離垢得法眼淨。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.128下）；爾時佛在波羅痩斯城婆羅捺河辺。時彼城中有長者子。名曰耶舍……。耶舍亦爾。初聞佛說心器清淨、便能了知四聖諦法、證預流果、見法得法極通達法。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.175) ; それから佛は、耶舍 (Yasa) という良家の子の〔帰仏の〕可能性あるを見て、彼が夜分に厭世の志を起し、家を棄てて出て来た時、「來れ耶舍よ」と呼び留めて、その晩に預流果、翌日阿羅漢果に入らせ給い……。
- ③中本（大正04 p.149上）；於時波羅奈城中、有長者名阿具利。有一子、字曰迦那（晋言宝称）。時年二十四、……中夜歎覺、……尋光詣佛。……佛言、童子善來……逮無垢法眼。
- ⑪仏讚（大正04 p.030下）；時彼鳩尸城 長者子耶舍 夜睡忽覺悟 …… 出家詣山林 …… 如來夜經行 聞唱惱亂聲 …… 即命汝善來 此有安隱處 …… 耶舍聞佛教 心中大歡喜…… 聖慧冷然開
- ⑫BC. (16-03) ; ……そのころ、ヤシャスという名のある長者の息子は……〔世間を〕厭離する気になった。……人の心と煩惱とをよく知れる如来は、〔ヤシャスを〕ごらんになって仰せられた。
「絶対の安らぎ（涅槃）のなかには災いはない。來れ。至福を得よ」
- ⑬行經（大正04 p.079下）；時波羅奈城 有大長者子 …… 厥名曰寶稱 ……
- ⑭過去（大正03 p.645上）；爾時有長者子、名曰耶舍。是時耶舍、聞說此語、即於諸法、遠塵離垢、得法眼淨。
- ⑮集經（大正03 p.814下）；爾時彼城有一最大巨富長者、名曰善覺。……一男兒、……耶輸陀（耶輸陀者隋言上傘）。時耶輸陀、即於彼坐、遠離塵垢、盡煩惱界、離煩惱已、於諸法中、生淨法眼。……得法眼淨。
- ⑯MV. (vol. III p.402 JonesIII p.402) ; ベナレス (Vārāṇasī) に一人のギルドの長がいた。樹神に祈り、子供が生まれ、ヤショーダ (Yaśoda) と名づけた。成人し、世尊の話を聞いて出家を願う。仏所に詣り四聖諦を聞いて、三明 (tisro bhijñā) 、六通 (śadbhijñā) 、自在神力 (balavasībhāva) を得た。
- ⑰衆許（大正03 p.954下）；時波羅奈国中有俱梨迦長者子、名曰耶舍。……時彼耶舍……譬如白色之……衣易為染着、得離塵垢獲法眼淨……。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.040上）；爾時有長者子、名曰耶舍。……是時耶舍聞說此語、……法眼淨。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092下）；經云。次度長者子耶舍得初果。
- ④統紀（大正49 p.154上）；五年(甲申)有長者子、名曰耶舍。……於中夜見空中光開門尋光趣鹿野苑。
- ⑤JM. (p.030, 番中 p.119) ; そして大師は、そこで族姓子ヤサ (Yasa) が家を捨てて出たその夜のうちに彼を預流果に安立せしめ（、翌日阿羅漢位に安立せしめ）た。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.120, 赤沼 p.159) ; 佛陀が鹿野苑に在した時であった。……婆羅那斯の國に耶舍 (Ratha) と名くる長者の息子があった。……鹿野苑の幽居へ向けて歩を運んだ。……佛陀は法を説き初め給うた。……これらの懇ろなる教を承けて、……耶舍はすべての欲情を離れて、直に豫流果に入ったのである。

【28-02】ヤサの教化——ヤサの父が優婆塞となる

ヤサ (Yasa) を探しに来た父親に、釈尊はヤサの姿を隠して法を説き、ヤサの父が仏・法・僧の三宝に帰依して優婆塞となる。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.016) ; 長者ヤサに法眼が生じた。彼は「私は世尊と法とサンガに帰依します (aham bhante bhagavantam saranam gacchāmi dhammañ ca bhikkhu-samghañ ca)」と、初めて三帰依を唱えた優婆塞となった (so 'va loke pañhamam upāsako a-hosi tevāciko)。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.789下)；耶輸伽父……即於座上諸塵垢尽得法眼淨……。前白仏言。我今帰依仏帰依法帰依僧。唯願世尊、聽為優婆塞。自今已去尽形壽、不殺生乃至不飲酒。是為最初優婆塞三自歸耶輸伽父為首。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.105中)；後伎直覺、共求耶舍不知所在、白其父母。父母四向推求絡繹而追……。彼即於坐上遠塵離垢得法眼淨、見法得果。見法得果已、受三自歸次受五戒。是為諸優婆塞於人中耶舍父最初受三歸五戒。
- ⑩根本有部律「破僧事」(大正24 p.129中)；……乃至令彼長者得預流果。

[B] 仏伝經典

- ③中本 (大正04 p.149中)；仏為説法、生死由癡、恩愛有離。破二十億惡、入須陀洹。
- ④過去 (大正03 p.645下)；無常苦空無我。……時耶舍父、聞説此言、即於諸法、遠塵離垢、得法眼淨。……即於仏前、受三自歸。於是閻浮提中、唯此長者、為優婆塞、最初獲得供養。
- ⑤集經 (大正03 p.818中)；時彼長者即於彼坐、遠離塵垢、如實證知、於諸法中、得法眼淨。……爾時人間彼大長者、最在初首、為優婆塞。人身之中、以三白成三歸依者、謂耶輸陀善男子父。
- ⑥MV. (vol. III p.413 JonesIII p.414)；ヤショーダ (Yaśoda) の両親は法眼淨を得た。
- ⑦衆許 (大正03 p.955中)；爾時世尊又為廣說四諦之法。時俱梨迦長者因是除去塵垢得法眼淨。… …仏言、俱梨迦、汝今於吾受得三歸依竟。當為世間第一優婆塞。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.040中)；時耶舍父聞説此言……法眼淨。(出因果經)
- ③氏譜 (大正50 p.092下)；父來覓子。仏為説法得法眼淨。為説三歸優婆塞初。
- ④統紀 (大正49 p.154上)；時耶舍父尋子仏所。仏為説法得法眼淨。受三自歸、為最初優婆塞。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.122, 赤沼 p.161)；耶舍の父は、息子の足跡を認め、その跡を遂うて、仏陀の御住居の見ゆる処まで進んだ。……仏陀はこの勝れた聴者のために教法を説き給うたが、聴者は直に心開けて豫流果に入った。

【28-03】ヤサの教化——ヤサ阿羅漢果を得る

出家の許しを得たヤサが直ちに心解脱して阿羅漢果を得る⁽¹⁾。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.017)；世尊がヤサの父に説法されたとき、ヤサは執著なく、諸漏から心解脱した。

- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.789下）；爾時世尊與耶輸伽父說法。時耶輸伽身漏盡意解、得無碍智解脫爾時世間有七羅漢。弟子有六仏為七。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.105下）；時耶舍觀諸法漏盡心得解脫。其父白仏言。仏為我說法而使耶舍快得善利。於是耶舍從坐起、白仏言。世尊、願與我出家受具足戒。仏言。善來比丘。乃至鉢盂在手。亦如上說。爾時世間有七阿羅漢。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.129中）；其子耶舍、猶著俗時種種珍寶莊嚴之具、得阿羅漢果。……於是時中世間有七阿羅漢。仏為第一。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.175) ; 翌日阿羅漢に入らせ給い……（【28-01】に含む）。
- ③中本（大正04 p.149上）；……仏言、善來比丘、便成沙門。……宝称心解、便得羅漢。
- ⑪仏讚（大正04 p.031上）；宿殖善根力 疾成羅漢果
- ⑫BC. (16-07) ; かくて前世〔に植えた善〕根の力によって、そのままの〔世俗の〕姿をとりながら、身によりまた心によって〔ヤシャスは〕阿羅漢のさとりを得た。
- ⑭過去（大正03 p.645中）；於是如來、重說四諦。漏盡意解、心得自在、成阿羅漢果。……心自念言、世尊所以說此偈者、正当以我猶着七寶、我今宜當脫如此服、……聽我出家。仏言、善來比丘。鬚髮自落、袈裟着身、即成沙門。
- ⑯集經（大正03 p.818中）；其耶輸陀善男子父於說法時、如是證見、……一切法中、心得解脫……長者去未久間、……與我出家。受具足戒……善來比丘。……時其長老耶輸陀身即成出家、得具足戒、為大沙門。……此世間中、七阿羅漢。
- ⑰衆許（大正03 p.955上）；於是世尊又為廣說苦集滅道四聖諦法。於是耶舍即於座上得漏盡意解證無學果。……猶着在家寶飾之衣、……願為沙門。……仏言、善來苾芻。鬚髮自落袈裟着身、成沙門形儀相具足。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.040中）；於是如來重說四諦……成阿羅漢果。……心自念言、世尊所以說此偈者……。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092下）；（長者子、父、耶舍、同友五十人……得初果）不久皆得羅漢。
- ④統紀（大正49 p.154上）；仏說四諦成阿羅漢、願求出家。仏言善來比丘、即成沙門。
- ⑤JM. (p.030, 番中 p.119) ; 翌日阿羅漢位に安立せしめた。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.123, 赤沼 p.164) ; 仏陀が父に説法して在した間、若き耶舍は大師から受けた最高の格言について、深奥にして莊重な黙想に耽っていた。……父が去って間もなく、耶舍は比丘となった。ここに於て、世間に七阿羅漢があることとなつた。

(1) 出家しないで阿羅漢となったとするものもある。

【28-04】ヤサの教化——ヤサを侍者とする

釈尊はヤサを侍者として長者の食事供養を受ける。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.017) ; ヤサの父はヤサを隨從沙門 (pacchāsamaṇa) として食を受けられるよう世尊に請い、世尊は受けられた。ヤサは具足戒を得た。その時世間に阿

羅漢は7人となった (tena kho pana samayena satta loke arahanto honti)。

- ⑦四分律「受戒捷度」(大正22 p.790上) ; 唯願世尊、今受我請、及耶輸伽并侍比丘。爾時世尊默然受請。
- ⑦四分律「藥犍度」(大正22 p.869上) ; 爾時世尊在波羅捺。有居士耶輸伽父往詣仏所頭面禮足却坐一面。爾時世尊無數方便為說法開化令得歡喜。耶輸伽父聞仏說法開化、心大歡喜已從坐起、白仏言。願受我請。時耶輸伽侍從世尊後。時世尊默然受請……。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.129中) ; 爾時長者白仏言。世尊、願仏世尊至明日時與子耶舍來我宅中受我供養。爾時世尊默受其請。長者知仏許已禮足而去。爾時世尊。至時著衣持鉢與耶舍童子到長者宅。

[B] 仏伝經典

- ⑯集經(大正03 p.819上) ; 爾時世尊於晨朝時、着衣持鉢、命耶輸陀、用為侍者、向其父家。

[C] 後世の仏伝資料

- ⑥Bigandet. (vol. I p.123, 赤沼 p.165) ; 翌朝、仏陀は黄衣をつけて、鉢を持し、耶舍比丘を伴うて家を出で、約束に従うて、耶舍の父の家へ行き給うた。……(耶舍の母と妻とによって)仏陀とその忠実の侍者とは、恭しく饗せられた。

【28-05】ヤサの教化——ヤサの母と妻が優婆夷となる

ヤサの母と妻が仏・法・僧の三宝に帰依して優婆夷となる。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya 'Mahākhandhaka' (vol. I p.018) ; 具寿ヤサの母と旧妻 (āyasmato Yasassa mātā ca purāṇadutiyikā) に法眼が生じた。「生じるものは滅すものである」と。彼女らは三宝に帰依し、初めて三帰依を唱えた優婆夷となった (tā 'va loke paṭhamam upāsikā ahesum tevācikā)。
- ⑦四分律「受戒捷度」(大正22 p.790上) ; 耶輸伽母及其本二……即於座上諸塵垢尽得法眼淨、見法得法成就諸法。即白仏言、自今已去歸依仏法僧、聽為優婆夷。我自今已去盡形壽、不殺生乃至不飲酒。是謂最初受三自歸優婆夷、耶輸伽母及其本二為首。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.105下) ; 仏言。姊妹汝歸依仏歸依法歸依比丘僧。即受三歸次受五戒。是為耶舍母初受三自歸五戒。爾時世尊為耶舍母擧家大小、說種種妙法示教利喜。皆遠塵離垢得法眼淨、見法得果。見法得果已、皆受三自歸次受五戒。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.129中) ; 時耶舍母及妻……乃至證預流果。爾時其母及妻、既見法證法已。

[B] 仏伝經典

- ⑯集經(大正03 p.819上) ; 是時長老耶輸陀母、並及長老耶輸陀婦、來向仏邊。……世尊次第而為說法。……彼等於坐、遠離諸塵、……得淨法眼。……歸依仏法、及歸依僧、即受五戒。爾時世間、當於是日、最初人中、三歸受戒、先得成為優婆夷者、……母、並……婦、所有一切諸眷屬等。
- ⑯MV. (vol. III p.413 JonesIII p.414) ; 【28-02】に含む。(ヤサの両親、但し妻の記述なし)
- ⑰衆許(大正03 p.956上) ; 爾時世尊為耶舍母及諸眷屬、如應說法……耶舍母等不起於座得法眼淨。……爾時世尊即為受其三歸。

[C] 後世の仏伝資料

⑥Bigandet. (vol. I p.125, 赤沼 p.165) ; 仏陀の座を占め給うや、耶舎の母と妻とは直に仏陀の御許に来つて世尊を礼し奉つた。仏陀はこれに対して教法を説き、……二人の女性は……豫流果に入り、仏教教団最初の優婆夷となつた。……女性の内で、一番最初に三宝……に帰依した人達であった。

【29】ヤサの4人の友人の出家

ヤサの友人4人はヤサが出家して阿羅漢果を得たことを聞いて、彼らも出家して阿羅漢果を得る。

[A] 原始聖典

①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.018) ; 具寿ヤサに4人の在家の友人がいた。バーラーナシーの良家の息子たちで、Vimala、Subāhu、Puṇṇaji、Gavampatiといった。彼らはヤサが出家したと聞いて、彼らも出家して心解脱を得た。その時世間に阿羅漢は11人となつた (tena kho pana samayena ekādasa loke arahanto honti)。

⑦四分律「受戒捷度」(大正22 p.790中) ; 爾時世尊、遊波羅捺国。時耶輸伽有少小同友四人、在波羅捺住。一名無垢、二名善臂、三名満願、四名伽梵婆提。……便得尽有漏心得解脱無礙解脱智生。時此世間有十阿羅漢、弟子如來為十一。

⑧五分律「受戒法」(大正22 p.105下) ; 爾時耶舎有四友人。一名満足、二名善博、三名離垢、四名牛主。聞耶舎於沙門瞿曇所出家修梵行、共議言。其道必勝、乃使豪族不顧世榮。我等可共到大沙門所淨修梵行。四人欣悅慕道於心……。爾時世間有十一阿羅漢。

⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.129下) ; 時波羅痩斯城諸長者等、聞第一長者子耶舎剃除鬚髮被於法服隨仏世尊而作弟子。其第二長者子、名曰富樓那。其第三長者子、名曰無垢。第四長者子、名曰驕梵拔提。第五長者子、名曰妙肩。……善來苾芻、汝便出家修諸梵行。作是語已彼長者子等鬚髮自落袈裟著身成苾芻相。……時四苾芻聞仏此言即便悟解證阿羅漢果。時此世間有十一阿羅漢。仏為第一。

⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.156下) ; 往詣波羅痩斯城度橋陳如五苾芻衆。次度耶舎五人。次度賢衆六十人民。

[B] 仏伝經典

①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.175) ; 他に彼(ヤサ)の友達五十四人をも「來れ比丘よ」という出家法によって出家させて、阿羅漢果に達せしめ給うた。

③中本(大正04 p.149中) ; 於時宝称親友四人、一名富禰、二名惟摩羅、三名橋炎鉢、四名須陀。聞宝称已作沙門、……共出詣仏、……願為弟子。仏言、善來比丘、皆成沙門……便得羅漢。

⑪仏讚(大正04 p.031上) ; 先有俗遊朋 其數五十四 尋善友出家 隨次入正法

⑫BC. (16-16) ; それから彼(ヤシャス)の友人五十人と三人と一人とが、彼に対する友情に惹かれて〔次々と〕その真理を得るにいたつた。

⑬行經(大正04 p.080中) ; 縁宝称功德 四友因得度 滿成與無怙 牛呵及善與

⑮集經(大正03 p.819中) ; 爾時天竺波羅奈城、有四居士大富長者。……第一名毘摩羅(隋言無垢)、其第二名修婆睺(隋言善臂)、第三名為富蘭那迦(隋言満足)、第四名為伽婆跋帝(隋言牛主)。……彼四長者皆悉一時成阿羅漢。……彼時世間成就一十一阿羅漢。

⑯衆許(大正03 p.956中) ; 爾時俱梨迦復有四子。一名布囉努、二名尾摩羅、三名諦饅鉢帝、四名

蘇摩斛。見彼耶舎投仏出家證羅漢果、……兄弟四人、……詣仏所、證羅漢果、是時乃有十大阿羅漢。

[C] 後世の仏伝資料

- ⑤JM. (p.030, 番中 p.120) ; また同じく、その場で彼（ヤサ）の友達54人を阿羅漢位に安立せしめた。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.129, 赤沼 p.167) ; 婆羅那斯の名門の出で、嘗て耶舎と厚い友情を汲みかわした四人の貴公子があった。……耶舎は仏陀の御許に四人の友達を伴うて、自分の受けたと同じ御教を四人のものに垂れ給わんことを願うた。……この説法が終わった時に、若き公子達は比丘となるに相応わしい心根を得て、仏弟子となった。これで世界に十一人の阿羅漢があることとなつた。

【30】ヤサの50人の友人の出家

ヤサの友人50人はヤサが出家して阿羅漢果を得たことを聞いて、彼らも出家して阿羅漢果を得る。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.020) ; 具寿ヤサに50人の在家の友人がいた。良家の息子たちで、彼らはヤサが出家したと聞いて、彼らも出家して心解脱を得た。その時世間に阿羅漢は61人となつた (tena kho pana samayena ekasat̄hi loke arahanto honti) 。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.790中) ; 爾時世尊、遊波羅捺国。時耶輸伽少小同友有五十人、在波羅捺城外住。……有漏心解脱無礙解脱智生。時此世間、有六十阿羅漢、弟子如來為六十一。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.106上) ; 耶舎昔所交遊、復有五十人。聞耶舎於瞿曇所修行梵行、共議出家乃至得阿羅漢。皆如上說。爾時世間有六十一阿羅漢。
- ⑩根本有部律「出家事」(大正23 p.1027上) ; 時有梵天、來請世尊。於波羅痩斯、三転法輪。時會聽者、有大臣子五十余人。既聞法已、並請出家及受近圓。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.130上) ; 波羅痩斯城中有五十豪族家……。時五十苾芻聞仏言已心獲無礙證阿羅漢果。時此世間有六十一阿羅漢。仏為第一。
- *⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.790下) ; 爾時世尊、遊波羅捺国。時有同友五十人、來向波羅捺国、欲成婚姻、在波羅捺城外廻遊觀、漸詣仙人鹿野苑。時五十人等遙見世尊顏貌端正衆相殊特、見已發歡喜心、於如來所、即前頭面禮足、在一面座已。時世尊與說勝法、勸令發歡喜心。……有漏心解脱無礙解脱智生。時世間有百一十阿羅漢、弟子仏為百一十一。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.175) ; 他に彼の友達五十四人をも……斯うして世に六十一人の阿羅漢が出来た時……。
- ③中本 (大正04 p.149中) ; 是時波羅奈傍県、名曰荼、有五十人。因事詣國、聞宝称富禪等皆作沙門。……徑詣鹿園、……願為弟子。仏言、善來比丘、悉成沙門、……皆得羅漢。
- ⑪仏讚 (大正04 p.031上) ; 先有俗遊朋 其數五十四 …… 上行諸聲聞 六十阿羅漢 悉如羅漢法 隨順而教誡
- ⑫BC. (16-16~18) ; ……彼（ヤシャス）の友人五十人と……そのとき、六十人の最初の弟子の阿羅漢の集団すべてに向かって、その阿羅漢たちに尊敬されている阿羅漢〔であるブッダ〕は、適

切に正しく告げられた。

- ⑬行經（大正04 p.080中）；將五十童子 得度脫諸苦 …… 彼諸世尊辺 始六十羅漢
⑭過去（大正03 p.645下）；爾時又有耶舍朋類五十長者子。……聞耶舍於仏法中出家修道、……共
詣仏所、……得法眼淨、……聽我出家。仏言、善來比丘、鬚髮自落、袈裟着身、即成沙門、……
得阿羅漢果。爾時始有五十六阿羅漢。
⑮集經（大正03 p.820上）；爾時長老耶輸陀、身昔在家有五十朋友。……彼等長老悉成漏盡諸阿羅
漢、心善解脫。……於時世間合成六十一阿羅漢。謂仏世尊、及五比丘、并耶輸陀、其耶輸陀波羅
奈城、有四善友、無垢善臂、滿足牛主、其耶輸陀、在家朋友、諸大長者、有五十人。並是別國相
召集來、或前或後、善男子等。
⑯衆許（大正03 p.956下）；爾時波羅奈國中復有大族諸長者子正五十人、與俱梨迦子常為朋友……
悉皆證得阿羅漢果。於是世間始有六十大阿羅漢。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.040下）；爾時又有耶舍朋類、五十長者子。（出因果經）
③氏譜（大正50 p.092下）；又度耶舍同友五十人、不久皆得初果。
④統紀（大正49 p.154上）；又耶舍朋類五十長者、聞耶舍出家、共詣仏所願求出家。仏言善來比丘、
即成沙門。是時始有五十六羅漢。
⑤JM. (p.030, 番中 p.120)；また同じく、その場で彼（ヤサ）の友達54人を阿羅漢位に安立せ
しめた。……このようにして菩提から最初の雨安居の間に、世間には61人の阿羅漢が存するこ
ととなった。すなはち、正等覚者、五群比丘、ヤサ (Yasa) 長老と彼の54人の友達の長老たち
である。
⑥Bigandet. (vol. I p.130, 赤沼 p.171)；猶同じく耶舍の友達であって、同様に名家の公子達
である五十人の人々も……耶舍の住む僧舎を訪うて……耶舍はその人達を伴うて、世尊の御前に
すみ出て……仏陀は、教を垂れ給うたが、結果は非常によろしく、彼等は直ぐに比丘となる許
可を受けた。これで阿羅漢の總数は六十一人(1)となった。

(1) 赤沼訳は六十人とするも、英文はsixty-oneとあり、これをとる。

[31] 富樓那の帰仏

釈尊と同じ日に出家し、ヒマラヤ地方で苦行していた富樓那 (Pūṇya Mantāniputta) が、釈尊
の成道を知って、鹿野苑に訪ねて帰仏し、阿羅漢果を得る。

[A] 原始聖典

- ⑩僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.412下）；仏告舍利弗。如來所度阿若憍陳如等五人善來出家善受
具足。共一戒一竟一住一食一學一說。次度滿慈子等三十人。次度波羅奈城善勝子。次度優樓頻螺
迦葉五百人。次度那提迦葉三百人。次度伽耶迦葉二百人。次度優波斯那等二百五十人。次度汝大
目連各二百五十人。次度摩訶迦葉闡陀迦留陀夷優波離次度釈種子五百人。次度跋度帝五百人。次
度群賊五百人。次度長者子善來。如是等如來所度善來比丘出家善受具足、共一戒一竟一住一食一
學一說。舍利弗。諸比丘所可度人亦名善來出家善受具足乃至共一說。是名善來受具足。

*③中阿含009「七車經」（大正01 p.431中）；於是尊者舍梨子問尊者滿慈子。賢者名何等、諸梵行人
云何稱賢者耶。尊者滿慈子答曰。賢者我號滿也。我母名慈。故諸梵行人稱我為滿慈子。（なおこの經
から推測すると、滿慈子の生地は王舍城でもなく、また舍衛城でもない。MN.024 ‘Rathavinita-s.’

も同じ。)

[B] 仏伝經典

⑯集經（大正03 p.824上）；「迦毘羅婆蘇都城邑の近くの一村に淨飯王の國師である一婆羅門があり、その一子富樓那弥多羅尼子（隨言満足慈者）は太子と同日生れで本性世間を厭離し、解脱を志求す。菩薩出家の夜に朋友三十人と共に家を出て、雪山に居住し苦行もて道を求む。菩薩成道を聞いて雪山より下り、鹿野苑の仏所に往詣す。」

時富樓那、……見世尊……證得無上阿耨多羅三藐三菩提。……雪山下、……往詣仏邊。……時富樓那、得如來聽其出家已、乞受具足。及其朋友二十九人、彼長老輩、既得出家受具戒竟。……爾時世間、一切合成九十一阿羅漢。

⑰MV. (vol. III p.377, Jones III p.374) ; さて、コーサラ (Kośala) 国のドローナヴァストゥカ (Dronavastuka) と名づける一村があった。そこに富裕な一バラモンが居り、妻の名前をマイトラーヤニ (Maitrāyanī) 息子をプールナ (Pūrnā) といった。世尊が家を出られた同じ日にプールナも又家を出て、ヒマラヤの閑居に行った。彼はそこで修行し、二十九人の仙人を弟子として持った。彼は弟子達と共にベナレス (Vārāṇasī) の鹿野苑にやってきて、世尊に具足戒を乞う。世尊はプールナと二十九人に対し、善来比丘の定法を宣告する。

[C] 後世の仏伝資料

【32】 那羅陀の帰仏と龍王の帰依

菩薩の出家成仏を予言したアシタ仙人の甥であるナーラカが、仙人の遺言にしたがって帰仏し、阿羅漢果を成じる。彼の姓はカートヤーヤナであったので、大迦旃延と呼ばれることになる。
これに因んで龍王が帰依する。

[A] 原始聖典

⑥增一阿含05-08（大正02 p.558中）；能降伏龍使奉三尊。所謂那羅陀比丘是。

⑦四分律「受戒捷度」（大正22 p.791上）；爾時世尊、遊波羅捺國。時伊羅鉢羅龍王、自出恒河水所居宮、手執金鉢盛滿銀粟、銀鉢盛滿金粟、將諸龍女、八日十四日十五日而說此偈……。爾時有一梵志、名那羅陀、住波羅捺城側。少垢利根多智聰明。時那羅陀、出波羅捺城、詣龍王所、到已語龍王言。汝今說偈。我欲與汝廣演其義……。有漏心解脫無礙解脫智生。時世間有一百一十一阿羅漢、佛為一百一十二。……佛告龍王。汝今歸依佛法僧。答言如是。我今歸依佛法僧。是為畜生最初受三自歸、伊羅鉢龍王為首。

⑧五分律「受戒法」（大正22 p.106上）；相師阿夷知菩薩成佛、當在波羅捺國仙人鹿苑中轉于法輪。又念。我命過後諸弟子中那羅摩納當紹繼我。我之供養悉當屬彼。彼必貪着無復憶佛出興世意。我今寧可於鹿苑邊為立舍宅。教令日日三念佛當出世。若出世時汝當於彼淨修梵行。念已即為立宅。如念教之。阿夷不久便命過。那羅果得供養貪着心深、都不復憶佛當出世。

時伊羅鉢龍王作是念。昔迦葉佛記我。於當來過百千萬億歲、積迦牟尼佛出現於世。佛當記汝脫龍身時、時今應至當往見佛。彼龍為見佛故、於六齋日在恒水中、用金鉢盛銀粟、銀鉢盛金粟。又莊嚴二女、而說偈言……。爾時那羅摩納、為摩竭国人所共宗敬……。摩納前禮佛足白佛言。世尊、願與我出家受具足戒。佛言。善來比丘。乃至鉢盂在手。亦如上說。出家未久、慤行不懈、得阿羅漢。爾時世間有六十二阿羅漢。

⑨根本有部律「破僧事」（大正24 p.110上）；時阿私陀仙說此頌已便即命終。爾時弟子那羅陀以種

種如法供具、隨時殯葬已。便詣波羅痩斯城於彼而住與五百摩納薄伽、為其教示婆羅門薛陀呪。其那羅陀為是迦旃延姓因号迦旃延。若釈迦菩薩當成正覺、迦旃延詣於仏所、彼仏即喚大迦旃延而便以法教示令彼度生死大苦海、住於最上寂靜究竟涅槃。遂以名之為大迦旃延。後當得此名甘露。

[B] 仏伝經典

⑮集經（大正03 p.825上）；「阿槃提國獮猴食集聚落の婆羅門大迦旃延の第二子那羅陀は南方の優禪耶尼城の近くの頻陀山に住む仙人阿私陀仙（那羅陀の外舅）の弟子となる。共に波羅捺城外に移り住むが間もなく阿私陀仙は命終。一方伊羅鉢・商佐の二竜王は仏出世を求めて、二偈の義解を懸賞募集する。那羅陀は仏の教えを受けて解答する。伊羅鉢竜王は仏所に往詣し、弥勒仏出世の時、人身を得るとの記を受く。」

是時長老那羅陀比丘、既出家已、具戒成就、……既得羅漢無着之果。……又有師言而此長老那羅陀者其本種族姓迦旃延。以本姓故、衆人稱言大迦旃延。……是時世間、即成九十二阿羅漢。

⑯MV. (vol. III p.382, JonesIII, p.379) ; アヴァンティ (Avanti) 国にマルカタ (Markaṭa) という町があり、そこに一人の富裕なバラモンが住んでいた。彼はウッジエーバカ・トーネーハーラカ (Ujjhebhaka Tonēhāraka) 国王の国師で、カートヤーヤナ (Kātyāyana) 姓に属し、二人の息子がいた。一人はナーラカ (Nālaka) といい、他はウッタラ (Uttara) といった。ウッタラが年長、ナーラカが年少。彼等の叔父はアシタ (Asita) といい、ヴィンディヤ (Vindhya) 山脈の隠所に五百人の弟子達と住んでいる仙人であった。一方ベナレスで開かれた祭りで、竜王エーラバトラ (Elapatra) はある課題を与え自分の娘と千の金片を賞として答を募集する。（この後竜王と世尊との問答、ナーラカと世尊との問答となる。）カートヤーヤナは世尊に入門を乞い、世尊は「来たれ、比丘」と呼びかけた。これが彼の受具足戒であった。

[C] 後世の仏伝資料

【33】婆毘耶の帰仏

師を求めて諸国遊行していたサビヤが鹿野苑で釈尊に会い、帰仏して阿羅漢果を成じる。

[A] 原始聖典

[B] 仏伝經典

⑰BC. (21-28) ; 牟尼はシュラーヴァスティーにて、サビヤとニルグランタ（裸行のジャイナ教徒）のナプトリープトラ（？）、及びその他の異教徒たちの迷闇をお破りになった。

⑯集經（大正03 p.835中）；「北天竺特又尸羅城に生まれた一女はその薄相のため、外道波梨婆闍の養女となり、呪術等を教わり成長する。南天竺より遊歴の一道士と出会って一男児婆毘耶を産む。道士は彼女を捨てて南へ還る。婆毘耶は成長後、南天竺に向い父と再会し、その後波羅捺城に至る。」

時婆毘耶……復白仏言、……聽我出家、并乞與我受具足戒。……得羅漢果、心善解脱。是時世間凡成九十三阿羅漢、第一世尊乃至最後及婆毘耶。爾時世尊成道之後、在波羅奈鹿野苑内、通及仏身、合八人、六月十六日安居、至九月十五日、合九十三人解夏。

⑯MV. (vol. III p.389, JonesIII p.389) ; さてマトゥラー (Mathurā) に一人のギルドの長がいた。三つ子が生まれ、そのうちの娘は不吉として宗教生活に入られた。彼女は成長し、遊行生活に入り他の遊行者と議論し、名声を得るに至った。その頃一人の雄弁のバラモンがマトゥラーに

入り、女性遊行者と討論を行い、これを敗り同居する。彼等は南の地方に旅に出て、九又は十ヶ月後にシュヴェータヴァラーカー (*Śvetavalākā*) の宿に泊る。そこでサビカ (*Sabhika*) という男子が出生する。彼は両親に育てられ、遊行者の知識すべてを教わって説法者となる。彼は師を求めて十六大国を巡り、ベナレス (*Vārāṇasī*) に来て世尊に会う。彼は世尊によって回心し、自在神力 (*balavaśibhāva*) に達し、善来比丘の言葉によって出家具足戒を受く。

[C] 後世の仏伝資料

【34】弟子たちを布教に出す

釈尊は弟子たちに人々を救済するために、「一つ道を2人で行くなれ」と教えて遊行に出し、自分はウルヴェーラーに帰ろうとする。

[A] 原始聖典

- ①SN.04-05 (vol. I p.105) ; 世尊はヴァーラーナシーの仙人墮処・鹿野苑に住しておられた。世尊は多くの人々の利益と幸せのために、遊行せよ (caratha cārikam bahujana-hitāya bahujana-sukhāya)。一つの道を二人して行くなれ (mā ekēna dve agamettha)」と説かれた。
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.020) ; 世尊は比丘たちに、「遊行せよ (caratha bhikkhave cārikam)。世間の利益のために二人して一つの道を行く勿れ (mā ekēna dve agamittha)。法を説け (desetha dhammam)、梵行を示せ (brahmacariyam pakāsetha)。私はまたウルヴェーラーのセナーニ村 (Uruvelā Senānigama) に行って法を説こう」と言われた。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.793上) ; 仏告諸比丘。汝等人間遊行、勿二人共行。我今欲詣優留頻螺大將村説法。対曰、如是世尊。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.108上) ; 於是世尊告諸比丘、汝等各各分部遊行世間、多有賢善能受教誠者。吾今獨往優為界鬱離羅迦葉所而開化之。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.130上) ; 汝等各可隨詣諸方、為諸衆生作大利益。且令汝等各各而往、不用同行。我亦往優樓頻螺聚落、為利益故。……爾時世尊復告諸苾芻曰。我於天人繫縛中而得解脫。汝等亦得解脫。汝等應往余方作諸利益哀愍世間。為諸天人得安樂故汝等不得双行。我今亦往優樓頻螺聚落。諸苾芻等咸奉佛教唯然而去。
- *①DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ (大本経 vol. II p.045) ; ヴィバッシン仏は弟子たちに、一つの道を二人して行くな、6年後に波羅提木叉を誦すために戻ってきなさい、と説かれた。
- *②長阿含001「大本経」(大正01 p.009下) ; 爾時如來默自念言。今此城内乃有十六萬八千大比丘衆。宜遣遊行各二人俱在在処。至於六年、還來城内説具足戒。
- *⑥增一阿含24-05 (大正02 p.619中) ; 爾時世尊告五比丘。汝等尽共人間乞食慎莫獨行。
- *⑫法天訳「毘婆尸仏経」(大正01 p.157下) ; 時毘婆尸仏而作是念。此大苾芻衆住満度摩城。宜應減少令六萬二千苾芻往詣諸方、遊行聚落随意修習。經六年後歸滿度摩城、受持波羅提目叉。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.175) ; (六十一人の阿羅漢が出来た時) 仏は雨安居を終って自恣を行い、「比丘等よ、〔四方に〕遊行せよ」といって、六十人の比丘を諸方に遣り、お自身は優樓頻羅 (ウルヴェーラー Uruvelā) 林に赴き給うた。
- ③中本 (大正04 p.149下) ; 仏勅諸比丘。汝曹各行、広度衆生、隨所見法、……遷入泥洹。吾今獨行、詣憂為羅県。

- ⑪仏讚（大正04 p.031上）；汝今已濟度 生死河彼岸 所作已畢竟 堪受一切供 各應遊諸國 度諸未度者 衆生苦熾然 久無救護者 汝等各獨遊 …… 時六十比丘 …… 各從其宿縁 隨意詣諸方
- ⑫BC. (16-19) ; 比丘たちよ。お前たちは苦惱〔の河の彼岸〕に渡り、自分の偉大な事業をなし遂げた。〔いまや〕なお苦しんでいる他の人々を助けなくてはならないのだ。そのためにお前たちはみな、ひとりひとり〔別の道をとつて〕この地上をめぐり歩き、疲れ果てている世間の人々のために、同情の心をもって教えを説きなさい。
- ⑬行經（大正04 p.080中）；時仏以梵音 告諸弟子曰 汝等已度苦 曠然清涼安 衆生沈愛欲 受苦可憐傷 卿等宜慈愍 諸方宣化度 分布遣弟子 於是獨遊行
- ⑭過去（大正03 p.646上）；是時如來、告諸比丘。汝等所作已辦堪為世間作上福田、宜各遊方教化。以慈悲心、度諸衆生。諸今亦當獨往摩竭提國、王舍城中、度諸人民。
- ⑮集經（大正03 p.835下）；爾時世尊還在於彼波羅奈城鹿苑坐夏、告諸比丘作如是言。……若欲行至他方聚落、独自得去不須二人。
- ⑯MV. (vol. III p.415, JonesIII p.416) ; 世尊は成道を遂げ、ヴァーラーナシー (Vārāṇasī) の鹿野苑リシヴァダナ (Rśivadana Mrgadāva) に居られた。そこで五比丘に告げられた。「比丘達よ、旅に出かけなさい。しかし二人が同じ道を行つてはならない。……私はウルヴィルヴァー (Uruvilvā) のセーナーパティ (Senāpati) 村に行くであろう」
- ⑰衆許（大正03 p.957上）；爾時世尊觀諸弟子而告之曰。……汝等今日悉於我處得聞正法、漏盡解脫……衆生為最福田、宜行慈愍隨緣利樂。

[C] 後世の仏伝資料

- ③氏譜（大正50 p.092下）；経云。仏告諸比丘。汝所作以弁、堪為福田、宜各遊方以慈度物。我獨往摩揭提度諸人民。
- ④統紀（大正49 p.154上）；仏告諸比丘。汝等宜各遊方教化衆生。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.132, 赤沼 p.172) ; 或る日、仏陀は諸弟子を集めて左の如く語り給うた。
「……迷界の人々や、諸天のために働いて、解脱の福音を得さしめねばならぬ。……汝等は、二人して、同じい道を歩かぬように、各々違った方面へ出掛けて行かねばならぬ。さらば行ひて、この最勝の法を宣伝せよ。……私はこれから施那 (Thena) 村に路を取り、優留毘羅の幽居近くに留まるであろう」

【35】悪魔を破す

悪魔が自分から逃れることはできないと釈尊を脅すが、釈尊はすでに脱したと悪魔を破す。

[A] 原始聖典

- ①SN.04-04 (vol. I p.105) ; 世尊はヴァーラーナシーの仙人墮處・鹿野苑に住しておられた。悪魔パーピマントが「あなたは悪魔に束縛されている (māra-bandhana-baddhosi)。私から逃れることはできない (na me mokkhasi)」と語りかけた。……
- ①SN.04-05 (vol. I p.106) ; 世尊は「1つの道を2人していく勿れ」と教えられた。悪魔パーピマントが「あなたは悪魔に束縛されている (māra-bandhana-baddhosi)。私から逃れることはできない (na me mokkhasi)」と語りかけた。……
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.022) ; 世尊が雨安居を過ごされたとき、悪魔パーピマントがやって来て、「汝は縛されていて、自分から脱することはできない (mahābandhanabad-

dho 'si, na me samaṇa mokkhasi)」といった。世尊は「すでに脱した、汝は敗れた (mahābandhanamutto 'mhi nihato tvam asi)」と擊退された。

④雜阿含1096 (大正02 p.288上) ; 一時仏住波羅捺國仙人住處鹿野苑中。……時魔波旬……說偈言、不脫作脫想 謂呼已解脫 為大縛所縛 我今終不放。……

④雜阿含1101 (大正02 p.289下) ; 一時仏住波羅捺國仙人住處鹿野苑中。……作師子吼。謂苦聖諦、苦集聖諦、苦滅聖諦、苦滅道跡聖諦。時天魔波旬……說偈言、何於大衆中 無畏師子吼 謂呼無有敵 望調伏一切。……

⑦四分律「受戒犍度」 (大正22 p.792下) ; 爾時世尊、以偈告諸比丘 我已脫一切 天及於世間 汝亦脫一切 天及於世間。爾時魔波旬、以偈向世尊說 汝為諸縛縛 天及於世間 一切衆縛縛 沙門不得脫 ……

⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.130上) ; 爾時惡魔作是念已、化為摩納婆往詣仏所……。

[B] 仏伝經典

⑯集經 (大正03 p.813上) ; (五比丘に説法の途中) 爾時魔王波旬、往詣仏世尊所。 (偈頌のやりとり) ……於彼地方、没身不現。

⑯集經 (大正03 p.836上) ; (六十一阿羅漢を成じ、遊行せよとの説法の後) 爾時魔王波旬密來往 詣仏所。 (偈頌のやりとり) ……從彼地方忽然不現。

⑯MV. (vol. III p.415, JonesIII p.416) ; (一人で遊行せよとの説法の後) 最も邪悪なマーラが混乱させるように世尊に近づき、偈頌の問答をする。マーラは打ちのめされ、完敗して姿を消す。

⑰衆許 (大正03 p.957上) ; 時彼罪魔摩擎囉迦、自變其身同世間人、如展臂頃即至仏所。……時魔摩擎囉迦聞是語已、即自思惟。此瞿曇沙門知他心事必不能亂。唯自苦惱隱沒而退。

[C] 後世の仏伝資料

⑥Bigandet. (vol. I p.132, 赤沼 p.174) ; (二人して行くなかれの説法の後) その時、惡魔は仏陀の前に顯われて、次の様に誘惑を試みた。……仏陀は答え給うた。「惡魔よ、婬欲、及びその他の欲情は全く私に依って亡ぼされた。汝は全く征服されている」。……惡魔は……消え失せた。

〔36〕弟子たちに弟子を取ることを許す

諸国に遊行に出た弟子たちが、出家を希望する者たちを連れて帰ってくるのが大変であったので、釈尊は弟子たちが自ら弟子を取ることを許可する。

[A] 原始聖典

①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.021) ; その時比丘達は諸方から世尊のところに、出家希望者を連れてきたので、比丘も出家希望者も疲労した。そこで世尊は「汝ら自らそれぞれの方角、それぞれの地方で出家させ、具足戒を与えよ (tāsu-tāsu disāsu tesu-tesu janapadesu pabbajetha upasampādetha)」と言われた。

⑦四分律「受戒犍度」 (大正22 p.793上) ; 人間遊行説法時、有聞法得信欲受具足戒。時諸比丘、將欲受具足戒者、詣如來所、未至中道、失本信意不得受具足戒。諸比丘以此事白仏。仏言、自今已去聽汝等即與出家受具足戒。

⑪根本有部律「出家事」 (大正23 p.1030中) ; 別有一人。在外遠國、於苾芻處、來求出家。彼苾芻將此人、來於仏所、欲與出家近円。其人在路身亡、乃不得出家。時諸苾芻緣此事故。來自仏言。

具如上說。爾時世尊便作是念。疲乏我聲聞、若有人求出家近円。在遠國者、我許於苾芻僧衆、與彼出家近円……。

[B] 仏伝經典

⑯集經（大正03 p.835中）；爾時他方有諸人輩、或從廻處諸邑聚落及諸國土、各各相喚、意並願樂欲求出家乞具足戒、來波羅奈、到於佛邊、白世尊言。與我出家受具足戒。以是因緣、諸旧比丘、應接勞乏。……爾時世尊……、我今教勅汝諸比丘。至於他方聚落城邑、若有人來欲求出家受具戒者、汝當與其出家受具。

[C] 後世の仏伝資料

⑯Bigandet. (vol. I p.132, 赤沼 p.176)；熱心に大法の宣伝に勤めた諸比丘は……比丘となろうと願い求むる群衆に取り巻かれた。彼等は毎日毎日諸方から……仏陀の御前に押し寄せて……。仏陀は彼等に宣うた。「……その様な遠い所から、わざわざ私の所へ出掛けて来るのは苦痛と煩労に堪えないことである。それ故、今私は汝等に僧団入許の権利を与える……。」

〔37〕三帰具足戒を定める

弟子たちが自らの弟子の取り方として、三帰戒によって具足戒を与えることを定める。

[A] 原始聖典

①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.022)；自ら出家・具足戒を与える場合には、三帰依によって出家させ、具足戒を与えよ (anujānāmi imehi tīhi saraṇagamanehi pabbajjam upasampadām)、と定められた。

⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.793上）；欲受具足戒者、應作如是。教令剃鬚髮著袈裟脫革屣、右膝著地合掌。教作如是語、我某甲歸依佛歸依法歸依僧。今於如來所出家、如來至真等正覺是我所尊。如是第二第三竟。我某甲已歸依佛歸依法歸依僧、於如來所出家、如來至真等正覺是我所尊。如是第二第三。佛言。自今已去聽三語、即名受具足戒。

⑪根本有部律「出家事」（大正23 p.1030中）；佛許此事已。彼苾芻衆、不知云何與出家與近圓。以緣白佛。時世尊告諸苾芻。但有人來、求出家者、當問諸難。若無障難者、然後與受三歸。即令合掌跪、當自称名、盡一形世、歸依佛兩足尊、歸依法離欲尊、歸依僧衆中尊。後與受五學處、十戒、二百五十戒。廣如余說。

[B] 仏伝經典

⑯集經（大正03 p.835下）；復告比丘。若彼來欲出家之時、汝等應須作如是事。先當為其剃除鬚髮、既剃落已、即教令着袈裟色衣、其着衣時、齊整服飾、偏袒右臂、教在衆前、右膝着地。教令頂禮諸比丘足、禮已還起、在比丘前跪坐、教令合十指掌、作如是語。我某甲、歸依佛歸依法歸依僧。汝等比丘、從今已後、依我勅教、若有人來求欲出家、受戒三歸、即得具足。

[C] 後世の仏伝資料

⑯Bigandet. (vol. I p.134, 赤沼 p.177)；然し、この時には次の條項を守らなければならぬ。志願者は先づ鬚髮を剃除せなければならぬ。黃色の衣を用意せなければならぬ。これらの準備が出来たならば、志願者は両肩に掛けた上衣の端を取って蹲踞り、三度歸依佛、歸依法、歸依僧の語を繰り返して、組み合せた両手を額の上まで挙げねばならぬ。

【38】30人の賢衆の出家

ウルヴェーラに来た釈尊が夫人連れでピクニックに来ていた30人の賢衆 (bhaddavaggiyā) と出会い、宝石を盗んで逃げた遊女に因んで出家させる(1)。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.023) ; 世尊はバーラーナシーに随意の間住されてから (yathābhīrantam viharitvā) 、ウルヴェーラに向かって遊行された。その途中に、30人の賢衆 (bhaddavaggiyā) がそれぞれ夫人を連れて園林に遊びに来ていたとの出会いがあった……。彼らに法眼が生じ、出家した。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.793上) ; 爾時世尊、遊鬱鬱羅劫波園中。時有鬱鬱羅跋陀羅跋提同友五十人、將諸婦女於此園中共相娛樂。其同友中一人無婦。以錢雇一姪女将来共相娛樂。姪女即偷其人財物逃走……。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.107上) ; 於是世尊從鹿苑漸漸遊行到娑羅林在樹下坐。去林不遠有一園觀。時有同友三十人、各將其婦於中遊戲。一人無婦、雇一姪女假好衣服共遊此園……。仏為說種種妙法示教利喜、乃至苦集盡道。三十人皆遠塵離垢得法眼淨、見法得果。見法得果已、白仏言。願與我出家受具足戒。仏言、善來比丘、乃至得阿羅漢亦如上說。爾時世間有九十二阿羅漢。
- ⑨五分律「受戒法」(大正22 p.107上) ; 時復有六十人為婚姻事行過娑羅林。遙見世尊姿容挺特猶若金山。皆前到仏所頂禮仏足。仏為說法乃至得阿羅漢皆如上說。爾時世間有百五十二阿羅漢。
- ⑩僧祇律「雜誦跋渠」(大正22 p.412下) ; 仏告舍利弗。如來所度阿若憍陳如等五人善來出家善受具足。共一戒一竟一住一食一學一說。次度滿慈子等三十人。次度波羅奈城善勝子(2)。次度優樓頻螺迦葉五百人。次度那提迦葉三百人。次度伽耶迦葉二百人。次度優波斯那等二百五十人。次度汝大目連各二百五十人。次度摩訶迦葉闡陀迦留陀夷優波離次度釈種子五百人。次度跋度帝五百人。次度群賊五百人。次度長者子善來。如是等如來所度善來比丘出家善受具足、共一戒一竟一住一食一學一說。舍利弗。諸比丘所可度人亦名善來出家善受具足乃至共一說。是名善來受具足。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.717上) ; 即便行詣白毘林中、度六十賢部令住見諦。
- ⑫根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.948中) ; 即便行詣白毘林中度六十賢部令住見諦。
- ⑬根本有部律「出家事」(大正23 p.1027上) ; 爾時世尊復詣聚落、名白毘林。有六十人、同為善伴。聞仏說已、便得正信。
- ⑭根本有部律「出家事」(大正23 p.1027上) ; 爾時世尊復詣聚落名白毘林。有六十人同為善伴。聞仏說已便得正信。
- ⑮根本有部律「破僧事」(大正24 p.130中) ; 爾時世尊、往波羅痩斯城優樓頻螺聚落。既到於彼詣白毘林、在一樹下宴坐而住。時有六十賢部在聚落外、於日日中、與諸女樂共嬉戲。有一女人……。
- ⑯根本有部律「破僧事」(大正24 p.156下) ; 往詣波羅痩斯城度憍陳如五苾芻衆。次度耶舍五人。次度賢衆六十人民。

[B] 仏伝經典

- ⑰NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.175) ; その途中、カッパーシヤ (Kappasiya 緜樹) 林中で、バッダヴァッギヤ (Bhaddavaggiya 賢群) 青年三十人を指導し給うた。この中で一番末のものは預流果に、一番上のものは不還果に入った。彼等をも総て残らず「来れ、比丘よ」という〔出

家] 法によって出家させて、諸方へ遣し、お自身は優樓頻羅 (Uruvelā) へと赴き給うた。

③中本（大正04 p.149中）；於時鹿園中間、有大衆会、飲食歌舞。時有一女、……女舞未竟、忽然不見、……大衆馳趣。……仏告衆人、且自觀身、觀他何為。……大衆心解、願為沙門、仏皆受戒、……皆得應真。

⑯集經（大正03 p.836下）；而世尊從波羅捺城、遊行漸至優婁頻螺聚落之所。（兵將婆羅門が友人29人と園遊中、同行の姪女が財物を持ち逃げし、それを追って世尊に出会う）……汝等今者寧求自身、寧欲求覓彼姪婦女、二事之中何者為勝。……願與我等出家受戒……。彼等長老、皆成羅漢、心善解脱。

⑯集經（大正03 p.837下）；爾時世尊教彼三十長老朋友、得知證已、遊行履歷、經白氈林、到彼林已、深入林中。……爾時彼廻、忽有六十雲種姓人、……往詣仏所、……爾時仏。為彼等六十雲種姓人、次第說法、所謂教行布施持戒、乃至證知。彼等長老一切皆得阿羅漢果、心善解脱。

⑰衆許（大正03 p.957上）；爾時世尊……往詣西曩野彌聚落烏魯尾螺池辺迦囉波娑林下經行宴坐。時聚落中有六十賢衆。……忽有一女於此快樂心生厭離、捨衆逃避不知所至。……我歸依仏歸依法歸依僧、自今已去永不殺生、畢身奉持優婆塞戒。

[C] 後世の仏伝資料

⑤JM. (p.030, 畑中 p.120)；法輪を転じた世尊はイシパタナ (Isipatana) において最初の雨安居を過ごし、……自恣を行って、60人の阿羅漢を諸方に派遣し、自分はウルヴェーラー (Uruvelā) に赴きつつ、途中カッパーシカ (Kappāsika) の深林において、30人の賢衆の王子たち (Bhaddavaggiyakumāra) を教導し……。

⑥Bigandet. (vol. I p.134, 赤沼 p.177)；仏陀は第一の雨期を鹿野苑に過ごし給うて後、優留毘羅の森に向うて進み給うた。……その時丁度三十名の貴公子が、この藪地に入つて歡娛優遊を恣にせんとて入り来つた。……仏陀の……結跏趺坐し給うを見て、……所説を傾聴して完き信奉者となつた。

- (1) 賢衆の30人とは別に他の60人も出家したとするものもある。また、集經ではこの後、釈尊がウルヴェーラーへ行くことになっている。
- (2) 波羅奈城善勝子をこの項目の「賢衆」と解釈した。

【39】 ガンジス河の船師の出家

釈尊がガンジス河の渡し舟の船師を出家させ、彼が阿羅漢果を成じる(1)。

[A] 原始聖典

[B] 仏伝經典

⑯集經（大正03 p.837下）；爾時世尊漸漸行到恒河岸邊、至於彼已而恒河畔有一船師。……爾時世尊即上船上。……作是語已。時彼船師所有俗形皆隱不現、左手自然執瓦器鉢、頭鬚及髮猶如七日剃落比丘。……即得出家、受具足戒……而彼長老成阿羅漢、心善解脱。

⑯MV. (vol. III p.420, JonesIII p.421)；比丘等は鹿野苑 (Mṛgadāva) で雨期を過ごし、さまざまな方向に出発した。世尊も出発された。一人の船師がガンジス (Gaṅgā) 河の岸に近づいてきて世尊を見、船を止めた。世尊は船に乗り、船師に言われた。……。……船師は世尊に導かれて阿羅漢に達した。その時、……すべての俗形が消えた。三衣一鉢が備わり、髪は落ち、彼の出家

は完成した。

[C] 後世の仏伝資料

(1) [B] の⑯では、この前にウルヴェーラーの30人の賢衆と60人の雲種衆の教化が記されているので、ここにおいた。

【40】ウルヴェーラーの牧女が優婆夷となる

初転法輪からウルヴェーラー (Uruvelā) に帰った釈尊に、スジャーター (Sujātā、あるいはナンダー [Nandā] とナンダバラ [Nandabalā]) が帰依し、三帰優婆夷となる。

[A] 原始聖典

- ①AN.01-14-07 (vol. I p.026) ; 私の声聞中で最初の優婆夷として私に帰依したのはスジャーター・セナーニー女 (Sujātā Senānidhītā) である⁽¹⁾。
- ⑥増一阿含07-01 (大正02 p.560上) ; 我弟子中第一優婆斯初受道證、所謂難陀難陀婆羅優婆斯是。
- ⑦四分律「受戒捷度」 (大正22 p.786上) ; (成道の時) 時世尊受此婆羅門食已、更詣一離婆那樹下、七日中結加趺坐思惟不動、遊解脱三昧而自娛樂。時世尊七日後從三昧起、到時著衣持鉢、入鬱鞞羅村乞食、漸至鬱鞞羅婆羅門舍中庭默然而住。時彼婆羅門婦、是蘇闍羅大將女。見如來中庭默然而住。見已發歡喜心即出食施與世尊。世尊慈愍彼故即受其食。食已告言。汝今歸依佛歸依法。答言如是。我今歸依佛歸依法。諸優婆夷、受歸依佛依法者、此鬱鞞羅婦、蘇闍羅大將女優婆夷為最初。
- ⑧五分律「受戒法」 (大正22 p.103中) ; (成道の時) 佛說偈已、起到鬱鞞羅斯那聚落入村乞食、次到斯那婆羅門舍、於門外默然立。彼女須闍陀、見佛威相殊妙。前取佛鉢盛滿美食以奉世尊。佛受食已語言。汝可歸依佛歸依法。即受二自歸。是為女人中須闍陀最初受二自歸為優婆夷。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.717上) ; 又至勝軍聚落、度二牧牛女亦令見諦。
- ⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」 (大正23 p.911上) ; 於大軍婆羅門及二牧牛女為說妙法令生正見、皆證初果。
- ⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.948中) ; 至勝軍聚落度二牧牛女亦令見諦。
- ⑪根本有部律「出家事」 (大正23 p.1027上) ; 復詣聚落、名曰軍住。其聚落主、有二女人。一字難陀、二名難陀波羅。聞佛說法、同前正信。
- ⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.130下) ; 爾時世尊、夜既曉已於晨朝時、著衣入多軍村、作是思惟。於此村中我先為誰說法。復作是念、是時村主有其二女、一名歡喜、二名歡喜力。我先往昔欲捨苦行時、此二女人、先以乳糜及與酥蜜、供養於我、我食此故身力強健。……爾時二女、即從座起整衣服頂禮佛足雙膝著地、合掌向佛、白言世尊。我遇妙法獲大勝利、從今以後乃至盡形歸佛法僧、為鄖波斯迦。……

[B] 仏伝經典

- ③中本 (大正04 p.149下) ; 於是如來、還詣摩竭提界、至優為羅縣。暮止梵志斯奈園、明日持鉢、詣斯奈門。……梵志二女、長名難陀、次名難陀波羅。……如來昇堂、教授二女、歸命三尊、授五戒已。……
- ⑯集經 (大正03 p.804中) ; 爾時世尊、詣難提迦村主之家。……其村主女、……其善生女、……是時善生、最初人間、再受三歸及受五戒作優婆夷。 (異説として)

- ⑯集經（大正03 p.838下）；爾時兵將大婆羅門有於二女、一名難陀、二名波羅。……時彼二女聞佛說法……即時得證須陀洹果、……佛乞受三歸五戒。……（耶舍の母、妻より後）
⑰衆許（大正03 p.957下）；爾時世尊度彼六十賢衆已、復思何人先可受化。乃憶西曩野彌聚落之中、有難那及長女并眷屬等堪先受化。

[C] 後世の仏伝資料

（1）これは苦行を捨てる際の帰依を表しているかもしれない。しかし最初の優婆夷というのであるから、成道後のことと考えてここに収めた。次の増一阿含も同じ。

【41-01】三迦葉の帰仏——ウルヴェーラ・カッサバの帰仏

釈尊はウルヴェーラに住む結髪外道のウルヴェーラ・カッサバ（Uruvelakassapa）に神通力を示して、帰信させる。彼の500人の弟子たちも釈尊のもとで出家する。

[A] 原始聖典

- ① ‘Theragāthā’ Vs.375～380 (p.042) ; (Uruvelakassapaの詩) 世尊の神変を見て、傲慢であつた私は世尊の元で出家し、すべての結縛を滅した (anuppatto sabbasamyojanakkhayo)。
② ‘Apadāna’ 03-54-535 (p.481) ; 私と弟のナディー・カッサバ、ガヤー・カッサバは世尊の神変に教化されて、世尊の元で出家して、弟子たち1000人とともに阿羅漢果を得た。
③ Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.024) ; 世尊は遊行して、ウルヴェーラに到着された。そのときウルヴェーラにはUruvelakassapa、Nadikassapa、Gayākassapaという3人の結髪の修行者 (jaṭila) が住んでいた。Uruvelakassapaは500人の、Nadikassapaは300人の、Gayākassapaは200人の弟子を持っていた。世尊はUruvelakassapaの住居に行かれた……。
④ 増一阿含24-05（大正02 p.619中）；爾時連若河側有迦葉在彼止住。知天文地理、靡不貫博。算數樹葉皆悉了知。將五百弟子日日教化。
⑤ 四分律「受戒捷度」（大正22 p.793中）；爾時世尊、遊鬱禪羅。時鬱禪羅婆界有梵志、名鬱禪羅迦葉。於彼住止、將五百螺髻梵志、為最尊長師首。鳩伽摩竭國中、皆稱為阿羅漢……。
⑥ 五分律「受戒法」（大正22 p.108上）；諸比丘受教分部而去。世尊便到迦葉所……。迦葉及五百弟子鬚髮自墮袈裟著身鉢盂在手。既受戒已以先被服事火之具、皆棄尼連禪河中。是為迦葉及五百弟子受具足戒。
⑦ 僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.412下）；佛告舍利弗。如來所度阿若憍陳如等五人善來出家善受具足。共一戒一竟一住一食一學一說。次度滿慈子等三十人。次度波羅奈城善勝子。次度優樓頻螺迦葉五百人。次度那提迦葉三百人。次度伽耶迦葉二百人。次度優波斯那等二百五十人。次度汝大目連各二百五十人。次度摩訶迦葉闍陀迦留陀夷優波離次度釈種子五百人。次度跋度帝五百人。次度群賊五百人。次度長者子善來。如是等如來所度善來比丘出家善受具足、共一戒一竟一住一食一學一說。舍利弗。諸比丘所可度人亦名善來出家善受具足乃至共一說。是名善來受具足。
⑧ 根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；又至烏盧頻螺林側、度千外道出家受具。
⑨ 根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.948中）；至烏盧頻螺林側度千外道出家近円。
⑩ 根本有部律「出家事」（大正23 p.1027上）；復有一池、名憂樓頻螺。其廬有一大仙、名曰迦摶。并諸弟子一千人俱。聞佛說法、咸請出家、及受近圓。
⑪ 根本有部律「破僧事」（大正24 p.131上）；時有外道、名優樓頻螺迦摶、老年一百二十、有五百

弟子、在尼連禪河辺林中住……。

*① ‘Udāna’ 01–009 (p.006) ; 世尊はガヤーシーサにおられた。そのとき多くの結髪外道たちは冬の雪降る中をガヤー河で沐浴し、火祭りをしてこれで清浄となったと考えた。そこで世尊は、次のようなウダーナを歌われた。「多くの人々はここで沐浴しているが、水では清らかとはならない。真実とダルマにおいてこそ清らかとなり、彼こそがバラモンである (na udakena suci hoti, bahv ettha nhāyatī jano, yamhi saccañ ca dhammo ca, so suci so ca brāhmaṇo) 」と。(取意。これはウルヴェーラ・カッサバの教化中の1エピソードである。)

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.176) ; [其処で仏は] 三千五百の神通を示現して、一千の結髪道士を伴れている優樓頻羅迦葉（ウルヴェーラカッサバ Uruvelakassapa）等の三人兄弟の結髪道士を〔仏の法に〕引き入れ、「来れ比丘よ」の法によって出家させて……阿羅漢果に入らしめ給うた。
- ③中本（大正04 p.149下）；近泥蘭禪河辺、有梵志、姓迦葉氏、字欝併羅、年百二十。……修治火祠、……好学弟子、有五百人。……仏言、善來比丘、皆成沙門。
- ④瑞應（大正03 p.476中）；当度尼連禪河、天神為止流令中暫乾。大子渡河、行數十里、見三梵志。（成道前）
- ④瑞應（大正03 p.480下）；又復念此間有優為迦葉、大明勇健、有好名字、……與五百弟子。……欲先開化。……迦葉及五百弟子、鬚髮自墮、皆成沙門。
- ⑤異出（大正03 p.620中）；有三道人、各教授弟子。一道人教五百弟子、一道人者、教三百弟子、一道人者、教二百弟子、凡為千人。仏將五沙門、到三道人所。諸弟子、皆大喜、皆隨仏而去。
- ⑥普曜（大正03 p.510下）；転復前行見三梵志。一曰憂為迦葉、次曰那提迦葉、次曰竭夷迦葉、兄弟三人有千弟子。（成道前）
- ⑥普曜（大正03 p.530下）；如來於是轉法輪已、化彼五人拘隣之等。念此間有優為迦葉等、大有名稱、……皆成沙門。
- ⑦方廣（大正03 pp.611中）；如來化五人竟、作是念言。優樓頻螺迦葉有大名稱、與五百弟子俱。……皆成沙門。
- ⑩十二（大正04 p.147上）；三年為欝為迦葉兄弟三人說法、滿千比丘。
- ⑪仏讚（大正04 p.031中）；世尊獨遊步 往詣伽闍山 入空靜法林 詣迦葉仙人 彼有事火窟 …… 欝毘羅迦葉 弟子五百人 隨師善調伏 次第受正法
- ⑫BC. (16–21~35) ; この私も……カーシュヤパ〔三〕兄弟の仙人たちを教化するために、王〔家出身の〕仙人たちの住むガヤーへおもむこう……こうして、そのうちに〔ブッダは〕そこに行かれて……そこで苦行の権化のように立っているカーシュヤパ（迦葉）をごらんになった。……五百人の弟子の集団も、彼（ブッダ）の教えを奉ずるにいたった。
- ⑬行經（大正04 p.080中）；度第一迦葉 居野象沢者 然後以次度迦葉之二弟 三兄弟門徒 千人成無着
- ⑭行經（大正04 p.083上）；舍衛城門中 逢五百異學 化以火圍繞 方便度脫之 現神足變化 度欝毘羅迦葉
- ⑯過去（大正03 p.646上）；爾時世尊、即便思惟。……唯有優樓頻螺迦葉兄弟三人。……即發波羅奈趣摩竭提國、……往優樓頻螺迦葉住處。……五百弟子、……師徒相與、隨仏而去。
- ⑯集經（大正03 p.840下）；是時優婁頻螺聚落、其中有三螺髻梵志仙人居止。第一所謂優婁頻螺迦葉為首、教授五百螺髻弟子。……。第二名為那提迦葉復領三百……。第三名為伽耶迦葉、復領二百……。

- ⑯集經（大正03 p.849下）；……。是時彼等五百長老、応声出家、即成具足。
- ⑰MV. (vol. III p.424, JonesIII p.425) ; 世尊は1000人の髪髮行者を出現させ、これらを率いてウルヴィルヴァーカーシュヤパ (Urvilvākāśyapa) の所へ来られた。……このようにして五百の神通により、カーシュヤパ、彼の二人の兄弟及び弟子を改宗させた。……ウルヴィルヴァーカーシュヤパと五百人の弟子、ナディーカーシュヤパ (Nadīkāśyapa) と三百人の弟子、ガヤーカーシュヤパ (Gayākāśyapa) と二百人の弟子全員が善来比丘戒を受けた。彼等の甥ウパセーナ (Upasena) も三百人の弟子と共に善来比丘戒を受け……ここに最初の比丘集団は千二百五十人で成り立った。
- ⑯衆許（大正03 p.958上）；時摩伽陀国有善相師烏嚕尾螺迦葉、寿年三百歳、自謂已得阿羅漢道、居尼連河側、弟子眷属有五百人。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.041上）；爾時世尊、即便思惟、……唯有優樓頻螺迦葉兄弟三人。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.092下）；經云。仏往摩竭提國、有優樓迦葉兄弟三人。……本起云。汝非羅漢不知道証。
- ④統紀（大正49 p.154上）；世尊即發波羅奈趣摩竭提國、日暮寄宿優樓頻螺迦葉住處。……五百弟子願求出家。
- ⑤JM. (p.030, 畑中 p.120) ; 次第にウルヴェーラー (Uruvelā) に到着した。そこに3ヶ月間 (tayo māse) 住んでいたが、ある日彼は夜分にウルヴェーラ・カッサパ (Uruvelakassapa) の家に住む竜王を調伏した。……このように彼は3千5百の神変を示して千人の結髪外道を従えた。ウルヴェーラ・カッサパをはじめとする3兄弟の結髪外道を調御し……。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.137, 赤沼 p.180) ; 仏陀はそれらの貴公子を道に入れて、坐を起ちて、優留毘羅の森へその旅行を続け給うた。その当時、優留毘羅の森には世に卓越した三人の仙者が住み、多数の弟子を統率して名声を遠くへ馳せて居つたのである。第一の仙者は五百人の弟子を統領し、第二は三百人を第三は二百人を統率して居つた。優留毘羅迦葉 (Ooroowela Kathaba) 、那提迦葉 (Nadi Kathaba) 、伽耶迦葉 (Gaya Kathaba) と呼んで居つた。

【41-02】三迦葉の帰仏——ナディー・カッサパとガヤー・カッサパの帰仏

河を流れてきた祭具を見て、ウルヴェーラカッサパのもとに赴いた2人の弟と500人の弟子たちは、事情を知って釈尊に帰仏する。

[A] 原始聖典

- ① ‘Theragāthā’ Vs.340~344 (p.038) ; 私 (Nadīkassapa) の利益のために仏は尼連禪河にやつて来て、私はその法を聞いて邪見を捨てた。……
- ① ‘Theragāthā’ Vs.345~349 (p.039) ; (Gayākassapaの詩) 8つの流れに潜ってすべての悪を流し、三明を得、仏の教えを実行した。
- ① ‘Apadāna’ 03–54–535 (p.481) ; 私と弟のナディー・カッサパ、ガヤー・カッサパは世尊の神変に教化されて、世尊の元で出家して、弟子たち1000人とともに阿羅漢果を得た。
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.033) ; Nadīkassapaは祭具が河に流れているのをみて、兄に何事かが起こったのを知った……。
- ⑥增一阿含24–05 (大正02 p.622上) ; 爾時順水下流、有梵志名江迦葉、在水側住。是時江迦葉見呪術之具、尽為水所漂。便作是念。咄哉、我大兄為水所溺。是時江迦葉將三百弟子……。爾時順

水下頭有梵志、名迦夷迦葉、在水側住。遙見呪術之具為水所漂。便作是念。我有二兄、在上学道。今呪術之具盡為水所漂、二大迦葉必為水所害。即將二百弟子、順水上流……。

- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.796中）；時迦葉中弟、名那提迦葉。在尼連禪水下流居、有三百弟子、於中最為尊上……。時鬱離羅迦葉小弟、名伽耶迦葉、居象頭山中。有二百弟子、於中為師首……。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.109中）；迦葉有二弟、大名那提迦葉、小名伽耶迦葉。大弟有三百弟子、小弟有二百弟子。……即共詣仏頂禮仏足、白仏言。願與我等出家受具足戒。仏言。善來比丘。乃至鉢盂在手、亦如上說。
- ⑩僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.412下）；仏告舍利弗。如來所度阿若憍陳如等五人善來出家善受具足。共一戒一竟一住一食一學一說。次度滿慈子等三十人。次度波羅奈城善勝子。次度優樓頻螺迦葉五百人。次度那提迦葉三百人。次度伽耶迦葉二百人。次度優波斯那等二百五十人。次度汝大目連各二百五十人。次度摩訶迦葉闡陀迦留陀夷優波離次度釈種子五百人。次度跋度帝五百人。次度群賊五百人。次度長者子善來。如是等如來所度善來比丘出家善受具足、共一戒一竟一住一食一學一說。舍利弗。諸比丘所可度人亦名善來出家善受具足乃至共一說。是名善來受具足。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；又至烏盧頻螺林側、度千外道出家受具。
- ⑫根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.948中）；至烏盧頻螺林側度千外道出家近円。
- ⑬根本有部律「出家事」（大正23 p.1027上）；仏到伽耶頂制底所、有伽耶迦摶。示現三種神變事已、遂令迦摶、住円寂處。
- ⑭根本有部律「破僧事」（大正24 p.133下）；爾時優樓頻螺迦摶、有弟二人、一名那提迦摶、二名伽耶迦摶。各有弟子二百五十人。先於尼連禪河岸勤修梵行処、修寂靜行。那提迦摶住尼連河下流、後於一時尼連禪河中、乃見鹿皮樹皮錫杖祭器等物並被漂沒。見是事已皆作是念……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.176) ; 【41-01】に含む。
- ③中本（大正04 p.151下）；是時迦葉二弟、次曰那提迦葉、幼曰迦耶迦葉、各有二百五十弟子。……仏言、善來比丘、皆成沙門。
- ④瑞應（大正03 p.482下）；優為迦葉有二弟、次曰那提迦葉、幼曰竭夷迦葉。二弟各有二百五十弟子、……復成沙門。
- ⑤異出（大正03 p.620中）；【41-01】に含む。
- ⑥普曜（大正03 p.532上）；優為迦葉有二弟、次名那提、幼曰竭夷。……成為沙門、仏便有千沙門。
- ⑦方廣（大正03 p.612中）；迦葉二弟、一名難提、二名伽耶、各有二百五十弟子、……皆成沙門。
- ⑩十二（大正04 p.147上）；【41-01】に含む。
- ⑪仏讚（大正04 p.031下）；那提伽闍等 二弟居下流 …… 二衆五百人 …… 兄今已服道 我等亦當隨
- ⑫BC. (16-36) ; そこで兄（ウルヴィルヴァー・カーシュヤバ）がその弟子とともに〔迷いの河の〕彼岸に達して、皮衣を棄てたとき、ガヤーとナディーという〔二人のカーシュヤバ〕もそこにやつて来て〔ブッダの〕道を奉じた。
- ⑬行經（大正04 p.080中）；度第一迦葉 居野象沢者 然後以次度迦葉之二弟 三兄弟門徒 千人成無着
- ⑭過去（大正03 p.649下）；爾時迦葉二弟、一名那提迦葉、二名伽耶迦葉。各有二百五十弟子、……即成沙門。
- ⑮集經（大正03 p.849下）；爾時其弟那提迦葉……自將三百弟子……應時出家、即成具足。爾時伽

耶螺髮迦葉……自將二百弟子……應声出家、即成具足。

⑯MV. (vol. III p.424, Jones III p.425) ; 【41-01】に含む。

⑰衆許 (大正03 p.961上) ; 爾時烏嚙尾螺迦葉有其二弟、一名曩提迦葉、二名謔耶迦葉。是二迦葉各有二百五十學徒、……度為沙門。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦 (大正50 p.041上) ; 【41-01】に含む。

③氏譜 (大正50 p.092下) ; 【41-01】に含む。

④統紀 (大正49 p.154中) ; 時頻螺二弟、一名那提、一名伽耶、……乃各與二百五十弟子願求出家。

⑤JM. (p.030, 番中 p.120) ; 【41-01】に含む。

⑥Bigandet. (vol. I p.137, 赤沼 p.180) ; 【41-01】に含む。

【41-03】三迦葉の帰仏——ガヤーシーサ山において阿羅漢果を成じる

釈尊は3人の迦葉と弟子ら1000人を引き連れてガヤーシーサ (Gayāsīsa) 山へ行き、3種の神変を示して「一切は燃えている」と説き、彼らすべてが阿羅漢果を得る。

[A] 原始聖典

①SN.35-28 (vol. IV p.019) ; 世尊はGayāsīsa山に千人の比丘と一緒に住されていた。そこで世尊は比丘らに、「一切は燃えている (sabbam ādittam)」と説かれた。

①‘Udāna’ 01-09 (p.006) ; 世尊がガヤーのGayāsīsa山におられたとき、多くの結髪外道 (sam bahulā jaṭilā) がいて、寒い冬の河で沐浴し、火祭りをして、それで清らかになると想えていた。世尊は「水浴しても清らかにならない、真実 (sacca) と法 (dhamma) によって清らかになる」とウダーナを唱えられた。

①‘Apadāna’ 03-54-535 (p.481) ; 私と弟のナディー・カッサパ、ガヤー・カッサパは世尊の神変に教化されて、世尊の元で出家して、弟子たち1000人とともに阿羅漢果を得た。

①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.034) ; 世尊はウルヴェーラに随意の間住されてから、もと結髪の修行者であった1000人の弟子を連れて象頭山 (Gayāsīsa) に向かって遊行された。そこで彼ら1000人は心解脱した。

④雜阿含0197 (大正02 p.050中) ; 「一時仏住迦闍尸利沙支提、與千比丘俱。皆是鬚髮婆羅門」。その時世尊は三種示現をなし教化して、「一切燒然」と説かれた。「爾時千比丘聞佛所說、不起諸漏、心得解脱」。

⑥增一阿含24-05 (大正02 p.622下) ; 是時世尊以此三事、教化千比丘。是時彼比丘受佛教已、千比丘尽成阿羅漢。

⑦四分律「受戒捷度」 (大正22 p.797上) ; 時世尊度此千梵志授具足已、將至象頭山中。於象頭山中有千比丘僧、以三事教化。一者神足教化、二者憶念教化、三者說法教化……。爾時世尊、以此三事教授千比丘。爾時千比丘、受此三事教授已、即時無漏心解脱無礙解脱智生。

⑧五分律「受戒法」 (大正22 p.109中) ; 於是世尊作是念。何處多有飲食臥具。於中教誡此故梵志千比丘僧。彼伽耶山多有飲食臥具。念已將千比丘往到彼所、以三事教誡。一者神足教誡、二者說法教誡、三者教勅教誡。……聖弟子聞如是法、生於厭離無有染著、便得解脱解脱智生、所作已辦梵行已立不復受有。說是法時、千比丘漏盡心得解脱也。

⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.717上) ; 又至伽耶山頂、現三神變教化令住安隱涅槃。

- ⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.911上）；留鬚外道一千人等並令歸仏出家近円。
⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.948下）；至伽耶山頂現三神變、教化令住安隱涅槃。
⑪根本有部律「出家事」（大正23 p.1027上）；其廈有一大仙名曰迦摶。并諸弟子一千人俱。聞仏說法咸請出家及受近圓。仏到伽耶頂制底所有伽耶迦摶、示現三種神變事已、遂令迦摶住圓寂廈。
⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.134中）；爾時世尊、度一千被髮外道、受具足戒。於優樓頻螺地隨意住已、漸漸遊行至伽耶山、住其山頂窣堵波廈。……世尊說此法時、彼千苾芻不受後有故、於諸有漏心得解脫、皆得阿羅漢果。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.176)；一千人の結髪道士を伴っている優樓頻羅迦葉（ウルヴェーラカッサパ Uruvelakassapa）等の三人兄弟の結髪道士を〔仏の法に〕引き入れ、「来れ比丘よ」の法によって出家させてガヤーシーサ（Gayāsīsa 象頭山）に留まらせ、「燃焼方便の説法」によって阿羅漢果に入らしめ給うた。
③中本（大正04 p.151下）；於時如來、與千比丘僧、詣迦耶悉大叢樹下坐、而入三昧。……姪怒癡火起、便有痛庠。……時千比丘、漏尽望斷、皆得阿羅漢。
⑪仏讚（大正04 p.031下）；彼兄弟三人 及弟子眷屬 世尊為説法 即以事火譬 愚癡黑煙起 亂想鑽燧生 貪欲瞋恚火 燃燒於衆生 …… 如是千比丘 …… 一切心解脫
⑫BC. (16-37)；それから牟尼はガヤーシールシャ（象頭）山において、彼ら三人のカーシュヤバとその弟子たちに対して、〔迷いの世界からの〕出離の訓話をなさった。
⑯集經（大正03 p.850中）；爾時世尊在彼優婁頻螺迦葉聚落之内……漸漸行向伽耶城辺。如來在彼象頭山頂、將是一千比丘徒衆停住。……汝等比丘、今應當知、此一切法、皆悉熾燃。……彼諸一千比丘徒衆、……心得解脫。
⑰衆許（大正03 p.962上）；爾時世尊、度迦葉等千苾芻已。……將耆年迦葉等一千苾芻、往讖耶山頂塔廈經行。……告曰、……諸苾芻、三火熾盛由我為本。……時三迦葉及千苾芻、……得心解脫、……悉皆證得阿羅漢道。

[C] 後世の仏伝資料

- ⑤JM. (p.031, 畑中 p.122)；ガヤーシーサ（Gayāsīsa 象頭山）において「燃火の教え」の説示によって阿羅漢位に安立せしめ……。
⑥Bigandet. (vol. I p.146, 赤沼 p.191)；仏陀は千人の弟子を伴いて、ガヤー河の畔にあるガヤーシーサ（Gayathitha）の村に入り給うた。この村の傍に象の頭に似た形の山があるが……仏陀は弟子と共にこの山の頂に昇りて、岩の上に安座し、弟子等を呼んで、左の如く語り給うた。
「愛する比丘等よ。人界、色界、無色界に於てめぐりあうものはみな燃ゆる炎である。……」

【42】法雨林の苦行者の教化

ガヤーシーサ山から王舎城への途中に法雨林があり、ここに住する苦行者が帰仏する。

[A] 原始聖典

[B] 仏伝經典

- ⑯集經（大正03 p.856中）；爾時世尊、經於少時、住象頭山、次第漸欲向王舎城、遊歷而行。是時

去彼優婁頻螺聚落、未幾至王舍城。其間有一旧仙人居林苑廻所、名曰法雨。而其法雨林内、有旧仙人草庵、其中常有五百苦行道人而住、……皆悉百歳。……

⑯MV. (vol. III p.434, Jones III p.436) ; 世尊はウルヴィルヴァー・カーシュヤパ (Uruvilvā-kāśyapa) の住処を千二百五十人の比丘達と共に去り、法雨林 (Dharmāranya) にこられた。そこには七百人の鬚髮行者が住んでおり、全員二千才であった (savimśāśatavarṣikāni) 。……彼等は世尊によって改宗し、自在神力 (balavaśibhāva) を得、涅槃に入った。

[C] 後世の仏伝資料

【43-01】ビンビサーラ王の帰依——釈尊を訪ねる

1000人の弟子を引き連れて王舍城に行った釈尊をビンビサーラ (Bimbisāra) 王が訪ねる。

はじめ王は高名なウルヴェーラ・カッサバが師であると考えるが、それを知った釈尊が自分が師であることを示して、王が釈尊に帰依する。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.035) ; 世尊は象頭山に随意の間住されてから、もと結髪の修行者であった1000人の弟子を連れて王舍城に向かって遊行された。マガダ王・セニヤビンビサーラ (rājan Māgadha Seniya Bimbisāra) をはじめとするマガダ国のバラモン・居士たち12万人に (ekādasanahutānam Māgadhakānam brāhmaṇagahapatikānam) 法眼が生じた。
- ③中阿含062「頻婢婆羅王迎仏經」(大正01 p.497中) ; 「一時仏遊摩竭陀国、與大比丘衆俱。比丘一千悉無著至真、本皆編髪。往詣王舍城摩竭陀邑」。王は世尊に会いに行つたが、鬱毘羅迦葉が師なのか、沙門瞿曇が師なのか判らなかった。そこで世尊は神通を示して、自分が師であることを知らせ、説法して、洗尼頻婢婆羅王および8万の天と1万2千の摩竭陀人に法眼が生じた。
- ④雜阿含1074 (大正02 p.279上) ; 一時仏在摩竭提國人間遊行、與千比丘俱。皆是古昔縗髮出家。皆得阿羅漢……到善建立支提杖林中住。摩竭提王瓶沙聞世尊摩竭提國人間遊行、至善建立支提杖林中住。與諸小王群臣羽從、車萬二千、乘馬萬八千、步逐衆無數。摩竭提婆羅門長者悉皆從……。
- ⑤別訳雜阿含013 (大正02 p.377上) ; 一時仏遊摩竭提國、與千比丘俱。先是婆羅門耆旧有德、獲阿羅漢。……如來往至善住天寺祠祀林中。頻婆娑羅王、聞佛到彼祠祀林間。時頻婆娑羅王即將騎隊。有萬八千輦輿車乘萬有二千、婆羅門居士數千億萬、前後圍遶往詣佛所……。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.797中) ; 爾時世尊、化此千比丘已便作是念。我先許瓶沙王請。若我成佛得一切智、先來至羅閱城。我今應往見瓶沙王。即正衣服、將大比丘千人、皆是舊學螺髻梵志、皆已得定調柔永得解脫、從摩竭國界遊化漸至杖林中……。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.109下) ; 爾時世尊作是念。吾昔與瓶沙王要得道度之。今應詣彼。便與千比丘前後圍繞漸漸遊行向王舍城。瓶沙王聞佛成道度優為迦葉兄弟三人及千弟子今來此邑。即勅國界四萬二千聚落、一聚落出豪傑二人出共迎佛。八萬四千人乘象馬車前後導從。爾時春末月熱已極盛。衆人各念、願得微陰。時釈提桓因知彼念、即化作雲蓋涼風微起……。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.717上) ; 又至杖林、令摩揭陀主頻毘婆羅王住於見諦。
- ⑪根本有部律「出家事」(大正23 p.1027上) ; 後往杖林、令摩揭陀主影勝大王、得見真諦。與八萬天衆及摩揭陀國婆羅門居士、至王舍城、住於竹林。
- ⑪根本有部律「破僧事」(大正24 p.135中) ; 王聞是已嚴駕善輶、與無量百千眷屬圍繞、欲往佛所禮拜供養……。爾時大王及居士等得此法已心大歡喜、從座而起整衣服、頂禮佛足右膝著地、合掌

向仏而作是言。我今入此微妙之法獲大勝利、從今日已後乃至尽形歸仏法僧、為五戒鄒波索迦。不殺不盜不邪行不妄語不飲酒。作是語已便即請仏及諸苾芻。願來於我王舍城住、令我一生供養四事。世尊爾時默然受請。

⑫法賢訳「頻婆娑羅王経」（大正01 p.825上）；頻婆娑羅王は杖林におられる世尊に会いに行った。その時一人の婆羅門が優樓頻螺迦葉が師匠で世尊が弟子ではないかと思った。そこで世尊は自分が師匠であることを示されて説法されたので、頻婆娑羅王に法眼清浄が生じ、優婆塞となった。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.082, 南伝28 p.176) ; [それから仏は] 「頻婆沙羅（ビンビサーラ Bimbisāra）王との約束を果たそう」と思召して、この一千人の阿羅漢たちを率き伴れて王舍城（ラージガハ Rājagaha）の附近にあるラッティ（Latthivanuyyāna 杖）林苑に入り給うた。王は林苑の番人から、仏の来り給うことを見聞き、……仏の所に詣り、……如來の御足を、頭を以て礼拝し……。
- ③中本（大正04 p.152上）；於時世尊、欲詣羅閱祇、度於君民。即日羅閱祇王遣使者。……世尊以顧、將千比丘僧、今頓須波羅致樹下。……王瓶沙、……禮畢自陳、我是摩竭提王瓶沙身也。
- ⑥普曜（大正03 p.532中）；爾時世尊、在波羅奈説經已竟、……欲至摩竭流布道訓開化愚冥。時摩竭國瓶沙王。……時仏入國、有大社樹名曰遮越、仏與比丘共坐樹下。……前稽首仏足、自称其号、我是国王瓶沙身也。
- ⑦方広（大正03 p.612下）；爾時世尊從波羅奈國與優婁頻螺迦葉兄弟三人及千羅漢、至摩伽陀國。時頻婆娑羅王……爾時世尊近王舍城在遮越林……王心歡喜下車步進、……稽首禮仏。
- ⑪仏讚（大正04 p.032上）；世尊大眷屬 進詣王舍城 憶念摩竭王 先所修要誓 世尊既至已 止住於杖林 瓶沙王聞之 …… 往詣世尊所 …… 前頂禮仏足 敬問體和安
- ⑫BC. (16-46) ; それから、マガダの国王との昔の約束を思い出されて、牟尼は彼ら〔千人の比丘たち〕に囲まれて、ラージャグリハ（王舍城）へ行かれた。かくて如来はヴェーヌ・ヴァナ（竹林園）に到着された。それを聞いて〔シュレーニヤ・ビンビサーラ〕王は大臣たちを従えて近づいて行った。
- ⑬行經（大正04 p.080中）；慈愍度竭王 行詣王舍城 有宿德之人 典領摩竭境 以善居王位 德善踰衆生 聞仏大聖尊 来入国境内 …… 王瓶沙妙容 衆王中最殊 …… 步進詣仏所 五體禮仏足 …… 三自称名号 …… 仏以八種聲 為王廣説法
- ⑭過去（大正03 p.650中）；爾時世尊、心自念言。頻毘婆羅王、……有約誓言、……作此念已。即與迦葉兄弟及千比丘眷屬因達、往王舍城、……住於杖林。……既至仏所、頭面禮足、而白仏言。我是月種摩竭提王、名頻毘婆羅。……
- ⑮集經（大正03 p.857上）；爾時彼處摩伽陀國、有粟散王、其王名曰頻頭婆羅。……王舍城、導引而出、往詣仏所、欲見如來（姪女婆羅跋帝が先に仏に見えんとするも、神通により、先に来れないようにする）……到仏所已、頂禮仏足。……
- ⑯MV. (vol. III p.441, JonesIII p.442) ; シュレーニヤ・ビンビサーラ (Śreniya Bimbisāra) 王は国師より、世尊と千二百五十人の弟子達がラージャグリハ (Rājagr̥ha) に来られアンタギリ丘 (Antagiri) 杖林園 (Yaśṭivana) に住しておられることを聞いた。王が仏所に行こうとすると大群衆が集まる。
- ⑰衆許（大正03 p.962下）；爾時世尊與耆旧迦葉及千阿羅漢、離識耶山詣於王城。去城不遠有杖林塔、仏與大衆至塔而住。時民彌婆囉王……。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.045上）；頻婆娑羅王、往昔於我有約誓言。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.093上）；仏度三仙已、念言王舍本願、便詣頻婆娑羅王所、仏在竹林中。普曜云王聞仏至大悅、導從八萬四千、來至仏所咸疑師弟、乃令迦葉現通除疑。
- ④統紀（大正49 p.154中）；世尊即與頻螺迦葉及千比丘往王舍城、詣頻婆娑羅王所……王與百官出城迎仏。仏為說法。
- ⑤JM. (p.031, 番中 p.122)；その千人の阿羅漢位に囲繞されながら、「ビンビサーラ (Bimbisāra) 王との約束を果たそう」と、次第にラージャガハ (Rājagaha) に行って、都城の近郊にある杖林と呼ばれる遊園 (Latthivanuyyāna) に到着した。その同じ日に彼は杖林遊園においてナーラダ・ジャータカ (Nārada-jataka) を説いた。説示が終わったとき、ビンビサーラ王は、11那由他の人々と共に、預流果に安立した。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.150, 赤沼 p.193)；そこで仏陀はその約定を果さんために千人の弟子を伴うて、王舍城に向い給うた。……頻婆娑羅王は、十二万の軍勢を率い、……杖林園に赴いた。……仏陀は更に進んで苦集滅道の四諦の理を説き出し給うた。

【43-02】ビンビサーラ王の帰依——王に法眼生ず

釈尊に帰依したビンビサーラ王はじめ、諸天や臣民が法眼淨を生じる。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.037)；ビンビサーラ王は法眼を生じて、太子の時に5つの願いがあったが、今すべてを成就したと語り、優婆塞となった。
- ③中阿含062「頻婢婆羅王迎仏經」（大正01 p.498下）；仏說此法時、摩竭陀王洗尼頻婢婆羅遠塵離垢、諸法法眼生。及八萬天摩竭陀諸人萬二千、遠塵離垢、諸法法眼生。
- ④雜阿含1074（大正02 p.279下）；仏告迦葉。我是汝師、汝是弟子、隨汝所安、復座而坐。時欝婢羅迦葉還復故坐。爾時摩竭提婆羅門長者作是念。欝婢羅迦葉定於大沙門所修行梵行。仏說此經已、摩竭提王瓶沙及諸婆羅門長者聞仏所說。歡喜隨喜、作禮而去。
- ⑤別訳雜阿含013（大正02 p.377中）；（尊者優樓頻螺迦葉）在仏前住、頂禮仏足、合掌而言。大聖世尊是我之師、我於今者是仏之子。仏言。如是如是、汝從我學、是我弟子。仏復命言。還就汝坐。時摩竭提頻婆娑羅王、聞仏所說、歡喜奉行。
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.797下）；時摩竭国人瓶沙王為首八萬四千人十二那由他天、諸塵垢盡得法眼淨、見法得法成就諸法自知得果證。前白仏言、我等歸依仏法僧、聽為優波塞、盡形壽不殺生、乃至不飲酒。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.110上）；仏知大衆既已喜敬、為說種種妙法示教利喜、及說仏常所說法苦集盡道。瓶沙王及八萬四千人、即於坐上遠塵離垢得法眼淨、見法得果已受三自歸及受五戒。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；又至杖林、令摩揭陀主頻毘婆羅王住於見諦。
- ⑫根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.911上）；頻婆娑羅王亦住見諦。次詣王舍城住竹林園、度大目連及舍利子。
- ⑬根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.948下）；至杖林令摩揭陀主頻毘婆羅王住於見諦。並度八十百千諸來天衆無量百千摩揭陀國婆羅門等。
- ⑭根本有部律「破僧事」（大正24 p.136下）；摩揭陀主頻毘婆羅王、及八萬天子、無量百千萬摩揭陀國婆羅門居士等、皆悉遠塵離垢得法眼淨。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.083, 南伝28 p.178) ; 〔その時〕摩揭陀王〔頻婆沙羅〕 (Magadharājā [Bimbisāra]) は、十一万人と共に預流果に入り〔残りの〕一万人は信士となることを告白した。
- ③中本 (大正04 p.153中) ; 仏説是時、王及国人一萬二千、諸天八萬、皆見道跡。
- ⑥普曜 (大正03 p.533中) ; 時瓶沙王得法眼淨、心中欣然前受五戒。
- ⑦方広 (大正03 p.613中) ; 爾時頻婆娑羅王得法眼淨、欣然請仏願受五戒。
- ⑪仏讚 (大正04 p.033上) ; 世尊說真實 平等第一義 瓶沙王歡喜 離垢法眼生
- ⑫BC. (16-92) ; このように最高の牟尼が、最高の真実として説いた至福の教説を聞いて、マガダの国王には汚れなく塵なく測り知れない、真理を見る眼（法眼）が生じた。
- ⑬行經 (大正04 p.081上) ; 王聞是深法 心為之悚然 即度生死淵 逮得慧眼淨
- ⑭過去 (大正03 p.651中) ; 爾時頻毘婆羅王、聞此法已、心開意解、於諸法中、遠塵離垢、得法眼淨。八萬那由他婆羅門大臣人民、……得法眼淨。九十六萬那由他諸天。又……。
- ⑮集經 (大正03 p.858中) ; 復有師言。凡有十二那由他人、遠塵離垢、盡煩惱界、心得清淨、於諸法中、生淨法眼。……爾時摩揭陀王頻頭婆羅、已見法相、已知法相、已入法相、……得如是知自在無碍。
- ⑯MV. (vol. III p.449, Jones III p.450) ; この法が説かれているとき、シュレーニヤ・ビンビサーラ (Śreniya Bimbisāra) 王は法眼淨を得た。
- ⑰衆許 (大正03 p.964中) ; 時世尊說是法時、民彌婆囉王及八萬天人、遠離塵垢得法眼淨。及有婆羅門長者土庶等百千人衆、亦離塵垢得法眼淨。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.046下) ; 爾時頻婆娑羅王、聞此法已心開意解。（出因果經）
- ③氏譜 (大正50 p.093上) ; 説偈告衆為王說法、得法眼淨。
- ④統紀 (大正49 p.154中) ; 王及八萬那由他婆羅門大臣人民得法眼淨。
- ⑤JM. (p.031, 番中 p.122) ; 【43-01】に含む。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.152, 赤沼 p.196) ; この説法の結果、王を始め十萬の群衆はみな、丁度かの白布の色に染まるように、直に豫流果の聖衆となつたのである。

【43-03】ビンビサーラ王の帰依——5種の願

王は、かつて王位を継ぐこと、仏に会うこと、などの5つの願いがあったが、それが実現したと喜ぶ。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.037) ; ビンビサーラ王は法眼を生じて、太子の時に5つの願いがあったが、今すべてを成就したと語った。5つの願いとは……
- ⑦四分律「受戒捷度」(大正22 p.798上) ; 瓶沙王見法得法、前白仏言。自念昔日、為太子時、心生六願。一者若父壽終我登位為王。二者當我治國時願佛出世。三者使我身見世尊。四者設我見佛已生歡喜心於如來所。五者已發歡喜心得聞正法。六者聞法已尋得信解……。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.102中) ; 於是漸漸遊行到王舍城。瓶沙王少有五願。一者父王登遐我當紹位、二者願為王時遇佛出世、三者願身見佛親近供養、四者願發喜心得聞正法、五者願聞法已即得信解。
- ⑩根本有部律「破僧事」(大正24 p.134下) ; 爾時摩揭陀主頻毘婆羅、昇樓閣上乞五種願。願我國

出大教導師……。

⑫支謙訳「辨沙王五願經」（大正14 p.779上）；聞如是。一時仏在王舍國鶴山中、與五百比丘俱。時王舍國王、号名辨比沙、少小作太子、意常求五願。一者願我年少為王、二者令我國中有佛、三者使我出入常往來佛所、四者常聽佛說經、五者聞經心疾開解、得須陀洹道。是五願、辨比沙王皆得之。

[B] 仏伝經典

①NK. (vol. I p.084, 南伝28 p.178)；王は仏の所に坐ったまま、〔仏に〕五つの願望を告げ、仏に歸依して……。

⑯集經（大正03 p.858下）；時頻頭王、即白仏言、如來世尊、我昔在家作童子時、發五種願、我於今日、悉得成就。何等為五。一者我在少年之時、早得王位、世尊、此是我之初願、今已得成。第二又願、得王位已、我治化內、有佛出世、此即是我第二心願、今已得成。第三又願、佛出世已、彼世尊邊、我設供養、令得歡喜、此是我心第三之願、今亦得成。第四又願、彼世尊邊、歡喜心已、為我說法、此即是我第四心願、今亦得成。第五又願、彼世尊所。為我說法、願我一切、悉得證知。

[C] 後世の仏伝資料

⑥Bigandet. (vol. I p.153, 赤沼 p.198)；摩揭陀國の王、頻婆娑羅王は、豫流果に入つて、世尊に申し上げるやう。「尊き佛陀よ、數年以前、私がこの国の太子であった時に、私に五つの願がありました。幸にその願を今はすべて成就することが出来ました。……」

【44】竹林園の寄進

ビンビサーラ王が王舎城の竹林精舎を寄進する（迦蘭陀長者が寄進したとするものもある）。

[A] 原始聖典

①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.039)；ビンビサーラ王は竹林園 (Veluvana) を布施し、世尊はこれを受けられた。

⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.798中）；時瓶沙王、持金澡瓶水授如來令清淨。白仏言。今羅閱城諸園中、此竹園最勝。我今施如來、願慈愍故受。仏告王言。汝今持此竹園、施仏及四方僧、何以故。若如來有園園物房舍房舍物衣鉢尼師檀鍼筒即是塔、諸天世人魔若魔天沙門婆羅門所不堪用。王言。我今以此竹園、施仏及四方僧。時世尊、以慈愍心受彼園已。

⑦四分律「房舍犍度」（大正22 p.936下）；爾時世尊在王舍城。摩竭王瓶沙作如是念、世尊若初來所入園、便當布施作僧伽藍。時王舍城有迦蘭陀竹園、最為第一。時世尊知王心念、即往迦蘭陀竹園。王遙見世尊來、即自下象、取象上褥、疊為四重敷已、白仏言。願坐此座。世尊即就座而坐。時瓶沙王、捉金澡瓶授水與仏、白言。此王舍城迦蘭陀竹園最為第一、今奉施世尊、願慈愍故為納受。仏告王言。汝今以此園施仏及四方僧……。

⑧五分律「受戒法」（大正22 p.110上）；於是瓶沙王稽首……。今以此竹園奉上世尊。仏言。可以施僧其福益多。王復白仏。願垂納受。仏言。但以施僧我在僧中。王便受教。以施四方僧。

⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；次至王舍城受竹林精舎。

⑪根本有部律「波逸底迦036」（大正23 p.823下）；爾時影勝王未得見諦以竹林園施露形外道。及生淨信得見諦已、遂廢外道奉施仏僧而為受用。

⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.948下）；至杖林令摩揭陀主頻毘婆羅王住於見諦。並度八十百千諸來天衆無量百千摩揭陀國婆羅門等。次至王舍城受竹林精舎。

⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.138中）；王取宝瓶灌世尊掌、而白仏言。我毘婆迦蘭陀園奉施世尊、唯願納受……。

*⑦四分律「房舎犍度」（大正22 p.937上）；世尊は王舎城に住しておられ、王瓶沙に説法された。そのとき比丘たちは耆闍崛山から、王舎城に乞食に来た。大長者は比丘たちにどこに住んでいるのか、と尋ねた。比丘たちは山窟中、水辺、樹下、石辺、草上に住んでいると答えた。長者は房舎を作れば、受けてくれるかと尋ねた。世尊はそれを許されていない、と答えた。そこで房舎を作ることを許された。瓶沙王は世尊が房舎を許されたと聞いて、迦蘭陀竹林園に大講堂を作った。またある檀越は楼閣舎を作り、ある檀越は、如象形房を作り、ある檀越は種々の房を作った。

*⑨十誦律「雜法」（大正23 p.276下）；仏在王舎城。爾時瓶沙王於竹園中起五百僧坊。有成者有未成者。時王命終。王阿闍世到竹園中看、見是房舎即問此為誰作。比丘答言。大王、是父王所作。有成者有未成者、王便命終。王問比丘、何不成竟。答言、無直。王言、我當與直。時房舎成竟。

[B] 仏伝經典

①NK. (vol. I p.085, 南伝28 p.180)；王は仏を初め〔比丘〕衆に大施を行い、「尊師、私は〔今や〕三宝なしには生きて行けなくなりました。……ラッティ林苑 (Latthivanuyyāna) は大そう遠く御座いますが、私どものこのヴェールヴァナ (Veluvana) と申す苑は、あまり遠もなく、……仏に相応しい住処でございます。世尊、こ〔の林苑〕を私からお受け下さいませ」といつて、……竹林園を〔喜〕捨てした。

③中本（大正04 p.153中）；於時坐中、有豪長者、名迦蘭陀、心中念言。可惜我園、施與尼犍、仏當先至奉仏及僧。……長者歡喜、修立精舍……請仏及僧。

⑥普曜（大正03 p.533中）；時摩竭國有一長者、名迦陵。見仏入國天人所奉而無精舍、我有好竹園欲用上仏。……仏及聖衆遊廻其中、是故名曰迦陵竹園。

⑦方広（大正03 p.613中）；時摩伽陀國有一長者、名迦蘭陀。見仏入國未有精舍、以好竹園奉上如來、前白仏言。……我以竹園奉上如來。

⑪仏讚（大正04 p.033上）；爾時瓶沙王 稽首請世尊 遷住於竹林 哀受故默然

⑫BC. (17-01)；それから、かの王（シュレーニヤ・ビンビサーラ）は牟尼にその住居として幸ある森ヴェーヌ・ヴァナを献上し、真理を理解してあまねく觀察し、〔ブッダの〕默許を得て都城に帰って行った。

⑬行經（大正04 p.081上）；爾時仏聖師 遊止竹林園

⑭過去（大正03 p.651中）；時頻毘婆羅王、……白仏。……我從今日、供養世尊及比丘僧、當令四事不使有乏。唯願世尊、住於竹園、令摩竭提國、長夜獲安。……於竹園、起諸堂舍。……我今以此竹園奉上如來及比丘僧。……竹園僧伽藍、最為其始。

⑮集經（大正03 p.860中）；時頻頭王、即白仏言。……我今捨施諸仏世尊招提僧等。（尼沙塞師の説）

⑯集經（大正03 p.860下）；爾時王舎大城之中、有一長者、名迦蘭陀。（阿耆毘伽道人より、國王に奪われる前に世尊に奉施せよと助言を受く）……布施未來三世一切衆僧來者。

⑰衆許（大正03 p.965中）；時民彌婆囉王以仏近住、欲立精舍安仏及僧而久住止。……我今欲以迦蘭那迦竹林作仏精舍、願仏納受。世尊默然、……迦蘭那迦竹林精舍因茲所立。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦（大正50 p.047上）；我從今日、供養世尊、及比丘僧、當令四事。……（出因果經）普曜經の異説：迦陵竹園。

②釈迦（大正50 p.063上）；釈迦竹園精舍縁記。（出四分律）

- ③氏譜（大正50 p.093中）；王以竹園施仏。諸王見仏洴沙為初。僧伽藍者竹園為初。
- ③氏譜（大正50 p.096下）；律云。摩竭王念、仏初至園即以施住。……王……以園奉仏。仏言、當施仏僧。……中本起云。本施外道、國王追悔欲以奉仏。……菩薩藏云。過去諸仏皆遊此園、若有入者自然無慾、又無毒心。
- ④統紀（大正49 p.154中）；國有長者、名曰迦陵。往詣仏所奉上竹園、……可作精舍。……諸僧伽藍竹園為始。
- ⑤JM. (p.031, 番中 p.122) ; その翌日、彼はプッサ月の黒分の布薩日に (Phussa-kāla-uposathe) ヴェールヴァナ (Veluvana 竹林) を受納し……。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.156, 赤沼 p.200) ; 頻婆娑羅王は、仏陀を供養し奉らんために、仏陀の受け給うようなものを心中に思いめぐらした。……都城に近いあの私の園林は、仏陀及び仏弟子の方々の止宿所として最も適当であろう。……竹林 (Weloowon) と呼ばる園林奉獻の崇巖な式を挙げた。仏陀は黙然としてその奉獻を受け給うた。

【45】舍利弗と目連の帰仏

王舍城内でサンジャヤ (Sañjaya) の弟子であった舍利弗は、釈尊の弟子であるアッサジ (Assaji) に遇って、仏の教えである「縁起法頌」を聞いて法眼淨を生じる。これを聞いた目連も法眼淨を生じ、彼らの250人の仲間たちと共に釈尊の弟子となる。舍利弗・目連は阿羅漢果を得る。

[A] 原始聖典

- ① ‘Apadāna’ 03-01-001 (p.024) ; (舍利弗の譬喻) 私はサンジャヤというバラモンの弟子であったが、アッサジから「諸法は因より生じる。その諸法に滅あり」という仏の偈を聞いて、第一の果を得た。それを聞いて目連も果を得た。……今日私は彼（アッサジ）によって法の將軍となった (tassāham vāhasā ajja dhammasenāpatī ahum) 。
- ②Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.039) ; その時王舍城にサンジャヤ (Sañjaya) という出家者がいて、250人の仲間と一緒にいた。舍利弗 (Sāriputta) と目連 (Moggallāna) の二人もサンジャヤに従って修行していた。舍利弗は王舍城で乞食している具寿アッサジ (Assaji) に会い、縁起法頌を聞いて、法眼を生じた。舍利弗は目連のところに行き、目連は舍利弗から縁起法頌を聞いて法眼を生じた。二人は250人の仲間と一緒に世尊のもとで具足戒を受けた。世尊はこの二人は声聞中の上首となるといわれた。
- ⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.798下）；爾時世尊、在羅閱城。時城中有刪若梵志、有二百五十弟子。優波提舍拘律陀為上首。爾時尊者阿濕卑、給侍如來。時到著衣持鉢入城乞食、顏色和悅諸根寂定、衣服齊整行步庠序、不左右顧視、不失威儀。時優波提舍、時已到入園觀看、見阿濕卑威儀如是。便生是念……。時優波提舍、即往至拘律陀所。拘律陀見優波提舍來、便作是語。汝今顏色和悅諸根寂定、如有所得將不見法耶。答曰。如汝所言……。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.110中）；爾時世尊在羅閱祇竹園精舍。彼有一邑名那羅陀。有故梵志名曰沙然。受學弟子二百五十。門徒之中有二高足。一名優波提舍、二名拘律陀。爾時頗鞞著衣持鉢入城乞食。顏色和悅諸根寂定、衣服齊整視地而行。時優波提舍出遊……。我師所說、法從緣生亦從緣滅、一切諸法空無有主。優波提舍聞已、心悟意解得法眼淨。便還所住為拘律陀說所聞法。拘律陀聞、亦離塵垢得法眼淨。……時二百五十弟子皆悉樂從。
- ⑩僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.412下）；仏告舍利弗。如來所度阿若憍陳如等五人善來出家善受具足。共一戒一竟一住一食一學一說。次度滿慈子等三十人。次度波羅奈城善勝子。次度優樓頻螺

迦葉五百人。次度那提迦葉三百人。次度伽耶迦葉二百人。次度優波斯那等二百五十人。次度汝大目連各二百五十人。次度摩訶迦葉闡陀迦留陀夷優波離。次度釈種子五百人。次度跋度帝五百人。次度群賊五百人。次度長者子善來。如是等如來所度善來比丘出家善受具足、共一戒一竟一住一食一學一說。舍利弗。諸比丘所可度人亦名善來出家善受具足乃至共一說。是名善來受具足。

⑪根本有部律「僧伽伐尸沙002」（大正23 p.682中）；至尊者舍利子所住之房。告言諸妹。此是貴族婆羅門子。捨俗出家年始十六。帝釈聲明經心悟解。諸外論者並皆摧伏如世尊說

一切世間智 唯除於如來 不及身于智 十六分之一

一切人天智 皆如舍利子 不及如來智 十六分之一

於大師衆弟子之中有大智慧、具足辯才最為第一。汝應至心禮敬其足。次至尊者大目乾連所住之房。告言諸妹。此是輔國大臣婆羅門子。捨貴勝位而為出家有大神力。能以足指動帝釈宮。於大師衆弟子之中有大威德、具大神通最為第一。汝應至心禮敬其足。

⑫根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；亦與身于目連出家受具。

⑬根本有部律「苾芻尼毘奈耶」（大正23 p.911上）；頻婆娑羅王亦住見諦。次詣王舍城住竹林園、度大目連及舍利子

⑭根本有部律「苾芻尼毘奈耶」（大正23 p.948下）；次至王舍城受竹林精舍。亦與身于目連出家近円。

⑮根本有部律「出家事」（大正23 p.1027上）；爾時世尊在竹林園。羯蘭鐸迦池側。時鄖波底沙與俱哩多、遊行人間至王舍城、乃見城中寂靜……。時鄖波底沙聞是語已、歡喜踊躍、恭敬合掌、右遶三匝、奉辭而去。便即往詣俱哩多處。時俱哩多遙見而來、告鄖波底沙曰。汝今容貌異常鮮潔、諸根清淨、為得甘露上妙法耶……。

⑯根本有部律「破僧事」（大正24 p.138中）；佛在此羯蘭鐸迦園、乃至舍利弗目犍連出家、得阿羅漢道。

[B] 仏伝經典

①NK. (vol. I p.085, 南伝28 p.181)；その頃、舍利弗（サリピッタ Sāriputta）、目犍連（モガッラーナ Moggallāna）という二人の普行沙門が、王舍城（ラージャガハ Rājagaha）の附近に住んで、不滅〔の涅槃〕を求めて居た。この二人の中で、舍利弗は阿説示（アッサジ Assaji）長老が托鉢のために入って来たのを見……偈を聞いて預流果に達し、友達の目犍連普行沙門にも、その偈を説いて聞かすと、彼も亦預流果に達した。彼等二人は〔元の師〕サンジャヤに（Sañjaya）会って〔事の仔細を述べ〕自分の弟子等と俱に仏の所に詣て、出家した。二人の中で目犍連は七日で（sattāhena）阿羅漢果のに達し、サリピッタ長老は半箇月で（addhamā-sena）達した。

③中本（大正04 p.153中）；佛在羅閱祇竹園精舍。……彼有一卿、名曰那羅陀。故有梵志、字曰沙然、……好仙弟子、凡有二百五十人。門徒之中、有二人高足難齊、一名優波替、次曰拘律陀、（優波替が托鉢の比丘頗陀に会い、頌を聞く）優波替、方聞法義、……便逮法眼。旋還精舍、……具向拘律陀説所聞偈、……亦得法眼。……即出所止、往詣竹園、……皆成沙門。……佛謂優波替、……復汝本字、為舍利弗、拘律陀、還字大目犍連。因本説法、逮得羅漢。

⑥普曜（大正03 p.533下）；佛有沙門名曰安陞、……入城分衛。……時舍利弗本字優波替、而遙見之心中欣然。……將諸弟子往詣佛所、……願聽出家……漏盡意解得無着果。前白佛言、吾有同学、俗字拘律、今名目連。……時舍利弗與目犍連俱、往詣佛所……成無着果。……本有千弟子、得舍利弗目連二百五十人、合一千二百五十比丘、一時所度。

⑦方広（大正03 p.613下）；佛有弟子名舍婆耆、入城分衛……時舍利弗見此沙門、……將諸弟子至如來所、……便成沙門、……得阿羅漢。前白佛言、世尊、我與同學大目犍連。……隨舍利弗往詣

- 仏所、……便成沙門、……得阿羅漢。時舍利弗目犍連、及二百五十弟子、皆得出家尽成羅漢
- ⑩十二（大正04 p.147上）；五年去未至舍衛時、舍利弗作婆羅門、有百二十五弟子坐一樹下。時目連為彌夷羅國中作承相將軍。（舍利弗が樹下に坐し、道を学んでいると聞き、百二十五人の部下と同学となる）舍利弗入城分衛、見仏弟子馬師比丘。……於是舍利弗便得須陀洹道、歡喜便還報目連言。……目連便復得須陀洹道。……舍利弗七日得阿羅漢、目連以十五日得阿羅漢。
- ⑪仏讚（大正04 p.033上）；時阿濕波誓 …… 時至行乞食 入於王舍城 …… 迦毘羅仙人 広度諸弟子 第一勝多聞 其名舍利弗 …… 隨聽心內融 遠離諸塵垢 清淨法眼生 …… 倍行詣仏所 與徒衆弟子 二百五十人 …… 二師及弟子 悉成比丘儀 …… 皆得羅漢道
- ⑫BC. (17-03)；ときにアシュヴァジト（馬勝）は……托鉢をしようとしてラージャグリハに到着した。……カピラ仙の家系の比丘で、多くの弟子を持ち、シャーラドヴァティープトラ（シャーリプトラ。舍利弗）という名で広く知られた者が、……彼を見て、……声をかけた。……バラモン（二生——シャーラドヴァティープトラのこと）の、眼は真理に開かれ……帰ってくるのを見て、……マウドガラの氏姓に生まれた者（マウドガリヤーヤナ、目連）が問い合わせた。……聞いて〔マウドガリヤーヤナ〕自らに正しい眼が生じた。……ブッダの威力によって彼らは一瞬のうちに黄褐色の上衣（袈裟）をまとった比丘〔の姿〕となった。
- ⑬行經（大正04 p.081上）；比丘名馬師 …… 行詣王舍城 …… 外學甚明達 厥名曰受訓 …… 彼聞是四句 …… 覆婆替即時 逮得慧眼淨 因為目犍連 再遍說四句 応時見道跡 倍行詣仏 與五百門徒 …… 発聲稱沙門 威儀即備悉 二賢先見道 倍逮羅漢果
- ⑭過去（大正03 p.652上）；于時王舍城中、有二婆羅門。……一姓拘栗、名優波室沙、母名舍利故、舉世喚為舍利弗。二姓目犍連、名目犍羅夜那。各有一百弟子。……爾時阿捨婆耆比丘、……入村乞食。……時舍利弗。聞阿捨婆耆說此偈已、……得法眼淨。……爾時目犍羅夜那、聞舍利弗說此語已、……得法眼淨。……二人、即將二百弟子、往詣竹園……即成沙門、……即得阿羅漢果。
- ⑮集經（大正03 pp.873下）；優婆低沙、……拘離多、……於彼波離婆闍外道法中、出家修道。……一長老比丘、名優婆斯那。（阿輸波踰祇多）……二人、……得法眼淨。……時刪闍耶波離婆闍迦、……吐大熱血。……詣向仏所、……出家。……優波低沙、從出家後、始經半月、……證羅漢果。時拘離多、止經七日、……證羅漢果。……五百眷屬、悉得出家。
- ⑯MV. (vol. III p.056, Jones III p.056)；ラージャグリハ (Rājagrha) の近くにウパティシュヤ (Upatisya) とコーリタ (Kolita) というバラモンの息子がいた。二人はサンジャイン・ヴァイラティープトラ (Sañjayin Vairatīputra) という遊行者の弟子となる。ウパティッシュヤは町で尊者ウパセーナ (Upasena) に会い、縁起の法を聞いて法眼淨を得、これを聞いたコーリタも法眼淨を得て、二人は五百人の同行者と共に世尊を訪ね、善来比丘戒を受ける。コーリタは七日後 (saptāha-)、ウパティシュヤは二週間後に (ardhamāsa-) 阿羅漢果を得る。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.047中）；于時王舍城中、有二婆羅門。（出因果經）
- ③氏譜（大正50 p.093中）；經云。仏在竹園、王城二婆羅門、……各有一百弟子共為親友。有阿耆比丘入城乞食。舍利弗見心異遍身、具問所學略說一偈、便得初果。還為目連再說得道。即將弟子往詣竹園、……便呼善來出家悟聖。
- ④統紀（大正49 p.154中）；七年(丙戌)婆羅門舍利仏、路逢婆耆比丘說偈、得法眼淨。歸與親友目犍連、宣說偈言、亦得法眼淨。即各將一百弟子往詣竹園、求願出家、仏呼善來比丘、……即成沙門、……亦成阿羅漢。
- ⑤JM. (p.031, 畑中 p.123)；ブッサ月の白分の最初の日に(i)、250人の遊行者たちと共に、2弟子を出家せしめた。彼等のうち、大目犍連 (Mahāmoggallāna) はマーガ月の7日目に (Māghamā

sassa sattamiyam) ……大舍利弗 (Mahāsāriputta) はマーガ月の満月の日に (Māghapūṇṇamiyam) 声聞波羅蜜智の頂点に達した。

⑥Bigandet. (vol. I p.158, 赤沼 p.204) ; 王舎城には刪舍耶 (Thindzi) と呼ぶ、異端の師があつた。その当時、舍利弗 (Thariputra) と目連 (Maukalan) とは、その師の教を受けて、徳行を研いでいた。（舍利弗は阿説示から法を聞き、豫流果に入り、舍利弗からこれを聞いて目連も豫流果に入る。）両人は二百二十人の仲間を連れて、仏陀の許に走った。……七日にして、目連は阿羅漢となり、舍利弗は十五日を要して阿羅漢のさとりをひらいた。

(1) プッサ月の黒分に (Phussa-kāla-uposathe) Veluvanaを受納し、その次の最初の日 (pātipadadivase) とは、すなわち、普ッサ月の白分の最初の日である。

【46】大迦葉の帰仏

すでに出家していた大迦葉 (Mahākassapa) が釈尊を阿羅漢と認めて弟子となり、妙衣を脱いで釈尊の糞掃衣と交換する。

[A] 原始聖典

①SN.16–11 (vol. II p.220) ; 出家した私 (Mahākassapa) は王舎城とナーランダの中間にあらバフプッタ・チエーティヤ (Bahuputta cetiya) に坐っておられる世尊に会って出家し、第8日目に智を生じた (atṭhamiyā aññā udapādi)。そして世尊と糞掃衣 (pamsukūla) を交換した。

④雜阿含1142 (大正02 p.302上) ; 世尊は舍衛国・祇樹給孤独園におられた。その時摩訶迦葉はぼろぼろの衣を着て、髪をぼうぼうにして現れた。比丘達は威儀を知らないと考えた。世尊は比丘たちの気持ちを知って、半座を分け与え、「汝は先に出家し、我は後に出家した」といわれた。迦葉はそれでも師であるからと傍らに坐った。世尊は禪定においても、神通力においても自分に等しいと迦葉を褒められた。

④雜阿含1144 (大正02 p.303中) ; 我出家已、於王舎城那羅聚落中間多子塔所、遇值世尊、正身端坐、相好奇特、諸根寂静、第一息滅、猶如金山。……仏告迦葉。汝當受我糞掃衣、我當受汝僧伽梨。仏即自手授我糞掃納衣。我即奉仏僧伽梨。如是漸漸教授、我八日之中、以學法受於乞食。至第九日起於無學。

⑤別訳雜阿含117 (大正02 p.416下) ; 雜阿含1142に同じ

⑤別訳雜阿含119 (大正02 p.418中) ; 世間若有阿羅漢者、我當歸依、隨其出家。時彼王舎大城中間有羅羅健陀。羅羅健陀中間有多子塔。……我昔推求出世之師。今所見者真是我之婆伽婆阿羅呵三藐三佛陀也。作是念已心不散亂、專念觀佛。更正衣服右達三匝、踴跪合掌。白佛言。佛是我世尊。我是佛弟子。如是三說。佛亦復言。如是迦葉、我是汝世尊。汝是我弟子。亦復三說。……爾時如來。即受迦葉所著大衣。我於是時自從佛手受是倂那糞掃之衣。佛授我已即便起去。我隨佛後。遙佛三匝、為佛作禮、即還所止。我於八日、學得三果。至第九日、盡諸有漏得阿羅漢。

⑩僧祇律「雜誦跋渠」 (大正22 p.412下) ; 仏告舍利弗。如來所度阿若憍陳如等五人善來出家善受具足。共一戒一竟一住一食一學一說。次度滿慈子等三十人。次度波羅奈城善勝子。次度優樓頻螺迦葉五百人。次度那提迦葉三百人。次度伽耶迦葉二百人。次度優波斯那等二百五十人。次度汝大目連各二百五十人。次度摩訶迦葉闡陀迦留陀夷優波離。次度釈種子五百人。次度跋度帝五百人。次度群賊五百人。次度長者子善來。如是等如來所度善來比丘出家善受具足、共一戒一竟一住一食一學一說。舍利弗。諸比丘所可度人亦名善來出家善受具足乃至共一說。是名善來受具足。

⑪根本有部律「僧伽伐尸沙002」 (大正23 p.682中) ; 至尊者大迦葉波所住之房。告言諸妹。此是

大婆羅門勝妙之族。捨九百九十九具犁牛、二百余碩碎金大麥、六十億金錢、有十八封邑僕使傭人、有十六聚落興易商估。妻名迦畢梨身如金色儀容美麗無與等者。如此衆事並皆棄捨如捐漁唾於後夜時捨百千上服著龜鈔僧伽胝、歸仏出家住於林薮。假使狂象拳目視之便捨狂醉、少欲知足修杜多行。於大師衆弟子之中威德尊重最為第一。汝應至心禮敬其足。

⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」（大正23 p.908中）；摩揭陀國に尼拘律という婆羅門に子が生まれ、畢鉢羅樹に祈って得られたので畢鉢羅、氏族にしたがって迦摶波と名づけられた。長じて劫比羅城の劫比羅婆羅門の娘・妙賢と結婚したが、2人は隠遁を願っていたので、12年間互いに身体も触れなかった。父母が亡くなったので共に出家し、迦摶波は阿羅漢に会ったら弟子になろうと心にきめて隠士となり、多子制底に住んでいた。時に世尊は6年の苦行の後、歡喜・歡喜力の供養を受け、黒龍の讚歎を得、吉祥の草を敷いて、36億の天魔を降伏して菩提樹下で無上覺を証し、鹿野苑で初転法輪し、次いで大軍婆羅門と2牧牛女に初果を証せしめ、留鬚外道1000人を帰仏させ、ビンビサーラ王を見諦させ、舍利弗・目連を度し、室羅伐城で勝光王を少年経を説いて調伏し、勝鬘夫人・毘盧將軍・仙授等に説法した後、隠士迦摶波を化す時であると知られ、仏栗国に遊行して、廣嚴城多子制底に行かれた。迦摶波は世尊に会うなり、「これは我が師、我はこれ弟子なり」と言って弟子となり、衣を交換して、第9日目に阿羅漢果を得た。元の妻・妙賢は無衣外道の輔瞞刺拏の弟子となり苦労していたが、後に大世主の弟子となり比丘尼となつたが、未生怨王に辱められた。

[B] 仏伝經典

- ③中本（大正04 p.161上）；爾時世尊在舍衛國祇樹給孤独園、為衆說法。……於是摩訶迦葉、垂髮弊衣、始來詣佛。世尊遙見歎言、善來迦葉、豫分半床、命令就坐。
- ⑪仏讚（大正04 p.033下）；爾時有二生迦葉族明灯多聞身相具財盈妻極賢厭捨而出家志求解脫道路由多子塔忽遇釀迦文……命之以善來……領解諸深法成四無碍辯大德普流聞故名大迦葉
- ⑫BC. (17-23)；そのときカーシュヤバの氏姓の灯明であったバラモン（二生）で、容色、姿形そして財産にも恵まれた者が、その富貴と賢き妻とを打ち棄て、解脱を求めて黄褐色の上衣をとつて〔家を〕出た。彼はバフトラカ（多土塔）……かたわらで……〔ブッダを〕見て、……合掌して近づいた。……牟尼が教えをわずかばかりお説きになったときに、彼はすべての意味を正しく理解したので、その透徹した知（無礙弁）と年長さからマハー・カーシュヤバ阿羅漢と名づけられた。
- ⑬行經（大正04 p.081下）；時有大姓子名曰藥樹生捨金色妙英剃頭被袈裟……今始得睹佛……向佛遙稽首……善來賢明士……即時逮果證
- ⑭過去（大正03 p.653上）；爾時偷羅厥叉國、有一婆羅門、名曰迦葉。……已即捨家事、入於山林、……而着壞色納衣、自剃鬚髮。……聞天語已、……即便往趣竹園僧伽藍。爾時世尊、……到于兜婆、而逢迦葉。……于時迦葉、聞此言已、即便見諦、乃至得於阿羅漢果。……有大威德、智慧聰明、是故名之、為大迦葉。
- ⑮集經（大正03 p.861下）；而彼村内（新堅立又は摩訶婆陀羅）、有一大富婆羅門、名尼拘盧陀羯波（隋言堪用樹）。……而產生一童子、……名畢鉢羅耶那（隋言樹下生）。……生於大迦葉種姓之内故、於世間得迦葉名。彼出家已、……次第遊行、……至那荼陀村王舍大城。其間忽見如來在彼一神祇處。……經於七日、至於八日、如教生智。
- ⑯集經（大正03 p.866下）；……。於時世尊、即授長老摩訶迦葉麤糞掃衣、世尊便受摩訶迦葉所著妙服。
- ⑰MV. (vol. III p.050, JonesIII p.050)；（後に竹林精舎での阿難との問答の中で）私は満一年

の遊行生活の終わりにラージャグリハ (Rājagrha) のバフプトラカ・チエーティヤ (Bahuputra-ka cetiya) に於て世尊にお会いした。……私は8日間は (aṣṭāham) 未だ学ぶべき身 (śaikṣo sakaraṇīyo) であったが、9日目に (navame) 阿羅漢果に到達した。……私は自分の綿の下衣を世尊のために広げ、世尊はそこに座られた。世尊は「お前は、この代りに私の大麻の糞掃衣を欲しいと思っているのか」と云って、私に世尊の糞掃衣をくださった。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.049上）；爾時偷羅厥叉国、有一婆羅門名曰迦葉。（出因果經）
③氏譜（大正50 p.093中）；有偷羅國婆羅門名曰迦葉、……巨富能施妻亦相具、俱無世慾捨家入山。……空天告言、今有仏出便趣竹園仏往迎之與共承受說法。悟阿羅漢有大威德、天人所重故名大也。
④統紀（大正49 p.154中）；時有婆羅門名曰迦葉、極為巨富捨家入山自剃須髮。……迦葉即趣竹園、佛為說法得阿羅漢。以有大威德智慧、名之為大迦葉。……迦葉於多子塔值佛、乃求出家、即以弊衣奉佛為座。價直十萬兩金。佛即授商那納衣。

【47】王舎城の人々の非難

多くの王舎城の男たちが出家したので、母や妻などから「釈尊がやってきて家系を断絶させる」という非難が生じる。しかしこの非難は7日間で滅する(1)。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.043)；王舎城の人々は「沙門ゴータマがやってきて、子なき状態にし (aputtakatāya paṭipanno) 、寡婦にさせ (vedhavyāya paṭipanno) 、家系を断絶させる (kulupacchedāya paṭipanno) 」と非難した。この非難は7日を過ぎて滅した (sattā-hassa accayena antaradhāyi)。
⑦四分律「受戒犍度」（大正22 p.799中）；爾時諸比丘乞食時聞此諸人所說。此大沙門將諸梵志自隨來此、今復當將此諸人去。諸比丘聞已皆懷慚愧。往世尊所、以此因縁具白世尊。世尊告諸比丘……。

[B] 仏伝經典

- ⑯集經（大正03 p.882中）；爾時婆伽婆度長老舍利弗及目犍連五百人等、……從摩伽陀國、次第遊行、……到王舎城(摩訶僧祇師作如是說)。……於時多人、道說毀訾、各各唱言。沙門瞿曇、當令我等無有子息、……絕我後胤。……爾時世尊告諸比丘。汝等當知、如是音聲、不應多時唯至七日。

[C] 後世の仏伝資料

- ⑥Bigandet. (vol. I p.163, 赤沼 p.210)；摩揭陀国の住民は、主に社会の最上層に位する多くの人々が相率いて沙門の生活に入るのをみて、互に囁き合うようになった。「みよ、沙門喬答摩はその法を説きて人民の種を絶やして仕舞うのではないか」……仏陀は諸弟子を慰めて、「……七日の後には全く絶えて仕舞うであろう」

(1) 非難が生じたとするエピソードを紹介せず、國中が帰依したとするものもあり、これも参考のために以下の中に掲げておいた。

【48-01】故郷へ帰る——淨飯王が釈尊の帰郷を切望する

釈尊の出家以来心配していた父の淨飯王 (Suddhodana) が、釈尊が仏になったと聞いて会うことを切望する⁽¹⁾。

[A] 原始聖典

- ①根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.717上）；時勝光王遣使持書往淨飯王所。白言大王。王今慶喜、太子已證無上正覺、亦令有情同漁甘露、今現住在逝多林中。時淨飯王聞此信已、以手支頬懷憂而歎。往日一切義成太子修苦行時、我常遣使問其安不、使者尋還報我住處。比令使問竟無一還。今者云來逝多林內、其事如何……。
- ②根本有部律「苾芻尼毘奈耶」（大正23 p.948下）；時勝光王遣使持書往淨飯王所、白言大王、王今慶喜。太子已證無上正覺亦令有情同漁甘露。今現住在逝多林中。時淨飯王聞此信已以手支頬懷憂而歎。往日一切義成太子修苦行時、我常遣使問其安不。使者尋還報我住處。比令使問竟無一還。今者來至逝多林內、其事如何。
- ③根本有部律「破僧事」（大正24 p.143上）；（祇園精舎を受けられた後）仏在室羅筏城逝多林給孤独園、與大苾芻衆俱。爾時憍薩羅國勝軍大王、遣使持書向劫比羅城、與淨飯王書曰、王應欣慶、王之太子得成正覺、獲甘露法、以微妙義普施群生、皆得充足、深助歡喜。時淨飯王得書讀已、情甚欣悅、以手掌頬默然而住、面有憂色。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.085, 南伝28 p.182) ; 如来が竹林園 (Veluvanuyyāna) に在す頃、淨飯 (Suddhodana) 大王は、「予の王子は六年間苦行を行い、最上の上菩提に達して、勝れたる法輪を転じ、王舍城 (Rājagaha) に近い竹林園に住んで居るという噂である」と聞いて、一人の大臣を呼び寄せ、「……予の王子を伴えて来てくれ」と言いつけた。（使者は仏の説法を聴聞し、阿羅漢果を得、出家）→迦留陀夷（カールダーカ Kāludāyin）派遣
- ③中本（大正04 p.154上）；於是如來將歸舍夷。與大比丘僧、皆得應真。……賢者舍利弗、大目犍連、欝毘迦葉、那提迦葉、伽耶迦葉等、一千二百五十人。
- ⑥普曜（大正03 p.534中）；時王遙聞子得佛道、已來六年。王念佛已心中悲喜、飢虛欲覩。
- ⑦方広（大正03 p.614上）；爾時輸檀王聞子得道已經六年、中心欣喜欽渴彌積。
- ⑮集經（大正03 p.889下）；即於彼時、頭檀王、聞子悉達……既覺證已、至波羅奈、轉大法輪。……爾時輸頭檀王、於世尊所、倍更憶念、作是思惟。設何方便、令彼太子、愍諸眷族速來至此迦毘羅城。
- ⑯MV. (vol. III p.092 JonesIII p.095) ; 世尊は、出家された時から、成道された時から、七年間 (saptahi varṣehi) 故郷を見ることがなかった。七年の終りに (saptānām varṣāṇām atyayena) 釈迦族から、昇天した天子から「今や故郷の人々に慈悲を与える時である」と請われ、これを承諾された。
- ⑰衆許（大正03 p.969下）；爾時世尊於舍衛國化利畢已、思欲往彼迦毘羅城。時勝軍王承仏化……奉書上淨飯王。……淨飯王……即思慮、……今若遣使定化出家。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.049下）；……王遙聞子得佛道、已來六年……。
- ③氏譜（大正50 p.093中）；普曜云。王聞得道已經六年、悲喜欲見。
- ④統紀（大正49 p.155上）；時父王遙聞子得佛道已六年來。

⑥Bigandet. (vol. I p.165, 赤沼 p.213) ; 浄飯大王は今まで、太子の出城以後六年の大苦行の間、太子のことを思うては憂愁に堪えず、……今一度太子に遇いたいものであると願い望まれて、……宮臣を招き、「……迦維羅婆蘇都へ一緒に帰って下さいと御願いせよ」と命ぜられた。……斯ういうことが七回も繰り返された。

(1) 資料によっては舍衛城で、祇園精舎の寄進を受けてから帰郷するというものもある。ここではブッダチャリタなどの順序にしたがった。

【48-02】故郷へ帰る——ウダーアイが帰郷を促す

父王の願いをウダーアイ (Udāyin) が使者になって釈尊に伝える(1)。

[A] 原始聖典

- ① ‘Apadāna’ 03-55-545 (p.504) ; そのときウダーアイ長老 (Udāyi-thera) に請われて、哀愍されて世間の導師 (Lokanāyaka) は釈迦族のカピラヴァットワに行かれた (upesi Kapilavhayam)。
⑥增一阿含24-05 (大正02 p.622下) ; 是時尊者優陀耶遙見世尊向迦毘羅衛坐。見已、便作是念。世尊必當欲往至迦毘羅衛見諸親里。是時優陀耶即前長跪、白世尊曰……。
⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.717中) ; 時鄖陀夷持王勅書往室羅伐。至世尊所奉上勅書。世尊受書便自披読。時鄖陀夷白世尊曰。世尊能向劫比羅城不。
⑫根本有部律「苾芻尼毘奈耶」 (大正23 p.948下) ; 時淨飯王自裁書曰
始從受胎後 長養於世尊 煩惱火恒然 常希最勝樹
今既得成仏 徒衆數無辺 余人受安樂 唯吾未除苦
書了印訖付鄖陀夷。
⑬根本有部律「破僧事」 (大正24 p.143上) ; 時王大臣、名烏陀夷。見王愁惱仰白王言。大王、何故以手掌頬心生憂惱默然而住……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.086, 南伝28 p.184) ; ……仏は、仏と成り給うて後、最初の内安居をイシパタナ (Isipatana) で過し、安居を終って自恣を行い給うと優樓頻羅 (ウルヴェーラー Uruvelā) に赴いて、其処に三箇月 (tayo māse) を過し、三人兄弟の結髪行者を教化し、一千人の比丘衆を伴れて弗沙 (ブッサ) 月の満月の日に (Phussamāsapuṇṇamāya) 王舎城 (Rājagaha) に赴いて、其処に二箇月間 (dve māse) 在した。これまで、婆羅奈 (バーラーナシー Vārāṇasi) を出で給うて以来、五箇月になり、寒冷期はすっかり過ぎて了った。そして優陀夷 (ウダーアイン Udāyin) 長老が来てから〔已に〕七八日を過ぎた。彼〔長者〕は、巴迦那 (パッグナ) 月の満月の日になって (Phaggūṇipuṇṇamāsiyam) 考えた。「……今や十力者が親族に好意を示し給う時である」と。そこで彼は世尊の所へ往って……その故郷の都へ赴き給うよう、その行を讃めたえた。
③中本 (大正04 p.154上) ; 是時迦維羅越王閻頭檀、遣梵志憂陀耶、來詣竹園、請仏還國。
⑥普曜 (大正03 p.534中) ; 有一梵志名優陀耶。……王告憂陀、往請迎仏、問訊。別闊以來十有二年、……思一相見如復更生。優陀耶受教、往詣仏所稽首仏足、具以王意白仏。
⑦方広 (大正03 p.614上) ; 語優陀夷言。汝今可往請仏還國問訊起居。離別已來十有二載、……得一相見還如更生。憂陀夷受王教已、往詣仏所、稽首仏足具述王意。
⑮集經 (大正03 p.889下) ; 此憂陀夷國師之子、次復車匿、此之二人。……我今當遣往彼為使。

- ⑯MV. (vol. III p.091, JonesIII p.093) ; 釈迦族の人々は、「世尊が法輪を転じ、ラージャグリハ (Rājagrha) に住しておられると聞いて、シュッドーダナ (Śuddhodana) 王に使者を送るよう要請し、チャンダカ (Chandaka) とカーローダーイン (Kālodāyin)」の二名が使者となる。
- ⑰衆許 (大正03 p.970上) ; 時有大臣名烏那曳曩、……王受書、速至舍衛行詣精舎、……白仏言。今請世尊、去迦毘羅城。仏言、我去。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.049下) ; ……有一梵志名優陀耶。
- ③氏譜 (大正50 p.093中) ; 普曜云。……有梵志名優陀夷……王令往請別闇已來、經十二年思一相見。
- ④統紀 (大正49 p.155上) ; 令梵志優陀耶、往迎仏曰、別闇以來十有二年、……思欲一見。優陀夷受教詣仏。願求出家即得阿羅漢。
- ⑤JM. (p.032, 番中 p.124) ; 大師はウルヴェーラー (Uruvelā) で3カ月 (tayo mase) 、ラージャガハ (Rājagaha) で2カ月 (dve māse) 過ごしたので、ヴァーラーナシー (Vārāṇasī) からの出発からこの時までが5カ月 (pañca māsā) 経過した。さて、このように世尊がここかしこで過ごしている時、スッドーダナ (Suddhodana) 王は「私の息子は6年間 (chabbassāni) 苦行し、最高の現等覚を得て、最もすぐれた法輪を転じつつ、ラージャガハに行って、竹林園 (Veluvanavīhāra) で過ごしている」ということを聞いて、……10人の大臣を使いに出した。……パッグナ月の満月の日に (Phaggunapūṇamīyam) 一番最後の使者、カールダーイン (Kāludāyin) 長老は、……世尊に近づき、「スッドーダナ大王があなたに会いたく思っておられます……」と言った。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.169, 赤沼 p.216) ; 浄飯王は数多の宮臣を眺めて、斯ういう難事には最も適当な人である迦樓陀夷 (Kaludari) を選び出された。彼は直ちに一千名の従者を連れて王舎城に向うた。竹林精舎に着いて前の使者と同じく仏陀の説法を聞き、従者達と共に沙門果を開いた。迦樓陀夷の到着後七日目に「……陛下は私に仏陀をお迎え申すよう御命令を下されました」

(1) チャンダカ (Chandaka ; skt.) とカーローダーイン (Kālodāyin ; skt.) とするものもある。

【48-03】故郷へ帰る——カピラヴァットゥへ

釈尊が父王の願いにしたがって、故郷のカピラヴァットゥ (Kapilavatthu) に帰る。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.082) ; 釈尊は随意の間王舎城に住されてから、カピラヴァットゥ (Kapilavatthu) に行かれ、ニグローダ園 (Nigrodhārāma) に住された。
- ⑥増一阿含24-05 (大正02 p.623中) ; 是時世尊即将諸比丘、前後囲繞、往詣迦毘羅衛國。到已、便詣城北薩盧園中。是時真淨王聞世尊已達迦毘羅衛城北薩盧園中。是時真淨王將諸釈衆、往詣世尊所。
- ⑩僧祇律「単提042」 (大正22 p.365中) ; 迦維羅衛国父子相見應此中 (鼈本生經) 広説。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.718下) ; 昔時去日百千天衆隨從空中、於劫比羅城囲繞而去。今者獲得無上妙智更乃足歩而還。欲令諸人息輕慢心故、我今應以神變入劫比羅城……。 (このとき浄飯王は見諦したので、王位を釈迦童子の賢善に譲った。p.720中)
- ⑫根本有部律「破僧事」 (大正24 p.144上) ; 爾時世尊作如是念。我若步行入劫比羅城、諸釈迦種

皆是高心、若見步行必当恥笑作如是語、此悉達太子出家之時、無量諸天囲繞騰空而去、多時苦行得甘露味、成等正覺、今步行入城。作此念已即入三摩地、没即現東方……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.087, 南伝28 p.186) ; 〔仏は〕……王舍城 (Rājagaha) を出発して日々一由旬を進み給い「王舍城から迦毘羅衛 (Kapilavatthu) までは六十由旬あるから、二箇月で著こう」と急がぬ旅に出で給うた。
- ③中本 (大正04 p.155上) ; 其日世尊、起於竹園、與比丘僧千二百五十人俱、威神感動諸天侍從、始入舍夷。
- ⑥普曜 (大正03 p.534中) ; 仏自念曰。本與父王要得仏道爾乃還国當度父母、今正應還。……先遣神足弟子比丘優陀耶、往顯示神足知仏欲往。
- ⑦方広 (大正03 p.614上) ; 爾時世尊作是思惟。本與父王要誓成仏爾乃還国當度父母。……爾時如來到七日已、與諸弟子整持衣鉢、威儀詳序向迦毘羅城。
- ⑩十二 (大正04 p.147中) ; 十二年還父王國。為釈氏精廬。去城八十里、為差摩竭說法。還國為父王及釈迦種說法、度八萬四千人、得須陀洹道。
- ⑪仏讚 (大正04 p.036下) ; 出彼五山城 與千弟子俱 前後眷屬從 往詣尼金山 近伽維羅衛 而生報恩心 …… 王師及大臣 先遣伺候人 …… 知仏欲還國 …… 王聞大歡喜 嚴駕即出迎
- ⑫BC. (19-01) ; ……〔ラージャグリハの〕五山と都城から去って、……〔カピラヴァストゥの〕都城へ向われた。そしてちょうど千人の弟子を教化したときであったが、進み行きて、彼 (ブッダ) は父の国に著かれた。そしてそこで父王や国人たちに恵みを施そうと思われて、自分の生国の端におとどまりになった。
- ⑯集經 (大正03 p.890下) ; 爾時世尊、即告長老優陀夷言。汝優陀夷、若其然者、汝等二人、於先可至彼迦毘羅婆蘇都城、告我親眷諸釈種等、作如是言。今者太子、苦行已徹、愍汝等故、不久欲來。其優陀夷、及彼車匿。蒙仏勅已、而白仏言。唯然世尊我不敢違。頂禮仏足、右遶三匝、辭退而去。次第漸行至迦毘羅婆蘇都城尼俱陀林、依彼聚落、暫時止住。
- ⑰衆許 (大正03 p.971上) ; 爾時世尊與是眷族隨路而去、次第遊化至迦毘羅城。不遠有嚕賀迦河。時淨飯王將諸眷族及大小臣同在河辺。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.049下) ; 仏自念言。本與父王要得仏道、爾乃還国當度父母、今正應還。……先遣神足弟子、比丘優陀耶、往顯威神足、知仏欲往。
- ③氏譜 (大正50 p.093中) ; 普曜云。……王出四十里迎仏。……
- ④統紀 (大正49 p.155上) ; 仏念、今將還國當度父母。
- ⑤JM. (p.032, 番中 p.125) ; 「よろしいウダーイン (Udāyin) よ」と世尊は、2万人の漏盡比丘を従えて、白月の最初の日に (pātipade) (1) ラージャガハを出発し……1日1由旬ずつ進んで2ヶ月して、ヴェーサー一カ月の満月の日に (Visākha-puṇṇamiyam) 、カピラプラ (Kapila-pura) に到着した。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.170, 赤沼 p.218) ; この時には摩揭陀の一萬の沙門果を得たる比丘と、迦維羅城から来た一萬の沙門果を得たる比丘とが仏世尊に従って旅をしたのである。両国の距離は六十由旬あって、この道程を行くに六十日を費したのであるから、一日に平均一由旬づつ旅行したのである。

(1) 「白月の最初の日に (pātipade)」とは「パッグナ (Phagguna) 月の白分の初日に」の意。

【49-01】ナンダとラーフラの出家——ナンダの出家

カピラヴァットゥに帰った釈尊は、はじめに異母弟のナンダ（Nanda、難陀）を出家させる。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.082) ; 世尊がラーフラを出家させたとき、淨飯王は「世尊が出家されたときには私の苦しみは少なくなかった。難陀の時もそうであった。しかしラーフラの場合は極めて大きい (bhagavati me pabbajite anappakam dukkham ahosi, tathā Nande, adhimattam Rāhule) 」と嘆き、父母の許さない子を出家させないでほしいと願って、許された。
- ⑦四分律「受戒捷度」(大正22 p.810上) ; 爾時輸頭檀那王、聞仏度羅睺羅出家。悲泣來僧伽藍中至世尊所。到已頭面禮足在一面坐。一面坐已白世尊言。世尊出家我有少望心、而難陀童子當為家業、而世尊復度令出家、難陀既出家已……。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.117上) ; 時淨飯王、聞仏已度羅睺羅、便大懊惱、出詣仏所白仏言。仏昔出家尚有難陀、不能令我如今懊惱。難陀已復出家、余情所寄唯在此子。今復出家。
- ⑨十誦律「受具足戒法」(大正23 p.152下) ; 仏在迦毘羅婆城。爾時淨飯王詣仏所……。王言。仏出家時、我心愁憂不忍不喜。難陀羅睺羅後諸子出家時、我心愁憂不忍不喜。今仏與我願。父母不放不得與出家……。從今父母不放不得與出家。若與出家、得突吉羅罪。
- ⑪根本有部律「僧伽伐尸沙002」(大正23 p.682下) ; 至尊者難陀所住之房。告言諸妹。此是仏親弟。捨俗出家。若不出家為力輪王。於大師衆弟子之中、善護諸根能防外境最為第一。汝應至心禮敬其足。
- ⑪根本有部律「出家事」(大正23 p.1035上) ; 仏在劫比羅城尼瞿陀林中住。時淨飯王……白仏言。世尊、唯願世尊與我一願。世尊問曰。大王、求何願耶。王曰。有少許願然諸釈種為言。世尊當作轉輪聖王、乘空往四天下、我等亦隨世尊。既出家已。我等所望悉皆不得。復次難陀當作力轉輪王、彼亦世尊度令出家亦絕希望。羅怙羅有大威德、當作大王、世尊今亦令其出家、我等釈種亦絕希望。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.091, 南伝28 p.195) ; 第二日目に (dutiyadivase) 、難陀 (ナンダ Nanda) 王子の即位式、新殿入初めの式、婚礼式が行われている時、仏は彼の家に来て、……彼を出家させようと思って祝呪を唱え、……。斯うして仏は、迦毘羅衛 (Kapilapura) の都へ来て第三日目に (tatiyadivase) 難陀を出家させ給うた。
- ⑥普曜 (大正03 p.536中) ; 時仏弟難陀亦作沙門。來下鬚髮。時難陀有典監、作剃頭師。……即成沙門、禮諸沙門因隨次坐。難陀在後作次第禮、到此沙門則住不禮。
- ⑦方広 (大正03 p.615下) ; 仏弟難陀亦為沙門。難陀所使名優波離。……便成沙門、在比丘中隨列而坐。難陀後至次第作禮、到優波離即止不禮。
- ⑯集經 (大正03 p.911中) ; 爾時世尊、教化難陀釈種之子、……汝來難陀、當就出家。……釈子難陀白言、世尊、我不出家。……如是世尊、第二第三、……勸其出家、而彼難陀、不肯出家。……但敬仏故……我當出家

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.051中) ; 時仏弟難陀亦作沙門。未下鬚髮難有典作。剃頭師……。 (出普曜經)
- ③氏譜 (大正50 p.093中) ; 爰時難陀亦作沙門。
- ⑤JM. (p.033, 番中 p.127) ; カピラヴァットゥ (Kapilavatthu) 市に到着した日から3日目に (tatiye divase) 、彼はナンダ (Nanda) 王子を出家せしめ、7日目に (sattame divase) ラーフ

ラ (Rāhula) 王子を出家せしめた。

⑥Bigandet. (vol. I p.178, 赤沼 p.226) ; この日、即ち、カチヤン月の満月の第二日は五大慶事の執行日であった。即ち仏陀の弟、難陀 (Nanda) は、一に灌頂をなし、二に元服をして冠をつけ、三に皇太子の位に上り、四に宮室を頂戴し、五に結婚することになっていた。仏陀は王宮を辞し去る場合に、この若き太子に鉢を与えて、隨従するようにしむけたまうた。……こういう次第で仏陀が迦維羅城到着の第二日目には難陀は比丘となつた。

【49-02】ナンダとラーフラの出家——ラーフラの出家

ラーフラ (Rāhula) の母はラーフラに父の釈尊に遺産を求めさせるが、釈尊は舍利弗に命じてラーフラを出家させる。

[A] 原始聖典

- ① ‘Buddhavamsa’ 26-04 (p.097) ; 今ここにあって（第2会にあって）私（釈尊）は私の実子に教誡した (idh'evāham etarahi ovadim mama atrajam) 。
- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.082) ; 世尊は随意の間王舍城に住されてから、カビラヴァットゥに遊行された。ラーフラの母 (Rāhulamātā) はラーフラに「彼はあなたの父です (eso te Rāhula pitā) 。行って遺産を求めるなさい (gacchassu dāyajjam yācāhi) 」と言つたので、ラーフラは世尊を訪ねた。世尊は舍利弗に命じてラーフラを沙弥として出家させた。
- ⑦四分律「受戒捷度」（大正22 p.809下）；爾時仏在釈翅搜迦維羅衛城尼拘律園。時世尊時到著衣持鉢入迦維羅衛城乞食。乞食已還出城。於時羅睺羅母、與羅睺羅在高閣上見佛來。語羅睺羅言。彼來者是汝父。爾時羅睺羅、疾疾下樓至如來所、頭面禮足在一而立。時世尊以手摩羅睺羅頭……。
- ⑧五分律「受戒法」（大正22 p.116下）；爾時世尊在釈迦國……於後世尊。晨朝著衣持鉢到淨飯王宮。時羅睺羅母、將羅睺羅在高樓上、遙見佛來語言。汝見彼沙門不。答言見。又語言。彼是汝父、可往索父余財。佛既入宮於中庭露地坐。羅睺羅馳下趣佛、頭面禮足立佛影中。白言。是影甚樂願佛與我父余財。佛語言。汝審欲得不。答言欲得。佛便將還所住告舍利弗、汝可度之。
- ⑨十誦律「受具足戒法」（大正23 p.152下）；佛在迦毘羅婆城。爾時淨飯王詣佛所……。王言。佛出家時、我心愁憂不忍不喜。難陀羅睺羅後諸子出家時、我心愁憂不忍不喜。今佛與我願。父母不放不得與出家……。從今父母不放不得與出家。若與出家、得突吉羅罪。
- ⑩僧祇律「單提042」（大正22 p.365中）；大愛道耶輸陀羅羅云出家應此中（鼈本生經）廣說。
- ⑪僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.460中）；佛告舍利弗。汝去度羅睺羅出家。舍利弗言。我云何度羅睺羅出家。佛言。汝往教言。我羅睺羅歸依佛歸依法歸依僧、如是三說。我羅睺羅、歸依佛竟歸依法竟歸依僧竟。盡壽不殺生不盜不邪淫不妄語不飲酒。
- ⑫根本有部律「僧伽伐尸沙002」（大正23 p.682下）；至具壽羅怙羅所住之房。告言諸妹。此是佛之子。捨俗出家。若不出家當為転輪王。於大師衆弟子之中、愛重學處奉持無失最為第一。汝應至心禮敬其足。
- ⑬根本有部律「出家事」（大正23 p.1035上）；佛在劫比羅城尼瞿陀林中住。時淨飯王……白佛言。世尊、唯願世尊與我一願。世尊問曰。大王、求何願耶。王曰。有少許願然諸釈種為言。世尊當作転輪聖王、乘空往四天下、我等亦隨世尊。既出家已。我等所望悉皆不得。復次難陀當作力転輪王、彼亦世尊度令出家亦絕希望。羅怙羅有大威德、當作大王、世尊今亦令其出家、我等釈種亦絕希望。
- ⑭根本有部律「破僧事」（大正24 p.158下）；時諸釈種共相議曰。此非菩薩之子。耶輸陀羅聞此語已即便啼哭、抱羅怙羅自為盟誓以羅怙羅置於菩薩。昔在宮中解勞石上擲置菩薩洗浴池中、而發誓言。……衆人見之咸生希有。母復持兒作如是念。若佛世尊六年苦行、成覺之後更住六年、滿十二

歲重還於此。我令諸人目驗虛實。爾時世尊後時還至劫比羅城。……爾時世尊告舍利子曰。此羅怙羅、汝今將去與如法出家。時舍利子受佛教已便與羅怙羅如法出家。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.091, 南伝28 p.196) ; 第七日目に (sattame divase) 羅睺羅の母 (Rāhulamātā) 〔なる妃〕は、王子〔羅睺羅〕に飾を着けさせて、世尊の側へ伴れて行った。（財産を王子に譲るよう言わせる）世尊は……具寿舍利弗 (Sāriputta) を呼び寄せ、「さて舍利弗よ、そなたこの羅睺羅 (ラーフラ Rāhula) 王子を出家させなさい」と曰うた。
- ⑥普曜 (大正03 p.536下) ; 俱夷携羅云來。……時王眷属皆懷沈疑。太子損國十有二年、何從懷妊生子羅云。……於時羅云厥年七歳。……仏語父王及諸臣曰、……此吾之正子緣吾化生勿咎俱夷也。
- ⑦方広 (大正03 p.616上) ; 耶輸陀羅携羅睺羅年已七歳。來至仏所……白仏言。……諸眷属皆有疑心。太子去國十有二載、何從懷孕生羅睺羅。……王及群臣……言善哉、羅睺真是仏子。
- ⑯集經 (大正03 p.906中) ; 其羅睺羅、如來出家六年已後、始出母胎。如來還其父家之日、其羅睺羅、年始六歳。……爾時世尊告輸頭檀王。……大王……其羅睺羅、真我之子、但是往昔業緣所逼、在胎六年。
- ⑯集經 (大正03 p.908中) ; 爾時世尊、將羅睺羅、至於靜林、遙喚長老舍利弗言。汝舍利弗、將羅睺羅、令其出家。
- ⑯集經 (大正03 p.908下) ; 其迦葉維、復有別説。（王は羅睺羅の出家を恐れ、世尊に会わせないようにするが、樓閣上から世尊を見るや下りて仏の衣裏に入り、隠藏して住す。舍利弗を和上として出家させようとするが、今十五才と指摘される。）……十五而出家者、可為沙彌。
- ⑯集經 (大正03 p.909下) ; (五師の異説) 其羅睺羅、生二年後、菩薩爾時、方始出家。苦行六年、然後成道、成道七歳。方始來向迦毘羅城。如是次第、數羅睺羅出家之日、正年十五。
- ⑯MV. (vol. III p.256, JonesIII p.245) ; 世尊がラーフラの父ということをラーフラ (Rāhula) に知らせた者は死刑にすると布告されるがラーフラの直感に混迷し、ヤショーダラー (Yaśodharā) 妃はついにラーフラに言う。ラーフラは出家を願うがシュッドーダナ (Śuddhodana) 王は七日の猶予を乞う。世尊はシャーリップトラに授戒を頼み、ラーフラは三帰具足戒を受ける。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.051下) ; 瞽夷携羅云來。……時王僚属皆懷沈疑。
- ③氏譜 (大正50 p.095上) ; 未曾有云。仏令目連往本城、問父母三叔并耶輸、令割愛放子、得聖道已當還度母、絕死生本並隨仏語。父母又勅豪族五十、各捨一子隨羅睺往。時年九歳。仏令阿難剃髮。并五十人一時出家、舍利弗為和上目連闍梨授十戒。……普曜云。……彌沙塞云。仏自將羅睺還、令舍利弗度。
- ④統紀 (大正49 p.155下) ; 十二年(辛卯) 仏遣目連、白父王及耶輸曰。太子羅睺、年已九歳。応令出家。
- ⑤JM. (p.033, 畑中 p.127) ; 【49-01】に含む。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.181, 赤沼 p.227) ; その第七日目であった。羅睺羅の母、耶輸陀羅妃は、羅睺羅に一番貴い晴衣をきせて……（「王位相続の権利として宝物を下さい」といわせる。）……佛陀は舍利弗を呼んで宣うた。「……彼を比丘としようと思う」。目連は羅睺羅の頭を剃って、黄衣を著せ、舍利弗は第一の教を受けた。

【49-03】ナンダとラーフラの出家——淨飯王の依頼

釈尊、難陀、ラーフラと、すべての跡継ぎが出家してしまったことを嘆いた淨飯王は、両親の許可のない子を出家させないでほしいと依頼し、許される。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘Mahākhandhaka’ (vol. I p.082) ; 世尊がラーフラを出家させたとき、淨飯王は「世尊が出家されたときには私の苦しみは少なくなかった。難陀の時もそうであった。しかしラーフラの場合は極めて大きい (bhagavati me pabbajite anappakam dukkham ahosi, tathā Nande, adhimattam Rāhule)」と嘆き、父母の許さない子を出家させないでほしいと願って、許された。
- ⑦四分律「受戒犍度」(大正22 p.810上)；父母於子多所饒益、乳養瞻視逮其成長。世人所觀而諸比丘、父母不聽輒便度之。唯願世尊、自今已去勅諸比丘、父母不聽、不得度令出家。爾時世尊、默然受王語……。
- ⑧五分律「受戒法」(大正22 p.117上)；願仏從今勅諸比丘、父母不聽不得為道。仏為王說種種妙法示教利喜已……告諸比丘。從今父母不聽不得度。亦如上說。
- ⑨十誦律「受具足戒法」(大正23 p.152下)；仏在迦毘羅婆城。爾時淨飯王詣仏所……。王言。仏出家時、我心愁憂不忍不喜。難陀羅睺羅後諸子出家時、我心愁憂不忍不喜。今仏與我願。父母不放不得與出家……。從今父母不放不得與出家。若與出家、得突吉羅罪。
- ⑩僧祇律「雜誦跋渠」(大正22 p.421上)；仏住迦維羅衛國尼拘律樹釀氏精舍……。爾時白淨王與衆多釀種、往世尊所……。惟願世尊、制諸比丘、父母不聽勿令出家……。
- ⑪根本有部律「出家事」(大正23 p.1035上)；仏在劫比羅城尼瞿陀林中住。時淨飯王……願世尊制、若父母未許勿使出家。爾時世尊、默然受父王所請。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.092, 南伝28 p.197)；王子（ラーフラ Rāhula）が出家すると、大王には一入苦惱が増して來た。その苦惱に耐えかねて、〔王は〕世尊に、「願わくは尊師よ、父母の承諾なくしては、その子を出家させ給わぬよう」といって、仏の承認を求め、仏は王に承引を与え給った。
- ⑯集經(大正03 p.909中)；而白仏言。……我見世尊出家之後、作是思惟。欲以王位付與難陀。世尊於後、復令出家。……阿難陀……阿尼樓陀……婆提喇迦、……羅睺羅。……從今日後、作如是教制。諸比丘、有出家者、令諮父母、許出家已、然後乃放。

[C] 後世の仏伝資料

- ④統紀(大正49 p.155下)；淨飯王詣仏白曰。仏昔出家尚有難陀、今難陀已復出家。余情所寄唯在此子、今當出家國計永絕。……復集諸比丘立制、父母不聽不許出家。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.182, 赤沼 p.229)；(淨飯)王は仏陀の所へ行ひて、礼拝をなし、人の子にして、両親の許可を得なければ比丘となることが出来ないという制定をして貰いたいと願われた。

【50-01】祇園精舎の寄進——スダッタ長者の帰依

所用で王舎城に來ていた舎衛城の長者スダッタ (Sudatta、給孤獨長者=Anāthapīṇḍika gahapati) が、仏が世に出られたと聞いて釈尊に会いに行って帰依する。

[A] 原始聖典

- ①SN.10-008 (vol. I p.210) ; 紿孤独居士 (Anāthapindika gahapati) は所用があつて王舎城に来ていて、仏が現れたと聞いて、世尊に会いに行った。
- ②Vinaya ‘senāsanakkhandhaka’ (vol. II p.154) ; 紿孤独居士 (Anāthapindika gahapati) は王舎城の長者の妹婿で、所用で王舎城に来ていた。そこで「仏陀が世に出た」ことを聞き、世尊を尋ねて行って、法眼淨を得て優婆塞となった。
- ③中阿含028 「教化病經」 (大正01 p.459下) ; 我 (紿孤独長者) 往昔時少有所為、至王舎城寄宿一長者家。時彼長者明當飯仏及比丘衆。時彼長者過夜向曉、教勅兒孫奴使眷属……。
- ④雜阿含592 (大正02 p.157中) ; 紿孤独長者は小因縁あつて王舎城の長者のところで泊まっていた。そのとき仏が出られたと聞いて会いに行き、法を聞いて見法し優婆塞となった。
- ⑤別訳雜阿含186 (大正02 p.440中) ; 須達多長者は少因縁あつて王舎城に来ていた。そのとき仏が出られたと聞いて会いに行き、法を聞いて須陀洹果を得た。
- ⑥四分律「房舎犍度」 (大正22 p.938中) ; 「爾時世尊在王舎城。舍衛国有居士名須達多、常好給施孤窮乞兒、遂因行更為名字給孤独食。彼於王舎城中有田業、年年從舍衛國至王舎城按行田業。王舎城中有長者是其親厚」。須達多はここで世尊に会い、説法を聞いて法眼淨を得た。
- ⑦五分律「臥具法」 (大正22 p.166下) ; 「時舍衛城有長者名須達多、出三十萬金錢與王舎城人年來債」。そこで「仏が世に出た」ことを聞き、世尊を尋ねて行って、法眼淨を得て優婆塞となった。
- ⑧十誦律「臥具法」 (大正23 p.243下) ; 「爾時舍衛國給孤独氏、有少因縁至王舎城、宿一居士舍」。そのとき仏が出られたことを聞いて世尊を訪ね、見法得法して優婆塞となった。
- ⑨僧祇律「雜誦跋渠」 (大正22 p.415中) ; そのとき世尊は王舎城の尸陀林におられた。城中に欝虔という長者がいて、そこに舍衛城からきた阿那邠坻 (紿孤独長者) という親友が泊まっていた。白淨王 (淨飯王) の王子が成仏したということを聞いて、釈尊に会いに行った。
- ⑩根本有部律「破僧事」 (大正24 p.138中) ; 爾時王舎城中有一長者、請仏世尊及苾芻衆於家供養。於此之時、給孤独長者、別有緣事至王舎城、此長者家便即止宿……。

[B] 仏伝經典

- ⑪NK. (vol. I p.092, 南伝28 p.198) ; その頃居士アナタピンディカ (Anāthapindika) は五百輛の車に品を積み、親友の王舎城の長者の宅に行って居た。其處で仏世尊が世に出で給うたことを聞き、或朝大そう早く、天人たちがその威力で開いた門から入って、仏の所に詣り、法を聴いて預流果に入った。
- ⑫中本 (大正04 p.156上) ; 仏從本国、與比丘僧千二百五十人俱、遊於王舎国竹園中。……舍衛長者、名曰須達(晋言善溫)。……。聞說是時、因本功德、便發淨意、逮得法眼。歸命三尊、諮詢受五戒、為清信士。
- ⑬仏讚 (大正04 p.034中) ; 時有大長者 名曰給孤独 …… 遠從於北方 橋薩羅國來 止一知識 舍 主人名首羅 聞仏興於世 近住於竹園 …… 即夜詣彼林 …… 決定了真諦
- ⑭BC. (18-01) ; ……不幸な人々に財を布施する者で、スマッタという……富豪の在家がいた。彼は北方の国コーサラからそこ (ラージャグリハ) へ出かけて行った。彼はそこ (ラージャグリハ) に牟尼が止住しておられると聞いた。聞いて、お目にかかりたいと思って、その夜のうちに出来て行った。……そのとき [スマッタ長者は] 偉大な仙人 (ブッダ) のこの教えを聞いて、真理 (法) の修行法における初果 (預流果) を得た。
- ⑮行經 (大正04 p.081下) ; 適從舍衛國 奉使至王舎 財富好施與 厥名曰須達 到適聞仏名 …

… 夜半至仏所 到即得見仏 …… 時長者須達 受入泥洹池
⑦衆許（大正03 p.966上）；時給孤長者因有事故、到王舍城經過彼家、遇夜止宿。……

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.063中）；釈迦祇洹精舍縁記。（出賢愚經）
③氏譜（大正50 p.096下）；賢愚經云。舍衛大臣名須達多、財寶無限拯濟貧乏、故号為給孤独。…
…自往王舍初聞仏名、心大歡喜、後見仏得初果。
④統紀（大正49 p.154下）；九年(戊子)舍衛國波斯匿王……大臣須達家居大富、喜濟貧乏孤老之人。
因名為給孤独。嘗往羅閱城……見世尊。即為說四諦法、成須陀洹。
⑥Bigandet. (vol. I p.194, 赤沼 p.245)；仏陀が王舍城に在した時のことであった。給孤独
(Anatapein) と呼ばれて居る富商が、五百の車に、高貴な貨物を沢山に積み重ねて、王舍城へ
着いた。……ある日、彼は早朝に眼覚めて、……仏陀の説法の会坐に参して、……仏陀の説法を
終り給うた時には、豫流の聖果を獲得したのであった。

【50-02】祇園精舎の寄進——精舎建設を発起する

スダッタ長者は舍衛城での雨安居を請い、釈尊は舍衛城に精舎を建立することを条件に承諾す
る。釈尊は精舎建設のために舍利弗を派遣する。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘senāsanakkhandhaka’ (vol. II p.158)；給孤独長者は舍衛城において自分の雨安居
を受けられることを乞う。
③中阿含028「教化病經」（大正01 p.460下）；爾時世尊、復問我（給孤独長者）曰。舍衛國中有
房舍未。我復答曰。舍衛國中無有房舍。爾時世尊而告我曰。長者當知、若有房舍比丘可得往來可
得住止。我復白曰。唯願世尊、我當如是為起房舍。比丘可得往來、於舍衛國可得住止。唯願世尊、
差一佐助。爾時世尊即差尊者舍梨子、遣尊者舍梨子令見佐助……。
④雜阿含592（大正02 p.158中）；唯願世尊來舍衛國、我當盡壽供養衣被・飲食・房舍・床臥・隨
病湯藥。佛問長者。舍衛國有精舍不。長者白佛。無也。世尊佛告長者。汝可於彼建立精舍。令諸
比丘往來宿止。長者白佛。但使世尊來舍衛國、我當造作精舍僧房、令諸比丘往來止住。爾時世尊
默然受請。
⑤別訳雜阿含186（大正02 p.441上）；唯願世尊、往詣彼國、我當終身施設供養。佛告須達多。彼
國為有僧坊以不。須達多白佛言。世尊、但往於彼、我當營造。使諸比丘、來往於彼。爾時如來默
然受請。
⑦四分律「房舍犍度」（大正22 p.939上）；給孤独は夏安居を舍衛城で過ごすことを請うが、すで
に瓶沙王の請いを受けていたので、精舎があることを条件に、来年の雨安居を承諾する。
⑧五分律「臥具法」（大正22 p.167上）；願佛及僧受我舍衛城夏安居。如是三請。佛皆默然。至第
四請乃告之言。若住處無有憒闊寂寞無聲。諸佛乃當於中安居。長者白佛。已解世尊、願差一比丘
為經營之。佛問言。汝今樂誰。答言。欲得舍利弗。佛即語舍利弗。汝便可往為經營之。舍利弗受
教而去。
⑨十誦律「臥具法」（大正23 p.244中）；願世尊及僧、受我夏請住舍衛國。……佛問須達。舍衛國
有僧坊不。答言。未有、世尊。佛言。若有僧坊住處、諸比丘可得來往。若無有者、諸比丘不得來
往止頓。又言。願世尊但受我請。我能為辦僧坊、令諸比丘得來往止頓。願世尊遣舍利弗。為我作
僧坊師。佛勅舍利弗。汝與居士作僧坊師。

- ⑩僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.415中）；爾時阿那邠坻聞此偈已、倍生敬信。尋詣仏所頭面禮足、却住一面。仏為說法、示教利喜。白仏言。世尊、我欲還舍衛城起立精舍。請仏及僧。唯願世尊哀受我請。復願世尊遣一比丘鑑理处分。如比羅經中廣說。乃至仏告舍利弗目連、汝等往彼觀地形勢……。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.139中）；世尊知舍利弗堪彼調伏、世尊念已、告具壽舍利弗言。汝應觀察給孤獨長者眷屬及室羅筏城人、應往教化造立毘訶羅。舍利弗默然受仏勅已……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.092, 南伝28 p.198)；第二日目には（dutiyadivase）、仏を初め比丘衆に大施を行い、仏を舍衛城（Sāvatthī）にお招待する承諾を得て、……。
- ③中本（大正04 p.156中）；前白仏言、唯願如來、臨盼舍衛。……。仏而告曰、彼有精舍、容吾衆不。對曰未有。……余能堪任、興立精舍、唯須比丘、監臨処當。顧勅舍利弗、並行營佐。
- ⑪仏讚（大正04 p.035下）；合掌而啓請 居在舍婆提 …… 欲造立精舍 唯願哀愍受 …… 請優波低舍 賢友而歸
- ⑫BC. (18-58)；ハリアシュヴァ族の後裔（プラセーナジト王）のお住みになる都城、私の住み家のある場所であるシュラーヴァスティー（舍衛城）は福德にみち、名声高いところでございます。私はそこにあなたの精舎を作りたいと思います。
- ⑯衆許（大正03 p.966下）；仏言。長者、我與苾芻數踰千人、彼無精舍何以安住。長者對曰、仏若降臨速當建立。（舍利弗派遣）舍利弗又自持繩一頭、令長者還執一頭、於中分擧十六殿堂六十九堂。

[C] 後世の仏伝資料

- ④統紀（大正49 p.154下）；乞如來降屈舍衛。世尊謂彼無精舍。須達曰還國當立。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.194, 赤沼 p.245)；彼（スダッタ長者）はその後二日目に、仏及び仏の聖衆に、大供養をなし、彼の生國なる舍衛城（Thawattie）にも御車を曳げて錫を留め給わんことを願うた。

【50-03】祇園精舎の寄進——ジェータ太子の園林を買い取る

スダッタ長者はジェータ太子（Jeta Kumāra）の園林が精舎建設の場所としてもっともふさわしいと、土地に金を敷き詰めて買い取る。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘senāsanakkhandhaka’ (vol. II p.158)；給孤獨長者は舍衛城に帰る途中途中で、仏が世に出たことを宣伝し、僧園を造り、精舎を建て、布施を設けることを説きながら帰る。舍衛城に帰って、都邑より遠からず、近くに過ぎず、坐禅に適するジェータ王子（Jeta Kumāra）の園を金を敷き詰めて買い取り、精舎を建てた。しかし小空地分の金が足らなかったが、これはジェータ王子が寄進して門屋を建てた。給孤獨長者はそこに、精舎・房・門屋・勤行堂・火堂・食厨・廁房・経行処・井戸・井堂・暖房・暖房堂・小池・廷堂を作った。
- ③中阿含028「教化病經」（大正01 p.461上）；爾時童子（勝）亦復再三而語我（給孤獨長者）曰。吾不賣園、至億億布滿。我即白曰。童子、今已決斷價數、但當取錢……。
- ⑦四分律「房舍犍度」（大正22 p.939中）；舍衛城に帰る途中、給孤獨長者は園林や橋船を作り、帰って祇陀太子の園林を金錢を地に敷いて購入し、精舎を建てた。

- ⑧五分律「臥具法」（大正22 p.167上）；須達長者將舍利弗還舍衛城。所經聚落廻處唱言。仏出於世有大威德。其諸弟子亦復如是。我已請之於舍衛城安居、汝等皆當共安頓廻修治道路及諸橋梁預辦供俱以待世尊。彼諸人等聞其此唱。知仏世尊當從此過、皆大歡喜敬承其語。須達長者既到舍衛作是念、何處極好堪作精舍。唯此城童子祇林。園果美茂其水清潔、流泉浴池香華悉備。當買作之。念已往到其所。語言。我欲買園寧能見與不。答言。若能以金錢布地令無空缺然後相與。須達便以金錢布地。祇言。我說此譬不欲相與。須達復言。說此為價豈得中悔。共諍紛紜遂便徹官。官即依法斷與須達。
- ⑨十誦律「臥具法」（大正23 p.244中）；是居士於王舍城因緣事訖、還向舍衛國。行路知仏所當宿處。語諸知親相識諸負債人言。汝等知不、今仏出世。我當為仏於此作如是講堂溫室食堂食厨洗浴廻門屋禪坊大小便處。爾時給孤独氏、限半由旬起僧坊、約勅左右供給所須。如是次第約勅至舍衛國。……時給孤独氏、還舍衛城不自入舍。即詣祇陀王子所白言。買君園、願以與我。王子答言。我此園非可買者、乃至側布金錢滿中、亦不賣也。居士言。園價已斷。王子答言。我不斷價。以是因緣遂相共諍。即詣斷事。大臣富貴人所具說是事。時大臣能斷事者語王子言。汝園已賣、宜時納價……。
- ⑩僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.415下）；時居士邠祇以十八億金買地、十八億金作僧房舍。十八億金供養衆僧。合五十四億金。
- ⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.139下）；時誓多太子給孤長者、共到其處。給孤長者及太子各具因緣白。斷事人議曰、太子、汝自定價、園屬長者、太子取金。太子既見斷已默然而去……。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.092, 南伝28 p.198)；ジェータヴァナ (Jetavana) に隅から隅まで金を布いて、一億八千万両の金を以てこれを買い取って工事を起した。
- ③中本（大正04 p.156中）；還彼舍衛、周行求地、唯祇園好。……因往守請祇、了無賣意。……若能以金錢、集布滿園。
- ⑩十二（大正04 p.147上）；六年須達與太子祇陀、共為仏作精舍。作十二仏図寺、七十二講堂、三千六百間屋、五百樓閣。
- ⑪仏讚（大正04 p.036中）；還彼橋薩羅 周行擇良墟 見太子祇園 林流極清閑 往詣太子所 請求買其田 …… 長者地祇林 以付舍利弗
- ⑫BC. (18-82)；行きてかのコーサラ王の都城にて、精舎のための敷地を求めて歩きまわった。彼はそこに、……ジェータ〔王子〕の園を見つけた。かくてその〔園を得る〕ために、……彼〔スッダッタ〕は……財貨で〔園を〕敷きつめ、法の訴訟を行なって買い取った。
- ⑯衆許（大正03 p.967上）；於舍衛城周遍内外、求覓殊勝清淨之地、欲建精舍安仏及僧。唯有祇陀童子園苑最勝。……君能以金布滿其地、我即與汝任自所為。……長者即日……、……般運黃金廻布訖。

[C] 後世の仏伝資料

- ③氏譜（大正50 p.097上）；請仏還園、先營精舎、共舍利弗。買太子祇陀園、以金布地遍八十頃地。園樹及門太子作之。
- ④統紀（大正49 p.154下）；唯太子祇陀園地正得其所。須達白太子欲買之。太子言、能以黃金布地間無空者便當相與。……二人同立精舎、号為太子祇樹給孤独園（賢愚經）
- ⑥Bigandet. (vol. I p.195, 赤沼 p.246)；信心の深いこの商主は……又嘗て仏陀のために新に造立した祇園 (Dzetawon) と称する壯麗なる精舎を奉獻するために、次の準備をした。……「私はこの僧園を、世尊及び世尊の諸比丘、これから後、四方より集うて來給う比丘衆に寄贈いたし

ます」といった。

【50-04】祇園精舎の寄進——祇園精舎の完成と寄進

祇園精舎が完成したので釈尊は舍衛城に赴く。スダッタ長者は精舎を四方僧伽に寄進する。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘senāsanakkhandhaka’ (vol. II p.159) ; 世尊は王舎城からヴェーサリーを経由して舍衛城に入られ、四方僧伽のために祇樹給孤独園 (Jetavana Anāthapiṇḍika ārāma) を受けられた。
- ⑦四分律「房舎犍度」(大正22 p.941中)；世尊は毘舍離から跋闍國を経て舍衛國に至られ、祇園精舎が給孤独長者によって世尊及び四方サンガに寄進された。
- ⑧五分律「臥具法」(大正22 p.167上)；世尊、我以此園房舎施四方僧。仏默然受。……舍利弗然後以繩量度。作經行廻講堂溫室食厨浴屋及諸房舎、皆使得宜。
- ⑨十誦律「臥具法」(大正23 p.244下)；爾時居士以舍利弗為師、於此園中起十六大重閣作六十窟屋。
- ⑩根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」(大正23 p.717上)；次往室羅伐城受逝多林給孤独園。
- ⑪根本有部律「苾芻尼毘奈耶」(大正23 p.948下)；次至王舎城受竹林精舎。亦與身子目連出家近円。次往室羅伐城受逝多林給孤独園。次至橋薩羅說少年經令勝光王得見諦已。
- ⑫根本有部律「破僧事」(大正24 p.142上)；爾時世尊及諸大衆、既入城内。……此誓多林給孤独園、施仏及四方苾芻僧伽……。
- ⑬根本有部律「雜事」(大正24 p.209中)；時給孤独長者為仏及僧、造逝多林住處施大衆已。
- ⑭根本有部律「雜事」(大正24 p.218中)；時給孤独長者側布黃金買逝多林、奉仏僧已。
- ⑮根本有部律「雜事」(大正24 p.230下)；時給孤独長者以逝多林施四方僧訖。
- ⑯根本有部律「雜事」(大正24 p.296下)；時給孤長者以寺捨與四方僧竟。
- ⑰竺律炎訣「三摩竭經」(大正02 p.843上)；復有人字阿難邠坻、大賢善好道。有好女國中第一。使者言。何用為第一。國中人言。曾與太子祇共請買園田八十頃持上仏。復以象負運黃金數千萬億持雇園田、不貪重寶但念為善耳。

[B] 仏伝經典

- ①NK. (vol. I p.093, 南伝28 p.200)；「この祇園精舎を、仏を初め現在世及び未来世の四方の比丘衆に捧げます」と云って献じた。仏は精舎を受取って謝辞を述べ……。
- ③中本 (大正04 p.156下)；給孤独氏、及王弟祇陀、前禮仏足、共上精舎。仏受呪願故、曰祇樹給孤独園。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦 (大正50 p.063中)；釈迦祇洹精舎縁記。(出賢愚經)

【51】波斯匿王の帰依

波斯匿王 (Pasenadi) が祇園精舎に滞在中の釈尊を訪ね、年若いからといって出家者を軽蔑してはならないという説法を聞いて帰依する。

[A] 原始聖典

- ①SN.003-001-001 (vol. I p.068) ; 波斯匿王は六師外道さえ自ら無上正等覺を得たとは宣言していないのに、生年若く出家して日が浅いゴータマがそれを得ているわけないと蔑んだので、釈尊は若いといって侮ってはならないものが4つあると説法されて、王は優婆塞となった。
- ④雜阿含1226 (大正02 p.334下) ; 同上
- ⑤別訳雜阿含053 (大正02 p.391下) ; 同上
- ⑪根本有部律「波羅市迦002」 (大正23 p.641中) ; 爾時世尊於杖林中、令摩揭陀影勝王得見諦已、便往室羅伐城為喬薩羅勝光王說少年經、令得調伏。
- ⑪根本有部律「波羅市迦003」 (大正23 p.664下) ; 爾時世尊為勝光王說少年經 (1) 令生信已。
- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.717上) ; 次至橋薩羅說少年經、令勝光王得見諦已住逝多林。
- ⑪根本有部律「苾芻尼波羅市迦001」 (大正23 p.911上) ; 往室羅伐城為勝光王說少年經令其調伏。次為勝鬘夫人毘盧將軍及仙授等、咸令見諦。
- ⑪根本有部律「苾芻尼泥薩祇波逸底迦004」 (大正23 p.948下) ; 次至王舍城受竹林精舍。亦與身子目連出家近円。次往室羅伐城受逝多林給孤独園。次至橋薩羅說少年經令勝光王得見諦已。
- ⑪根本有部律「出家事」 (大正23 p.1040上) ; 爾時仏在室羅筏城逝多林中為王說法。其勝光王證見諦已。……爾時勝光大王擊鼓宣令曰於我国界住者不應賊盜。若犯盜者、當科死罪。被盜之人我自出物以酬其直。爾時世尊復說少年經調伏王已。
- ⑪根本有部律「破僧事」 (大正24 p.142下) ; 勝軍王答曰、喬答摩所說、我實得阿耨多羅三藐三菩提、我今不信。所以者何、喬答摩、所是耆老外道、所謂晡刺拏末羯利珊逝移脚拘陀呢揭爛陀等六師、由云不證得阿耨多羅三藐三菩提。何況喬答摩沙門、小年近始出家、如何證得阿耨多羅三藐三菩提。何人肯信。仏告大王、有四種小、並不應欺。何等為四、一者小刹帝利、二者小毒蛇、三者小火、四者年小出家。此等不可輕欺。所以者何、小出家者得阿羅漢有大威德。爾時世尊即說頌曰……。爾時橋薩羅主勝軍王等、聞此頌已心生歡喜、即從座起禮仏而去。

[B] 仏伝經典

- ③中本 (大正04 p.159中) ; 是時如來、還舍衛國在樹給孤独園。……王波斯匿心自念言。……〈仏に会い、説法を聞くも「瞿曇年少、学日甚浅」として直ちに信ぜず。末利夫人の勧めもあって〉王意乃解、……帰命三尊、……尽形竟命、首戴尊教。
- ⑩十二 (大正04 p.147中) ; 是十四国。仏十二年於中遊化説法、波斯匿王晋言和悦。
- ⑪仏讚 (大正04 p.038中) ; 世尊已開化 迦維羅衛人 隨緣度已畢 與大衆俱行 往橋薩羅國 脅波斯匿王 祇桓已莊嚴 堂舍悉周備 …… 時王專心聽 一切智所說 厲薄於俗榮 知王者無歎如逸醉狂象 醉醒純熟還
- ⑫BC. (20-04) ; そのときプラセーナジト王はシャーキヤ族の牟尼に拝顔したいと思い、ジェータヴァナに行った。行きついでそして尊敬を表わして牟尼を礼拝し、……。
- ⑫BC. (20-51) ; ……王は、このように一切知者〔なるブッダ〕から教えの真理を聞き得て、王權は俗惡、無常にして移りやすしとの知恵を生じて、狂醉より醒めたる象のごとくに、シュラーヴァスティーに帰って行った。
- ⑯衆許 (大正03 p.969中) ; 爾時舍衛國主勝軍大王、聞仏遊化來入其國、受給孤長者請住於精舍。……少年始新出家。……時勝軍王得聞如來說是四法、深心信受……以頭面禮仏双足、……歡喜而退

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.066下）；波斯匿王造釈迦金像記。（出増一阿含經）
④統紀（大正49 p.159上）；三十三（壬子） 仏在王舍城耆闍崛山中、為舍衛國波斯匿王說般若波羅蜜十四正行。……帝王歡喜。……若王往時、置經七寶帳座、日日供養如事父母。

(1) 大正は「少年軽」とするが「少年經」と読んだ。

【52】釈迦族の子弟の出家

釈尊が釈迦族から出家して成仏したことに因んで、阿難（Ānanda）、アヌルッダ（Anuruddha）、ウパーリ（Upāli）、キンビラ（Kimbila）、デーヴァダッタ（Devadatta）などの釈迦族の子弟が出家する。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘samghabhedakkhandhaka’ (vol. II p.180)；世尊はアヌピヤー國のアヌピヤー（Anupiyā）というマッラ族の村（Mallānam nigama）に住しておられた。そのとき釈種の童子らは、世尊の出家したまえるに従って出家した。マハーナーマ（Mahānāma）は、自分らの族より出家したものがないから、出家しようと阿那律（Anuruddha）にいった。彼らの母は2子が出家することを許さず、バッディヤ王（Bhaddiyo Sakyarājā）が出家したらという条件を出した。そこで、バッディヤ、阿那律、阿難（Ānanda）、バグ（Bhagu）、金毘羅（Kimbila）、提婆達多（Devadatta）、ウパーリ（Upāli）は一緒にひそかに家を出、釈尊の元で出家した。マハーナーマは家業を継いだ。その雨安居中にバッディヤは三明を現証し、阿那律は天眼を生じ、阿難は預流果を得、提婆達多は異生位の神通を得た。
- ⑥増一阿含24-05（大正02 p.623下）；是時王告國中、諸有兄弟二人、當取一人作道。其不爾者、當重謫罰……。是時提婆達兜釈種語阿難釈言、真淨王今日有教。諸有兄弟二人、當分一人作道。汝今出家學道。我當在家修治家業。是時阿難釈歡喜踊躍報言、如兄來教。是時難陀釈語阿那律釈言。真淨王有教、其有兄弟二人者、當分一人作道。其不爾者、當重謫罰。汝今出家、我當在家。是時阿那律釈聞此語已、歡喜踊躍、不能自勝。報曰。如是如兄來教。
- ⑦四分律「僧殘010」（大正22 p.590中）；世尊は弥尼搜國（マッラ族の國）の阿奴夷界に住しておられた。時に釈子の多くが世尊にしたがって出家したので、弟の摩訶男は兄の阿那律に我らの一門からは誰も出家していないから、出家しようといい、家業は大変だからということで、阿那律が出家することになった。しかし母親は跋提は母親が熱愛しているから許すまいと思って、跋提が出家したらという条件を出した。跋提の母は阿那律の母は子を熱愛しているから、阿那律が出家したらという条件を出した。二人は難提、金毘羅、難陀、跋難陀、阿難陀、提婆達と剃髪師の優波離とともにひそかにカピラヴァットゥ城を出て、父母が出家を許したからと言って出家した。世尊は先に優波離を、次に阿那律を、次に跋提を、次に難提を、次に金毘羅を、次に難陀を出家させた。したがって優波離は「大戒」を受けて上座となった。そのとき、毘羅荼という大上座がおり、別に阿難陀を度し、余の次の上座が跋難陀と提婆達多を度した。
- ⑧五分律「僧殘010」（大正22 p.016下）；同上
- ⑩僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.412下）；仏告舍利弗。如來所度阿若憍陳如等五人善來出家善受具足。共一戒一竟一住一食一學一說。次度滿慈子等三十人。次度波羅奈城善勝子。次度優樓頻螺迦葉五百人。次度那提迦葉三百人。次度伽耶迦葉二百人。次度優波斯那等二百五十人。次度汝大目連各二百五十人。次度摩訶迦葉闍陀迦留陀夷優波離次度釈種子五百人。次度跋度帝五百人。次度群賊五百人。次度長者子善來。如是等如來所度善來比丘出家善受具足。共一戒一竟一住一食一

学一説。舍利弗。諸比丘所可度人亦名善來出家善受具足乃至共一説。是名善來受具足。

- ⑪根本有部律「泥薩祇波逸底迦004」（大正23 p.720中）；時淨飯王即便槌鍾、宣令普告諸釈種中、家別一人出家奉仏、若不肯者必招咎責。即於是時釈種之中、賢善・無滅等五百釈子悉皆出家。
- ⑫根本有部律「苾芻尼毘奈耶」（大正23 p.951下）；（淨飯王が賢善に王位を譲った後）時淨飯王搖鈴宣令、告釈種曰。家別一人出家奉仏。若不肯者必招咎責。即於是時釈種之中賢善無滅等五百釈子悉皆出家。如世尊說若捨貴族而出家者多獲利養。時五百釈子苾芻極招利養。
- ⑬根本有部律「出家事」（大正23 p.1035上）；仏在劫比羅城尼瞿陀林中住。時淨飯王而宣教令。劫比羅城釈種、家別一子出家。彼等諸親眷屬来看。時出家者為彼眷屬說法。聞法喜已、皆發信心、便即出家。
- ⑭根本有部律「破僧事」（大正24 p.144中）；時王呼鄖陀夷、乃至擊鼓鳴槌、宣王教令。普使投劫比羅城內家家一子隨仏出家。時斛飯王有其二子、一名無滅、二名大名。……時王宣勅告諸人民、我及無滅并天授等釈種五百人同共出家、汝等知聞應當歡喜。……天授……。瞿迦離塞那沓婆（此云缺財）、羯吒牟羅底沙海授……。鄖波難陀……。鄖波離……。
- *① 'Udāna' 02-10 (p.018)；バッディヤに関する「楽しいかな。楽しいかな」というエピソードあり。
- *⑪根本有部律「破僧事」（大正24 p.164上）；ウパーリの記述

[B] 仏伝經典

- ③中本（大正04 p.155中）；於是父王、請仏及僧、令詣王園、永為精舍。仏受王意、便入精舍、…広説教法。……中有發大乘者、有樂辟支仏行者、有發羅漢意者、有作沙門者、各隨發心、如行所得。……調達便告行者、吾等王者子弟、今棄世榮、出家居道。……調達冠幘、自然墮地、衢和離身、所乘象馬、四脚布地、而作鳥鳴。相互占曰、余皆得道、二人不吉。俱詣仏所、悉作沙門。
- ⑦方廣（大正03 p.615下）；便敕国内豪貴釈種顏貌端正、選五百人度為沙門侍仏左右。
- ⑪仏讚（大正04 p.037下）；釈種諸王子 心悟道果成 悉厭世榮樂 捨親愛出家 阿難陀難陀 金毘阿那律 難囉跋難陀 及軍荼陀那 如是等上首 及余釈種子 悉從於仏教 受法為弟子 国大臣 優陀夷為首 與諸王子俱 隨次而出家 又阿低梨子 名曰優波離 …… 亦受出家法
- ⑫BC. (19-39)；アーナンダ、うるわしの NANDA、クリミラ、アニルッダ、ナンド、ウパナンダまたクンタダーナ、弟子たちの陰の師となったデーヴァダッタ、彼等は牟尼に教えられる弟子となつた。そして宮廷祭官の息子、偉大なるウダーインは同じ道に出て行き、彼の決意を見たアトリの子ウパーリも同じように〔出家の〕意を固めた。
- ⑯集經（大正03 p.900中）；爾時輸頭檀王告諸釈言。汝等諸釈、若知時者、必須家別一人出家。…爾時五百諸釈童子、……咸謂能隨太子出家（優波離、先に出家を聽される）
- ⑰集經（大正03 p.921上）；爾時童子摩尼婁陀、……、我欲捨家出家修道。
- ⑱集經（大正03 p.921上）；爾時輸頭檀王、及諸釈種、一切眷屬。……、然彼釈王婆提喇迦、受王位後、經十二年。
- ⑲集經（大正03 p.922中）；復有一釈童子名跋涪婆（隋言多眉）。又一釈童名宮毘羅。又一童子名難提迦。復有釈童名曰阿難。有釈童名提婆達多。
- ⑳集經（大正03 p.923上）；爾時世尊、既先度彼剃除髮師、……然後次與婆提喇迦釈王出家。
- ㉑MV. (vol. III p.176, Jones III p.171)；シュッドーダナ (Śuddhodana) 王は言った。「クシャトリアの一家から各一名若者を出家せしめよ」
- ㉒衆許（大正03 p.974中）；王乃下勅告示内外。今賢王阿彌嚕駄及提婆達多等、釈種五百人出家、咸可知悉。……烏波梨欲於正法出家。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.051中）；便勅國中諸豪族釈、端正姝好顏貌殊異、選五百人出為沙門。
- ①釈迦（大正50 p.059上）；釈迦從弟阿那律跋提出家緣記。（出五分律）
- ③氏譜（大正50 p.093中）；王見大喜選豪族五百人。為沙門令侍。
- ③氏譜（大正50 p.095上）；四分。阿那律母為作三時殿娛女娛樂。兄摩訶男以家事累欲自出家。釈種八人同時出家。先度優波離……。普曜云。難陀樓上遙見。
- ④統紀（大正49 p.155上）；王乃勅國中豪族。選五百人出為沙門。侍佛左右。……時阿那律調達難陀跋提難提等八人釈子。出家之日。脫寶衣付優波離曰。……優波離亦願出家。……阿難年八歲出家之日。得白四羯磨具足戒。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.185, 赤沼 p.232)；それで優波離 (Oopali) 先づ入団して、王子達は優波離を挙げて教団の人となった。……竹林精舎に過した第二の雨期中に跋提 (Baddyā) と金毘羅 (Kimila) と跋嚮 (Bagoo) とは最高の証果阿羅漢位を得阿難 (Ananda) は豫流果に入り、阿那律 (Anooroudha) は論議の道に於て大に進むことを得た。提婆 (Dewadat) は独り世第一法の位よりも上には達するを得なんだ。

【53】ゴーシタ園の寄進

ゴーシタ (Ghosita) 長者が祇園精舎で釈尊と会い、精舎の建立を約し、コーサンビー (Kosambi) にゴーシタ園を建設する。

[A] 原始聖典

- ⑪根本有部律「波逸底迦082」（大正23 p.882上）；俱舍彌國 (Kosambi) に善財という長者があり、声が良いので妙音 (Ghosita) と呼ばれていた。王はその人柄を見込んで大臣とした。あるとき南方から世尊の評判を聞いて、祇園精舎の世尊に会いに沙門たちがやって来る途中で妙音の義堂（布施するための建物）に泊まった。3ヶ月の雨期を過ごした後、彼らと一緒に給孤独長者の所へ行き、説法を聞いて世尊をコーサンビーに招待した。世尊は大准陀 (Mahācunda) に営事を任命して妙音園 (Ghositārāma) にヴィハーラができたとき、世尊は行って「7有事福業」と「7無事福業」を説かれた。

[B] 仏伝經典

- ③中本（大正04 p.157上）；梵志……旋還舎衛、路由一国、名拘藍尼。国有長者、字瞿師羅(晋音美言)。……（給孤独氏の話を梵志より聞き、五百人を将いて舎衛城へ行き須達に会って世尊に引合わせてもらう）五百梵志得阿那含、便作沙門。美音宗等、逮得法眼。……美音心念欲請世尊、佛知其念、而告之曰。彼無精舎、汝願不遂。美音……我有別宅、願為精舎。
- ⑪仏讚（大正04 p.040下）；至俱舍彌國 化度瞿師羅 及二優婆夷 波闍欝多羅 伴等優婆夷
- ⑫BC. (21-33)；カウシャムビーにおいては、富豪のゴーシラと、クブジョッタラーを初めとする女たちと、あれこれ大勢の人々が助けられた。

[C] 後世の仏伝資料

【54】ウデーナ王の帰依

暴虐であったコーサンビーのウデーナ（Udena）王が仏教信者であった王妃の願いによって釈尊に帰依する。

[A] 原始聖典

⑨十誦律「波夜提082」（大正23 p.125下）；世尊は俱舎彌國（Kosambi）におられた。そのとき優填王（Udena）には千人の夫人があり、一部の五百人は舍彌婆提（Sāmāvati）を首として善行であり、一部の五百人は阿奴跋摩（Anopamā）を首として惡不善であった。そのとき小国に反乱があつて、王は城の後事を摩撻提婆羅門に託して出征した。婆羅門は阿奴跋摩の父親で、ここまで取り立てられたのは娘のおかげだと考えて、舍彌婆提の後宮を火事にさせて皆殺しにした。王は代りに瞿師羅居士の娘で舍彌婆提の妹である威徳を迎へ入れ、婆羅門を追放して阿奴跋摩夫人を殺した。威徳は姉が熱心な仏教信者であったので、宮中で供養することを王に願い許された。

*⑥增一阿含31-02（大正02 p.667上）；優填王の「懷凶暴無有慈心、殺害衆生不可称計」であったときのことが語られている。

*⑥増一阿含36-05（大正02 p.706上）；是時優填王即以牛頭栴檀作如來形像高五尺。……是時波斯匿王純以紫磨金作如來像高五尺。

*⑦四分律「布薩法」（大正22 p.126下）；夫人の月光が死んで梵天に生まれ、その勧めで優陀延王が王位を王子に譲って出家したことが記されている。

[B] 仏伝經典

③中本（大正04 p.157中）；爾時如來與比丘僧千二百五十人俱、從舍衛祇洹、遊於拘藍尼國美音精廬。……是時國王、名曰優填。強暴侵剋、開納佞言、耽荒女樂、疑綱自沈。又置大夫人二人、左右番上。……左夫人字照堂、為人嬌傲、唯惡是從。……右夫人字該容、執行仁愛、虔敬肅恭。〈長老の青衣、度勝を通して仏の教えを受ける〉……〈王、齊日に該容を召すも命に応じず。王怒って縛して射殺せんとするも、箭還って己に向う。たまたま敵国と戦争が起り、照堂の父吉星に国政をまかせた間に、該容を焼殺するも、事が発露する。〉……王大恚之、……照堂等輩、幽之地窟、推逐邪道。廣闡仏法。

[C] 後世の仏伝資料

①釈迦（大正50 p.066下）；優填王造釈迦栴檀像記。（出增一阿含經）

④統紀（大正49 p.165上）；時優填王……恋慕世尊、鑄金為像。……世尊合掌語像、我滅度後、我諸弟子以付囑汝。

【55】舍衛城における神通

釈尊が舍衛城において外道を降伏するために種々の神通を示す。

[A] 原始聖典

⑦四分律「雜犍度」（大正22 p.947中）；世尊が在家に神通力を示すなど教えられたとき、外道たちは瓶沙王の所に行って、神通力比べをしたいと申し出た。世尊は引き受け王舍城を出た。王は8万4千人を引き連れて後を追った。優禪城の波羅殊提王のところへいった。摩竭國の外道、優禪城の外道が集まってきた。優陀延王の拘睒彌國の瞿師羅園中に行かれた。そして迦維羅衛國の

尼拘律園中に行かれた。仏の異母弟の梵施が王であった。舍衛国の祇園中に行かれた。波斯匿王が王であった。その舍衛国の別処で世尊は留まられ、先の諸王や帝釈・梵天、末利夫人、長者梨師達多富羅那に、15日間にわたって神通を示された。

⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.399下）；於室羅伐城為人天衆現大神通。

*⑩僧祇律「單提032」（大正22 p.352下）；世尊は舍衛城におられた。そのとき阿耆河（Aciravati?）の岸辺で大会が催され、九十六種の出家人に供養されることになった。波斯匿王はじめ諸大臣は前日に用意した。阿難はこのことを世尊に知らせ、世尊は目連に命じて、神通力で外道たちが向こう岸に渡れないようにした。

[B] 仏伝經典

⑪仏讚（大正04 p.039下）；時有諸外道 見王信敬仏 咸求於大王 與仏決神通 時王白世尊 願從彼所求 仏即默然許 種種諸異見 五通神仙士 悉來詣仏所 仏即現神力 正基坐空中 普放大光明 如日耀朝陽 外道悉降伏 国民普歸宗

⑫BC. (20-52)；大地の主たるかの王が〔ブッダ〕を拝礼したと知って他の異教徒たちは、その場で十力〔を具せるブッダ〕に神通の試合を挑んだ。地の守護神〔たる王〕に依頼されたときに、自己を克服せる仙人（ブッダ）は神通を示すことに同意された。かくて牟尼は、明らかで光明を放つ円輪を示し、あたかも諸星を焼き尽くす日の出のように、勇躍して、種々様々の見解をもつ〔異教の〕教師たちを多くの種類の神通をもって降伏された。

[C] 後世の仏伝資料

⑤JM. (p.033, 畑中 p.147)；【56】に含む。

⑥Bigandet. (vol. I p.216, 赤沼 p.270)；タバオング月（Tabaong 二月）の満月の日、世尊は大衆を率いて王舍城を去り……ワチヤウ（Watso）月の上弦の第七日に舍衛城の国に入り給うた。……仏陀は……群衆の前で、今こそ神通を顯わす時であると思召してその空中道へ飛び上つていろいろの神通を顯わし給うた。

【56】三十三天でマハーマーヤーに説法する

釈尊が母マーヤー（Māyā）のために三十三天に上って説法し、雨安居を過ごされてからサンカッサ（Sankassa）に下る。

[A] 原始聖典

④雜阿含506（大正02 p.134上）；一時仏住三十三天驄色虛軟石上、去波梨耶多羅拘陀羅香樹不遠、夏安居、為母及三十三天説法……。

④雜阿含604（大正02 p.167下）；此處如來至天上為母説法、將無量天衆、下於人間。……世尊從三十三天下閻浮提僧迦舍城優曇鉢樹下。天龍鬼神乃至梵天悉從來下。即於此時名此會名天下處。

④雜阿含604（大正02 p.169下）；如來在天上與母説法時。我亦在於中與母説法竟、將諸天衆從天上来、下僧迦奢國。

⑥增一阿含36-05（大正02 p.703中）；今如來母在三十三天、欲得聞法。今如來在閻浮里內、四部圍遶國王人民皆來運集。善哉世尊、可至三十三天與母説法。是時世尊默然受之。……爾時世尊說此偈已、便詣中道。是時梵天在如來右處銀道側、釈提桓因在水精道側、及諸天人在虛空中散華燒香、作倡伎樂、娛樂如來。是時優鉢華色比丘尼聞如來今日當至閻浮提僧迦尸池水側。聞已……。

⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.346上）；爾時世尊為欲斷其利養過故遂昇三十三天於玉石殿上三

月安居、近円生樹為母説法。……爾時世尊告目連曰。汝今可往瞻部洲中告諸四衆。滿彼七日已仏從天處向瞻部洲於僧羯奢城清淨曠野烏曇跋羅樹辺而下。……汝應化作三道宝階、黃金吠琉璃蘇頤迦。答言。大善。即便化作三種寶階。世尊處中躡琉璃道、索訶世界主大梵天王於其右辺踏黃金道手執微妙白拂價直百千兩金并色界諸天而為侍從。天帝釈於其左辺踏頤迦道。手擎百支傘蓋價直百千兩金而覆世尊并欲界諸天而為侍從。

⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.399下）；往三十三天為母摩耶広宣法要。宝階三道下瞻部洲、於僧羯奢城人天渴仰。

[B] 仏伝經典

- ⑪仏讚（大正04 p.039下）；為母説法故 即昇忉利天 三月處天宮 普化諸天人 度母報恩畢 安居時過還
- ⑫BC. (20-54) ; ……彼は三種の生存界（三有）を超えて、〔天に〕昇って行かれたが、それは母に利益を与え、彼女のために教えを説こうと思われたからである。こうして天に行かれた牟尼は天に住む母を知恵をもって教化しあわり、雨季を過ごし、空中の神々の王の供養を型どおりに受けたのちに、神々の世界からサンカーシュヤに降りられた。
- ⑬行經（大正04 p.088中）；母妙寶芙蓉 及天林樹花 欲令時開敷 故佛昇忉利 …… 爾時佛世尊 以清和梵音 甘露法藥雨 於慈母妙后 …… 聞說是法已 母妙天帝后 八十八勞結 心垢永滅尽

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.054中）；釈迦母摩訶摩耶夫人記。（出佛昇忉利天為母説法經）
- ④統紀（大正49 p.164下）；五十三年（壬申）佛先往忉利天、三月安居。遣文殊詣母所。……摩耶夫人聞之、乳自流出、直至佛口。……佛為説法得須陀洹果。三月將盡欲出涅槃、……佛與母別、大眾導從、下還祇洹。
- ⑤JM. (p.033, 畑中 p.147) ; ……第7〔の雨安居〕（sattamām）を三十三天宮で〔過ごした〕。その雨安居において、世尊は、ウッタラーサールハ星宿に満月が宿るアーサールハ月の満月の日に (Āsālhapunṇamāyām uttarāsālhanakkhattayoge vattamāne) 、Sāvatthī（舍衛城）の城門の近くにあるgaṇḍamba樹のもとで二重の神変を行なおうとして、〔そこに〕集まった人々が36由旬の会衆となり、影が長く身を落とす時分、空中に経行処を築いた。そしてそれは、1鉄圍山ほどの長さがあった。世尊は、そこで神変を行なった。〔神変〕を行なって、さらには右足をあげてYugandhara（持双山）の山頂に置き、もう一方の足をあげてSineru（須彌山）の山頂に置いた。かくして、6万8千由旬の処が〔彼にとっては〕3歩であった。大師は神々の会衆の中央に坐った時、母親（仏母Māyā）のためにAbhidhamma-pitaka（論藏）を説いた。3ヶ月間（tayo māse）、彼は間断なくAbhidhammaを説き、雨安居を過ごし終えて自恣を行なったが、アッサユジャ星宿に満月が宿る、その大自恣の日に（mahāpavāraṇādivase assayujanakkhatte vattamāne）、三十三天宮から下ってSaṅkassaの城門に立った。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.219, 赤沼 p.275) ; 佛陀は並びなき心眼力を押しすすめ、過去の諸仏が一様に忉利天に雨期を過し、各々の母后に説法し給うたことをお知りになり……。

【57】マハーパジャーパティー・ゴータミー最初の比丘尼となる

釈尊の乳母のマハーパジャーパティー・ゴータミー (Mahāpajāpatī Gotamī) が出家を希望するが、釈尊は許されない。これを阿難が取りなし、最初の比丘尼となる。その際女性の出家者のために八敬法を制定する。

[A] 原始聖典

- ①AN.01-014-01 (vol. I p.025) ; 私の声聞女中で（出家して）もっとも久しき者の第1はマハーパジャーパティー・ゴータミーである (etad aggam mama sāvikānam bhikkhunīnam rattaññūnam yadidam Mahāpajāpatī Gotamī) 。
- ②AN.08-051 (vol. IV p.274) ; マハーパジャーパティー・ゴータミーが世尊に出家を願い出たが、世尊は許されなかった。そこで彼女はヴェーサーリーの大林重閣講堂 (Vesāli Mahāvana Kūṭāgārasāla) の門外で泣いていた。阿難がこれを見て執り成し、八重法 (atṭha garudhammā) で出家が許されることになった。しかしこれで正法が1000年続くところが500年になったと言われた。
- ③Vinaya ‘Bhikkhunīkkhandhaka’ (vol. II p.253) ; 世尊はカピラヴァットウのニグローダ園におられた。そのときマハーパジャーパティー・ゴータミーが世尊に出家を願い出たが、世尊は許されなかった。世尊はヴェーサーリーに遊行され、大林重閣講堂 (Vesāli Mahāvana Kūṭāgārasāla) に住されたが、彼女は門外で泣いていた。阿難がこれを見て執り成し、八重法で出家が許されることになった。しかし世尊はこれで正法が1000年続くところが500年になったと言われた。
- ④中阿含116「瞿曇弥経」(大正01 p.605上) ; 瞿曇弥大愛が世尊に出家を願い出たが、世尊は許されなかった。そこで彼女は門外で泣いていた。阿難がこれを見て執り成し、八尊師法で出家が許されることになった。
- ⑤増一阿含05-01 (大正02 p.558下) ; 我声聞中第一比丘尼、久出家学国王所敬、所謂大愛道瞿曇彌比丘尼是。
- ⑥四分律「比丘尼犍度」(大正22 p.922下) ; 世尊は釈迦瘦尼拘律園におられた。そのとき摩訶波闍波提が世尊に出家を願い出たが、世尊は許されなかった。世尊は拘薩羅国に遊行され祇桓精舎に住されたが、彼女は門外で泣いていた。阿難がこれを見て執り成し、八尽形寿不可過法で出家が許されることになった。釈尊は正法が500年に減ったことを歎かれ、阿難は悲しんだ。
- ⑦五分律「比丘尼法」(大正22 p.185中) ; 世尊は迦維羅衛城の尼拘類樹下におられた。そのとき摩訶波闍波提瞿曇弥が世尊に出家を願い出たが、世尊は許されなかった。世尊は舍衛城に遊行され祇桓精舎に住されたが、彼女は門外で泣いていた。阿難がこれを見て執り成し、八不可越法で出家が許されることになった。しかし世尊はこれで正法が1000年続くところが500年になったと言われた。
- ⑧僧祇律「単提042」(大正22 p.365中) ; 大愛道耶輸陀羅羅云出家応此中（鼈本生経）広説。
- ⑨根本有部律「雜事」(大正24 p.404下) ; 500結集の時に、阿難が執り成して大世主を出家させ、比丘尼が生まれて、正法が早く滅することになったことが非難されている。
- ⑩慧簡訳「瞿曇弥記果経」(大正01 p.856上) ; 瞿曇弥が出家を願い出たが許されなかった。そこで阿難が女人にも四沙門果を得させるべきだと執り成し許されたが、梵行が久存しないと嘆かれ、八重法を定められた。

[B] 仏伝經典

- ③中本（大正04 p.158上）；爾時仏遊於迦維羅衛國釈氏精舍。……千二百五十人俱。是時大愛道瞿曇彌、行到仏所、……白仏言。我聞女人精進可得沙門四道、願得受仏法律。……仏言且止、瞿曇彌、無樂以女人入我法律。……如是至三、仏不肯聽。〈雨安居の後、国を出る仏を追って那私県にて再度願うも聽されず。阿難の仲介によってようやく聽される。〉假令大愛道、審能持此八敬法者、聽為沙門。
- ⑯集經（大正03 p.870下）；爾時世尊、已開女人、聽其出家。于時摩訶波闍波提、為五百釈女。皆悉出家、光顯仏法、建立比丘尼衆。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.052中）；釈迦姨母大愛道出家記。（出中本起經）
- ③氏譜（大正50 p.095中）；中本起云。……大愛道白言。我聞女人出家得四道果。
- ④統紀（大正49 p.156上）；初仏還國。大愛道求出家。……再三不許。仏再還國復求出家。如前不許。阿難白仏。大愛道至心欲受法律。願仏聽之。仏令尽形壽行八敬法。時大愛道得出家。為比丘尼始……比丘尼受八敬法。
- ⑥Bigandet. (vol. I p.209, 赤沼 p.262)；（淨飯王崩御、アニュジャーナ紀元百七年、九十七才）波闍波提皇后は、夫の王の崩御後、……宗教的生活に入りたいという志願を持っていられた。皇后はこの目的で、世尊の御前に出て、志望の通り尼にして下さいということを三度願われた。然し三度とも斥けられた。仏陀はやがて生国を捨てて吠舍離に帰り、大林（Mahawon）中の重中閣講堂（Gutagaia-thala）に居を占め給うた。……大林精舎を訪問……阿難仲介……許可。

【58】アングリマーラの教化

人々を殺してその指を首飾りとしていた殺人鬼のアングリマーラ（Aṅgulimāla）を、釈尊は追いかけても追いかけても近づけないという神通力を示して教化する。

[A] 原始聖典

- ①MN.086 ‘Aṅgulimāla-s.’ (vol. II p.097)；世尊が舍衛城におられたときのこと、人々を殺して、その指を首飾りとしていた殺人鬼のアングリマーラを、追いつこうとしても追いつけない神通力を示して教化され、隨從沙門とされた。
- ①‘Theragāthā’ Vs.866～891 (p.080)；（アングリマーラの詩）世尊は追いつこうとしても追いつけない神通力を示されたので、私は出家した。
- ①Vinaya ‘Mahākkhandhaka’ (vol. I p.074)；そのとき、盜賊アングリマーラが出家して、人々が驚き戸を閉ざし非難した。そこで、「名称強盜を出家せしむべからず」という規則ができた。
- ④雜阿含1077（大正02 p.280下）；一時仏在央瞿多羅国人間遊行、經陀婆闍梨迦林中。……世尊、莫從此道去。前有央瞿利摩羅賊、脫恐怖人。仏告諸人。我不畏懼。……遙見央瞿利摩羅手執刀楯走向。世尊以神力現身徐行、令央瞿利摩羅駛走不及。走極疲乏已、遙語世尊。住、住、勿去。……爾時央瞿利摩羅出家已。
- ⑤別訳雜阿含016（大正02 p.378中）；一時仏遊化摩竭陀國桃河樹林。（以下略同）
- ⑥增一阿含38-06（大正02 p.719中）；「一時仏在舍衛國祇樹給孤独園。……爾時國界有賊名鷲掘魔、極為兇暴。殺害生類不可稱計、無慈悲於一切衆生、國界人民無不厭患、日取人殺以指為鬚。故名為指鬚」。そのとき指が一つ足りなかったので母を殺そうとした。これを釈尊が留め、追いつこうとしても追いつけない神通力を示して教化され、出家させた。
- ⑫竺法護訳「鷲掘摩經」（大正02 p.508中）；世尊が舍衛國祇樹給孤独園におられたときのこと。

鷲掘魔羅は百人を殺して鬘にしようとしていた。母を害しないように、釈尊が追いつこうとしても追いつけない神通力を示されて教化し、出家させた。

⑩求那跋陀羅訳「央掘魔羅經」（大正02 p.512中）；世尊が舍衛国祇樹給孤独園におられたときのこと。央掘魔羅は生天を得るために、千人を殺して鬘にしようとしていた。一人足りなかったので母を殺そうとしたが、釈尊が追いつこうとしても追いつけない神通力を示されて教化し、出家させた。

[B] 仏伝經典

- ⑨僧伽（大正04 p.134下）；爾時世尊知鷲崛鬘今應受化。……彼本行少諸惡永盡流血污體。便解劍捨着一面、白世尊言。 師今是我護 遭遇此聖師 求為作弟子 不違師禁戒。
- ⑩仮讚（大正04 p.040上）；央瞿利摩羅 於彼脩佉村 為現神通力 化令即調伏
- ⑪BC. (21-13)；神通力を具足された世尊は、スマの人民の間で、サウダーサのように残忍なバラモンであったアングリマーラを教化された。
- ⑫行經（大正04 p.082中）；懷害多瞋怒 捷疾甚暴風 小指為額鬘 迷惑癡狂走 害如閻羅王 梵志鷲掘魔 神足以調化 凶暴難調者

[C] 後世の仏伝資料

⑬Bigandet. (vol. I p.254, 赤沼 p.321)；その所を離れて、世尊はある森を通過なさろうとして給うた。その森というのは有名な兇賊で殺人者である鷲屈摩羅（Ougalimala）の名高い住家として喬薩羅（Kothala）の人民に非常に恐れられた場所である。

【59】 提婆達多の破僧

提婆達多（Devadatta）はマガダ国の王子・阿闍世（Ajātasattu）に取り入って王を殺させ、自身は釈尊を殺して、教団をのつとろうとする。

[A] 原始聖典

①Vinaya ‘samghabhedakkhandhaka’ (vol. II p.184)；提婆達多は、阿闍世王子が幼くて、将来に吉祥有りということで、近付きになろうと王舎城に行った。阿闍世王子は提婆達多の神通力に喜び、寄進した。提婆達多は「比丘衆の長となろう」として神通力を失った。提婆達多は王の出席している集会で釈尊に、「世尊は年老いたので、比丘衆を自分に譲れ」と迫った。世尊は、「舍利弗・目連にすら付嘱しない。まして六年誕を食える者に於てをや」と突っぱねた。そして世尊は、提婆達多を王舎城において提婆達多のなすことは仏法僧のなすことではなく、提婆達多個人の為ことであるという、「顯示羯磨」にかけることを舍利弗に命じた。提婆達多は阿闍世王に父を殺して王となれ、自分は世尊を殺して仏陀となる、とそそのかした。（ビンビサーラ王はこれを知って自ら退位した。）しかし成功せず、そこで提婆達多は自らギッジャクータ山の上から石を落とし、また象をけしかけた。提婆達多はコーカーリカに「五事」を説いて、破僧を持ち掛けたが、世尊は許されなかった。そこで提婆達多は王舎城の町で、世尊は奢侈に墮したと非難した。提婆達多は布薩の日に「五事」を持するかどうかで籌をとり、500人の新参比丘を連れて破僧し、象頭山に向かって去った。世尊は舍利弗・目連を派遣して、若い比丘たちに反省を求め、連れて帰らせた。世尊は提婆達多は地獄に落ちて1劫住し、救うことはできないと予言した。

②Vinaya ‘Samghādhisesa 010’ (vol. III p.171)；世尊は王舎城・迦蘭陀竹林園（Veluvana Ka-

landakanivāpa) におられた。そのとき提婆達多 (Devadatta) は拘迦利迦 (Kokālika) ・迦吒無迦利 (Kaṭamorakatissaka) ・騫陀毘耶子 (Khanḍadeviyāputta) ・婆勿陀達 (Samuddadatta) の所へ行って、破僧・破法輪を為そうともちかけた。そして五法、すなわち、1、林住者たること、2、乞食者たること、3、糞掃衣者たること、4、樹下住者たること、5、魚肉を食しないこと、を提案した。しかし世尊は拒否された。そこで提婆達多は喜んで、別住しようとした。

- ①Vinaya ‘Samghādhisesa 011’ (vol. III p.174) ; 世尊は王舍城・迦蘭陀竹林園におられた。そのとき提婆達多が破僧を企て、心ある比丘たちは非難した。そのとき拘迦利迦・迦吒無迦利・騫陀毘耶子・婆勿陀達は提婆達多に味方した。
- ⑤別訳雜阿含053 (大正02 p.374中) ; 爾時提婆達多獲得四禪、而作是念。此摩竭提國、誰為最勝。覆自思惟、今日太子阿闍世者、當紹王位。我今若得調伏彼者、則能控御一國人民。時提婆達多作是念已、即往詣阿闍世所、化作象寶、從門而入、非門而出。又化作馬寶、亦復如是、又復化作沙門、從門而入、飛虛而出。又化作小兒、衆寶瓔珞、莊嚴其身、在阿闍世膝上、時阿闍世抱取鳴唼、唾其口中。提婆達多貪利養故、即嚥其唾。提婆達多變小兒形、還伏本身。時阿闍世見是事已、即生邪見、謂提婆達多神通變化、踰於世尊。……⁽¹⁾
- ⑦四分律「僧殘010」 (大正22 p.594上) ; そのとき提婆達多は三聞達多 (Samuddadatta) の所へ行って、破僧・破法輪をなそうともちかけた。そして五法、すなわち、1、乞食者たること、2、糞掃衣者たること、3、樹下住者たること、4、蘇塩を食しないこと、5、魚肉を食しないこと、を提案した。その時世尊は提婆達多が四聖種を断じようとしているとたしなめられ、破僧は墮地獄だと戒められた。
- ⑦四分律「僧殘011」 (大正22 p.595下) ; 世尊は羅閱祇耆闍崛山中におられた。ときに提婆達多は五法を執し、それに与する比丘たちがあった。
- ⑦四分律 ‘samghabhedakkhandhaka’ (大正22 p.909中) ; 世尊は王舍城におられた。僧たちが集会したとき、提婆達多は五事を説き、これが「是法是毘尼是仏所教」と思うものは籌をとれといった。五百人の新學無知の比丘たちは籌をとった。阿難が立って、これが「非法非毘尼非佛教」であると思うものは鬱多羅僧を一面に着けよといった。六十人の長老比丘がそうした。五百人の新學無知の比丘たちは伽耶山に向かって去った。舍利弗・目連は行って提婆達多の衆を説得し、五百人を連れ帰った。三聞達多は眠っている提婆達多を起こし、これを知って提婆達多は面孔より血を出した。
- ⑧五分律「僧殘010」 (大正22 p.020中) ; 調達にたいして、制戒された。「破僧しようとするものは、三諫されて僧殘」と。
- ⑧五分律「僧殘011」 (大正22 p.021上) ; 世尊は王舍城におられた。そのとき助調達比丘たちは調達の説に賛成した。
- ⑧五分律「破僧法」 (大正22 p.164上) ; 調達は五法を唱えて破僧することを提案した。頗軀、分那婆敷、般那、盧醯、伽盧帝舍、瞿伽離、騫荼陀婆、三聞達多は賛成した。また和修達という優婆塞も賛成した。調達は布薩の時に、五法を提案し、五百人の比丘が賛成した。阿難と一人の須陀洹比丘のみが反対した。舍利弗・目連は行って提婆達多の衆を説得し、連れて帰った。三聞達多は眠っている提婆達多を起こした。これを知って提婆達多は面孔より血を出し、生きたまま地獄に落ちた。
- ⑨十誦律「僧殘010」 (大正23 p.024中) ; 世尊は王舍城におられた。そのとき提婆達多は俱伽梨・騫陀陀驃・迦留陀提舍・三文達多の所へ行って、仏はすでに老耄で年衰えているから、破僧・破法輪を為そうとおもちかけた。そして五法、すなわち、糞掃衣者たること、乞食者たること、一食法、樹下住者たること、魚肉を食しないこと、を提案した。しかし世尊は破僧を戒められた。
- ⑨十誦律「僧殘011」 (大正23 p.025下) ; 世尊は王舍城におられた。世尊は助破僧比丘にちなん

で、戒を制された。「破僧を企てるものに加わるものは三諫されて僧残」

- ⑨十誦律「調達事」（大正23 p.257下）；調達素知種種外書星宿、相人吉凶天地怪相、見瓶沙王太子阿闍世王相明了。我當以神通力攝取、決定是我檀越、以是因緣多人隨從。作是念已、變身作象寶、於阿闍世太子家、不從門入從門中出、或從門入不從門出、現如是相欲令知是調達。復變身作馬寶、或從非門入門中出、或從門入非門出、現如是相欲令知是調達。復現作端正小兒、着金寶瓔珞、在太子膝上東西宛轉、太子鳴抱共戲唾其口中、現如是相欲令知是調達。以是神通力、奉阿闍世太子心、令生惡邪見。謂調達神通力勝佛。生愛敬心、供養衣服臥具湯藥、乃至日日送五百釜飲食、五百乘車匁達、來至調達所、自手下食。……
- ⑩僧祇律「僧殘010」（大正22 p.281下）；世尊は王舍城におられた。そのとき提婆達多は破僧をしようとした。制戒された。「破僧しようとする者は、三諫されて僧残」
- ⑪僧祇律「僧殘011」（大正22 p.283中）；世尊は舍衛城におられた。提婆達多が羯磨にかけられたとき、提婆達多は六群比丘に、あなた達は長い間自分に承事してきながら今どうして黙っているのかと非難した。そこで六群比丘たちは提婆達多の味方をした。
- ⑫根本有部律「僧伽伐戸沙010」（大正23 p.700下）；神通力を得た提婆達多はマガダ王の末生怨太子を教化して、彼が王になればたやすく多くの人々を教化することができると考えた。提婆達多はさまざまな神通を表し、太子はこれをかわいがった。童子に姿を変えたときには、太子は自分の唾を飲ませた。提婆達多は飲んだ。そこで太子は提婆達多を供養するようになった。そのとき提婆達多は阿闍世太子の供養を得て、世尊は今、年衰え年耄して四衆を教授するのに疲れている、私に付属してもらおうと考えた。この瞬間に神通力を失った。時に提婆達多は四人の仲間、高迦梨迦・騫荼達驃・羯吒謨洛迦底灑・三沒達羅達多といっしょに世尊のところに来て、サンガを譲れと要求した。世尊は舍利弗・目連にさえ付属しないのに、癡人で唾を食うような者に譲れないと突っぱねた。そこで提婆達多は初めて世尊に殺意を抱いた。
- ⑬根本有部律「僧伽伐戸沙011」（大正23 p.704中）；世尊は提婆達多の四人の仲間、孤迦梨迦・騫荼達驃・羯吒謨洛迦底灑・三沒達羅達多を呵責されて、「破僧を企てるものに加わるものは三諫されて、僧残」と定められた。
- ⑭根本有部律「破僧事」（大正24 p.149中）；提婆達多は五法を立てて、破僧しようとした。
- ⑮根本有部律「破僧事」（大正24 p.170中）；天授は四人の比丘、孤迦梨迦、騫荼達驃、羯吒謨洛迦、三沒達羅達多に破僧を持ち掛けた。

[B] 仏伝經典

- ⑯僧伽（大正04 p.135下）；時調達於世尊所常懷瞋恚。……即便放石。……當於爾時摩竭國王有象、名檀那波羅。……是時提婆達兜飲象子使醉而放彼象。……聞如來語、即便涕零。
- ⑰仏讚（大正04 p.040下）；爾時提婆達 見仏德殊勝 内心懷嫉妬 退失諸禪定 造諸惡方便 破壞正法僧 …… 彼提婆達兜 為惡自纏縛 先神力飛行 今墮無押獄
- ⑱BC. (21-37~65)；デーヴァダッタはその〔ブッダの〕偉大きさを見て慢心〔と嫉妬〕をいだき、もうもろの瞑想（禪定）から逸脱して、多くの正しからざることを行なった。心汚れた彼は牟尼の僧団の不和を謀ったが、所期の分裂を引き起こすことができなかつたので、彼（ブッダ）を殺害するための努力を始めた。……ありとあらゆる悪を身につけたデーヴァダッタは汚れた罪業を数多くなして、国王、人人、バラモン、仙人の呪いによるかのように地の底〔の阿鼻地獄〕に沈んでしまった。
- ⑲行經（大正04 p.083中）；調達之所放 狂醉於王舍 仏所化迷惑 醉象名財守
- ⑳行經（大正04 p.093下）；爾時調達 懷毒害心 …… 教使逆惡 汝篡父王 我當殺佛…即時放

醉象 …… 象即時屈伏 自帰仏足下

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.058中）；釈迦徒弟調達出家縁記。（出中本起経）
④統紀（大正49 p.155中）；仏語提婆達多。……汝宜在家分檀恵施、不宜出家、如是再三。提婆便生懶念。…後犯五逆。…最後受身成辟支仏、名曰南無。
⑥Bigandet. (vol. I p.262, 赤沼 p.331) ; 提婆達多はこの憶恚の情から仏陀の僧団を離れて他所へ移らんと決心して、王舍城へ行いて頻婆娑羅王の若き太子阿闍世 (Adzatathat) に取り入って……若き太子は……師として仰ぎ、提婆の為に……ヤウシシヤ丘 (Yauthitha hill) に一精舎を建立した。……阿闍世が摩揭陀の王位に即いたのは仏陀成道後第三十七年目であった。

(1) 提婆達多が阿闍世太子の唾を飲んだという伝承には次のようなものがある。「婆沙」85（大正27 p.442上）、「毘那耶」2（大正24 p.857下）。

【60】ヴェーランジャーにて馬麦を食する

釈尊はヴェーランジャ（あるいはアッギダッタ）婆羅門の招待を受けてヴェーランジャー (Verañjā) に行くが、雨安居の食を得られず、馬の飼料の馬麦を食べて過ごす。

[A] 原始聖典

- ①Vinaya ‘波羅夷001’ (vol. III p.001) ; ヴェーランジャー (Verañja) 婆羅門はヴェーランジャー (Verañjā) で雨安居を請い、世尊はナレール (Nañeru) のプチマンダ (pucimanda) 樹の下に住された。その時ヴェーランジャーは飢饉で、そこで世尊も比丘たちも北路の馬商人から得た馬の飼料である麦を食された。
⑦四分律「波羅夷001」（大正22 p.568下）；毘蘭若婆羅門は世尊に雨安居を請い、そこで世尊は500人の比丘とともに蘇羅婆國 (Soreyya?) に遊行され、そこから毘蘭若に至り、那隣羅浜州 (Nañeru) の曼陀羅樹の下に住された。そのとき飢饉であったので、販馬人の布施する馬麦を食された。
⑧五分律「波羅夷001」（大正22 p.001上）；毘蘭若邑に波斯匿王 (Pasenadi) から封ぜられていた毘蘭若という婆羅門があり、世尊は請われて雨安居に入った。ところが婆羅門は悪魔波旬 (Māra pāpimant) に惑わされてこれを忘れてしまったため、世間は飢饉であったため世尊は城北の山で安居を過ごされ、販馬師の布施する馬麦を食された。
⑨十誦律「波夜提044」（大正23 p.098中）；世尊は毘羅然國の阿耆達 (Aggidatta) という婆羅門王の請いによって夏安居したが、その国はまだ信者が無く精舎もなかったので、馬の食べる馬麦を食べて過ごされた。
⑩十誦律「医薬法」（大正23 p.187中）；同上
⑪根本有部律「薬事」（大正24 p.045上）；釈尊は鞞闍底城に遊行され、火授王の請いによって雨安居に入られた。王は夢を見て王位を失うのを恐れて、閉じこもってしまい、供養をすることを忘れてしまった。そこで世尊は馬麦を食して過ごされた。
⑫根本有部律「薬事」（大正24 p.096上）；大德世尊、先作何業、成正覺後、與四百九十八苾芻、於辺界城、而食馬麦、舍利子・大目乾連受天供養。仏言。……

[B] 仏伝經典

③中本〈大正04 p.163上〉；世尊與五百比丘僧往詣隨蘭然。時阿耆達天魔迷惑、耽荒五欲。……如來到門閉而不通、便止舍迦陵頻樹下。仏告比丘僧。此郡既飢人不好道、各各自便隨利分衛。舍利仏受救獨升忉利天上、日食自然。衆僧分衛三日空還。時有馬師減麥飯仏及比丘僧。

[C] 後世の仏伝資料

【61】諸弟子の教化

ここには‘Buddhacarita’と‘仏所行讚’の断片的ではあるが、諸弟子の教化に関する記述を掲げる。それぞれについての原始聖典資料がないわけではないが、煩雑になるので省略する。

[A] 原始聖典

(省略)

[B] 仏伝經典

⑪仏讚（大正04 p.40上）；〔（忉利天より下り）マガダ？〕樹提迦、耆婆、首羅、輸盧那、長者子央伽、無畏王子、尼瞿屢陀、尸利掘多迦、尼撻憂波離

⑫BC. (21-02・03)；〔ラージャグリハ〕ジョーティシュカ (Jyotiṣka)、ジーヴァカ (Jīvaka)、シューラ (Śūra)、シュローナ (Śrona)、アンガダ (Aṅgada)、アバヤ (Abhaya) 王子、シュリーグプタ (Śrīgupta)、ウパーリ (Upāli)、ニヤグローダ

⑪仏讚（大正04 p.40上）；〔乾陀羅国〕弗迦羅

⑫BC. (21-04)；〔ガンダーラ〕プシュカラ (Puṣkara)

⑪仏讚（大正04 p.40上）；〔毘富羅山〕醯茂鉢低鬼、波利耆利

⑫BC. (21-05)；〔ヴィプラ (Vipula) 山〕ハイマヴァタ (Haimavata) (ヤクシャ)、サーター グラ (Sātāgra) (ヤクシャ)

⑪仏讚（大正04 p.40上）；〔波沙那山中〕波羅延梵志

⑫BC. (21-07)；〔パーシャーナ (Pāśāṇa) の山〕パーラーヤニカ・バラモンたち

⑪仏讚（大正04 p.40上）；〔他那摩帝村〕鳩吒檀駄

⑫BC. (21-09)；〔スターヌマティー (Sthānumatī) 村〕クータダンタ (Kūṭadanta, ;Pāli)

⑪仏讚（大正04 p.40上）；〔毘提訶山〕般遮尸陁

⑫BC. (21-10)；〔ヴァイデーハカ山 (Vaidehaka-parvata) 〕パンチャシカ (Pañcaśikha)、アスラの女、神々

⑪仏讚（大正04 p.40上）；〔毘紐瑟吒〕難陀の母

⑫BC. (21-08)；〔ヴェーヌカンタカ (Veṇukanṭaka) 〕ナンダの母 (Nandamātā)

⑪仏讚（大正04 p.40上）；〔央伽富梨城〕富那跋陀羅、輸屢那檀陀 (Śronaḍanḍa)、凶惡なる大力龍、国王及び後宮

- ⑪BC. (21-11) ; [アンガの都] プールナバドラ (Pūrṇabhadra) (ヤクシャ)、マホーラガ (大力龍) のシュレーシュタ、ダンダ (大力龍)、シュヴェータ (大力龍)、ピンガラ (Piṅgala) (大力龍)、チャンダラ (大力龍)
- ⑪仏讚 (大正04 p.40上) ; [侏儒村] 稽那、尸盧
⑫BC. (21-12) ; [アーパナ (Āpana) の町] ケニヤ (Kenya) (バラモン)、シェーラ (Śela) (バラモン)
- ⑪仏讚 (大正04 p.40上) ; [脩佉村] 央瞿利摩羅、
⑫BC. (21-13) ; [スフマ (Suhma) の人民の間] アングリマーラ (Aṅgulimāla)
- ⑪仏讚 (大正04 p.40上) ; [?] 浮梨耆婆男
- ⑪仏讚 (大正04 p.40中) ; [跋提村] 跋提梨、跋陀羅 (=兄弟の二鬼神)
⑫BC. (21-14) ; [バドラ (Bhadra)] メンダカ (Menḍhaka)
- ⑪仏讚 (大正04 p.40中) ; [毘提訶富利] 大寿、梵摩 (=二婆羅門)
⑫BC. (21-15) ; [ヴィデーハ国の都] ブラフマーユス (Brahmāyus)
- ⑪仏讚 (大正04 p.40中) ; [毘舍離城] 諸の羅刹鬼、離車師子、離車衆、薩遮尼犍子 (Soca)
⑫BC. (21-16) ; [ヴァイシャーリー (Vesāli) 市の池] ラークシャサ (羅刹)、シンハ (Siṁha) にひきいられたリッチャヴィ族の人々、ウッタラ、サティヤカ (Satyaka)
- ⑪仏讚 (大正04 p.40中) ; [阿摩勒迦波] 鬼 婆陀羅、跋陀羅迦、跋陀羅劫摩
⑫BC. (21-17) ; [アラカーヴァティー (Alakāvatī) なる都城] ヤクシャバドラ
- ⑪仏讚 (大正04 p.40中) ; [阿蠻山] 鬼 阿蠻婆、鳩摩羅、阿悉多迦
⑫BC. (21-18) ; [アタヴィー] アーターヴァカ (Āṭavaka) (ヤクシャ)、ハスタカ (Hastaka) (王子)
- ⑪仏讚 (大正04 p.40中) ; [伽闍山] 鬼 緝迦那、針毛夜叉
⑫BC. (21-20) ; [ガヤー (Gayā)] カラ (Khara) (ヤクシャ)、スチローマ (Sūcīloma) (ヤクシャ)
- ⑪仏讚 (大正04 p.40中) ; [波羅奈] 迦旃延
⑫BC. (21-21) ; [ヴァーラーナシー (Vārāṇaśī)] カーティヤーヤナ (Kātyāyana)
- ⑪仏讚 (大正04 p.40中) ; [輸盧波羅] 多波犍尼劍
⑫BC. (21-22) ; [シュールパーラカ (Śūrpāraka) の市] スタヴァカルニン (Stavakarṇin) (商人)
- ⑪仏讚 (大正04 p.40中) ; [摩醯波低] 迦毘羅仙
⑫BC. (21-24) ; [マヒーヴァティー (Mahīvatī)] 苦行者カピラ (Kapila)

- ⑪仏讚（大正04 p.40中）；〔波羅那処〕婆羅那鬼
⑫BC. (21-25) ; [ヴァーラナヴァティー (Vāraṇavatī)] ヴァーラナ (Vāraṇa?) (ヤクシャ)
- ⑪仏讚（大正04 p.40中）；〔摩偷羅国〕鬼 竭曇摩
⑫BC. (21-25) ; [マトゥラー (Mathurā)] ガルダバ (Gardabha) (ヤクシャ)
- ⑪仏讚（大正04 p.40中）；〔偷羅俱瑟吒〕賴吒波羅
⑫BC. (21-26) ; [ストゥーラコーシュタカ (Sthūlakoṣṭhaka) の町] ラーシュトラパーラ (Rāṣtrapāla)
- ⑪仏讚（大正04 p.40中）；〔轉蘭若村〕諸の婆羅門
⑫BC. (21-27) ; [ヴァイラニヤー (Vairanyā)] すぐれたる人 (バラモン)
- ⑪仏讚（大正04 p.40中）；〔迦利摩沙村〕薩毘薩深、阿耆尼毘舍
⑫BC. (21-27) ; [カルマーシャダミヤ (Kalmāśadamya)] バーラドヴァージャ (Bhāradvāja) (バラモン)
- ⑪仏讚（大正04 p.40下）；〔舍衛国に還り〕瞿曇摩、闍帝輸盧那、道迦阿梨
⑫BC. (21-28) ; [シュラーヴァスティー] サビヤ (Sabhiya) 、ニルグランタのナプトリープトラ (?) (Naptrīputra) 、及びその他の異教徒たち
- ⑪仏讚（大正04 p.40下）；〔橋薩羅国に還り〕弗迦羅婆梨 (=外道の師)
- ⑪仏讚（大正04 p.40下）；〔施多毘迦〕諸の外道仙
⑫BC. (21-30) ; [シェータヴィカ (Śetavika)] シュカ (śuka) (オウム) 、シャーリカ (śārikā) (ムクドリ)
- ⑪仏讚（大正04 p.40下）；〔阿輸闍國〕諸の鬼龍の衆
⑫BC. (21-31) ; [アヨーディヤー (Ayodhyā)] ナーガリカ (Nāgarika) (龍) 、カーリカ (Kārika) (龍) 、クムビーラ (Kumbhīra) (龍)
- ⑪仏讚（大正04 p.40下）；〔金毘羅国〕金毘羅、迦羅迦 (=惡竜王)
- ⑪仏讚（大正04 p.40下）；〔跋伽国〕夜叉鬼 毘舍、那鳩羅 父母及び大長者
⑫BC. (21-32) ; [バルガ] ビーシャカ (Bhiṣaka?) (ヤクシャ) 、ナクラ (Nakula) の両親
- ⑪仏讚（大正04 p.40下）；〔俱舍弥国〕瞿師羅、波闍欝多羅 (=優婆夷)
⑫BC. (21-33) ; [カウシャムビー (Kauśambi)] ゴーシラ (Ghoṣila) 、クブジョッタラー (Kubjottarā)
- ⑪仏讚（大正04 p.40下）；〔捷陀羅国〕阿婆羅龍
⑫BC. (21-34) ; [ガンダーラ] アパラーラ (Apalāla) (大龍王)

- ⑫BC. (21-06) ; [ジーヴァカのマンゴー林] アジャータシャトル (阿闍世) 王
⑫BC. (21-19) ; [「安樂」の町] ヴィマラ (Vimala) (ヤクシャ)
⑫BC. (21-29) ; [シュラーヴァスティー] 憐しまずに贈物を与えるバラモンたち、善行をなす者たち、家系正しき者たち、コーサラ国王 (プラセーナジト)

[C] 後世の仏伝資料

(省略)

【62】パータリ村の繁栄を予言する

釈尊はパータリ村 (Pātaligāma) に城を築いていたヴァッサカーラ (Vassakāra) 大臣の接待を受け、パータリ村の繁栄を予言する。釈尊に因んで、門とガンジス河の渡しにゴータマの名前が付けられる。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.081) ; 世尊は王舎城から、アンバラッティカ (Ambalaṭṭhikā) 、ナーランダー (Nālandā) を経由してパータリ村 (Pātaligāma) に行かれた。そのときマガダの大臣・スニーダ (Sunīda) とヴァッサカーラ (Vassakāra) はヴァッジ人 (Vajji) の侵攻を防ぐために城を築いていた。世尊は天神がここに住居を構えつつあるのをみて、「このパータリブッタ城は最高の都となり、物資の集散地となるだろう (agga-nagaram bhavissati Pātaliputtam puṭa-bhedanam) 」と予言された。そして世尊の出られた門はゴータマ門 (Gotamadvāra) 、ガンジスを渡られた渡し場はゴータマの渡し (Gotama-tittha) と名づけられた。
- ②Vinaya ‘bhesajjakkhandhaka’ (vol. I p.226) ; 世尊は王舎城からパータリ村に行かれた。そのときマガダの大臣・スニーダ (Sunīda) とヴァッサカーラ (Vassakāra) はヴァッジ人 (Vajji) の侵攻を防ぐために城を築いていた。「アリヤの住所であり、商人の集まるところであるかぎり、パータリブッタは最高の都となり、物資の集散地となるだろう (yāvatā ariyam āyatanam yāvatā vanippatho idam agganagaram bhavissati Pātaliputtam puṭa-bhedanam) 」と予言された。そして世尊の出られた門はゴータマ門 (Gotama-dvāra) 、ガンジスを渡られた渡し場はゴータマの渡し (Gotama-tittha) と名づけられた。
- ③長阿含002「遊行經」(大正01 p.012上) ; 爾時世尊於竹園隨宜住已、告阿難曰。汝等皆嚴。當詣巴陵弗城。……世尊知時故問阿難、誰造此巴陵弗城。阿難白佛。此是禹舍大臣所造、以防禦跋祇。佛告阿難。造此城者正得天意。吾於後夜明相出時至閑靜處、以天眼見諸大神天各封宅地。中下諸神亦封宅地。阿難。當知諸大神天所封宅地有人居者安樂熾盛。中神所封中人所居。下神所封下人所居功德多少、各隨所止。阿難。此處賢人所居、商賈所集、國法真實、無有欺罔。此城最勝諸方所推不可破壞。……大臣禹舍從佛後行。時作是念。今沙門瞿曇出此城門即名此門為瞿曇門。又觀如來所渡河處即名此處為瞿曇河。
- ④根本有部律「藥事」(大正24 p.021下) ; 世尊は波吒離邑に行かれた。そこで、「世尊告曰。我在室中入定即以清淨天眼、觀見於彼波吒離村大威力天神并諸小神及有威德諸人民等、各隨彼神愛樂而住。皆順天神所行教法。由諸天神於此住故、當知是城應為最勝」と予言された。そして門が「喬答摩門」、道路が「喬答摩道」と名づけられた。
- ⑤根本有部律「雜事」(大正24 p.384下) ; 於其城邑有勝人住止、有勝人言議、有勝商人來共交易

往還無滯者。謂即是此波吒離城。然有三災禍城當損壞。所謂水火及內反逆。……時行雨大臣於仏出城處為造門樓、名曰喬答摩門、河津階道名喬答摩路。

⑫白法祖訣「仏般泥洹經」（大正01 p.162中）；仏從羅致聚、呼阿難去至巴隣聚。……仏問阿難。誰因此巴隣聚、起城郭者。對曰、摩竭大臣雨舍公図起此城、欲以遏絕越祇。仏言、善哉阿難。雨舍公之賢乃知因此。吾見忉利天上諸神妙天共護此地。其有土地為天上諸神所護持者其地必安且貴。又此地者天之中也。主此四分野之天。名曰仁意。仁意所護者其國久而益勝。必多聖賢智謀之人。余國不及亦無有能壞者。……公即隨仏後視、仏從何城門出、欲名仏所出門為仏城門。所度小溪水名為仏溪。

⑬失訣「般泥洹經」（大正01 p.177下）；前到巴連弗止城外神樹下。……於是仏起到阿衛際、坐一樹下。持神心道眼見上諸天、使賢神守護此地。賢者阿難從燕坐起稽首畢一面住。仏問阿難。誰因此巴連弗起城郭者。對曰。是摩竭大臣雨舍所建、所其欲以遏絕越祇。仏言。善哉善哉。雨舍之賢、乃知因此。吾見忉利諸神妙天共持此地。其有土地為天神所護必安且貴。又此地者。近天之中主此地神、名曰人意。人意所護其國久而益勝。必多聖賢仁智豪俊余國弗及亦莫能壞、此城久久。……仏說已從坐起、出東城門。雨舍追侍曰。當名此門為瞿曇門。仏度津渚又追名之為瞿曇津。

⑭‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上 p.140、Waldschmidt p.134）；世尊はマガダ国を経て、パータリ村と王舎城の中間にある竹園の近くの王の別荘（magadheśu janapadeśu caryām caran antarā ca pāṭaligrāmakaṃ antarā ca rājagrhaṃ rājāgārake rātrīm viharati veṇuyaṣṭikām upaniśṛtya*）にとどまり、そこからパータリ村に行かれた。そのときマガダの大臣・ヴァルシャーカーラ（Varṣākāra）はヴリジ人（Vṛji）の侵攻を防ぐために城を築いていた。世尊は神靈がここに住居を構えつつあるのをみて、「このパータリプトラ市は物資の集散のための最上の都となるだろう（agram bhaviṣyati puṭabhedanānām yad uta pāṭaliputram nagaram）」と予言された。そして世尊の出られた門はガウタマ門（Gautamadvāra）、ガンジスを渡られた渡し場はガウタマの渡し（Gautamatīrtha）と名づけられた。

[B] 仏伝經典

⑪仏讚（大正04 p.041中）；發於王舍城 託巴連弗邑 到已住於彼 娑吒利支提 彼是摩竭提 辺邑附庸國 国主婆羅門 多聞明經典 贈相土安危 国之仰觀師 摩竭王遣使 勅告彼仰觀 命起於牢城 以備於強鄰 世尊記彼地 天神所保持 於中起城郭 永固不危亡 仰觀心歡喜 共養仏法僧

⑫BC. (22-04)；神々がそ〔の都城〕に自らの財宝を運んでくるのをごらんになって、この都城は世の中で傑出したものとなろう、と如来（ブッダ）はおっしゃった。

[C] 後世の仏伝資料

⑬Bigandet. (vol. II p.004, 赤沼 p.341)；世尊は菴婆羅致村（Ampaladaka）から那蘭陀（Nalanda）の大村に入り給うた。……巴連邑（Patalibot）に向い給うた。……このことを預告して仏陀はこの村が大きな市となって、沢山の市の中でも殊に名高くなつて、闍浮提の諸国から多くの商人が群り集まるであろうと宣うた。

【63】ナーディカ村の人々への授記

ガンジス河を渡って、ナーディカ村（Nādika）に赴いた釈尊は、そこで死んだ人々の死後を記別し、「法鏡經」を説く。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.091) ; 世尊はガンジスを渡ってから、コーティ村 (Kotigāma) に立ち寄られ、ナーディカ (Nādika) に着かれて、レンガ堂 (Giñjakāvasatha) に住された。そこでナーディカ村で死んだ人たちの死後を記別され、「法鏡経 (Dhammādāsa nāma dhammapariyāya)」を説かれた。
- ②DN.018 ‘Janavasabha-s.’ (闍尼沙経 vol. II p.200) ; ある時世尊はナーディカ (Nādika) のレンガ堂 (Giñjakāvasatha) に住されていた。そのとき世尊はカーシ (Kāsi) ・コーサラ (Ko-sala) ・ヴァッジ (Vajji) ・マッラ (Malla) ・チエーティ (Ceti) ・ヴァンサ (Vamsa) ・クル (Kuru) ・パンチャーラ (Pañcāla) ・マッチャ (Maccha) ・スーラセーナ (Sūrasena) 等の国々の信者 (paricāraka) たちの死後を記別された。
- ③SN.055-008, 009, 010 (vol. V p.356, 358) ; ある時世尊はナーディカ (Nādika) のレンガ堂 (Giñjakāvasatha) に住されていた。そのとき世尊はサールハ (Sālha) やアソーカ (Asoka) ・カッカタ (Kakkata) などの死後を記別した。
- ④Vinaya ‘bhesajjakkhandhaka’ (vol. I p.230) ; アンバパリーは世尊がコーティガーマ (Kotigāma) におられるのを聞いて、ヴェーサーリーから会いに行き、食事に招待した。ヴェーサーリーのリッチャヴィ族の人々はそれを譲ってくれと言った。しかし譲らなかった。世尊はコーティガーマに随意の間住して後、ニヤーティカ (Ñātikā) 村に行かれ、レンガ堂に住された。アンバパリーは食事を供養し、菴婆婆梨園を仏を上首とする比丘らに寄進した。それから世尊は大林・重閣講堂に住された。
- ⑤長阿含002「遊行経」(大正01 p.013上) ; 爾時世尊於拘利村隨宜住已、告阿難俱詣那陀村。阿難受教即著衣持鉢、與大衆俱侍從世尊路由跋祇到那陀村、止犍椎廻。……仏告阿難、伽伽羅等十二人斷五下分結、命終生天、於彼即般涅槃、不復還此。五十人命終者……。仏告阿難。今當為汝說於「法鏡」使聖弟子知所生處、三惡道盡得須陀洹、不過七生、必盡苦際。亦能為他說如是事……。
- ⑥長阿含004「闍尼沙経」(大正01 p.034中) ; 一時。仏遊那提犍稚住處與大比丘衆千二百五十人俱。爾時……鷲伽國・摩竭國・迦尸國・居薩羅國・拔祇國・末羅國・支提國・拔沙國・居樓國・般闍羅國・頗漂波國・阿般提國・婆蹉國・蘇羅婆國・乾陀羅國・劍洴沙國、彼十六大国有命終者仏悉記之。
- ⑦雜阿含854 (大正02 p.217中) ; 一時仏住那梨迦聚落繁耆迦精舍。爾時……仏告諸比丘。彼罽迦舍等已斷五下分結得阿那含、於天上般涅槃不復還生此世。
- ⑧雜阿含1037 (大正02 p.270下) ; 一時仏住那梨聚落曲谷精舍。爾時耶輸長者疾病困篤、如是乃至得阿那含果記。如達摩提那修多羅廣説。
- ⑨根本有部律「藥事」(大正24 p.026中) ; 世尊は阿難を連れて那地迦聚落に行かれた。そこでは災疫があり、多くの人が死んだ。「仏告諸苾芻。彼滌目鄖波索迦断五下分結已、即受化生於此涅槃證不還果。於此世中得不退転法。余鄖波索迦等亦復如是」と記別され、また「法鏡経」を説かれた。
- ⑩根本有部律「雜事」(大正24 p.385中) ; 我今欲往販葦聚落村外林中。白言。世尊、如是應去既至彼已。時彼聚落人遭疫癘。……仏言。苾芻。於此村中有二百五十諸鄖波索迦断五下分結、從此命過得化生身、於彼涅槃更不退転、證不還果不復更來。汝等苾芻。復有三百余人鄖波索迦……。我今復為汝等説「法鏡経」、應可諦聽善思念之。云何法鏡。謂仏法僧聖清淨戒……。
- ⑪白法祖訣「仏般泥洹経」(大正01 p.163上) ; 仏復從拘隣聚呼阿難、俱至喜豫國。阿難言諾。仏與諸比丘俱至喜豫國犍提樹下坐。……仏言玄鳥等十人死皆在不還道中。仏告諸比丘僧、若曹但見十人死、仏持天眼見。見優婆塞死者五百人……。

- ⑪失訣「般泥洹經」（大正01 p.178中）；（拘利邑を経て）仏與阿難俱到喜豫邑、止河水辺犍祇樹下。……仏告諸比丘。此十人者已斷自然魂神、上生十八天上到不還地、不復來下受世間法。又是國死非但此也。仏天眼見五百清信士……。
- ⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上 p.198、Waldschmidt p.160）；世尊はガンジスを渡つてから、クティ村（Kutigrāma）に立ち寄られ、ナーディカ一村（Nādikā）に着かれて、クンジカ一休息所（Kuñjikāvasatha）に住された。そこでナーディカ一村で死んだ人たちの死後を記別され、「法の鏡という名の法門（Dharmādarśa nāma dharmaparyāya）」を説かれた。

[B] 仏伝經典

- ⑪仏讚（大正04 p.041中）；如來復前行 至彼鳩梨村 說法多所化 復至那提村 人民多疫死 親戚悉來問 諸親疫死者 命終生何所 仏善知業報 悉隨問記説
- ⑫BC. (22-13・14)；それから、ガンジス河の岸からブッダはクティ村へ赴かれ、そこで法話をなさった後、ナーディカ一村へ赴かれた。折しもそのとき、そ〔の村〕では多くの死人が出ていた。どうして何処へだれが生まれ変わるのかを、そこで彼ら（その村の住人）に対して牟尼はお説きになった。

[C] 後世の仏伝資料

- ⑥Bigandet. (vol. II p.007, 赤沼 p.345)；（拘利村 Kantikamaから）更に進んで那地迦（Nadika）の村に入り給うた。……「世尊は遮樓（Thamula）比丘は欲情を征服して涅槃に入り難陀（Anaunda）比丘尼は梵天界に生れて、涅槃に入り、この世界に帰らない」と宣うた。

【64】アンバパリーの帰依

釈尊はヴェサーリー（Vesālī）の郊外のアンバパリー（Ambapālivana）園で娼婦・アンバパリー（Ambapāli-gaṇikā）の食事の招待を受ける。リッチャヴィ（Licchavi）族の貴族たちは釈尊招待の権利を譲ることを要求するが、アンバパリーは拒否する。（このとき園林を寄進したとするものもある）

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’（vol. II p.094）；ナーディカからヴェーサーリーに着かれた世尊は、娼婦アンバパリー（Ambapāli-gaṇikā）の食事の招待を受けられた。アンバパリーはリッチャヴィ族の人々が食事を招待する権利を譲れとの要求を拒否し、自からの園林を仏を上首とする比丘サンガに（Buddha-pamukhassa bhikkhusamghassa）寄進した。
- ②Vinaya ‘bhesajjakkhandhaka’（vol. I p.231）；（最後の遊行の途次に）娼婦アンバパリー（Ambapāli gaṇikā）は釈尊を食事に招待した後、自からの園林を仏を上首とする比丘サンガに（buddhapamukhassa bhikkhusamghassa）寄進した。
- ③長阿含002「遊行經」（大正01 p.014中）；（最後の遊行の途次に）淫女菴婆婆梨は釈尊を食事に招待した後、自からの園林を仏を首とする招提僧に寄進した。
- ④雜阿含623（大正02 p.174上）；一時仏在跋祇人間遊行、到驛舍離國菴羅園中住。爾時菴羅女聞世尊跋祇人間遊行至菴羅園中住、即自莊嚴乘車出驛舍離城、詣世尊所恭敬供養……。
- ⑤增一阿含20-11（大正02 p.596上）；（最後の遊行の途次か？）闍菴婆婆利女は釈尊を食事に招待した後、自からの園林を如来および比丘僧に寄進した。
- ⑥四分律「衣犍度」（大正22 p.855下）；世尊は婆闍國から遊行して毘舍離にやって来られた。そ

の時菴婆羅婆提は自からの園林を仏および四方僧に寄進した。

⑧五分律「衣法」（大正22 p.135中）；世尊は跋耆国から遊行して毘舍離にやって来られた。その時淫女阿范和利は自からの園林を僧に寄進した。

⑪根本有部律「藥事」（大正24 p.026下）；菴波羅波利夫人は世尊が那稚迦聚落におられるのを知つて、食事に招待した。

⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.385下）；仏告具寿阿難陀曰。我今欲往廣嚴城、汝可告諸大衆。時阿難陀言。如是世尊。仏及僧衆漸至城所住菴波羅林。時此城中有一女人（旧云奈女者非）顏容端正衆所知識名菴波羅。是此林主。……爾時世尊復為菴波羅女隨機說法示教利喜已。

⑫白法祖訣「仏般泥洹經」（大正01 p.163中）；「仏從喜豫聚呼阿難、至維耶梨國。阿難言諾。仏從喜豫聚至維耶梨國。未至七里、仏止棕園中。有姪女人字棕女。」姪女・棕女は釈尊と比丘らを食事に招待して受けられた。すぐ後に維耶離の豪姓諸理家がやって来て、食事を招待する権利を譲れと要求したが奈女は拒否した。

⑬失訣「般泥洹經」（大正01 p.178下）；「彼時仏請賢者阿難俱之維耶離國。即受教行。仏樂拘利歷城中去、到止城外故望女奈氏園。奈女聞仏從諸弟子自越祇來。」奈女は釈尊と比丘らを食事に招待して受けられた。すぐ後に維耶離の豪姓諸離車がやって来て、食事を招待する権利を譲れと要求したが奈女は拒否した。

⑭‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上 p.225、Waldschmidt p.172）；ナーディカーからヴァイシャーリー（Vaiśāli）に着かれた世尊は、娼婦アームラパリー（Āmrapāli-gaṇikā）の食事の招待を受けられた。アームラパリーはリッチャヴィ族の人々が食事を招待する権利を譲れとの要求を拒否した。

*④雜阿含623、白法祖訣「仏般泥洹經」（大正01 p.163中）、失訣「般泥洹經」（大正01 p.178下）、

⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.385下）には園林の寄進記事はない。

[B] 仏伝經典

⑤中本（大正04 p.161中）；仏從迦維羅衛國、與千二百五十比丘俱、過拔耆國界度人民。去至維耶離、詣奈氏樹園。城中有女人、名阿凡和利。聞仏來化、歡喜無量、即便嚴出、與五百女人俱。……女聞仏言、心解欲止、便發道意、自歸三尊。（明日の食事に請待し、仏受け入れる。その後、城中の長者子五百人が請待するも先請ありとして受けず。長者子は市を閉じ、城門を閉じる等の妨害をするも果たさず。）仏坐飯竟、……為説經法。五百長者子、阿凡和利、及五百女人、逮得法眼。

⑥仏讚（大正04 p.041下）；前至鞞舍離 住於菴羅林 彼菴摩羅女 承仏詣其園 …… 彼菴摩羅女 漸至世尊前 見仏坐樹下 禅定靜思惟 念仏大悲心 哀受我樹林 …… 爾時鞞舍離 諸離車長者 聞世尊入國 住菴摩羅園 有乘素車輿 素蓋素衣服 青赤黃綠色 其衆各異儀 導從翼前後 爭塗競路前 天冠袞花服 宝飾以莊嚴 威容盛明曜 增暉彼園林 除捨五威儀 下車而步進 息慢而形恭 頂禮於仏足 …… 請仏及大衆 明日設薄供 仏告諸離車 菴摩羅已請 離車懷感愧 彼何奪我利 知仏心平等 而起隨喜心

⑦BC. (22-15)；そこ（ナーディカー村）に一夜を過ごされた後、〔ブッダは〕ヴァイシャーリーの都へ赴かれた。それから、アームラパリーの土地である吉祥なる園林へと誉れのかたまりなるひと（ブッダ）は赴かれた。女性の第一人者アームラパリーは、導師（ブッダ）がそこに〔来られたのを〕耳にして、最高の馬をしつらえた馬車に乗って喜びいさんでやって来た。……如来の法話によって〔彼女は〕欲望の本性を持つ心を捨て、女であることを蔑み、〔感官の〕対象に背を向け、自らの生業を不淨のものと考えたのである。

⑧行經（大正04 p.091上）；仏與弟子衆 乃至捺女林 捺女聞之已 馳出往見仏 …… 如是禮仏

足 …… 前白世尊言 …… 明旦受我請 …… 默然受其請 …… 嚙惡女人形 懷慚且還帰
時仏許奈女 受請去之後 維耶離貴賤 皆來至仏所 …… 是輩亦請仏 仏言已受請 仏許奈
女請 是輩皆懷恨 時仏為是等 広説微妙法

[C] 後世の仏伝資料

⑥Bigandet. (vol. II p.007, 赤沼 p.345) ; 時に吠舍羅 (Wethalie) 国に菴婆波利 (Apopalika) と称する名高き娼婦があった。菴婆波利は、櫟樹の繁れる大きな快しい森に近い美しい場所に住っていた。……教えをきいて大に感動して、世尊と御弟子達とを翌日自第に招待……（王子達の招待を斥ける。）……菴婆波利はこの林を世尊に献上し……。

【65】竹林村で最後の雨安居を過ごす

釈尊はヴェーサーリーの近郊の竹林村 (Veluvagāmaka) で最後の雨安居に入り、80歳となり、老い衰えたと慨嘆される。

[A] 原始聖典

①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.098) ; 世尊はアンババーリー園から竹林村 (Veluvagāmaka) に移られ、そこで雨安居を過ごされた。そのとき病にかかりて、自分は年老い80歳となった (aham kho pana etarahi jinno vuddho mahallako addha-gato vayo anuppatto, asi-tiko me vayo vattati) と慨嘆された。

②長阿含002「遊行経」(大正01 p.014下) ; 爾時世尊於毘舍離、隨宜住已。告阿難言。汝等皆嚴。吾欲詣竹林叢。對曰。唯然。即嚴衣鉢與大衆侍從世尊、路由跋祇至彼竹林。……此土飢饉、乞求難得。汝等宜各分部、隨所知識、詣毘舍離及越祇國於彼安居、可以無乏。吾獨與阿難於此安居。……吾已老矣年粗八十。譬如故車方便修治得有所至、吾身亦然。以方便力得少留壽。

⑩根本有部律「波羅市迦004」(大正23 p.675中) ; 爾時世尊未入涅槃安住於世與諸弟子二時大集。一謂五月十五日欲安居時。二謂八月十五日隨意了時。若前安居者受教勅已往詣城邑村坊聚落。而作安居至隨意了皆來集會。隨所證獲皆悉自知、其未證者請求證法。近薜舍離安居苾芻三月既滿作衣已竟。顏色憔悴形容羸瘦執持衣鉢往竹林村。

⑪根本有部律「藥事」(大正24 p.029下) ; 爾時世尊告阿難陀。汝可隨我往竹林聚落。答曰。唯然世尊。爾時世尊遊行薜利支人間至竹林聚落北、昇攝波樹林中住。于時其國飢饉。極至困弊。乞食難得。爾時世尊告諸苾芻。時世飢儉、乞食難得。汝諸苾芻。如飢儉經廣説、亦如道品伝來經、六集經及大涅槃經等法行。

⑫根本有部律「雜事」(大正24 p.387上) ; 我今欲往竹林中汝可告諸大衆。時阿難陀如仏所教即與大衆隨仏至竹林北住升攝波林。時屬飢儉乞求難得。仏告諸苾芻。今時飢儉、汝等宜可求同意者於薜舍離諸方聚落隨便安居、我與阿難陀於此處住。……我今衰邁身力羸弱年將八十、唯依二事而得存住、如朽破車亦依二事。

⑬白法祖訣「仏般泥洹經」(大正01 p.164中) ; 仏從維耶梨國出、告阿難。寧可俱至竹芳聚。阿難言諾。又聞竹芳聚米穀大貴、諸比丘求分衛難得。仏坐思惟。維耶梨國飢饉穀糴騰貴。其聚狹小、不能供諸比丘分衛……。今我身皆痛、我持仏威神、治病不復。持心思病如小差狀。仏語阿難。今仏年已尊、且八十。如故車無堅強、我身體如此無堅強。

⑭失訣「般泥洹經」(大正01 p.180上) ; 仏請賢者阿難俱至竹芳邑、止城北林樹下。是歲竹芳邑飢饉穀糴騰貴。仏告諸比丘。是間飢饉、乞求難得。汝等宜分部行、別到維耶及越祇諸隣邑、可以無乏。……我亦已老、年且八十。形如故車無牢無強。

- ⑫ ‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’ (中村・上 p.285、Waldschmidt p.192) ; 世尊はアームラパリー園から竹林村 (Veṇugrāma) に移られ、そこで雨安居を過ごされた。そのとき病にかかりて、自分は年老い80歳となった (tathāgato vrddho jīrṇatām prāpto śītike vayasi vartate) と慨嘆された。

[B] 仏伝經典

- ⑪ 仏讚 (大正04 p.43下) ; 往詣毘紐村 於彼夏安居 三月安居竟 復還舎離
⑫ BC. (23-62・63) ; その夜が過ぎて、〔翌朝〕アームラパリーは〔世尊たちを〕尊敬してもてなした。〔それから、世尊は〕ヴェーヌ村 (竹林村) へ赴かれ、〔夏安居 (雨期の三ヶ月の修行) をそこで過ごされた〕。〔三ヶ月の〕夏安居を過ごされて、ヴァイシャーリーへ行かれ、猿沢の池の岸に大牟尼 (ブッダ) はとどまられた。

[C] 後世の仏伝資料

- ⑥ Bigandet. (vol. II p.008, 赤沼 p.346) ; この場所に暫らく留まり給うた後、世尊は竹芳 (Weluwa) の村にいたり、第四十五の最後の雨期を過ごし給うた。……「……私は今や非常に老いた。八十になった。……我が弟子は、我が教法の続く限り自らに頼り、法に歸依せねばならぬ。……」

【66】入滅を決心する

悪魔波旬が早く入滅せよと迫り、釈尊は3ヶ月後に般涅槃することを決心する。阿難に自帰依、法帰依を説き、重閣講堂に比丘らを集めさせて入滅することを宣言する。

[A] 原始聖典

- ① DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.102) ; 世尊はヴェーサーリーのチャーパーラ廟 (Cāpāla cetiya) において、悪魔パーピマントに「今から三ヶ月後に般涅槃する (ito tiṇṇam māsānam accayena parinibbāyissati) 」と宣言された。そして阿難にもこれを伝え、ヴェーサーリーの重閣講堂に比丘らを集めて「諸行は壞れるものである。不放逸によって精進せよ (vaya-dhammā saṅkhārā, appamādena sampādetha) 」と説法され、比丘らにも3ヶ月後に涅槃に入ることを宣言された。
② SN.51-10 (vol. V p.262) ; 世尊は悪魔パーピマントに「今から三ヶ月後に般涅槃する (ito tiṇṇam māsānam accayena parinibbāyissati) 」と宣言された。
③ AN.08-70 (vol. IV p.311) ; 世尊は悪魔パーピマントに「今から三ヶ月後に般涅槃する (ito tiṇṇam māsānam accayena parinibbāyissati) 」と宣言された。
④ ‘Udāna’ 06-01 (p.064) ; 世尊は悪魔パーピマントに「今から三ヶ月後に般涅槃する (ito tiṇṇam māsānam accayena parinibbāyissati) 」と宣言された。
⑤ 長阿含002「遊行經」(大正01 p.015中) ; 「仏告阿難、俱至遮婆羅塔。対曰。唯然。如來即起著衣持鉢詣一樹下。告阿難。敷座。吾患背痛、欲於此止。」……「止、止、波旬、仏自知時不久住也。是後三月、於本生處拘尸那竭娑羅園双樹間、當取滅度。」そして講堂に比丘らを集めさせて、「如來不久、是後三月當般泥洹」と宣言された。
⑥ 中阿含036「未曾有經」(大正01 p.477下) ; 若如來不久過三月已當般涅槃。由是之故令地大動。地大動時四面大風起、四方彗星出、屋舍牆壁皆崩壞尽。是謂第三因緣令地大動。
⑦ 増一阿含51-01 (大正02 p.821中) ; 爾時大愛道聞諸比丘說如來不久當取滅度不過三月當在拘夷

那竭娑羅双樹間。

- ⑩僧祇律「雜誦跋渠」（大正22 p.489下）；爾時阿闍世王韋提希子與毘舍離有怨如大泥洹經中廣說。乃至世尊在毘舍離於放弓杖塔邊捨壽、向拘尸那城熙連禪河側力士生地堅固林中雙樹間般泥洹。於天冠塔邊闍維乃至諸天使火不然。待尊者大迦葉故。
- ⑪根本有部律「藥事」（大正24 p.031中）；爾時世尊告具壽阿難陀曰。我今與汝往拘尸那城。答言。唯然。既漸次行於其中路有梵婆城、不入此城。便即往彼拘尸那國。到彼國已。爾時世尊指娑羅雙樹。告阿難曰。我當不久於彼林下入般涅槃。
- ⑫根本有部律「雜事」（大正24 p.387中）；是故當知。於我現在及我滅後、汝等自為洲渚自為歸依、法為洲渚法為歸依、無別洲渚無別歸依。……時阿難陀聞佛教已、即隨佛後至廣嚴城住重閣堂。於小食時著衣持鉢入城乞食。時阿難陀隨佛而去、次第乞已還至本處。飯食訖取衣鉢澡漱畢洗足已。佛即往詣取弓制底樹下而坐、告阿難陀曰。此廣嚴城物產華麗芳林果樹在處敷榮。塔廟清池甚可愛樂。瞻部洲內此最希奇。……佛告魔曰。汝且少待、如來不久却後三月入無余依大泥槃界。……汝今可往取弓塔邊側近苾芻皆令普集常食堂中。時阿難陀即往遍告、衆既集已。……佛從座起至其堂內就座而坐告諸苾芻。汝等觀察、諸行無常、是變易法、不可委信、深可厭捨而求解脫……。
- ⑬白法祖訣「佛般泥洹經」（大正01 p.164下）；佛從竹芳聚、呼阿難。且復還至維耶梨國。阿難言受教。佛還維耶梨國入城持鉢行分衛。還止急疾神樹下露坐。……阿難即起、語諸比丘僧、佛却後三月當般泥洹。
- ⑭失訣「般泥洹經」（大正01 p.180中）；佛請賢者阿難俱至維耶離。受教即行、既到止猿猴館。……魔曰、可足時已畢矣。佛言汝默、如來不久、是後三月當取泥洹。……佛告諸比丘。世間無常、無有牢固、皆當離散。……佛後三月、當般泥洹、勿怪勿憂。……彼時佛勅賢者阿難請維耶離國猗行比丘。受教即請。悉曾講堂、稽首畢一面住。佛告諸比丘。世間無常無有牢固、皆當離散。無常在者心識所行但為自欺。恩愛合會其誰得久。天地須彌尚有崩壞。況于人物。而欲長存生死憂苦。可厭已矣。佛後三月當般泥洹、勿怪勿憂。
- ⑮法顯訣「大般涅槃經」（大正01 p.191中）；吾今當往遮波羅支提入定思惟。作此言已。即與阿難俱往彼處既至彼處。……却後三月當般涅槃。是時魔王、聞佛此語、歡喜踊躍還歸天宮。……爾時世尊告阿難言。汝今可語此大林中重閣講堂。諸比丘衆皆悉令往大集講堂。阿難奉勅。……比丘、一切諸法皆悉無常、身命危脆猶如驚電。汝等不應生於放逸。汝等當知、如來不久、却後三月、當般涅槃。
- ⑯‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上 p.298、Waldschmidt p.202）；世尊はヴァイシャーリーのチャーパーラ靈樹（Cāpāla caitya）において、惡魔・惡しき者に「今や久しうからずして、三ヶ月後に般涅槃する（na cirasyedānīm tathāgatasya trayāñām māsānām atyayād anupadhiśeṣe nirvāṇadhātau parinirvāṇām bhaviṣyai）」と宣言された。そして阿難にもこれを伝え、ヴァイシャーリーの会堂（upasthāna-sālā）に比丘らを集めて「一切の作られたものは無常であり、諸の法を受持し、完成し、保ち、理解し、説くことなさい」と説法された。

[B] 仏伝經典

- ①僧伽（大正04 p.142下）；世尊亦捨壽命。……是時尊者阿難、清旦從座起、往詣世尊所。……阿難白佛言、今日世尊亦捨壽命耶。世尊報曰、如是阿難、我亦捨壽命。
- ②佛讚（大正04 p.043下）；往詣毘舍離村 於彼夏安居 三月安居竟 復還鞞舍離 …… 以感魔波旬 来詣於佛所 合掌勸請言 昔尼連禪側 …… 今所作已作 当遂於本心 時佛告波旬 滅度時不遠 却後三月滿 当入於涅槃
- ③BC. (23-64)；マーラ（魔）がその森に現れて、近づいて来て言った。（ナランジャナー河の岸での以前のやり取り）それから、以上の〔マーラの〕言葉をお聞きになって、「三ヶ月経て

ば涅槃に入ろう。おどおど心配するな」と阿羅漢たちの最高者（ブッダ）はおっしゃった。

⑬行經（大正04 p.095下）；欲界塵勞王 厥号名弊魔 率來至仏所 便說是言辭 維仏往昔坐 尼連禪水辺 …… 時仏天中天 梵音告魔王 今魔當懷喜 必無復憂患 今却後不久 三月當捨壽

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.054下）；爾時世尊於忉利天……至三月盡將欲還下、命鳩摩羅。汝今可下至閻浮提語言、如來不久當入涅槃。
- ③氏譜（大正50 p.093下）；長阿含云。佛在毘舍離與阿難獨居。後夏舉體皆痛、告阿難。……阿難為魔所蔽不悟佛意。魔請佛言願入涅槃、乃至三請告言。是後三月於本生處、拘尸那竭婆羅園雙樹間當取滅度。
- ④統紀（大正49 p.163中）；五十二年（辛未）冬十一月既望。佛在毘舍離國大林精舍重閣講堂、告諸比丘。却後三月我當般涅槃。
- ⑤JM. (p.035, 番中 p.152) ; マーガ星宿に満月が宿るマーガ月の満月の日に (*Maghapuṇṇamiyam Māghanakkhatteṇa*) 「今から3ヶ月後に如来は般涅槃するであろう」とパーヴァーラ・チエティヤ (*Pāvāla-cetiya*) にいる時に知り、寿行を放棄したのであった。
- ⑥Bigandet. (vol. II p.031, 赤沼 p.373) ; 阿難よ、私が仏陀となつて間もなく、尼連禪河の岸の優留毘羅の幽居にあった時、悪魔が私の前に顯れて涅槃に入れとすすめた事がある。……処が今遮和羅の祠近く悪魔は再び顯れて、私に向い同じいことを願うた。「悪魔よ、心配するな、今より三月後には涅槃に入るであろう」と私は彼に曰った。

【67】ボーガ城における説法

ヴェーサーリーからボーガ城（Bhoganagara）に到着した釈尊は、比丘らに四大教法を説く。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.122) ; 世尊はヴェーサーリーから、バンダ村 (*Bhaṇḍagāma*) ・ハッティ村 (*Hatthigāma*) ・アンバ村 (*Ambagāma*) ・ジャンブ村 (*Jambugāma*) を経由してボーガ城（Bhoganagara）に着かれ、アーナンダ廟（Ānanda cetiya）に住された。ここで世尊は比丘たちに4大教法 (*cattāro mahāpadesā*) を説かれた。
- ②AN.04-180 (vol. II p.167) ; 世尊はボーガ城のアーナンダ廟に住されていた。そのとき4大教法 (*cattāro mahāpadesā*) を説かれた。
- ③長阿含002「遊行經」（大正01 p.017中）；爾時世尊於菴婆羅村隨宜住已、佛告阿難。汝等皆嚴、當詣瞻婆村・撻茶村・婆梨婆村及詣負彌城。對曰。唯然。即嚴衣鉢與諸大衆侍從世尊、路由跋祇漸至他城於負彌城北止尸舍婆林。佛告諸比丘。當與汝等說四大教法、諦聽、諦聽、善思念之……。
- ④根本有部律「雜事」（大正24 p.389上）；如是次第經過十余聚落皆為衆生隨機説法。至受用城北林而住。于時大地悉皆振動、四維上下煙焰洞然、日月無光流星墮落。
- ⑤白法祖訣「仏般泥洹經」（大正01 p.164下）；世尊は維耶梨國から華氏郷土を経て、夫延城に着かれた。城北の樹下に坐され、比丘たちに4大教法を説かれた。
- ⑥失訣「般泥洹經」（大正01 p.182下）；善淨邑にて比丘らに法句經を説かれた。
- ⑦法顯訣「大般涅槃經」（大正01 p.195中）；世尊は毘耶離から象村・菴婆羅村・閻浮提村をへて善伽城に着かれた。その時世尊は4決定説を説かれた。
- ⑧‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’ (中村・上 p366, Waldschmidt p.228) ; 世尊はヴァイシャーリーからクシタ村 (*Kuṣṭhagrāmaka*) 、ガンダ村 (*Gandagrāmaka*) 、ドローナ村 (*Dronagrāmaka*) 、

シュールパ村 (*Sūrpagrāmaka*)、アームラ村 (*Āmragrāmaka*)、ジャンブ村 (*Jambugrāmaka*)、
ハスティ村 (*Hastigrāmaka*) を経てボーガ市 (*Bhoganagaraka*) に到着し、理法 (dharma) と
戒律 (vinaya) について説法された。

[B] 仏伝經典

- ⑪仏讚 (大正04 p.045下) ; 是吾之最後 遊此鞞舍離 往力士生地 当入於涅槃 漸次第遊行 至彼蒲加城 安住堅固林 教誡諸比丘 吾今以中夜 当入於涅槃
- ⑫BC. (25-36~40) ; それから、順次、導師 (ブッダ) はボーガ市へ赴かれ、そこにとどまられた一切知者 (ブッダ) は、比丘たちにおっしゃられた。「今しも私が逝った後は、教え (法) を最高のものとして依れ。それ (教え) こそが汝 [ら] の最高目的である。それ以外のものは徒勞である。經典の中にも入っておらず、戒律の中にもあらわれていないものは、〔私の〕論理と個々に矛盾する。それを決して保持してはならない。それは教え (法) ではなく、律ではなく、私の言葉ではない。多くの人の言葉であったとしても、その暗黒の教えは捨てられるべきである。清浄な教えは保持されるべきであり、そこにおいて顛倒のことのない、それこそが教え (法) であり、律である。それこそが私の言葉である。
- ⑬行經 (大正04 p.103上) ; 仏以入無為 滅身諸苦痛 與無著弟子 出妙維耶離 行歷諸村落 安詳以次第 覚悟衆生類 顯露宿善行 度脫無央數 令服甘露味 次至成有城 力士所生土 與諸弟子俱 止宿其土界

[C] 後世の仏伝資料

- ⑥Bigandet. (vol. II p.035, 赤沼 p.378) ; 佛陀はブハンダ・ガーマ (Pantoogama) に着き給うた。つづいて、ハツトヒ (Hatti)、ジャムブゥ (Tsampou)、アンバ (Appara) の村々を過ぎて、負伽 (Bauga) の市に入り給うた。この市に於て、四大教法を説き給うた。

【68】 チュンダの供養

ボーガ城からパーヴァー (Pāvā) に到着した釈尊は、鍛冶工のチュンダ (Cunda) が供養したスーカラ・マッダヴァ (sūkaramaddava) を食し、激しい腹痛に襲われる。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.098) ; 世尊はボーガ城からパーヴァー (Pāvā) に至られ、鍛冶屋の子であるチュンダ (Cunda) のアンバ園 (ambavana) に住された。そこでチュンダの供養したスーカラマッダヴァ (sūkaramaddava) を食され、死に近き病気 (ābādha māraṇantika) にかかられた。
- ① ‘Udāna’ 08-05 (p.081) ; 世尊はマッラ国 (Malla) に遊行し、パーヴァー (Pāvā) に至られ、チュンダ (Cunda) のアンバ園 (ambavana) に住された。そこでチュンダの供養したスーカラマッダヴァを食され、死に近き病気にかかられた。
- ① ‘Suttanipāta’ Vs.083~090 (p.016) ; 世尊はチュンダに4種の沙門 (caturo samanā) について説かれた。
- ②長阿含002「遊行經」 (大正01 p.018上) ; 爾時世尊於負彌城隨宜住已、告賢者阿難、俱詣波婆城。對曰。唯然。即嚴衣鉢與諸大衆侍從世尊、路由末羅至波婆城闍頭園中。時有工師子名曰周那……。爾時周那取一小座於佛前坐、漸為説法、示教利喜已。大衆聞遠侍從而還。中路止一樹下、告阿難言。吾患背痛、汝可敷座……。

- ⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.389上）；（広巖城－重患村－十余聚落－城北林－）我今欲往波波聚落（波波此云罪惡）。答曰。如是世尊是時欲往俱尸那城壯士生地漸至波波邑。依折鹿迦林而住。……時此衆中有鍛師之子名曰准陀。亦坐聽法……。
- ⑫白法祖訣「仏般泥洹經」（大正01 p.167下）；仏與比丘僧從夫延國至波旬國、止禪頭國中。波旬國人民名諸華。諸華人民聞仏來止禪頭國中。皆來出前、為仏作禮皆却坐。仏皆為說經。時有一人名淳。淳父字華氏。華氏子時在坐中……。仏去淳家呼阿難、去至鳩夷那竭國。阿難言諾。即與比丘僧從華氏國至鳩夷那竭國。仏道得病、下道止坐。
- ⑬失訣「般泥洹經」（大正01 p.180中）；世尊は維耶から拘利邑・健持邑・掩満邑・出金邑・授手邑・華氏邑・善淨邑を経て波旬国に行き、夫延歴城外の禪頭園中にとどまられた。その時波旬の豪姓の諸華氏が世尊に会いにやって来たが、その中の淳の食事の招待を受けられた後、病気になられた。
- ⑭法顯訣「大般涅槃經」（大正01 p.196下）；世尊は善伽城から鳩娑村を経て波波城に着かれた。城中に工巧子あって淳陀と名づけるものがいた。食後鳩尸那城に行かれる途中大苦痛を生じられた。
- ⑮‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・上 p400、Waldschmidt p.252）；世尊はマッラ族の村（Malla）に遊行し、パーパー村（Pāpāgrāmaka）に至られ、鍛冶工のチュンダ（Cunda karmāraputra）の供養した食を食され、病気にかかられた。
- *⑯‘Suttanipāta’ Vs.083～090；Cundasuttaと呼ばれるこの經は、このときの釈尊の説法であると考えられている。

[B] 仏伝經典

- ①仏讚（大正04 p.046中）；時有長者子 其名曰純陀 請仏至其舍 供設最後飯
②BC. (25-51)；それから彼（ブッダ）を敬う善者チュンダの家において、世尊は食事をなさった。彼（チュンダ）のために〔そうなさったの〕であって、ブッダ自身のためにではない。

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.070上）；爾時會中有優婆塞、是拘尸城工巧之子、名曰純陀……白仏言。唯願世尊、及比丘僧、哀受我等、最後供養。
②Bigandet. (vol. II p.035, 赤沼 p.378)；率いて波波（Pawa）城に赴き、富裕なる鍛工の子淳陀（Tsonda）の建立した櫟樹林の精舎に入り給うた。……世尊は自ら小豚の肉と米とを取りて食し給い……。

【69】スバッダの帰仏

スバッダ（Subhadda）がクシナーラ（Kusinārā）の沙羅双樹の間に臥す釈尊を訪ね、最後の弟子となる。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.153)；クシナーラ（Kusinārā）の沙羅双樹の間で（antarena yamakasālānam）、世尊は阿難に命じてスバッダ（Subhadda）を出家させた。スバッダはもう一人の阿羅漢となった（Aññataro kho pan' āyasmā Subhaddo arahantam ahosi）。彼が世尊の最後の直弟子であった（So Bhagavato pacchimo sakkhi-sāvako ahosi）。
- ②‘Apadāna’ 03-05-049 (p.100)；（スバッダのアパダーナ）サーラの森の最後の床に（pac-

chime sayane) 向かわれた聖者は、私を出家させたもうた (pabbājesi)。

- ②長阿含002「遊行経」(大正01 p.025上)；是時、拘尸城内、有一梵志。名曰須跋、年百二十耆旧多智。……於是須跋即於其夜、出家受戒、淨修梵行、於現法中自身作證、生死已盡、梵行已立、所作已辦、得如實智、更不受有。時夜未久即成羅漢。是為如來最後弟子。
- ④雜阿含979(大正02 p.254上)；時俱夷那竭国有須跋陀羅外道出家、百二十歲年耆根熟。……時尊者須跋陀羅得阿羅漢、解脫樂覺知已作是念。我不忍見仏般涅槃、我當先般涅槃。時尊者須跋陀羅先般涅槃已。然後世尊般涅槃。
- ⑤別訳雜阿含110(大正02 p.413上)；一時仏在拘尸那竭力士生地娑羅林中。爾時如來涅槃時到告阿難曰。汝可為我於雙樹間北首敷座。於時阿難受仏勅已於雙樹間北首敷座。既敷座已還至仏所、頂禮佛足在一面坐。白仏言。世尊。我於雙樹間北首敷座所作已竟。爾時世尊即從坐起往趣雙樹敷上北首右脇而臥足足相累、繫心在明、起於念覺先作涅槃想。爾時拘尸那竭國有一梵志。名須跋陀羅。先住彼國其年朽邁一百二十……。
- ⑥增一阿含04-10(大正02 p.558下)；最後取證得漏盡通、所謂須拔比丘是。
- ⑥増一阿含42-03(大正02 p.752上)；爾時須拔梵志從彼國來至拘尸那竭國遙見五百人來。即問之曰。汝等為從何來。五百人報曰。須拔當知如來今日當取滅度在雙樹間。是時須拔便作是念……。爾時世尊告阿難曰。我最後弟子之中所謂須拔是也。爾時須拔白仏言。我今聞世尊夜半當取般涅槃。唯願世尊先聽我取涅槃。我不堪見如來先取滅度。爾時世尊默然可之。
- ⑪根本有部律「雜事」(大正24 p.396上)；爾時拘尸那城有出家外道、名曰善賢(梵云蘇跋陀羅)年百二十形容衰朽。……爾時善賢起徹到心、即便速證阿羅漢果、得心解脫。復作是念、我今不忍見仏般涅槃宜可先去。作是念已詣世尊所、頂禮雙足退坐一面白仏言。大德世尊、我願先入涅槃……。
- ⑫白法祖訳「仏般泥洹經」(大正01 p.171下)；王去仏五里、所止屯住。国有耆年、字曰須拔、年百二十。……願仏加哀、受我為沙門。須拔髮自然墮地、袈裟著體。精心思教。霍然無想、一心清淨、喻明珠、即得應真道。重自思念。吾不能使吾師於前泥洹也。即時先仏、取泥洹道。
- ⑬失訳「般泥洹經」(大正01 p.187中)；是時城中、有老異學、年百二十、名曰須跋。……賢者須跋已度世得應真。坐自念。吾不能待仏般泥洹、便先滅度、而仏後焉。
- ⑭法顯訳「大般涅槃經」(大正01 p.203中)；爾時鳩尸那城、有一外道。年百二十、名須跋陀羅。……於是世尊即便喚之、善來比丘。鬚髮自落、袈裟著身、即成沙門。世尊又為廣說四諦。即獲漏盡、成阿羅漢。爾時世尊告阿難言。汝今當知、我於道場成阿耨多羅三藐三菩提、最初說法、度阿若憍陳如等五人。今日在於娑羅林中、臨般涅槃、最後說法、度須跋陀羅。
- ⑯‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’(中村・下 p.632、Waldschmidt p.366)；クシナガリー(Kuśinagara)のシャーラの双樹の間で(antareṇa yamakaśālāyā)、世尊は「来れ、修行者よ、清淨を行え(ehi bhikṣo cara brahmacaryam)」といつて、出家させた。スバドラはよく解脱した阿羅漢となった(arhan babhūva suvimuktah)。
- *⑤別訳雜阿含213(大正02 p.453中)；須跋陀羅者如集偈頌中説。

[B] 仏伝經典

- ⑪仏讚(大正04 p.046中)；飯食說法畢 行詣鳩夷城 度於蕨蕨河 及熙連二河 彼有堅固林 安隱閑靜處 入金河洗浴 身若真金山 告勅阿難陀 於彼雙樹間 掃灑令清淨 安置於繩床 吾今中夜時 当入於涅槃 …… 爾時有梵志 名須跋陀羅 賢德悉備足 淨戒護衆生 少稟於邪見 修外道出家(仏入滅近きを知り、阿難に面会を願うも、阿難はこれを断ろうとするが、仏はこれを許される) …… 心開信增廣 仰瞻如來臥 不忍觀如來 捨世般涅槃 及仏未究竟 我當先滅度 合掌禮聖顏 一面正基坐 捨壽入涅槃 如雨滅小火 仏告諸比丘 我最後弟子
- ⑫BC. (26-01)；それから善行を正しくそなえ、〔身・口・意〕三種の戒を保ち、生きものたちに

ついて犠牲祭を行なわないスバドラは、善逝（ブッダ）にお目にかかりたく思い、比丘として解脱したいと思い、喜びを与える人たるアーナンダに言った。牟尼（ブッダ）が涅槃（入滅）される時だということを私は聞きました。そのために私はお目にかかりたいという思いが生じました。……そこで……アーナンダは「〔今はその〕時ではない」と、涙顔で答えた。……（ブッダ）は、それをお知りになって、「私は世間の人々を利益するために生まれてきたのであるから、そのバラモンを妨げてはいけない」とおっしゃった。……多くの弟子をお持ちになっている大聖仙（ブッダ）の〔最後の〕弟子となつたのである。

⑬行經（大正04 p.106中）；時賢善須跋 修仁除躁性 欲見仏求度 来謂阿難言 我覺天人師 時至欲滅度 故來詣難見 覚知一切法 請阿難通入 阿難心煩毒 便謂須跋言 今非見師時 …… 告語阿難言 莫違來現者 吾出世為善 …… 時須跋聞之 尋即得解脱

[C] 後世の仏伝資料

⑥Bigandet. (vol. II p.061, 赤沼 p.400) ; 俱戸那羅 (Koutheinaron) の市に、外道に使えて居る人があった。……須跋陀 (Thoubat) といい、……彼は仏陀の市の近くにあって涅槃に入り給わんとするをきき、世尊に見え奉って疑を除きたいと思うた。（阿難は取次を拒否するも世尊はこれを許す）仏陀は阿難を呼び、須跋陀を一比丘たらしむるように命じ給うた。……彼は仏陀の……最後に教化し給うた入道者であった。

【70】最後の説法

釈尊は弟子たちに、「諸行は滅するものである。不放逸に精進せよ」と最後の説法をする。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.156) ; 世尊は比丘らに言われた。「比丘らよ、あなた達に告げる。諸行は滅するものである。不放逸に精進せよ (handā dāni bhikkhave āmantayāmi vo; vayadhammā saṃkhārā, appamādena sampādetha) 」と。これが如来の最後の言葉であった (Ayaṁ Tathāgatassa pacchimā vācā) 。
- ①SN.06–15 (vol. I p.157) ; 世尊はクシナーラーのマッラ族のウパヴァッタナの沙羅樹園の沙羅双樹の間で般涅槃されるとき (Kusinārāyan viharati Upavattane Mallānam sālavane antarrena yamakasālānam parinibbānasamaye) 、比丘らに最後の説法をされた。「不放逸に励め、諸行は滅するものである (appamādena sampādetha vayadhammā sankhārā) 」と。
- ①AN.04–76 (vol. II p.079) ; 世尊はクシナーラーのマッラ族のウパヴァッタナの沙羅樹園の沙羅双樹の間で般涅槃されるとき、仏法僧において疑惑があるなら問え、後で師は現存せず、問うことができないと後悔することなかれ (pucchatha, bhikkhave mā pacchā vippaṭisārino ahuvattha, sammukhībhūto no satthā ahosi nāsakkhimha bhagavantam sammukhā paṭipucchitum) 」と語られた。
- ②長阿含002「遊行經」（大正01 p.026中）；比丘、無為放逸。我以不放逸故自致正覺。無量衆善亦由不放逸得。一切萬物無常存者。此是如來末後所說。
- ⑪根本有部律「雜事」（大正24 p.399中）；仏言、法皆如是諸行無常。是我最後之所教誨。
- ⑫失訣「般泥洹經」（大正01 p.188中）；仏語阿難。其已願樂如來正化、於仏法衆苦習盡道。無所疑者當棄貪欲慢憒之心。遵承仏教以精進受、默惟道行。是為最後仏之遺令。必共順之。
- ⑬法顯訣「大般涅槃經」（大正01 p.204下）；汝等當知。一切諸行皆悉無常。我今雖是金剛之體亦復不免無常所遷。生死之中極為可畏。汝等宜應勤行精進、速求離此生死火坑。此則是我最後教也。

⑫ ‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’ (中村・下 p.664、Waldschmidt p.386) ; 世尊は「さあ、修行僧たちよ。沈黙しておれ。もろもろの事象は過ぎ去るものである (aṅga bhikṣavas tūṣṇīm bhava-ta vyayadharmaḥ sarvasaṃskārāḥ)」と説かれた。これが人格完成者の最後の言葉であった (iyam tatra tathāgatasya paścimā vācā)。

[B] 仏伝經典

- ⑨僧伽 (大正04 p.143下) ; 無常為所從生……我等今日當修何業。今世尊最後說此法。
⑩仏讚 (大正04 p.049下) ; 汝等善自護 勿生於放逸 有者悉歸滅 我今入涅槃 言語從是斷 此則最後教
⑪BC. (26–88) ; 動物・静物のすべては滅する。それゆえ、汝らはよく注意深く（不放逸）あれ。
〔私が〕涅槃すべき時がやってきた。汝ら、言うことなけれ。これが私の最後の言葉である。

[C] 後世の仏伝資料

- ③氏譜 (大正50 p.094上) ; 双巻泥洹云。告諸比丘。……我為聖師至七十九、……無宜放逸善法由生、萬物無常此是後說。
④統紀 (大正49 p.166下) ; 世尊將入涅槃。是時中夜寂然無聲、為諸弟子略說法要。汝等比丘於我滅後當尊重珍敬波羅提木叉、……是汝大師。
⑤Bigandet. (vol. II p.068, 赤沼 p.406) ; 「愛する比丘等よ、生あるものはすぐにその裏に滅びるということを含むものである。このことを忘るなよ。……」これは仏陀の最後の御語であった。

【71】 涅槃

釈尊は禪定を順次に楽しみ、最後に第四禪に入って入滅する(1)。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.156) ; 世尊は……初禪から第2禪、第3禪、第4禪に入れられ、第4禪から立たれて直後に般涅槃された (catutthajhānā vuṭṭhahitvā samanantarā parinibbāyi)。
②DN.017 ‘Mahāsudassana-s.’ (vol. II p.169) ; 世尊はクシナーラーの沙羅双樹の間に住され、この地で入滅する因縁を語られた。
③SN.06–15 (vol. I p.158) ; 世尊は……初禪から第2禪、第3禪、第4禪に入れられ、第4禪から立たれて直後に般涅槃された (Catutthajhānā vuṭṭhahitvā samanantarā parinibbāyi)。
④長阿含002「遊行經」 (大正01 p.026下) ; 世尊……入第一禪、從第一禪起、入第二禪、從二禪起、入第三禪、從三禪起、入第四禪、從四禪起、佛般涅槃。
⑤中阿含033「侍者經」 (大正01 p.474上) ; 一時世尊遊拘尸那竭住憇跋單力士娑羅林中。爾時世尊最後欲取般涅槃時告曰。阿難、汝往至双娑羅樹間可為如來北首敷床。如來中夜當般涅槃……。
⑥中阿含068「大善見王經」 (大正01 p.515中) ; 一時佛遊拘尸城住憇跋單力士娑羅林中。爾時世尊最後欲取般涅槃時告曰。阿難、汝往至双娑羅樹間可為如來北首敷床。如來中夜當般涅槃……。
⑦雜阿含604 (大正02 p.167下) ; 此處如來具足作佛事畢、於無余般涅槃而般涅槃。
⑧雜阿含1197 (大正02 p.325中) ; 世尊往就繩床右脇著地北首而臥、足足相累、繫念明相。爾時世尊即於中夜於無余般涅槃而般涅槃般涅槃已。雙堅固樹尋即生花周匝垂下供養世尊。
⑨根本有部律「雜事」 (大正24 p.399中) ; ……從初禪出還入第二第三第四靜慮、寂然不動便入無

余妙涅槃界。

- ⑫白法祖訣「仏般泥洹經」（大正01 p.172下）；年亦自至七十有九、惟斷生死迴流之淵、思惟深觀、從四天王、上至不想入、從不想転還身中、自惟身中四大惡露、無一可珍。北首枕手猗右脇臥、屈膝累脚、便般泥曰。
- ⑬失訣「般泥洹經」（大正01 p.188下）；……從一禪思復至三禪、便從四禪反於無知棄所受余泥洹之情、便般泥洹。
- ⑭法顯訣「大般涅槃經」（大正01 p.199下）；常在人天受樂果報無有窮盡。何等為四。一者如來為菩薩時、在迦比羅施兜國藍毘尼園所生之處。二者於摩竭提國、我初坐於菩提樹下得成阿耨多羅三藐三菩提處。三者波羅捺國鹿野苑中仙人所住転法輪處。四者鳩尸那國力士生地熙連河側娑羅林中雙樹之間般涅槃處。
- ⑮法顯訣「大般涅槃經」（大正01 p.205上）；乃至次第入於初禪。復出初禪、入第二禪。出於二禪、入第三禪。出於三禪、入第四禪。即於此地入般涅槃。
- ⑯法賢訣「阿羅漢具德經」（大正02 p.833上）；聲聞能修淨行最後出家、須跋陀羅苾芻是。
- ⑰‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・下 p.690、Waldschmidt p.394）；世尊は……初禪から第2禪、第3禪、第4禪に入られ、第4禪を達成されてから、（清らかな）眼を獲得して、不動なる寂靜に入り、ブッダなる尊師は完きニルヴァーナに入られた（caturtham dhyānam samāpya cakṣuṣmān āniñjyam sāntim samāpanno buddho bhagavān parinirvṛtaḥ）。

[B] 仏伝經典

- ⑨僧伽（大正04 p.143下）；是時世尊臨欲般涅槃時、告諸比丘。汝等比丘、有所狐疑、便可時間。乃至一切行無淨常云何。尊者阿那律。世尊般涅槃耶。
- ⑩仏讚（大正04 p.049下）；（初禪→九正受→初禪→四禪）出定心無寄 便入於涅槃
- ⑪BC. (26-89)；（初禪→九種類の定→初禪→四禪）そして四禪の行から彼（ブッダ）は出られると、そのままだちに寂靜へとお入りになったのである。
- ⑫行經（大正04 p.108下）；吾入泥洹城 時今已近到 於是捨壽行 是我未後言（第一禪→四禪→往返於九禪→還至第一禪→四禪）然後捨壽行 廬入泥洹城 仏適捨壽行

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.068上）；釈迦双樹般涅槃記。（出大般涅槃經）
- ②釈迦（大正50 p.072上）；自我為聖師至七十九、所應作者亦已究暢。
- ③歴代（大正49 p.025）；（壬子）四（仏年七十九以匡王四年二月十五日後夜、於中天竺拘尸那城力士生地娑羅樹間入涅槃）
- ④氏譜（大正50 p.093下）；仏入城向双樹間、令阿難敷座、使足南首北面向西方。……我今成正覺已於此處復捨身命涅槃。（初禪→非想定→初禪→四禪）。從定起已入般涅槃。
- ⑤統紀（大正49 p.166下）；時世尊……右脇而臥、頭枕北方……如來中夜寂然無聲。於是時頃便般涅槃。
- ⑥JM. (p.036, 畑中 p.152)；その後3ヶ月して、ヴィサーカー星宿に満月が宿るヴィサーカー月の満月の日に (ito tiṇṇam māsānam accayena Visākhapuṇṇamīyam Visākhanakkhattayoge vattamāne) 世尊はクシナーラー (Kusinārā) のマッラ (Malla 未羅国) の沙羅樹林で、大般涅槃の床についたとき、（ランカ一島への布教を説く）……このように言うべきことを言い、なすべきことをなして早朝時日出から3ナーデイー (tinādī) ほどの間に、無余涅槃界に般涅槃した。
- ⑦Bigandet. (vol. II p.069, 赤沼 p.407)；仏陀が全く涅槃に入り給うたのは、アニュジャーナ紀元百四十八年のカチヤン月の満月の火曜日の夜の明け切らぬ内であった。

(1) 入滅年齢については、本研究の第1号中の「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」のpp.115~122を参照されたい。

【72-01】葬儀——火葬

釈尊の遺言にしたがって、クシナーラーの人々は遺体を祀ってから、天冠寺（Makutabandhana cetiya）に運んで荼毘に付そうとするが、火がつかない。大迦葉が到着すると自然に火がつき、葬儀が行われる。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.159) ; マッラ族の人々は6日の間釈尊の遺体を祀り、第7日目に (sattamam̄ divasam̄) 天冠寺 (Makutabandhana cetiya) で荼毘に付そうとした (jhāpessāma) 。大迦葉が到着したとき自然に火がついた。
- ②長阿含002「遊行経」(大正01 p.028上) ; 末羅の人々は釈尊の般涅槃後7日を終わろうとするときに、天冠寺に遺体を運んで荼毘に付そうとした。大迦葉が到着したとき自然に火がついた。
- ③中阿含068「大善見王経」(大正01 p.518中) ; 我今得離生老病死啼哭憂感。我今已得脱一切苦。阿難、從拘尸城、從和跋單力士娑羅林、從尼連然河、從求求河、從天冠寺、從為我敷床廻。我於其中間七反捨身、於中六反為転輪王、今第七如來無所著等正覺。
- ④四分律「集法毘尼五百人」(大正22 p.966上) ; 世尊が拘尸城末羅園娑羅林間で般涅槃されたとき、末羅子が火葬しようとしても火がつかなかった。摩訶迦葉が到着して自然に火がついた。
- ⑤五分律「五百集法」(大正22 p.190中) ; 爾時世尊泥洹未久。大迦葉在毘舍離獮猴水辺重閣講堂與大比丘僧五百人俱。皆是阿羅漢唯除阿難。告諸比丘、昔吾從波旬國向拘夷城二國中間聞佛世尊已般泥洹。我時中心迷亂不能自摶……。
- ⑥十誦律「五百比丘結集三藏法品」(大正23 p.445下) ; 佛婆伽婆在拘尸城娑羅双樹間力士住處般涅槃。拘尸諸力士供養佛身。是時長老摩訶迦葉將五百比丘、從波婆城欲到拘尸城二城中間……。
- ⑦僧祇律「雜跋渠法」(大正22 p.489下) ; 爾時阿闍世王章提希子與毘舍離有怨如大泥洹經中廣說。乃至世尊在毘舍離於放弓杖塔辺捨壽、向拘尸那城熙連禪河側力士生地堅固林中双樹間般泥洹。於天冠塔辺闍維乃至諸天使火不然。待尊者大迦葉故。
- ⑧根本有部律「雜事」(大正24 p.400下) ; 涅槃經後7日して、拘尸那城の諸壯士らが遺体を繫冠制底に運んで荼毘に付そうとしたが火がつかなかった。大迦葉が到着して自然に火がついた。
- ⑨白法祖訣「仏般泥洹經」(大正01 p.173下) ; 鳩夷那竭王らは滅度以来7日目に荼毘に付そうとしたが火がつかなかった。大迦葉が到着してから荼毘に付した。
- ⑩失訣「般泥洹經」(大正01 p.189中) ; 般泥洹後7日して荼毘に付そうとしたが火がつかなかった。大迦葉が到着して自然に火がついた。
- ⑪法顯訣「大般涅槃經」(大正01 p.205上) ; 涅槃經後7日を満じて諸力士は釈尊の遺体を宝冠支提の所に運んで荼毘に付そうとしたが火がつかなかった。摩訶迦葉が到着して自然に火がついた。
- ⑫‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’ (中村・下 p.732、Waldschmidt p.412) ; 世尊が涅槃されて第7日目に (saptahāntaram̄) 、マッラ族のマクタ堤にある祠堂で (mallānām̄ makuṭabandhane caitye) 火葬に付そうとした (dhyāpayiṣyāmah̄) 。大力ーシャバが到着してひとりでに火がついて燃え出した。

[B] 仏伝經典

- ⑪仏讚（大正04 p.052上）；出於龍象門 度瀨連河表 到諸過去仏 滅度支提所 積牛頭栴檀
…… 置仏身於上 …… 以火燒其下 三燒而不燃 時彼大迦葉 先住王舍城 知仏欲涅槃 …
… 願見世尊身 以彼誠願故 火滅而不燃 迦葉眷屬至 …… 然後火乃燃
- ⑫BC. (27-70~74) ; 龍門を通て [町の] 外へ出て、ヒラニヤヴァティーと言われる河を無事に渡った後、ムクタ [バンダナ] と呼ばれる廟 (チャイティヤ) の根元に、名声のゆえに積まれたので [その名声に相応するだけ大きな薪] 山を彼ら (マッラ族の者たち) は作った。……道をやって来た [マハー] カーシャパ (大迦葉) は清浄な心によって思いをなし、世尊の完全な遺体にまみえたいと思った。その力によって火は燃えなかつたのである。それから、そのとき、師 (ブッダ) にまみえるためにそこへ比丘 (マハーカーシャパ) が急ぎ駆けつけて、最高の牟尼に礼拝すると、たちどころに火はおのずから燃えたのである。
- ⑬行經（大正04 p.111下）；上於甘樹下 以種種香木 積為大薪積 及若干種香 …… 三燒仏薪
積 火終不肯燃 …… 大迦葉不遠 懷慈往見仏 時火以是故 共吹終不燃 時迦葉至 禮敬仏
積已 於是仏薪積 即時自然燃

[C] 後世の仏伝資料

- ③氏譜（大正50 p.094上）；経曰。……那律告阿難入城告知如來已滅度。……沈檀名香積上將欲加
火而天滅之。待迦葉故……経云。大迦葉在波波國……知仏滅度詣天冠寺。欲見仏身三請不許。…
…迦葉違棺三匝説偈。不燒自然。
- ④統紀（大正49 p.167上）；時大迦葉與五百弟子在耆闍崛山。去拘尸城五十由旬……見地大動。即
知如來已入涅槃。……迦葉説偈。如來復現双足千幅輪相出於棺外。……還自入棺。從心胸中火涌
棺外。
- ⑤JM. (p.036, 番中 p.171) ; 我々の世尊の遺体を、クシナーラーのマッラ族の人には7日間
(sattāham) 聖祭を催したあと、7日目に (sattame divase) 火葬した。
- ⑥Bigandet. (vol. II p.078, 赤沼 p.420) ; かくて御遺骸は天冠寺 (Makula bandan) に着き給
い、人々はかねて用意の柴堆の上に安置し奉った。……その時大迦葉は五百の比丘を率いて波々
から俱尸那羅の途上にあった。(末羅 [Malla] の人々香木に点火するも燃えず。大迦葉到着する
と) 火は人手を借らず、独り手に燃え出て、柴堆に移り、火炎を上げた。

【72-02】葬儀——舍利の分配

舍利は8分され、それぞれの国に塔が建立される。この外に、瓶塔・灰塔が建立される。

[A] 原始聖典

- ①DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ (vol. II p.164) ; 世尊の舍利はマガダ王の阿闍世 (Rājā Māgadho Ajātasattu Vedehi-putto) 、ヴェーサーリーのリッチャヴィ族 (Vesālikā Licchavi) 、
カピラヴァットウの釈迦族 (Kāpilavatthavā Sakyā) 、アッラカッパのブリ族 (Allakappakā Bulayo) 、ラーマガーマのコーリヤ族 (Rāmagāmakā Koliyā) 、ヴェータディーパの婆羅門
(Vethadīpako brāhmaṇo) 、パーヴァーのマッラ族 (Pāveyyakā Mallā) 、クシナーラーのマッ
ラ族 (Kosinārakā Mallā) に八分され、瓶はクンバ婆羅門 (Doṇo brāhmaṇo) 、灰はピッパリー
ヴァナのモーリヤ族 (Pippalivaniyā Moriyā) に与えられた。
- ② ‘Buddhavamṣa’ (p.068) ; 勝者マハーゴータマはクシナーラーにおいて涅槃され、舍利の分
割 (dhātuvitthārika) が行われた。1つはアジャータサットウへ、1つはヴェーサーリーの都へ、
1つはカピラヴァットウへ、1つはアッラカッパカへ、1つはラーマ村へ、1つはヴェータディー

パカへ、1つはパーヴァーのマッラ族へ、1つはクシナーラーへ。香姓婆羅門は瓶塔を築き、モーリヤ族は灰塔を建てた。

- ②長阿含002「遊行経」（大正01 p.030上）；時拘尸国人得舍利分、即於其土起塔供養。波婆国人、遮羅國、羅摩伽国、毘留提国、迦維羅衛国、毘舍離國、摩竭國阿闍世王等得舍利分已、各歸其國、起塔供養。香姓婆羅門持舍利瓶歸起塔廟。畢鉢村人持地焦炭歸起塔廟。
- ⑨十誦律「五百比丘結集三藏法品」（大正23 p.446下）；爾時拘尸城諸力士得第一分舍利。即於國中起塔、華香伎樂種種供養。波婆國得第二分舍利……。羅摩聚落拘樓羅得第三分舍利……遮勅國諸刹帝利得第四分舍利……。毘舍離諸婆羅門得第五分舍利……。毘耶離國諸梨昌種得第六分舍利……。迦毘羅婆國諸釈子得第七分舍利……。摩伽陀國主阿闍世王得第八分舍利……。姓煙婆羅門。得盛舍利瓶還頭那羅聚落起塔華香供養。必波羅延那婆羅門居士得炭還國起塔供養。爾時闍浮提中八舍利塔第九瓶塔第十炭塔。仏初般涅槃後起十塔自是已後起無量塔。
- ⑩根本有部律「雜事」（大正24 p.402中）；第一分與拘尸那城諸壯士等廣興供養。第二分與波波邑壯士。第三分與遮羅博邑。第四分與阿羅摩処。第五分與吠率奴邑。第六分與劫比羅城諸釈迦子。第七分與吠舍離城栗姑毘子。第八分與摩伽陀國行雨大臣。此等諸人既分得已、各還本処起窣覲波。恭敬尊重伎樂香華盛興供養。時突路擎婆羅門將量舍利瓶、於本聚落起塔供養。有摩納婆名畢鉢羅、亦在衆中告諸人曰。釈迦如來恩無不普、於仁聚落而般涅槃。世尊舍利非我有分、其余炭燼幸願與我。於畢鉢羅処起塔供養。
- ⑪白法祖訣「仏般泥洹經」（大正01 p.175上）；辺境の八国の王たちが仏舍利を求めて集まった。屯屈という梵志が仲裁して八分した。道士の桓違は焦炭を得、遮迦竭人は灰を得た。
- ⑫失訣「般泥洹經」（大正01 p.190上）；拘夷王、波旬國の諸華氏、可樂國の諸拘鄰、有衡國の諸満離、神州國の諸梵志、維耶國の諸離健、赤澤國の諸釈氏、摩竭王阿闍世が舍利を8分し、梵志溫違は地焦炭、有衡國の異道士は地灰を得た。
- ⑬法顯訣「大般涅槃經」（大正01 p.207上）；韋提希子阿闍世王、余七国王及毘耶離の諸離車等は舍利を8分し、調停の労を取った徒盧那婆羅門は舍利瓶、諸力士は灰炭を得た。
- ⑭‘Mahāparinirvāṇa-sūtra’（中村・下 p.732、Waldschmidt p.412）；世尊の舍利は、クシナガラのマッラ族（Kauśināgarāṇām mallānām）、パーパーのマッラ族（Pāpiyakānām mallāṇām）、チャラカルパのブラ族（Calakalpakanām bulakānām）、ヴィシュヌ・ドヴィーパのバラモン（Viṣṇudvīpiyakānām bulakānām）、ラーマ・グラーマのクラウディヤ族（Rāma-grāmī-yakānām kraudyānām）、ヴァイシャーリーのリッチャヴィ族（Vaiśālakānām licchavīnām）、カピラヴァストゥのシャーキヤ族（Kāpilavāstavyānām śākyānām）、マガダのアジャータシャトル王（rājā Māgadho 'jātaśatrur vaidehiputro）に8分され、瓶はドゥームラ姓のバラモン（Dhūmrasagotrāya brāhmaṇāya）に与えられ、炭は学生であるピッパラーヤナ（Pippalāyana māṇava）が取って、それぞれ塔を建てた。

[B] 仏伝經典

- ⑪仏讚（大正04 p.052中）；彼諸力士衆 …… 興無上供養 時七国諸王 承仏已滅度 遣使詣力士 請求仏舍利（諸力士衆と七王の争いを梵志が仲裁する）
- ⑫仏讚（大正04 p.054上）；即開仏舍利 等分為八分 自供養一分 七分付梵志 七王得舍利 …… 梵志 …… 得分舍利瓶 …… 金瓶塔 …… 俱夷那竭人 聚集余灰炭 …… 灰炭塔 …… 如是闍浮提 始起於十塔
- ⑬BC. (28-01)；正しい仕方で数日の間彼ら（マッラ族の者たち）はそれら〔の遺骨〕を最上の供養で供養した。すると、属國の小王の使者が七人、次々とその〔遺骨の〕ためにその〔クシナガラの〕町へやって来た。（マッラ族と七王の争いあり。バラモン「ドゥローナ」が仲裁する）それ

から……（ブッダ）の遺骨をマッラ族の者たちは八つに尊敬と徳をもって分けた。自らは〔自らの取り〕分を受け取って〔他の〕七〔部分〕をそれぞれ他の者たちに与えたのである。

- ⑬行經（大正04 p.112上）；諸力士悲感 在於王殿上 供養尊舍利 如是至數日 隣側七国王 時各尋遣使 …… 求得舍利分
- ⑭行經（大正04 p.114下）；即時以金釤 分聖尊舍利 別以為八分 …… 於是諸力士 徒中取一分 致其余七分 送與七国王 …… 於是七国王 各各自於國 興師建神塔 …… 梵志草香性欲己聚起塔 …… 金釤塔第九 仏積炭灰塔 滿十妙巍巍

[C] 後世の仏伝資料

- ①釈迦（大正50 p.074下）；釈迦八国分舍利記。（出双巻泥洹經）
- ④統紀（大正49 p.167中）；二月二十九日。如來荼毘已經七日。帝釈……、……取仏右牙、天上起塔。有二捷疾羅刹、盜取仏牙一双。時城内大衆收取舍利滿八金壇、入拘尸城七日供養。三月六日、……時八国王共爭舍利、有大臣優波吉諫八国王。……。……即分舍利而為三分、一分諸天、一分龍王、一分八王……。……姓煙婆羅門高聲唱言、當作八分、時拘尸城得第一分、乃至闍王得第八分。……姓煙婆羅門得盛舍利瓶、……羅延婆羅門得炭。……是時閻浮提始有十塔。
- ⑤JM. (p.037, 番中 p.172)；クシナーラーのマッラ族 (Kosinārakā Mallā) の人には、7日間 (sattāham) 遺骨を供養して7日目に (sattame divase) 分配した。……8つの舍利塔、第9の瓶のCetiya、第10の灰塔が同時に立てられた。
- ⑥Bigandet. (vol. II p.094, 赤沼 p.435)；諸王の使臣は徒盧那 (Dauna) の語に従って、徒盧那について御遺骨を八分せんことを願った。

〔付表 1〕

「仏伝諸經典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典一覧表」

凡　　例

[1] 本表は次のような目的のために作成された。

- (1) 「仏伝經典」が取り上げている釈尊伝エピソードを、どの文献が伝えており、どの文献が伝えていないかを一覧すること。
- (2) それぞれの文献が、そのエピソードを釈尊の生涯のどの位置に（どの順序）にあるものとしているかを示すこと。

[2] 本表は次の三部から成っている。

- [A] 原始聖典
- [B] 仏伝經典
- [C] 後世の仏伝資料

これらはいうまでもなく、本体の「仏伝諸經典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」の区分にしたがったものである。

なお、見開き 2 ページで一つの表になっているものもあるので注意されたい。

[3] 表中に数字が記載されているものが、当該エピソードの記述があることと、その順序を示す。なお、同じ数字が 2ヶ所以上にある場合は、異なるエピソードが同時に扱われていることを示す。但し、文献によっては順序が不明のものもあり、この場合には記述のあることを○で示した。また、△は「要覧」中に、参考として*を付して 1字下げにした資料しかないことを示す。

[4] その他以下の事項を注意されたい。

[4-1] 「原始聖典」は釈尊の生涯の時系列に従って編集されているわけではないので、ほとんどの場合、順序は不明である。しかし一部分ではあるがそれを示す文献もあり、これを表中に記しておいた。「順序 1」「順序 2」というように示してあるので、以下を参照されたい。

- ①-順序 1 = Vinaya ‘Mahākhandhaka’ による。
順序 2 = DN.016 ‘Mahāparinibbāna-s.’ による。
順序 3 = MN.026 ‘Ariyapariyesana-s.’ による。
- ②-順序 1 = 長阿含 002 「遊行経」 による。
- ③-順序 1 = 中阿含 204 「羅摩経」 による。
- ⑥-順序 1 = 増一阿含 24-05 による。
- ⑩-順序 1 = 僧祇律「雜誦跋渠法」（大正 22 p.412 下～） による。
- ⑪-順序 1 = 根本有部律「泥薩祇波逸迦 004」 による。
順序 2 = 根本有部律「破僧事」（大正 24 p.106 中～） による。

[4-2] 「仏伝經典」中の⑯『仏本行集經』、⑰“Mahāvastu”は、必ずしも「仏伝經典」とはいえず、むしろ「譬喻經典」というべきものであって、釈尊伝記中のエピソードは必ずしも時系列順に記述されているわけではない。とは言ながら、時系列を意識している部分もないではないと考えられるので、ここでは取りあえず、記述の順序（ページの早いものから遅いものへ）として番号を付しておいた。同じエピソードが 2ヶ所以上に記述されている場合も少なくないが、その場合は早い記述のほうを採用した。

付表 1

[A] 原始聖典

項 目	經 典	①パーリ				②長阿		③
		有無	①-1	①-2	①-3	有無	②-1	有無
01	ディーパンカラ仏から記別を受ける	○						
02	兜率天に住む	○						○
03	兜率天において世間を観察する							
04-01	先祖・種姓	○				○		
04-02	親族	○				○		
05-01	マハーマーヤーの夢	○				○		○
05-02	占師が夢を占う							
05-03	胎内で十ヵ月を過ごす	○				○		
06-01	ルンビニ一園へ	○						
06-02	三十二種の瑞兆							
06-03	誕生	○				○		
06-04	「天上天下唯我為尊」と宣言する	○						○
06-05	「サルヴァールタシッダ」と命名される	△						
06-06	「天中天」の異名	△						
06-07	アシタ仙人の予言	○				△		
06-08	三十二相・八十種好	○				○		○
07	マハーマーヤーの死	○						
08	マハーパジャーパティー乳母となる	○						○
09-01	学問							
09-02	種々の競技							
10	提婆達多が射た雁を助ける							
11	樹下の禪定	○						○
12-01	妃の選択	○						
12-02	婿選びの種々の競技							
13	三つの宮殿に住む	○						○
14	四門出遊	○				△		
15	夫人の懷妊とラーフラの誕生	○						
16-01	淨飯王の夢							
16-02	マハーパジャーパティーの夢							
16-03	太子夫人の夢							
16-04	菩薩の夢							
17-01	美女たちの熟睡中の姿態							

付表 1

中阿	④雜阿	⑤別雜	⑥増一		⑦四分	⑧五分	⑨十誦	⑩僧祇		⑪根本		
③-1	有無	有無	有無	⑥-1	有無	有無	有無	有無	⑩-1	有無	⑪-1	⑪-2
			○		○					○		
										○		
			△							○		1
					○	○				○		
					○	○				○		
			○							○	1	2
										○		3
					○					○		4
										○		5
	○											
	○									○		6
	○				○					○		7
			○							○		8
	○									○		9
					○	○				○	2	13
	○	○								○		10
						○				○		11
					○	○				○		12
	○				△					○		14
	○					○				○		15
										○		18
	○				○					○		20
										○		17
										△		
					△			○		○		16
	○				○	○				○	3	19
								○		○		21,45
										○		23
										○		24
							○			○		25
					○					○		22

付表 1

項 目	經 典	①パーリ				②長阿		③
		有無	①-1	①-2	①-3	有無	②-1	有無
17-02	出城	○			1	○		○
17-03	悪魔が出家を止めようとする							
17-04	貴識が道標となつて天道を示す							
17-05	剃髪し、狩人と衣を交換する					○		
18	バッガヴァ仙人を訪問する							
19	ビンビサーラ王と逢う	○						
20-01	アーラーラ・カーラーマ仙人を訪問する	○			2			○
20-02	ウッダカ・ラーマプッタ仙人を訪問する	○			3			○
21-01	ウルヴェーラーへ	○			4			○
21-02	5人の侍者が菩薩と共に苦行に入る							
21-03	6年間の苦行	○						
22-01	苦行が悟りに役立たないと知る	○						
22-02	5人の侍者が菩薩を見捨てる	○						
23-01	村の乙女の供養	○						
23-02	ネーランジャラー河で沐浴する							
23-03	前正覚山に上る							
23-04	龍王カーリカの讃歎							
23-05	草刈り人のクサ草献上							○
23-06	菩提樹下の誓い							○
23-07	降魔	○						
23-08	菩提樹下の成道	○			5	○		
24-01	悪魔が涅槃に入れと誘惑する	○				○		
24-02	アジャパーラ樹下にて	○	1			△		○
24-03	ムチャリンダ樹下にて	○	2					
24-04	タップッサとバッリカの供養と帰依	○	3					
24-05	ディーパンカラ仏の因縁							
24-06	天神が呵梨勒果を献じる							
24-07	天女が糞掃衣を献じる							
25-01	説法を決心する	○	4		6	△		△
25-02	カーラーマとラーマプッタの死を知る	○	5		7			○
26	ウパカに遇う	○	6		8			○
27-01	五比丘と会う	○	7		9			○
27-02	中道を説く	○	8					○
27-03	四諦三転十二行相を説く	○	9					○

付表 1

中阿	④雜阿	⑤別雜	⑥増一		⑦四分	⑧五分	⑨十誦	⑩僧祇		⑪根本			
③-1	有無	有無	有無	⑥-1	有無	有無	有無	有無	⑩-1	有無	⑪-1	⑪-2	
1					○				○			26	
	○				○	○			○			27	
	○								○			28	
	○				○	○			○			29	
2					○				○			30	
3	○				○				○			31	
4			○		○				○			33	
									○			32	
	○		○						○	4		34	
	△		○		○				○			35	
			○		○				○			36	
	○								○	6		37	
					○				○	5		38	
									○			39	
	○								○	8		40	
5			○		○	○			○	7		41	
6									○	9		42	
	○		○						○	10		43	
	○		○		○	○		○		○	11		44
	○	△								○			47
					○	○							
					○	○				○			49
	○		○		○	○			○			46	
					○								
					○	○			○			48	
7	△	△	○	1	○	○				○	12		50
8			○	2	○	○				○			51
9	○		○	3	○	○				○			52
10			○	4	○	○	△			○			53
11					○	○				○			54
12	○		○	5	○	○	○			○	13		55

付表1

項目	經典	①パーリ				②長阿		③
		有無	①-1	①-2	①-3	有無	②-1	有無
27-04	コンダンニヤに法眼生ず	○	10					
27-05	善来比丘戒	○	11					
27-06	他の4人に法眼生ず	○	12					
27-07	無常・苦・無我を説く	○	13					
27-08	五比丘心解脱す	○	14		10			○
28-01	ヤサに法眼生ず	○	15					
28-02	ヤサの父が優婆塞となる	○	16					
28-03	ヤサ阿羅漢果を得る	○	17					
28-04	ヤサを侍者とする	○	18					
28-05	ヤサの母と妻が優婆夷となる	○	19					
29	ヤサの4人の友人の出家	○	20					
30	ヤサの50人の友人の出家	○	21					
31	富樓那の帰仏							△
32	那羅陀の帰仏と龍王の帰依							
33	沙毘那の帰仏							
34	弟子たちを布教に出す	○	22				△	
35	悪魔を破す	○	23					
36	弟子たちに弟子を取ることを許す	○	24					
37	三帰具足戒を定める	○	25					
38	30人の賢衆の出家	○	26					
39	ガンジス河の船師の出家							
40	ウルヴェーラーの牧女が優婆夷となる	○						
41-01	ウルヴェーラ・カッサバの帰仏	○	27					
41-02	ナディーとガヤーの二迦葉の帰仏	○	28					
41-03	ガヤーシーサ山において阿羅漢果を得る	○	29					
42	法雨林の苦行者の教化							
43-01	釈尊を訪ねる	○	30					○
43-02	王に法眼生ず	○	31					○
43-03	5種の願	○	32					
44	竹林園の寄進	○	33					
45	舍利弗と目連の帰仏	○	34					
46	大迦葉の帰仏	○						
47	王舍城の人々の非難	○	35					
48-01	淨飯王が釈尊の帰郷を切望する							

付表 1

中阿	④雜阿	⑤別雜	⑥増一		⑦四分	⑧五分	⑨十誦	⑩僧祇		⑪根本		
③-1	有無	有無	有無	⑥-1	有無	有無	有無	有無	⑩-1	有無	⑪-1	⑪-2
	○		○	6	○	○	○			○		56
					○	○		○	1	○		65
					○	○				○		66
	○				○	○				○		57
13			○	7	○	○				○	14	58
					○	○				○		59
					○	○				○		60
					○	○				○		61
					○					○		62
					○	○				○		63
					○	○				○		64
					○	○				○		67
								○	2			
		○			○	○				○		
		△			○	○				○		68
	○				○					○		69
					○					○		
					○					○		
					○	○		○	2	○	15	70
		○			○	○				○	16	71
		○	8		○	○		○	3	○	17	72
		○	9		○	○		○	4	○	17	73
	○	○	10		○	○				○	18	74
	○	○			○	○				○		75
	○	○			○	○				○	19	77
					○	○				○		76
					○	○	△			○	20	78
					○	○		○	5	○	21	79
	○	○						○	6	○		
					○					○	24	85

付表1

項 目	經 典	①パーリ				②長阿		③
		有無	①-1	①-2	①-3	有無	②-1	有無
48-02	ウダーラが帰郷を促す	○						
48-03	カピラヴァットウヘ	○	36					
49-01	ナンダの出家	○	37					
49-02	ラーフラの出家	○	38					
49-03	浄飯王の依頼	○	39					
50-01	スダッタ長者の帰依	○						○
50-02	精舎建設を発起する	○						○
50-03	ジェータ太子の園林を買い取る	○						○
50-04	祇園精舎の完成と寄進	○						
51	波斯匿王の帰依	○						
52	釈迦族の子弟の出家	○						
53	ゴーシタ園の寄進							
54	ウデーナ王の帰依							
55	舍衛城における神通							
56	三十三天でマハーマーヤーに説法する							
57	マハーパジャーパティー比丘尼となる	○						○
58	アングリマーラの教化	○						
59	提婆達多の破僧	○						
60	ヴェーランジャーにて馬糞を食する	○						
61	諸弟子の教化							
62	パータリ村の繁栄を予言する	○		1		○	1	
63	ナーディカ村の人々への授記	○		2		○	2	
64	アンバパーリーの帰依	○		3		○	3	
65	竹林村で最後の雨安居を過ごす	○		4		○	4	
66	入滅を決心する	○		5		○	5	○
67	ボーガ城における説法	○		6		○	6	
68	チュンダの供養	○		7		○	7	
69	スバッダの帰仏	○		8		○	8	
70	最後の説法	○		9		○	9	
71	涅槃	○		10		○	10	○
72-01	火葬	○		11		○	11	○
72-02	舍利の分配	○		12		○	12	

付表 1

付表 1

[B] 仏伝經典

項 目	經 典	①	②	③	④	⑤	⑥
		NK	修行	中本	瑞応	異出	普曜
01	ディーパンカラ仏から記別を受ける	1	1		1	1	20
02	兜率天に住む	2	2		2	2	1
03	兜率天において世間を観察する	3	3		3		2
04-01	先祖・種姓						
04-02	親族						
05-01	マハーマーヤーの夢	4	4		4	3	3
05-02	占師が夢を占う	5	5		5		4
05-03	胎内で十ヵ月を過ごす	8	6				5
06-01	ルンビニ一園へ	9	7				7
06-02	三十二種の瑞兆	6	12		8	6	6
06-03	誕生	10	8		6	4	8
06-04	「天上天下唯我為尊」と宣言する	11	9		7	5	9
06-05	「サルヴァールタシッダ」と命名される		10		9	7	
06-06	「天中天」の異名		11				15
06-07	アシタ仙人の予言	12	13		10	8	12
06-08	三十二相・八十種好				11		13
07	マハーマーヤーの死	7	15		13	9	10
08	マハーパジャーパティー乳母となる						11
09-01	学問		16		14		16
09-02	種々の競技	16			15		
10	提婆達多が射た雁を助ける						
11	樹下の禪定	13	20		21	13	17
12-01	妃の選択	15	17		17	11	18
12-02	婿選びの種々の競技		18				19
13	三つの宮殿に住む	14	14		12		14
14	四門出遊	17	19		16	10	22
15	夫人の懷妊とラーフラの誕生	18			18		
16-01	浄飯王の夢						21
16-02	マハーパジャーパティーの夢						
16-03	太子夫人の夢		21				
16-04	菩薩の夢						
17-01	美女たちの熟睡中の姿態	19	22		19		23

付表 1

⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
方広	LV	僧伽	十二	仏讚	BC	行経	過去	集経	MV	衆許
2	2						1	1	1	
1	1		2			1	2	4	4	3
3	3	1	3			2	3	5	5	4
			1	1	1		4	2	2	1
			5					3	3	2
4	4	2	4	2	2	3	5	6	6	5
5	5					4	6	7	7	6
6	6						7	8	8	
8	8			3	3	5	8	9	9	7
7	7	4					11	12		
9	9	3	7	4	4	6	9	10	10	8
10	10	5		5	5	7	10	11	11	9
11	11		6	8	8	9	13	16	13	10
16	16					8	12	13	12	11
14	14			6	6	10	14	15	15	14
15	15			7	7	11	15	14	14	12
12	12			9	9		17	17		13
13	13		8	10	10		18	18		
17	17			11	11	12	19	19		15
							20			16
								20		17
18	18			15	15	17	21	21	16	20
19	19		9	12	12	13	22	23	17	18
20	20							24	18	
21	22		10			14	16	22	19	
22	23			14	14	16	23	25	24	19
				13	13		24	27	25	21
23	21							26	20	22
								28	21	
24	24					15	25	29	22	23
25	25	6						30	23	24
26	26			16	16	18	27	31	26	

付表 1

項目	経典	①	②	③	④	⑤	⑥
		NK	修行	中本	瑞応	異出	普曜
17-02	出城	20	23		20	12	24
17-03	悪魔が出家を止めようとする	21					
17-04	貴識が道標となって天道を示す				22	14	25
17-05	剃髪し、狩人と衣を交換する	22	24		23	15	26
18	バッガヴァ仙人を訪問する						
19	ビンビサーラ王と逢う	23	25		26		28
20-01	アーラーラ・カーラーマ仙人を訪問する	24	26				30
20-02	ウッダカ・ラーマップタ仙人を訪問する	24	26				29
21-01	ウルヴェーラーへ	25	27		27		
21-02	5人の侍者が菩薩と共に苦行に入る	26			24	16	27
21-03	6年間の苦行	27	28		30		31
22-01	苦行が悟りに役立たないと知る	28					
22-02	5人の侍者が菩薩を見捨てる	29			25	17	
23-01	村の乙女の供養	30	29		35		32
23-02	ネーランジャラー河で沐浴する	31	30		34		33
23-03	前正覚山に上る						
23-04	龍王カーリカの讃歎	32	31		36		34
23-05	草刈り人のクサ草献上	33	32		28	18	35
23-06	菩提樹下の誓い	34	33		29	19	36
23-07	降魔	35	34	1	31		37
23-08	菩提樹下の成道	36	35	2	32		38
24-01	悪魔が淫槃に入れと誘惑する						
24-02	アジャパーラ樹下にて	37					
24-03	ムチャリンダ樹下にて	38			39	20	
24-04	タップサとバッリカの供養と帰依	40	36	3	37		39
24-05	ディーパンカラ仏の因縁	41	37	4	33	21	
24-06	天神が呵梨勒果を献じる	39			38		
24-07	天女が糞掃衣を献じる						
25-01	説法を決心する	42		5	40	22	40
25-02	カーラーマとラーマップタの死を知る	43		6			41
26	ウパカに遇う	44		7			
27-01	五比丘と会う	45		8	41	23	42
27-02	中道を説く			9			
27-03	四諦三転十二行相を説く			10			

付表 1

⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
方広	LV	僧伽	十二	仏讚	BC	行經	過去	集経	MV	衆許
27	27	7	11	17	17	19	26	32	27	25
								33		
28	28	8		19	18	20	28	34	28	26
29				18	18	21	29	35	29	27
31	30			20	19	22	30	38	30	28
30	29			21	20	23	31	36	31	29
32	31			22	21	24	32	37	32	30
34	33			23	22	25	33	39		31
33	32			24	23					31
35	34	17		25	24	26	34	40	33	32
36	35			26	25		35	41		33
37	36			29	28	27	38	43		34
38	37			28	27	28	37	42	34	35
39	38			27	26		36	44	35	36
										37
40	39			30	29	29	39	45	36	38
41	40			31	30	30	40	46	37	39
42	41	9		32	31	31	41	48	38	40
43	42	12		33	32	32	42	47	39	41
44	43	10	12	34	33	33	43	49	40	42
45	44							58	48	44
47	46							51	50	
46	45						48	50	49	45
48	47			36	34	52	46	52	51	43
								53	52	
								54	53	
								55	54	
49	48			35	35	51	44	56	55	46
50	49			37	36	53	45	57	56	47
51	50			39	37	54	47	59	57	48
52		16	13	38	38	55	49	60	58	49
54	51	11		40	39	34	50	61	59	50
55	52	13		41	40	35	51	62	60	51

付表 1

項目	経典	①	②	③	④	⑤	⑥
		NK	修行	中本	瑞応	異出	普曜
27-04	コンダンニヤに法眼生ず	46		12			43
27-05	善来比丘戒			11			
27-06	他の4人に法眼生ず	47					44
27-07	無常・苦・無我を説く	48					
27-08	五比丘心解脱す	49		13			
28-01	ヤサに法眼生ず	50		14			
28-02	ヤサの父が優婆塞となる			16			
28-03	ヤサ阿羅漢果を得る	51		15			
28-04	ヤサを侍者とする						
28-05	ヤサの母と妻が優婆夷となる						
29	ヤサの4人の友人の出家	52		17			
30	ヤサの50人の友人の出家	52		18			
31	富樓那の帰仏						
32	那羅陀の帰仏と龍王の帰依						
33	沙毘那の帰仏						
34	弟子たちを布教に出す	53		20			
35	悪魔を破す						
36	弟子たちに弟子を取ることを許す						
37	三帰具足戒を定める						
38	30人の賢衆の出家	54		19			
39	ガンジス河の船師の出家						
40	ウルヴェーラーの牧女が優婆夷となる			21			
41-01	ウルヴェーラ・カッサバの帰仏	55		22	42	24	45
41-02	ナディーとガヤーの二迦葉の帰仏	55		23	43	24	46
41-03	ガヤーシーサ山において阿羅漢果を得る	56		24			
42	法雨林の苦行者の教化						
43-01	釈尊を訪ねる	57		25			47
43-02	王に法眼生ず	58		26			48
43-03	5種の願	59					
44	竹林園の寄進	60		27			49
45	舍利弗と目連の帰仏	61		28			50
46	大迦葉の帰仏			41			
47	王舍城の人々の非難						
48-01	淨飯王が釈尊の帰郷を切望する	62		29			51

付表 1

⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
方広	LV	僧伽	十二	仏讚	BC	行經	過去	集経	MV	衆許
	54			42	41		52	63	61	52
53				46	45		54	64		53
				43	42		53	65	62	52
56	53	18					55	66		54
57						36	56	67		55
				44	43	37	57	68	66	56
							59	69	67	58
				45	44		58	70		57
								71		
								72	68	59
				47	46	38		73		60
				47	47	39	60	74		61
								75	63	
								76	64	
					67			77	65	
				48	48	40	61	80	69	62
								81	70	63
								78		
								79		
								82		64
								83	71	
								84		65
58			14	49	49	41	62	85	72	66
59			14	50	50	42	63	86	72	67
				51	51			87		68
								88	73	
60				52	52	43	64	89	74	69
61				53	53	44	65	90	75	70
								91		
62				54	54	45	66	92		71
63			15	55	55	46	67	95	42	
				56	56	47	68	93	41	
								96		
64								97	44	76

付表1

項目	経典	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
		NK	修行	中本	瑞応	異出	普曜
48-02	ウダーラが帰郷を促す	63		30			52
48-03	カピラヴァットウヘ	64		31			53
49-01	ナンダの出家	65					54
49-02	ラーフラの出家	66					55
49-03	浄飯王の依頼	67					
50-01	スダッタ長者の帰依	68		33			
50-02	精舎建設を発起する	69		34			
50-03	ジェータ太子の園林を買い取る	70		35			
50-04	祇園精舎の完成と寄進	71		36			
51	波斯匿王の帰依			40			
52	釈迦族の子弟の出家			32			
53	ゴーシタ園の寄進			37			
54	ウデーナ王の帰依			38			
55	舍衛城における神通						
56	三十三天でマハーマーヤーに説法する						
57	マハーパジャーパティー比丘尼となる			39			
58	アングリマーラの教化						
59	提婆達多の破僧						
60	ヴェーランジャーにて馬麦を食する			43			
61	諸弟子の教化						
62	パータリ村の繁栄を予言する						
63	ナーディカ村の人々への授記						
64	アンババリーの帰依			42			
65	竹林村で最後の雨安居を過ごす						
66	入滅を決心する						
67	ボーガ城における説法						
68	チュンダの供養						
69	スバッダの帰仏						
70	最後の説法						
71	涅槃						
72-01	火葬						
72-02	舍利の分配						

付表 1

⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
方広	LV	僧伽	十二	仏讚	BC	行經	過去	集経	MV	衆許
65							98	43	77	
66			17	60	60		99		78	
68							103			
69							102	46		
							101			
				57	57	48			72	
				58	58				73	
			16	59	59				74	
			18	62	62				75	
67				61	61			100	45	79
				67	68					
				63	63					
				64	64	56				
							94			
		14		66	65	49				
		15		68	69	50				
				65	66					
				69	70					
				70	71					
				71	72	57				
				72	73					
		19		73	74	58				
				74	75	59				
				75	76					
				76	77	60				
		20		77	78					
		21		78	79	61				
				79	80	62				
				80	81	63				

付表 1

[C] 後世の仏伝資料

項 目	經 典	①	②	③	④	⑤	⑥
		釈迦	歴代	氏譜	統紀	JM	Bigandet
01 ディーパンカラ仏から記別を受ける		○			1	1	1
02 兜率天に住む		○		3	2	4	3
03 兜率天において世間を観察する		○		2	4	5	5
04-01 先祖・種姓		○		1	3	2	2
04-02 親族						3	4
05-01 マハーマーヤーの夢		○	1	4	5	7	6
05-02 占師が夢を占う		○			6	8	7
05-03 胎内で十カ月を過ごす		○		5	7	6	8
06-01 ルンビニー園へ		○		6	8		9
06-02 三十二種の瑞兆		○		9		10	12
06-03 誕生		○	2	7	9	9	10
06-04 「天上天下唯我為尊」と宣言する							11
06-05 「サルヴァールタシッダ」と命名される		○		11	11	12	14
06-06 「天中天」の異名		○		10	10		
06-07 アシタ仙人の予言		○		12	12		13
06-08 三十二相・八十種好		○		8			
07 マハーマーヤーの死		○		14	14	11	15
08 マハーパジャーパティー乳母となる		○			15		
09-01 学問		○	3	15	16		
09-02 種々の競技		○	4	16	18		19
10 提婆達多が射た雁を助ける					17		
11 樹下の禪定		○		17	19		16
12-01 妃の選択		○	6	18	20	13	18
12-02 婿選びの種々の競技		○					
13 三つの宮殿に住む		○		13	13	14	17
14 四門出遊		○	5	20	21	15	20
15 夫人の懷妊とラーフラの誕生		○		19	22	16	21
16-01 净飯王の夢							
16-02 マハーパジャーパティーの夢							
16-03 太子夫人の夢		○			23		
16-04 菩薩の夢						22	33
17-01 美女たちの熟睡中の姿態		○					22

付表 1

項目	経典	①	②	③	④	⑤	⑥
		釈迦	歴代	氏譜	統紀	JM	Bigandet
17-02	出城	○	7	21	30	17	23
17-03	悪魔が出家を止めようとする					18	24
17-04	貴譏が道標となって天道を示す						
17-05	剃髪し、狩人と衣を交換する	○		22	24		25
18	バッガヴァ仙人を訪問する	○		23	25		
19	ビンビサーラ王と逢う	○			26	19	26
20-01	アーラーラ・カーラーマ仙人を訪問する	○		24	27	20	27
20-02	ウッダカ・ラーマプラッタ仙人を訪問する				28	20	28
21-01	ウルヴェーラーへ	○				21	
21-02	5人の侍者が菩薩と共に苦行に入る			25			
21-03	6年間の苦行	○	○	26	29	21	29
22-01	苦行が悟りに役立たないと知る			27			30
22-02	5人の侍者が菩薩を見捨てる	○		30	35		31
23-01	村の乙女の供養	○		29	32	23	32
23-02	ネーランジャラー河で沐浴する			28	31	24	34
23-03	前正覚山に上る						
23-04	龍王カーリカの讚歎	○		31		25	35
23-05	草刈り人のクサ草献上	○		32	34	26	36
23-06	菩提樹下の誓い	○		33	33		37
23-07	降魔	○		34	36	27	38
23-08	菩提樹下の成道	○	8	35	37	28	39
24-01	悪魔が涅槃に入れと誘惑する			53	55		
24-02	アジャパーラ樹下にて					29	40
24-03	ムチャリンダ樹下にて	○		40	40	30	41
24-04	タプッサとバッリカの供養と帰依	○		39	41	31	42
24-05	ディーパンカラ仏の因縁	○					
24-06	天神が呵梨勒果を献じる						
24-07	天女が糞掃衣を献じる						
25-01	説法を決心する	○		36	38	34	43
25-02	カーラーマヒラーマプラッタの死を知る	○		37	39		44
26	ウパカに遇う			38			45
27-01	五比丘と会う	○		41	42	32	46
27-02	中道を説く	○					
27-03	四諦三転十二行相を説く	○		42	43		47

付表 1

項目	経典	①	②	③	④	⑤	⑥
		釈迦	歴代	氏譜	統紀	JM	Bigandet
27-04	コンダンニヤに法眼生ず	○		43	44	33	
27-05	善来比丘戒	○		45	46	40	
27-06	他の4人に法眼生ず	○		44	45	35	48
27-07	無常・苦・無我を説く	○			47		
27-08	五比丘心解脱す	○		46	48	36	49
28-01	ヤサに法眼生ず	○		47	49	37	50
28-02	ヤサの父が優婆塞となる	○		48	51		51
28-03	ヤサ阿羅漢果を得る	○		49	50	38	52
28-04	ヤサを侍者とする						54
28-05	ヤサの母と妻が優婆夷となる						53
29	ヤサの4人の友人の出家					39	55
30	ヤサの50人の友人の出家	○		50	52	39	56
31	富樓那の帰仏						
32	那羅陀の帰仏と龍王の帰依						
33	沙毘那の帰仏						
34	弟子たちを布教に出す			51	53		57
35	悪魔を破す						58
36	弟子たちに弟子を取ることを許す						59
37	三帰具足戒を定める						60
38	30人の賢衆の出家					41	61
39	ガンジス河の船師の出家						
40	ウルヴェーラーの牧女が優婆夷となる						
41-01	ウルヴェーラ・カッサパの帰仏	○		52	54	42	62
41-02	ナディーとガヤーの二迦葉の帰仏	○		52	56	42	62
41-03	ガヤーシーサ山において阿羅漢果を得る					43	63
42	法雨林の苦行者の教化						
43-01	釈尊を訪ねる	○		54	57	44	64
43-02	王に法眼生ず	○		55	58	45	65
43-03	5種の願						66
44	竹林園の寄進	○		56	59	46	67
45	舍利弗と目連の帰仏	○		57	60	47	68
46	大迦葉の帰仏	○		58	61		
47	王舍城の人々の非難						69
48-01	淨飯王が釈尊の帰郷を切望する	○		59	65		70

付表 1

項目	経典	①	②	③	④	⑤	⑥
		釈迦	歴代	氏譜	統紀	JM	Bigandet
48-02	ウダーイが帰郷を促す	○		60	66	48	71
48-03	カピラヴァットゥヘ	○		61	67	49	72
49-01	ナンダの出家	○		63		50	73
49-02	ラーフラの出家	○		68	70	51	74
49-03	浄飯王の依頼				71		75
50-01	スマッタ長者の帰依	○		70	62		77
50-02	精舎建設を発起する				63		78
50-03	ジェータ太子の園林を買い取る			71	64		79
50-04	祇園精舎の完成と寄進	○					
51	波斯匿王の帰依	○			73		
52	釈迦族の子弟の出家	○		62	68		76
53	ゴーシタ園の寄進						
54	ウデーナ王の帰依	○			76		
55	舍衛城における神通					52	81
56	三十三天でマハーマーヤーに説法する	○			75	52	82
57	マハーパジャーパティー比丘尼となる	○		69	72		80
58	アングリマーラの教化						83
59	提婆達多の破僧	○			69		84
60	ヴェーランジャーにて馬麦を食する						
61	諸弟子の教化						
62	パータリ村の繁栄を予言する						85
63	ナーディカ村の人々への授記						86
64	アンバパリーの帰依						87
65	竹林村で最後の雨安居を過ごす						88
66	入滅を決心する	○		64	74	53	89
67	ボーガ城における説法						90
68	チュンダの供養	○					91
69	スバッダの帰仏						92
70	最後の説法			66	77		93
71	涅槃	○	○	65	78	54	94
72-01	火葬			67	79	55	95
72-02	舍利の分配	○			80	56	96

[付表2]

「仏伝諸經典および仏伝関係諸資料の成道後七週間のエピソード一覧表」

本表は、釈尊成道後七週間の事績についての、さまざまな異伝を整理するために、これを週ごとに対照表にしたものである。「要覧」中の「【24】解脱を楽しむ」の〔01〕から〔07〕までは、週の順序とは係わりなく、エピソード別に資料をまとめてあるので、この欠を補うためである。

なお、表中の括弧内に記入したものは、後に続く週との中間か、後の週にまたがる記事である。

[A] 原始聖典

	第一週	第二週	第三週	第四週	第五週	第六週	第七週	出定後
① パーリ 律 (南伝3 p.001)	菩提樹下にて、十二縁起を順逆に観察する。	アジャパー・ニグローダ樹下(傲慢なバラモン)	ムチャリンダ樹下にて、大雨降り、龍王が保護する。	ラージヤー・ヤタナ樹下にて、二商人が供養する。	アジャパー・ニグローダ樹下にて。			梵天勧請
⑦四分律 (大22 p.781下)	於菩提樹下、結跏趺坐、七日不動。 (二商人供養。商人髪爪供養)	食賈人麩蜜已即於樹下結跏趺坐七日不動。 (身内風動、呵梨勒樹神取呵梨勒果、來奉世尊)	食呵梨勒果已、於樹下結跏趺坐七日思惟不動。 (入齋鞞羅村乞食)	詣一離婆那樹下、七日中結跏趺坐思惟不動。 (入齋鞞羅村乞食、蘇闍羅大將女供養)	還詣離婆那樹下、七日結跏趺坐思惟不動。 (入齋鞞羅村乞食)	詣文隣樹隣水、文隣龍王宮……七日思惟不動。 (入齋鞞羅村乞食)	往詣阿踰波羅尼拘律樹下、至已敷坐具結跏趺坐。	梵天勧請
⑧五分律 (大22 p.103上)	逆順觀十二因縁。風患取呵梨勒果、即除。結跏趺坐七日。 (遊行人間、二商人供養)	食麩蜜已復結跏趺坐入定七日。	到文隣龍所坐一樹下……復入定七日。雨七日、龍王保護。 (到齋鞞羅斯那聚落入村乞食。須闍陀供養)	復還菩提樹下、結跏趺坐三昧七日。 (姉妹四人供養)	還菩提樹下三昧七日。	向阿豫波羅尼拘類樹……到樹下三昧七日。		梵天勧請
⑪根本有部 破僧事 (大24 p.124下)	菩提樹下…入火界三摩地、經于七日今猶在定。 (二商人供養。患於風氣。魔王白可入涅槃。取呵梨勒果)	往牟枝磷陀龍王池辺、坐一樹下…七日雨下不絕。	還菩提樹下……結跏趺坐觀十二縁生。					梵天勧請

付表2

[B] 仏伝経典

	第一週	第二週	第三週	第四週	第五週	第六週	第七週	出定後
① NK (南伝 28 p.163)	禅定に安住して七日の間唯その処に坐し続ける。	御座を瞬きもせず見つめて七日間を過す。	宝の経行處に経行しつつ七日を過ごす。	宝の家にてアビダルマを取り調べて七日間を過ごす。	アジャパーラ榕樹のある所にて魔女誘惑す。	文隣陀龍王	ラージャーヤタナ樹下にて、訶梨勒果を食す。	二商人供養
⑥普曜 (大 03 p.524 下)	宿夜七日観道場樹、以報其思、過七日已。							二商人供養
⑦方広 (大 03 p.599 中)	観菩提樹王目不暫捨不起于坐經於七日。	至第二七日至第三七日観菩提場。	至第四七日…隨近經行以大海爲邊際。 (魔王願入般涅槃)	於第五七日住瞑隣陀龍王所居。	於第六七日往尼俱陀樹下。	於第七七日至多演林中在一樹下、結跏趺坐。 (不食已來四十九日)		二商人供養 梵天勧請
⑧ LV (溝口訳 p.325)	瞑想の喜びを栄養として、自分自身の中に味わいつつ、智慧の樹の下で一週を過ごされた。	三千大千世界の諸領域を含む長大きな散歩をされた。	如来は瞬き一つせずに「悟りの場を見つめられた。	東の海から西の海に至る一つの短い散歩をされた。 (悪魔パーピヤンが入涅槃を勧める)	龍の王であるムチャリンダの家に住まわれた。	「雌ヤギを飼う者」という名前のイチジクの木の下へ赴かれた。	ターラーヤナ樹のもとに留まっておられた。	二商人供養
⑪仏讚 (大 04 p.028 中)	於彼七日、禅思心清淨觀察菩提樹瞪不瞬。							梵天勧請 二商人供養
⑫ BC (14-94)	七日の間病も覚えず、まばたきもせずに坐り続けられた。							梵天勧請 二商人供養
⑬行経 (大 04 p.087 上)	悅臥樹王下坐觀樹七日、不食喜充盈							梵天勧請 二商人供養

付表2

	第一週	第二週	第三週	第四週	第五週	第六週	第七週	出定後
⑭過去 (大03 p.642下)	於七日中一心思惟觀於樹王。 (梵天勸請)	觀諸衆生上中下根…滿二七日。						二商人供養
⑮集經 (大03 p.799中)	在樹下坐經七日夜不起 七日目正觀十二因緣。	離菩提樹相去不遠、七日不動、七日諦觀於菩提樹目不暫捨(1)。	摩梨支經行處加趺而坐復經七日。	於迦羅龍王宮殿加趺而坐復經七日。	於瞋隣陀龍王宮殿於七日中雨不暫停…擁蔽佛身。	往昔羊子所種尼拘陀樹一坐便經七日不動。	差梨尼迦樹林結跏趺坐於七日。(經七七日)	二商主供養
⑯MV (Jones III p.261)	菩提樹下で坐禪。	菩提樹をしつかり眺めて第二七日を過す。 (マーラの娘が来る)	第三七日を長距離の經行で過す。	第四週をカーラ龍王の住処で過す。	第五週をムチャリンダ龍王の住処で過す。	第六週を牧羊子のバニヤン樹下で過す。	第七週をクシーリカーネ樹林の中の諸天の祠で過す。	二商人供養
⑰衆許 (大03 p.951上)	結跏趺坐於樹下、於七昼夜入火界 二梵天子勸請。 (二商人供養。魔王請仏入涅槃。発風病、食訶梨勒果)	離菩提樹往母啞鱗那龍王宮……於一樹下結跏趺坐……七日七夜降霖大雨。	還菩提樹下結跏趺坐經晝夜。入定觀察十二緣生。					梵天勸請

(1) 「国説一切経」本縁部3の78p.の脚注では、「第二七日不動住、第三七日菩提樹諦觀、第四七日迦羅龍王供養」とするが、「本表」では表中に記した如く解釈した。

[C] 後世の仏伝資料

	第一週	第二週	第三週	第四週	第五週	第六週	第七週	出定後
⑥ Bigan-det (赤沼訳 p.130)	七日間宝座上に趺坐。	菩提樹の北東十尋の地 宝座に目を注ぎ、瞬きもせず、不動の默想。	菩提樹の北方二尋の処にて、東から西へ、西から東へ往返經行。	菩提樹より十三尋の地阿毘達磨を黙想。	阿闍波羅樹即ち牧羊者の樹と呼ばれる尼拘律陀樹下、七日間趺坐。(魔女誘惑)	目真隣陀貯水池、七日間大雨、龍王保護。	羅闍耶多那樹趺坐 最も崇美なる三昧。 (都合四十九日、三昧)	二商人供養